

上海史話



672.1P / 210.2
8746



由國家圖書館典藏
國家圖書館數位化

羅剛教授遺書

剛、遼東に遼河を流れる蘇州河となつたのである。

周代三江の地に、國を建てたのは吳越である。吳の國は初め梅里すなはち今の無錫に都してゐたが、その王闔閭の時（紀元前五世紀）に今の蘇州に移つて大城を築いた。同時に上海の東南にあたる浦東か南浦あたりには、南武城を築いて越に備へた。吳に仕へた伍子胥や孫子は、蘇州の閶閫城を根據地として、西は吳楚、北は齊、晉、南に越を威服したのであつた。この地方の戰爭は、北支の中原における用兵乘車と異り、この當時から既に、河川、沼湖を利用する水軍によるものであつた。

范蠡が越王勾踐を扶けて吳を滅ぼし、都を會稽（今の紹興）から蘇州へ移したのは、周の元王三年（紀元前四七三年）であり、楚が越を滅ぼして江南を併合したのは、周の顯王三十五年（紀元前三三四年）である。黃浦江を開いたと言傳へられる楚の春申君・黃歇は、それから七、八十年後に、この地方へ赴任して來たのであつた。（今上海の別名を申江ともいふのは、黃歇に由来してゐる。）

秦の始皇帝が天下を統一し、紀元前二二一年全國を三十六郡に分つた時、太湖以東の三角洲と浙江地方は、これを會稽郡と稱し、治郡の府をやはり蘇州に置いた。

江蘇海境總圖 方五里





このやうに江南三角洲の中心地として、今の蘇州は、既に紀元前から繁榮してゐたわけであるが、秦から漢にかけても、三角洲の東部は、未だ謂ゆる澤國であつて、人煙稀少の砂洲であつたこと勿論である。この沖積地帯が、海岸線の東漸と共に、次第に農耕に適するやうになり、水運の要所々々に、都邑を生んで行つた跡を見ることは、興味がある。

元來江南の地形は、中腹に太湖を孕み、北部は丘陵に富み、南端の部分も稍地位が高い。南京附近の鳳凰山や太湖東南の景牛山には、鐵礦の埋蔵が発見されてゐるくらゐだから、全部が砂洲から出来てゐるわけではない。そこでこの比較的土地の高いところに近い水道の要衝に、先づ都市が発達したものと思はれる。蘇州、杭州、常州、湖州などの古い都市はみな然りである。

秦以前においては、江陰(秦の暨陽郷)、無錫(吳の梅里)、蘇州(姑蘇)、嘉興(吳の長水)、平湖(秦の海鹽縣の一部)等が江南三角洲の最東端に位する都邑であつて、これ等を連ねる線から東には、史上有名な都邑が存在しなかつた。前漢、後漢の代、すなはち紀元二〇六年―二一九年に、三角洲に存在した縣城は、凡そ十箇所であつた(大村欣一著「支那の實相」)が、そのうち右の線以東に新設されたものは、僅かに今の崑山東北の婁縣のみであつた。

漢の後、三國吳の孫權が、南京を首都として王と稱した年（二二二年）から南朝の陳（五八〇年）に至る期間には、この三角洲に増設せられた縣城が凡そ十二あり（大村欣一前掲書）、そのうち新しく東邊に置かれた縣としては、今の常熟の西北に南沙縣、東北に海陽縣、東に海虞縣及び興國縣（何れも隋にこれを廢す）があり、今の松江の西に晉浦縣、東南に前亭縣があつた。漢代平湖の東南にあつた海鹽縣も、今の海鹽の位置に移された。

かくて江南澤國の開拓は、次第に東方に進められて行つたのだが、かの晉室の南渡に伴ふ人口の増加と文化の向上が、それを加速させたことは争へぬところであらう。漢民族の水利事業に對する高度の技術は、北支においては、主として人工灌溉に向けられたが、江南においては主として排水路の調整と防波工事に向けられた。殊に防波工事は、澤國の開拓において、劃期的な重要性を有つてゐる。三角洲が面目を一新して、全支第一の肥沃な農耕地に變ずるに至つたのは、實にその東海岸における海塘の築造に由來するといつてもよいのである。

海塘は今では、白茆口の上流から、寶山を経て、杭州に至る三角洲の全海岸線に延びてゐる。これは防波堤であると同時に、また海賊に對する防禦施設にも用ひられたもので、この堤防の完

成に近づくに従ひ、土地の低い三角洲の農田化が、急速に進んだのであつた。日本の「水路志」にも「毎年此の如くして自然に埋立てられたる土地は、附近の支那人を占有し、直ちに堤防をめぐらして耕種す」

とある（藤田元春著「北支中支の風物」）が、かやうにこの種の堤防は、固より一時に全般に互つて企畫せられたものではなく、思ふに南北朝時代か或はもつと古くから、部分的に次第に築造されたものである。堤防の位置そのものも、屢々東方へ移轉せしめられて、現在その遺跡が何重にも残つてゐる。

古文獻によれば、海塘は唐代これを重修すとあるに、餘り記録がないが「塘の始めはまた唐ともいふ」（鄭肇經著「中國水利史」）のであつて、堤についてなら、「晉書」に既に記録が見える。すなはち咸和年間（三二六―三三四年）吳の内史虞潭が「滬瀆を修し以て海沙を防ぐ。百姓これに頼る」（卷七十六、列傳）とある。修したといふからそれ以前に既に、壘が存在してゐたわけである。修葺の目的たる「海沙を防ぐ」は、版によつては「海抄を防ぐ」ともある。「海抄」ならば、海賊の掠奪を防ぐ意味である。滬瀆とは、後に述べる如く、今の上海の地であるから、當時上海は、

海岸から程遠からぬところにあつたことが知られる。

唐以後は、海塘の築造に殊に力を用ひたこと史上に明らかで、三角洲の開拓と諸都市の發達も、唐以後に目醒ましいものがある。隋（五八一—五八一年）から唐を経て、五代及び宋（一二七七年）に至る間に三角洲に新設せられた縣城は、凡そ十縣で（大村は二箇編纂）、そのうちこれまでのものより海岸に近い東の方に置かれたものは、今の常熟縣（唐の武德七年）、華亭縣、唐の天寶十年、今の松江縣）今の嘉定縣（宋の嘉定十年）等であつた。

上海は、宋代には未だ鎮に過ぎなかつたが、元の至元二十七年（一二九〇年）すなはち今を距る六百五十年前に、初めて縣城となつた。唐代揚子江口の砂洲に過ぎなかつた崇明島は、五代に防岸工事成つて、鎮が置かれ、元の至元十四年に州（縣の管區大なるもの）とせられた。今の太倉縣には明の弘治十年に州が置かれた。明代倭寇防禦のために守衛所を設けてゐた寶山、川沙、南匯、青村（奉賢）、金山衛等は、何れも清代に入つて、漸く縣城となつたのである。

二、滬 濱 壘

上海の別名を、現今なほ「滬」といふ。これは吳松江（蘇州河）の下流を、昔「滬濱」といつたからである。

滬濱の名を載せた最も古い文獻は、僊に擧げた「晉書」の虞翻傳であるが、梁の簡文帝の「吳郡石像碑記」にも「吳郡婁邑界松江の下、號して滬濱といふ。ここに居を有つ人、漁を以て業と爲す」とある。唐の陸廣微の撰と稱せられる「吳地記」には、その通玄寺の項に「滬濱。漁人云」の記事があり、晚唐の皮日休の詩に「全吳互漢に臨み、百里滬濱に到る。海物駢羅を競ひ、水怪滲漉を争ふといふ」文句も見える。宋の宋長文撰「吳郡圖經續記」卷中には、「松江東して海に寫くを滬濱と曰ひ、また滬海とも曰ふ。今の青龍鎮の旁ら滬濱村あるは是なり」と記してゐる。

滬濱を吳松江の下流とせず、海口とする説もある。すなはち清の顧炎武の「天下郡國利病書」には「松江と黃浦と合流して海に入る。その口を名づけて滬濱と曰ふ」とある。また近人王揖唐

の考證では、滬濱を以て吳淞江に注ぐ一支流となし、やゝ上流の青龍江と盤龍匯との中間にあつたもので、今の上海の地にあらずとしてゐる（『上海租界問題』下篇）。

然しながら宋時代の古い文獻の方を信すべきであつて、顧祖禹が「讀史方輿紀要」（卷二四）に云つてゐるやうに、

「青龍江が松江に合してより、東して海に至るを皆滬濱と曰ふ。」

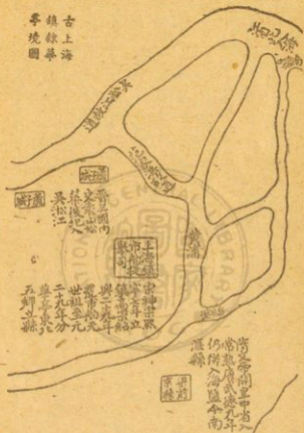
と規定するのが、最も正しいやうである。すなはち吳淞江の下流一帯が滬濱で、それに沿ふ今の上海の土地が「續記」にいふ「滬濱村」であり、そこに住む人々は漁民なのである。

滬濱の滬は、古文では扈とも書いてあり、今でも乍浦あたりの海岸で使用されてゐる漁具の一種のことである。陸龜蒙の「漁具詠」の序に「網罟の流れにして、竹を海に列するを滬と曰ふ。駐吳の人、今これを罟と謂ふ」とあり「輿地志」に、

「竹を挿して海中に列し、繩を以て之を編み、岸に向ひて兩翼を張る。潮上れば即ち没し、潮落つれば即ち出づ。魚潮に隨ひ、竹に礙れて去るを得ず。之を名づけて扈と曰ふ。」

とある。これから推すと、昔の上海の地は、文字通りの漁村に過ぎなかつたわけである。

古上海
鎮鎮華
學境園



紀元四世

紀の二、三

十年代に、

この滬濱の

漁村に、壘

を修築して

海沙を防ぎ

居民の福利

を圖つたの

は、前にも

述べた通り

吳の内史虞

潭で、此人



江淞吳

御湖

今青浦縣

唐

吳大帝造
青龍戰艦
于此故名
唐天寶五
載建鎮
宋大觀元
年以鎮治水
利
景領帝船元
元九年罷屬
上海

大阿年置
山縣
馬台
山

殿山湖

大同初析海
鹽池立縣

溧陽

唐天寶十載始
創范山海鹽池
唐年與地
平縣

秀州塘

奉海湖
今沈
湖

が史上に知
らるゝ上海
の最初の恩
人である。
それから約
六、七十年
後の晉の隆
安四年（四
〇〇年）吳
郡の太守袁
山松が、再
び濶漬鹽を
修築し、當

時舟山島の定海に據を置いて亂を作した海賊孫恩の攻撃に備へた。この滬漬壘は、次のやうに各書に異つた名稱で記録されてゐる（胡道靜稿「築城王袁山松傳」上海研究資料六〇九頁）。

滬漬壘 「晉書」孫恩傳

滬漬城 「晉書」袁粲傳

蘆子城 「紹熙雲間志」

袁山松城 「輿地記」

袁崧城 「太平寰宇記」

滬漬城 「資治通鑑」

「紹熙雲間志」（宋の紹熙四年すなはち一一九三年編）には、

「滬漬壘はもと東西二城あり。東城は廣さ萬餘步、四門あり、今江中に徙り、西南の一角を餘す。西城は極めて小さく、東城の西北に在り、その兩旁に東西蘆浦あるを以て、俗遂に呼んで蘆子城となす。」

とある。東西兩蘆浦は吳淞江すなはち蘇州河の南岸の支流で、西蘆浦は曹家渡の南で江に入り、

東蘆浦は、小沙渡の東で江に入つてゐたもの。故に濕漬壘の西城は現在の靜安寺の東北に當り、東西二つの蘆浦の中間に挟まれてゐた。東城は東蘆浦の東、現在のガーデン・ブリツチの邊に在つたらしい。隆安五年孫恩遂に濕漬を陥れ、袁山松は殉難した。當時死者四千人といふから、相當大きな戦闘だつたわけである。

濕漬壘は現在全く遺跡を留めてゐない。「太平寰宇記」に「袁崧城は濕漬江邊にあり、今波濤の衝く所となり、半ば江中に毀す」とあり、「雲間志」によると、宋の紹熙年間（十二世紀末）には、東城は僅かに西南の一角を残すのみとなつてゐた。西城は江に近かつたどけに、既に全く江中に没してゐたものらしい。「萬曆上海縣志」は「永樂大興」を引いて、十五世紀の初め頃の吳淞江の状況を叙し、「兩岸みな平曠茂林、また壘有るなし」と書いてある。すなはち明代には、もう東城もなくなつてゐた。「嘉慶上海縣志」は、

「古濕漬江大にして、黃浦江小なりければ、海寇來犯はみな濕漬より進めり。故に兩城を築きて以て之を防ぎしなり。後に黃浦大となりて、濕漬溼塞し、賊達する能はず、兩城遂に廢地となれり。」

と説明してゐる。

因に黄浦は近代まで存在してゐたもので、「同治上海縣志」に「惟ふに東西黄浦なほ存す」とある。然るに租界が出来てからは、これを填めて道路を築いたので、東西兩浦とも、今は斷流殘溝となつて、全く形を看ることが出来ない。

三、吳

淞江

淞江の「淞」は直接海に注ぐ河といふ意味である。吳淞江すなはち蘇州河は、古は黄浦江の一流支流ではなく、太湖から出でて、獨立に海に注ぐ大河であつた。それは「三江」の一つであつて黄浦江よりも、遙かに大きいものであつた。

河幅も廣かつた。「嘉慶上海縣志」は「唐時闊さ二十里、宋時闊さ九里、後に漸減して五里、三里、一里に至れり」といつてゐる。元の任仁發の「水利集」には「古は吳淞江狭きところ尙二里餘」とあり、明の夏原吉の奏疏には「廣さ一百五十餘丈」(顧炎武撰「天下郡國利病書」卷十七)とあ

り、李林松の「吳淞江議」には「明以來は寛さ七、八十丈乃至百數丈」とある。（吳靜山著「吳淞江」に引くところによる）

これ等の記録によると、明代以前には、現在のやうに狭隘なものではなかつたし、下流一帯は浩瀚渾濁し無く、海寇の來犯は勿論、江南に至る貢使商船も、すべてこの江を通航して來たものであつた。それが元、明、清の三朝の間に、次第に淤塞し、歴代屢々疏通を圖つたけれども、遂に人工では、原狀に復することが出来なかつたのである。

吳淞江の處置は、實に支那古來の水利用論、殊に論争最も華々しかつた吳中水學の中心問題となつた。明の歸有光によれば、吳淞江淤塞の原因は、湖泥と圍田と分殺とであつた（池田靜夫稿「歸有光の水學」、『京亞經濟研究』二二、四）。すなはちその「水利用論」にいふ。

「謂ゆる吳淞江は、江を顧るに、湖口より海を距る遙からず。湖泥填淤反土の患あり、湖田膏腴往々にして民の圍占する所となり、而して水と尺寸の利を争ふ。淞江日に隘まる所以なり。昔人その本に循らず、流れに沿ひ、末を遂ひ、目前の小快を取りて、別に港浦を鑿ち、以て一時の利を求む。而して松江の勢ひ日に失はる。」

また清の顧炎武は、その「天下郡國利病書」において、吳淞江の經營につき次のやうに論じてゐる。江の上流は氾濫の禍があり、昔人はこれがため分殺の治水方法をとつた。その結果として下流は淤塞し、灌漑の利を失ふに至つた。これが近人の憂ひである。故に下流の水利を圖らんとするものは、分段を矯めて、朝宗の勢ひを復し、江道の開展を齎さねばならぬといふのであつた。

かくて吳淞江は、下流の淤塞するにつれて、屢々開鑿や改道が行はれ、その結果として新江と舊江の二つに分流するに至つた。舊江の名稱は、宋代（十二世紀）に江の支流たる盤龍、白鶴の諸匯を開浚し、彎を略し、直を取つた時から起つたもので、「紹熙雲間志」に既にその記録がある。舊江は、嘉定南境の封家浜のあたりから東南に向ひ、牧養港を経て東に折れ、潭子港で吳淞江に合してゐる今の虬江の位置に當つており、舊江の舊の音が轉じて、虬江の虬に變つたものと傳へられる。虬江は更に潭子港から閩北の中興路、虬江路を経て、引翔區の北境に出で、虬江碼頭すなはち飯田棧橋の附近から黃浦江に合流してゐたのであるが、今は中斷されて、下流は溝渠に等しいものになつてゐる。

宋代江南の水患は、太湖の落水が、吳淞江の上流で氾濫し、或は急湍をなして、舟運に不便を興ふることであつた。そこで宋の慶歴二年（一〇四二年）上流太湖との間に、長堤を築いて、江水を横截したのである（軍御撰「吳中水利書」）。その結果江流は暢びず、また他方、下流では潮砂の襲來があつた。すなはち「宋の元符の初め（十一世紀末）、潮沙遠かに漲り、半ば平地となる」と凌介禧の「東南水利略」に見え、王廷珮の「蘇太松山川考」には、「二十三保の一隅（今の引翔區及び共同租界の東北）はもと吳淞江の舊址たり、宋時に於て流沙積滿す」とある。元末（十四世紀）に至つては、下流の淤塞益々著しく、吳淞江の絶望論を唱へた吳執中は、「兩岸沙を漲らせ、將に岸と平らかならんとす。その中僅かに江洪を存す。之を舊時に比すれば百の一に及ばず」（王鑿撰「姑蘇志」卷三）と記してゐる。

清の「嘉慶上海縣志」には、「今は舊江の南を通行するものを江となす。皆江中の沙洪なり。江上の人直ちに沙洪を以て之を呼ぶ」とあるが、かやうにして吳淞江の故道は、元末から明、清にかけて湮滅してしまつた。舊時は、江面二十里にも及んだといふから、現在の河床と舊江とは、或は江の兩側であつたのかも知れない。それが潮沙の堆積で、北側の方から次第に埋まり、南側

の江洪が、辛うじて舟楫を通じ得る程度に餘命を保つたのであらう。この現在の河床は、原名を宋家港、一名減水河といつた。明の永樂二年（一四〇四年）蘇添治水の任に當つた夏原吉は、減水河に黃浦の水を導き入れるために、兩河を横に繋ぐ范家浜といふクランクを掘鑿した。

黃浦は始めは、吳淞江口に注いでゐた一小流に過ぎなかつたが、宋時吳淞江上流における築堤の結果として、次第に太湖、澱山湖方面の落水を受けるやうになり、元、明の交には、日増しに河幅を闊大してゐたものである。かくて連繋の當初は江浦合流して海に入つてゐたものが、後には竟に大國が附庸に降つた形で、吳淞江は黃浦の單なる支流に墮してしまつた。そして黃浦は黃浦江と稱せられるに至つたのである。

現在この黃浦江と吳淞江との合流點に繁榮してゐる上海港の「上海」といふ名稱は、昔この地點にあつた上海浦といふ一つのクランクの名に由來してゐる。宋の鄭置の「水利書」に、「松江の南岸小來浦より海口に至るまでに大浦一十八浦あり、中に上海下海の二浦あり」とあるが、この上海浦が吳淞江の下流すなはち滬濱の南岸に注ぐ地點に、上海鎮が生れたのである。元の任仁發の「浙西水利議荅錄」には、「今日東南に上海浦ありて、澱山湖三澱の水を放泄す」とあり、また

「新涇、上海浦、劉家港等は水深數十丈なるに、新開の吳淞江は深さ僅かに一丈五尺のみ」とも記しており、これで見ると、上海浦も相當大きかつたやうである。澱山湖三漚の水を放濼すとあるから、或はこの場合、黄浦のことを指すのではないかと考へられるが、清代の地圖には、別個のものとして畫かれてゐる。すなはち「松江府志」や「同治上海縣志」の地圖には、上海浦は黄浦江の南岸に位置する一小クリークとして示されてゐるのである。

上海浦と並行して吳淞江の南岸に注いでゐたと思はれる下海浦は、康熙、乾隆の「縣志」ともに、二十三保（今の引用區及び共同租界東北區）に位置すと記し、嘉慶及び同治の「縣志」には、桃林浦の東、揚樹浦の西と指定されてゐる。このクリークは吳淞江の源滅の結果、いまでは僅かにその痕跡を、黄浦江の北岸に留めてゐるのである。

（註）上海の地は、海の上に浮んでゐるとの感じから、また「上洋」とも呼ばれ、古い文献では、明代陳繼儒の修した「松江府志」にそのことを記しており、また上海を「貿易品の陳揚地」として、「海から上る」の意味に解する向もあつたやうだが、何れも上海の地名の起源としては當つてゐない。

四、上海市船舶司

上海の地は、唐の時代、すなはちまだ滬濱村と呼ばれてゐた時代には、秀州華亭縣に屬し、滬濱の沖を華亭海と稱してゐた。當時の上海は、水産地ではあつたが、まだ港埠ではなかつた。そこは海寇にとつて格好の上陸地點ではあつたが、商船の碇泊地ではなかつた。貿易の港は、海口から數十裡も吳淞を廻つた青龍鎮といふところに先づ發達した。

青龍鎮は、今の黃渡鎮と青陽港との間に位し、昔三國吳の孫權が、そこで青龍戰艦を造つたといふ傳説のあるところである。唐の天寶五年（七四六年）「江を控へ、海に連なる」この地に、はじめて鎮が置かれた。宋代には、青龍鎮は江南第一の貿易港となつた。

宋の朱長文の「吳郡圖經續記」に、「松江正流して吳江縣に下り、甫里を過ぎ、華亭を経て青龍鎮に入る。海商の湊集する所なり」とあり、而も入港船舶は遠く福建、廣東方面からも來たらし「朝家承平、海内を總してより、閩粵の賈、風に乘じて航海し、以て險となさず、故に珍貨遠物吳の市に畢集す」とも見えてゐる。

「宋史」食貨志によると、宋の政和年間（一一一三）に、市舶司の分所たる務（役目）を青龍鎮に置き、監督官を華亭縣に設けた。後に江浦溼塞して蕃舶の至るもの減少したため、止め

て縣官に兼掌させたが、宣和元年（一一一九年）河道浚深の結果、海船再び輻輳するに至つたので、また専門の稅務官を復活させたとある。故に宋代青龍鎮には「學あり、庫あり、倉あり、務あり、水陸巡司あり」て相當の繁榮を示し、「小杭州」の別名があつた位であつた（松江府志）。

唐宋時代、日本の船もこの青龍鎮に來たことは確かであらう。唐代日本船は、多く揚子江口を目標して航海し、揚州または蘇州に到着するのを常とした。弘法大師の「爲大使與福州觀察使書」に、「建中（七八〇—七八三年）以往、入朝の使船、直ちに揚蘇に着く」とある（桑原隲藏著「東洋史說苑」）。蘇州へ直接來たといふからには、華亭海から吳淞江を廻航して、青龍鎮にも碇泊したことは間違ひなからう。顧炎武は「天下郡國利病書」に、「日本最も近く、宋元の間入貢せるは、みな青龍市舶司よりし、後に浙の四明に取る」と書いてゐるが、明の「弘治上海縣志」にも、大體これと同様の記述があるさうである。

日本側の研究では、宋代日本の對支航路は、通常浙江の明州すなはち四明（甯波）を目的地としてゐたといふが、それにしても風の工合で、華亭海へ着くことも、珍らしくなかつたらうと思はれる。「宋史」列傳に、

『淳熙十年（一一八三年）日本七十三人復た颯ふて秀州華亭縣に至る。常平義倉の錢米を給し、以て之を振ふ。紹熙四年（一一九三年）秦州及び秀州華亭縣復た倭人の風の爲め泊する所となりて至れる者あり。』

といふ記録がある。華亭縣へ颯至したといへば、やはり青龍鎮あたりで上陸したものと考へられる。因みにくだんの漂流者達は、藤田元春氏によれば、時たま「我國の源平時代に當つてゐるから、西海の平家の落武者や源豫州の餘黨だつたらしいといふ（同氏著「日支交通の研究」）。

元代になると、吳淞江の淤塞が甚だしくなつて、青龍鎮へは、大船の入港が不可能になつた。そして下流の上海が、これに代つて、港となるに至つた。これよりさき、上海は、宋初の熙寧七年（一〇七四年）に、鎮になつてゐたといはれる（松江府志）が、青龍鎮の貿易が上海鎮に移つたのは、それから約二百年の後であつた。

宋末の咸淳三年（一二六七年）、初めて上海鎮に、貿易監督官たる市舶司の分所が置かれた。その初代の官吏は董楷であつた。徐蔚南氏によると（同氏著「上海の發展」支那研究（四四））、この人に「受福亭記」といふ一篇の文章がある。その内容は、董楷が、上海で最初に實施した都市建設の記録

である。すなはち彼は、上海に地所を定めて、四つの橋、四つの坊に、一つの亭と一つの井戸を造り、更に土造の文昌宮を修理したといふのである。この渺小な土木建築が、上海における意識的な公共事業の最初のものであったのである。

間もなく元の至元十三年（一二七六年）に、元朝が上海の地を征服した。翌十四年、初めて本格的な市舶司が上海に置かれた。元來市舶司は、宋初の乾德四年（九五七年）廣州にはじめて置き、後に杭州、明州、ついで元祐二年泉州にも置いて、外國輸入貨物の約十分の一の關稅を取立てた海關のことで、これの所在地といへば、大開港場を意味するわけである。従前青龍鎮乃至上海鎮に置かれてゐたものは、この種機關の分所で、「務」と稱する小規模のものであった。それが遂に上海では昇格して、本式の市舶司となつたのである。かくてはじめて、上海は全支那指の外國貿易港の列に加へられるに至つたのである。

ところが「讀史方輿記」、「松江府志」、「上海縣志」などの近代の資料には、上海が鎮になつた宋初の熙寧七年に、それまで青龍鎮に存した市舶司や榷貨場（外國輸入貨物を政府で買上げ、これを民間に專賣する役所）を、上海に移轉したと書いてゐるが、市舶司の性質と規模からいつても、これは

誤りであらう。元の至元十四年に上海市舶司が創設されたことは、「元史」食貨志に明らかであるが、それ以前のことには、正史に記録がない。「宋史」食貨志には、曩に擧げたやうに「青龍鎮に務を置く」とあるのみである。この點について、小竹文夫氏は藤田豊八、桑原隲藏兩博士の宋代市舶司の研究に基づきつゝ、次のやうに述べられてゐる（同氏稿「上海の沿革」―「支那研究」一八）。

「市舶司が上海に設けられたや否やといふことは、港としての上海の研究上極めて重大なことで、當時若し市舶司が設けられてゐたら、少くとも廣州、明州、杭州、泉州と肩を伍する大港として、宋代から認められてゐたことになるからである。坊間上海に關する多くの本が出てゐるが、皆不用意に、恐らく松江府志や上海縣志の直譯であらうが、宋代上海に市舶司が置かれたと型の如く書いてあるのは滑稽である。」

元朝は、上海に市舶司を設けて、外國貿易のために開放すると同時に、この地をもつて「海運」の基地とした。「海運」とは、江南の米を海路北京に輸送することである。元以前歴朝の國都は、陝西、河南に設けられてゐたので、江南の米糧を送るには、内河水運の便を利用出来た。元朝に至つて初めて北京に都した結果、漕米のために新たに運河を開く必要を生じ、始め山東を通じて



(上) 熬波圖に據る鹽場の模型（事變前上海市博物館に陳列されたもの）（下）元代上海浦東地方の製鹽業の圖（陳椿撰「熬波圖」に據る。）

輸送を試みたが、河道に故障が多かつたので、遂に至元十八年（一二八一年）元の宰相伯顔は海運の計を立て、上海を基地とする海路清運を開始したのである。かくて江南の産米は、大量に上海鎮に集められ、その北方移送高年に百萬石乃至二百九十萬石にも達し、盛時これが輸送に従事した船隻は九百艘に及んだ。明の永樂以後及び清代にも、上海を基地とする海運はなほ續けられた。この海運の創設が漕都としての上海の發展を著しくはやめたことは、疑ひを容れない。

當時の上海鎮の繁昌振りは、元の唐時措の「縣治記」にある左の記述によつて知ることが出来る（『嘉靖上海縣志』に載す）。

『市舶あり、權場あり、酒庫あり、軍隘あり、官署、儒塾、佛宮、僊館、貯廩、買肆、鱗次栴比し、實に華亭東北の一巨鎮なり。』

かくて至元二十七年（一二九〇年）松江府の知府撲散翰文の建議により、華亭縣東北部の長人、高昌、北亭、新江、海隅の五郷を分離して上海縣を置いた。監縣は正副二名を任じ、初代の正監縣は達魯花赤といふ蒙古人であつた。「弘治上海縣志」によると、當時（元代）の上海縣の戸數は七萬二千五百二戸であつた。

宋元時代の上海の主要産業は、もはや水産漁業ではなく、農耕であり、棉花が栽培せられて、棉業が既に勃興しつゝあつた。農耕に適せぬ土地では、鹽業が行はれてゐた。

上海の棉業は、宋元の間には南支から移植せられ、明の成化年間には、全国的に盛名を馳するに至つたのである。木綿紡織の改良された方法を、初めて上海に輸入した恩人は、黃道婆といふ上海生れの婦人であつた。彼女は幼時崖州に淪落し、同地で紡織の新法を習ひ覚え、元の元貞年間（一二九五—一二九六年）に歸郷して、地方人にこれを傳授したのである。宋代棉花がはじめて栽培された地は、上海近郊の烏泥渚といふ所で、そこにはいま黃道婆が祠られてゐる。

上海の鹽業については、元の陳椿撰「熬波圖」といふ資料がある。これは當時の製鹽の状況を繪と文で示したもので、その序に、

「浙の西、華亭の東百里は、實に下砂となす。大海に濱し、黃浦に枕し、大塘を距て、吳淞、揚子二江を襟帶し、東南に直走す。みな斥鹵の地なり。海を煮て鹽を作る。其の來れるや尙し。

宋の建炎中始めて鹽監を立てし地なり。」

とある。その鹽田は、今の浦東、南匯方面にあつたもので、これを下砂場と呼んでゐた。宋元の

時代には、下砂場の産鹽量は、淞江鹽の首位を占めてゐたのである。今日浦東には、最早鹽田は存在しないが、なほ二灶とか六灶とかいふ地名が残つてゐる。これは昔製鹽の窟のあつたところである。

五、倭寇と上海

上海の市舶司は、元の大徳二年（一二九八年）に撤廢せられ、この地は甯波市舶司の管轄下に入られた。明代には市舶司は遂に上海に置かれず、洪武初年（一三六八年）附近の太倉、黃渡に、一時設けられたが、首都南京に近過ぎるといふので、間もなくこれも罷められた。

明代の海外貿易は、専ら甯波、泉州、廣州の三市舶司によつて管理され、主に甯波は日本、泉州は琉球と呂宋、廣州は西洋諸番の貢船市舶を迎へてゐたのだが、明初以來約百年間、沿海を侵した倭寇のため、殆んど正常の貿易は行はれなかつた。倭寇の最も猖獗した嘉靖二年（一五二三年）から約四十年間は、甯波、泉州の兩市舶司も廢止されたくらゐであつた。

この時期に、上海は最も頻繁に、倭寇の襲來を受けた。これを防禦するために、浙西、浙東五十九ヶ所に陣地が構築された。上海附近の海邊では、寶山、南匯嘴、金山衛等が、倭寇上陸の要所となつた。

倭寇といつても、徹頭徹尾抄掠を目的としたのではなく、足利、大内、細川氏等の貢船とその他地方豪族の市舶が、始めは平和的に交易を営み、時に利あらずと見るや、一轉して寇盜に變ずるものであつた。明朝は制を定めて、十年に一度貢し、人は二百人（後に三百人）に限り、船は二艘（後に三艘）に限り、軍器は携ふることを得ず、違ふものは寇と見做すとし、また勘合符を發給して、これを有する貢船のみ來往を許した。他の一般の市舶は勿論、貢船を裝うて來るものも、勘合符のないものは、全然入港を禁止し、海濱に留まつて互市するものがあると、その相手方の支那人を斷罪に處した。こゝにおいて浙江、福建、廣東等の海商、土豪のうちに、却て日本人と結託してこれを導き、或は自ら日本人の服飾旂號を用ひて、四隣を掠め、官憲を威嚇するものが現れるに至つた。

最も大規模の倭寇は、安徽の人王直、浙江の人徐海等が、海禁を破つて日本、暹羅と貿易し、

嘉靖三十二年（一五五三年）肥前平戸の豪族松浦氏等と結んで、江蘇、浙江を劫掠したそれである。「明史」日本傳に、同年三月「大舉して入寇し、連縱數百海を蔽ひ、浙の東西、江の南北、濱海數千里同時に警を告ぐるに至り、昌國衛を破り、太倉を犯し、上海縣を破る」とあるが、その後引續き拓林に駐屯し、上海ばかりでなく、江南各地が再三掠奪に遭ひ、翌々年の如きは、南京、蕪湖まで侵されてゐる。

上海が犯された時の模様は、明の張鼎撰「吳淞甲乙倭變志」と范濂撰「雲間據目抄」に最も詳しい。この時の倭寇の指揮者は蕭顯といひ、嘉靖三十二年閏三月寶山から上陸し、連賓華僑で戦ひ、四月上海を掠めて去つた。當時の上海知縣俞顯科は、遁走して行方知れずになつた。五月七日には高昌渡で戦ひがあり、また幾くもなく、千餘の倭寇が太平寺から入市し、北京仕向けの清米を奪ひ、その運送船を焼き拂つた。十二日賊更に三百餘艘をもつて、海口、周浦の兩道を約して入寇し、官軍の指揮武尙文、縣丞宋縉等は何れも戦死し、邑里殆ど空虚となつた。二十七日賊また至り、鎮撫吳賢をして、黃泥浜にこれを防がしめたが及ばず、爾後浦東沿海二百里に亘り、新舊の倭寇絡繹として到來、全く寧日がなかつた。六月二十七日には倭二百餘、三海船に駕し、

上海北宮前から上陸して攻撃に移つた。この時の戦ひには鎮撫胡賢死し、指揮黎鵬舉も斃れて、遂に縣知(縣廳)も焚かれ、民家の灰燼に歸したものの數百、實に酸鼻を極めたといふ。かくて僅か二ヶ月餘の間に、上海の蒙つた寇禍は、五回の多次に亘つたのである。

そこでこの旺盛な倭寇の侵入を防ぐために、上海の官民連の間では、城壁築造の議がもち上つた。そして郷人顧從禮に名によつて、次のやうな請願文が朝廷に奉られた。

「上海には……懸治を設け、原と城垣の守るべきもの無し、蓋し一は事草創に出で、庫藏錢糧未だ多からざると、一は地方の人なかば海洋貿易の輩にして、武藝素より通習するところ、海寇の敢て輕々しく犯さず、未だ城を設けずと雖も、自ら他慮無かりしによる。今編戸六百餘里、殷實の家率ひて多く市に在り。錢糧四十餘萬、四方より輻輳し、貨物尤も多し。而して縣門外一里を過ぎざるに、即ち黃浦の潮勢迅急、最も防禦し難し。……蓋し賊海より入り、潮に乗じて劫掠すること、囊中を取るがごとし。皆城なきの故に因る。伏して望むらくは、錢糧の難聚、百姓の哀苦を軫念し、工部會議に救し、以て久しきを経て守るべきの計を爲さんことを。」

ところが工部の審議も終らぬうちに、再び倭寇の騷擾が起つたので、最早一刻も猶餘すべきで

ないと、松江の知府方廉から再び建議があり、かくて田賦の増徴と邑紳の寄附によつて、急速に築城のことが取り運ばれた。工事は嘉靖三十二年九月に着手せられ、十一月に全部完成した。當時の城は周圍九里、高さ二丈四尺、城門が六ヶ所にあり、外壕は廣さ六丈、深さ一丈七尺であつた。上海出身の明朝の名臣藩思の『築城記』に、その詳細の記録がある。

城は倭寇に對して有効であつた。築城の翌年にも、倭寇の大舉襲撃が二度ほど行はれたが、流石に勇敢な倭寇も、この堅固な城は抜かず、他の地方都市へ轉じて行つたのであつた。かく城が出来て安全になると、上海は自づと繁榮に向つたのである。尤も始めのうちは倭寇の影響から、宵越しの金は持たぬといつた氣風を生じ、輕佻浮薄の繁榮であつた。『上海縣志』に、

「嘉靖癸丑、島夷内に訶し、閩閩凋弊、費俗一變し、市井輕佻十五群を爲し、家に磨石なくして、華衣を纏ひ、鮮履を穿つ。」

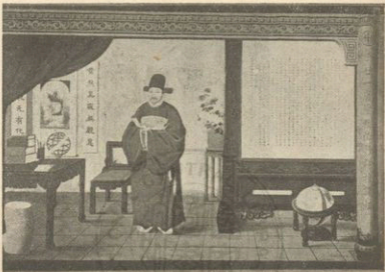
とあり、また人情も悪化し、他をおとしいれ、親しき者を謀殺し、役人を見て見ぬ振りをする有様で、舊來の素封家も立ちどころに破産の憂目を見た。現時にいふ「魔都上海」の性格は、早くもこの頃に胚胎したのである。他方新興の商業資本家達は、互に奢侈を誇り、家屋には彫鏤を盡

し、多数の奴婢を使役し、美衣美食に飽いてゐたといふ。誇張は多いが、とにかく上海の生活は、急速に田舎風を脱して、市民生活の様式に移りつゝあつたのである。

この繁榮の裏には、上海の代表的産業たる木棉織布業の、著しい發達があつたことを見逃せない。上海木棉は、明の成化年間、朝廷に献上を命ぜられたことから、一層名聲を博し、その賣行は秦晋京邊の諸省にまで及び、俗に「松郡の棉布衣天下を被ふ」とさへいはれた。これについては、清の褚華撰「木棉譜」、近人徐蔚南著「上海棉布」などの好資料がある。

六、西洋との接觸

明末は西洋文明との接觸が始まつた時期で、十六世紀の中葉、先づ葡萄牙の商人が、南波、厦門、澳門等に渡來し、明朝と交渉して澳門を租借し、遂に支那の對外貿易を獨占するに至つた。そして上海は、まだその頃對歐貿易の港とはならなかつたが、葡萄牙の商船に便乗して澳門へ來た歐洲各國の耶蘇會士が、支那全土の傳道事業に着手するに及んで、漸くこの地にも西洋人の姿



徐光啓の像

を見るやうになつた。

天主教傳道の最初の功勞者は、伊太利耶蘇會士マテオ・リッチ（利馬竇）で、彼は北京にあつて、
數々の文明利器と科學圖書を朝廷に獻じて信用を博した。これに次いで、南京にゐた葡萄牙耶
蘇會士コアンネス・デ・ロチャ（羅如望）が有名であつた。このロチャについて洗禮を受け、リッ
チの指導を受けて天文、地理、數學等の書を翻譯した徐光啓が、上海出身の進士であつた關係か
ら、上海の地は支那への最初のキリスト教文明の輸入の上に、甚だ縁故の深いものとなつたので
ある。

徐光啓は、明の萬曆三十六年（一六〇八年）南京から耶蘇會士郭仰鳳を迎へて、上海で初めて天
主教の開教を行つた。彼は晩年上海西門外の肇嘉浜に後樂堂といふ別荘を建て、死後はその近く
に葬られた。このあたりが後年繁榮して町となり、徐の家名をとつて徐家浜と稱するに至つたも
ので、現在佛蘭西派の天主堂のあるところは、後樂堂の跡である。

郭仰鳳のほか、明末上海へ來た耶蘇會士には、伊太利人ラザルス・カッタネオ（郭居靜）、葡萄牙人
ムリウス・アレニ（支國略）、伊太利人フランチスカス・サンピアツ（學文濟）、同じくフランチスカ

ス・ブランツアティ(潘國光)等が算へられる。ブランツアティは一六四〇年徐光啓の孫女顧瑪第納の世話で、城内の今の天主堂街に、上海最初の教會堂を建てたのであつた。

明朝が倒れて清朝が起つた時には、上海はあまり戦禍を蒙らなかつた。然し多少の反抗は、上海地方でも行はれた。「縣志」などには、匪徒、海寇の騷擾として記されてゐるが、これはやはり明朝遺臣の反抗と見るべきものである。緒葦の「熱城備考」には、その時の反抗の様子が稍詳しく載つて居り、藩復といふ邑人の指揮者は、前記伊太利人ブラシツアティと結んで謀りごとの助けを得たとある。また山口昇著「歐米人の支那に於ける文化事業」によると、サンピアツも明の有力者から、葡萄牙の援軍派遣方の轉機を頼まれ、巧みにこれを利用することによつて、キリスト教の保護に努めたらしい。

上海縣が清政府の版圖に入つたのは、清の順治二年(一六四五年)である。やがて康熙の世になつて、四海みな平定された。臺灣によつて、最後まで反抗した鄭成功の孫克塽も、康熙二十二年(一六六三年)遂に屈服し、海寇は全く根を絶つた。そこで翌二十三年海禁が解かれ、二十四年上海に江海關が開設せられた。

海禁は明代倭寇猖獗の時から屢々行はれ、廣州乃至澳門のほかは、どの港も概ね海外通商を禁ぜられてゐたのだが、康熙の代になつて、粵海關、閩海關、浙海關、江海關の四關が開設されたのである。蹇安の「中西紀事」や王之春の「國朝柔遠記」には、この江海關の位置を、江南の雲臺山だと記してゐるが、乾隆元年の「江南通志」や乾隆十五年の「上海縣志」などの、より古い資料に、康熙二十四年海關を上海に設くとあるから、江海關の位置が上海だったことは疑ひの餘地がないのである。

海關が設置されてから、上海港は愈々鼎盛に赴いた。「嘉慶上海縣志」に「海關貿易を通じてより、閩粵浙齊遼海間及び海國船舶河の淤滯を慮り、輒して吳淞江より入り、城の東隅に續す。舳艫尾衝、帆檣櫓の如く、都會に似たり」とある。だが輾轉したのは支那船のみで、外國船が入港した形跡はないやうである。外國貨物は閩粵の船で南支經由輸入されたのである。この頃英國の東印度會社が既に支那航路を有ち、舟山島の定海まで來て、寧波と互市した記録があるが、上海にまでは未だ到着してゐない。

王之春の「國朝柔遠記」に康熙三十七年（一六九八年）「定海に權關を置き、英吉利來りて互市す」

とあつて、再波の浙海關が一時定海に移され、またそこに「紅毛館」が建置されてゐたことが記されてゐる。英國側の資料には、一七〇〇年東印度会社のトラムボール號が定海に入港し、また新東印度會社船のイートン號で、キヤッチブールが同地に到着したとある。キヤッチブールは管貨人兼領事の資格で、永住するつもりで來たのだが、船長、管貨人等との不和や、支那官憲への賄賂の増嵩、船鈔の引揚げ等から商館の維持が出來ず、三年餘り滞在した後退去した。その間に定海へ入港した英船は、十一隻を算へたが、貿易の成績は芳しくなかつたらしい。

それでも東印度會社は、廣東二港に限つて交易をさせようとする清朝の政策に抗して、その後も絶えず中支への進出を企圖し、乾隆九年（一七四四年）にはヘードウィック號を定海に派し、更に同二十年（一七五五年）にはアレン・フリント（洪仁輝）を派遣して、再波貿易の許可と廣東貿易の改善方を交渉せしめた。その翌年及び翌々年にも、英船は定海に入港してゐる。

アレン・フリントは舟山島にばかり留まつてはゐず、更に禁を犯して天津にまで赴き、その科で廣東に護送され、澳門に三年間も投獄されたくらいであつたから、當時彼が上海港をも具さに調査して歸つたらしいことは想像に難くない。モンタルト・ド・ジーサスの「史的上海」には、

一七五六年に東印度會社のビッグウが、上海の有望なことを主張し、その結果フリント一行の派遣となつたのだとあり、ランニング、クーリング共著「上海史」によるも、同年の東印度會社の報告に、貿易港としての上海の重要性を述べたものがあるとのことである。

然るに乾隆二十四年末（一七六〇年）清朝は、李侍堯の奏した防範外夷章程を實施し、對英通商を公行制度による廣東貿易のみに制限した。そこでこの苦境打開のために、英國側では使節派遣の議が起り、最初にスコットウなる者が、兩廣總督を相手に寧波貿易の開放を要求したが成らず、次いで一七八七年キャスカート中佐が派遣されたが途中で病歿し、そして遂に一七九三年マカートニイの北京訪問となつたのである。ところがこの時の英國の要求には、舟山、甯波、天津の開港をいつてゐるが、上海には何等言及してゐない。而もそれ等の要求も、結局は皆拒絶された。英國は一八一六年更に、アマーストを北京に使させたが、これも完全に失敗に歸したのであつた。

かく當時の上海は、西洋の貿易船に對しては、未だ固く門戸を鎖してゐた次第だが、日本、安南、暹羅との貿易においては、逆に積極的な出貿易を營んでゐたやうである。日本の記録には、元祿

享保（十八世紀初葉）以降、長崎へ渡航する「南京船」のことが出るやうになり、「和漢三才圖會」の地圖には、上海の地名も載せられてゐる。「南京船」は甯波から出帆したのもあつたらうが、上海の船も相當にあつたことと思はれる。「國朝柔遠記」に、雍正年間（一七二三—一七三五年）日本に往來する江南の地方人に、官邊が警戒の目を光らせてゐる記事のあることから、それを想像することが出来る。また康熙二十四年上海に江海關を設置した當時の税則を記した「大清會典」則例戸部の條に、安南商船には輸出入とも七折、東洋商船には輸出銀百三十兩、輸入六折を徴税したとあり、それにいふ「東洋商船」とは日本に往來した支那船と解すべきものであらう（小竹文夫氏稿「上海の貿易」―支那研究「四四」）が、少くとも當時から、上海と長崎との間に、直接貿易が行はれてゐたことは確かであらう。

七、開港始末

東印度會社は、廣東一港の貿易にもともと不満であつたから、屢次の政府使節の派遣に、好んで

多額の費用を負担し、使節等もまた北京朝廷との交渉において、あらゆる屈辱を忍んで、北方諸港の通商開拓に努めたが、いづれも不成功に終つた。だが、とかくするうちに、北方諸港の中では、甯波、定海、天津などよりは、上海が最も通商に好適地であることを、漸く確認するに至つた。そこで一八三二年社員ヒューチ・ハミルトン・リンゼイ（胡蝦米）等を派し、こんどは上海の地方官との直接交渉によつて、實質的に通商の解決を謀らうと試みたのであつた。

リンゼイの一行には、通譯として獨逸生れの新教牧師チヤールルス・ギユツラフが加はつてゐた。ギユツラフは、當時モリソンに次ぐ有名な支那通で、その前年の八月二十日民船に乗つて上海に到り（メイボン、ジャン・フレデー共著「上海傳租界史」）、既に目的地の事情にも明るかつたのである。

廣東當局は彼等一行の出帆の意圖を察知し、頗りにこれを阻止しようとしたが、リンゼイ等は日本へ航海するのだと偽つて澳門を發し、沿岸到るところで支那官憲と争ひつゝ北航し、一八三二年六月二十一日（道光十二年五月二十三日）遂に吳淞に到着した。これが恐らく西洋帆船の當地に入港した最初の事實で、船名は往年の使節に因んだロード・アマースト號といふのであつた。

彼等は吳淞砲臺と支那の兵船から、一陣の威嚇砲火を受けたが、これに屈せず小艇に移乗して



黃浦江を廻航し、當時小東門外にあつた天后宮の前で上陸した。そして一旦は道臺衙門まで進んで、門扉を壊して面會を強要したが目的を達せず、道臺の指圖に従つて天后宮に引返し、そこでやつと道臺知縣等と面接した。儀禮上のことで押問答を重ねた後、通商の開始を要求したが容れられず、上海滞在は一日も罷りならぬといひ渡された。けれども彼等は、なほ二週間程も上海に滞在し、具さに城内の模様を観察したのであつたが、當時市中の支那商人は寧ろ取引を熱望してゐたといふ。

リンゼイはこの時のことを「北支那諸港航海報告書」に詳細記述してゐるが、その中に「城内の商店は、何れも一般に小さいが、各種の商品が飾られ、西洋品もかなりあつた」とあり、また「同治上海縣志」によると、嘉慶頃すでに上海に「洋行街」なる街巷が存在してゐたやうで、開港以前の上海に、閩粵の民船によつて相當洋貨が齎らされてゐた（小竹文夫氏稿「上海の沿革」）ことは確かである。従つて、既に洋貨の取扱ひに馴れてゐた上海の商人たちが、官憲の冷淡なのとは反對に、リンゼイ等の一行を歓迎したらしいことはほゞ想像出来るのである。一八三五年（道光十五年）には、更にメドハーストが上海を訪れたが、この時はリンゼイ、ギユツラフ等よりも一層好意を



吳淞沖の戦（英艦モデスト號の艦長ワトソンの描いたもの）

もつて迎へられたといふ(ランニング、クーリング共著「上海史」)。

かくて英人の上海開港に對する渴望は、愈々抑へ切れぬものとなつたが、折から廣東において、阿片密輸に絡まつて英支の衝突が起つた。一八四〇年英國は兵を出して廣東を攻略するとともに、逸早く北航して舟山島の定海を占據した。支那側は、英軍の作戦が最初から上海を目標とせることを看破し、福建、廈門方面の海防についてゐた提督陳化成を、吳淞口の警備に轉せしめ、砲臺を修築するとともに、海塘の上に行營を建てた。同年八月英艦三隻が、早くも賣山沖に姿を現はしたが、砲撃を受けて、間もなく立去つた。

一八四一年秋廈門が陥落し、定海は二度占據せられた。ヘンリー・ポティンチャーは定海に臨時政府を樹て、支那側が要求を容れるまでは、飽くまで同港を確保すると聲明し、更に鎮海、寧波を攻めた。一八四二年四月には上海城内の火藥庫が爆發した。漢奸の所爲ではないかと、人心脅々たるうちに、五月乍浦失守の報を入れて、愈々上海は混亂に陥り、家財を纏めて城外に避難するものが續出した。

六月九日(道光二十二年五月一日)黒船は、遂に吳淞塘外十餘里のところ近づいた。十六日清晨

英艦船十餘隻は、ブロンド號を先頭に前進攻撃を開始した。二番目のコーンウォリス號には副提督旗が掲げられてゐた。モデスト、コランバイン、クリオ、ノース・スターの諸艦がこれに続いた。陳化成の守備する吳淞西砲臺からも砲撃の火蓋が切られた。ブロンド號に十四弾が命中し、ヘウイツト少佐が戦死した。その他の各艦も相當命中弾を受けた（ジーサス「史的上海」）。支那側の文獻によると、三時間のこの戦闘に、英艦の撃沈されたもの火輪船三隻、大兵船一隻を算へ、戦死者三百人に達したとある（實例見「壬寅閩見紀略」）。他方支那砲船十九隻の一隊は、英艦ネメシス號を包圍し、同艦を一時淺瀬に乗上げしめたが、結局却つて全滅の厄に遭つた。

英軍は東砲臺と小沙背を猛攻し、先づ小沙背に敵前上陸を敢行した。この方面及び東砲臺の守兵は忽ち敗走し、寶山城外に在つて、これ等の指揮をしてゐた甯江總督牛鑑は、早くも太倉に逃れた。西砲臺の陳化成は、最後まで踏止まつて奮戦したが、遂に部下八十一人とともに戦死した。英軍の鹵獲した大砲は三百以上を算へたが、その大部分は眞鍮製のものでなく、竹で作つたものであつた。

吳淞陥落後、上海城内では、土匪、敗兵の掠奪が始まり、道臺、知縣等は逸早く逃亡した。居

民も多くは南翔と法華涇の方面へ避難した。十九日英軍は水陸並び進み、水兵は黄浦江を溯江して閘行のさきまで行き、陸兵約二千餘は、寶山、殷家行から北門に到り、難なく無抵抗の上海に入城した。

英軍のヒューズ・ガフ中將は、城隍廟の後園に總司令部を置いた。華麗な廟内では忽ち掠奪が始められ、精巧な木彫は燃料に使はれた。或る大きな質屋には砲兵隊が陣取つて、店舗内の金銀財寶をきれいに掃除した。市中の毛皮や絹は殆ど奪ひ去られた（ジーサス、史的上海）。民家は大小となく軒並みに捜査せられ、室内に侵入した英兵は、箱を傾け、鏡を倒し、凡そ一切の銀錢首飾細くして軟きものは、微なりと雖も必ず搜ふのであつた（袁陶愚撰、壬寅聞見紀略）。掠奪品を城壁の上から綱に吊して、城外の支那人に賣付けるといふ悪どいことも行つた。そして婦女を見れば凌辱した。支那の娘は顔に墨を塗つて、その美を隠し、或は髪を剃つて、男子を装つた。

「洋人、城に居るの日、婦女の未だ逃れざる者は、辱しむる所となるを懼れ、凡そ空墳、深草、枯溝、敗壁として匿れざるなし。その漸く匿れて耐へざる者は、則ち深夜に隙を俟ち、隙を冒して城に返る。或はまた髻髪して、男子の装ひに易へ、亦た間ま脱するを得る者あり。然れど

も萬一暴露すれば、立ちどころに辱しめを受く。」(曹汝璜「夷患備書記」)

かやうに城内は、英兵のために限なく蹂躪せられ、女達は身の置きどころもなかつた。絶望の餘り老人や婦女子が、咽喉を突き、江に身を投げて死ぬのを、英兵は平気で眺めてゐた。ただ牛羊鶏鴨などの好物を、献上する支那人だけを保護した。これ等の支那人には部隊長から護照が発給され、この護照を門口に貼つた家へは、二度と掠奪に遭入らぬことにした。他方砲車、彈藥、兵糧の運搬のためには、僧侶、道士、紳富の見境ひなく、引提へて勞役に服せしめたのであつた。かうした暴虐の揚句、英國全權代表ヘンリー・ポティンダールの來滬とともに、彼の名において、次のやうな意味の布告が漢文で發せられた。

『普天の下、率土の濱、國のさまざまなるその數を知らず、されどその一として、至高の天父の支配を受けざるはなく、悉くこれ一家の同胞なり。既にして一家をなす、然らば相和して兄弟の如く好みを通じ、互に他に對して上位を誇ることあるべからず。今次の戦争は、清國皇帝が速かに全權大臣を特派し、平等の立場において、將來の保障と商業上の必要とのため、領土割讓を條件とする和議を進むるに至るまでは、繼續して止まざるべし。』

六月二十三日上海の英軍は、新たに到来した軍隊を合併し、七十三隻の艦船に乗組んで揚子江に出で、鎮江、南京に向つて進攻した。英兵が去ると、また土匪の蜂起を見たが、自警團が組織されてこれは間もなく収まつた。

一八四二年八月九日英軍は南京を攻撃した。支那側は遂に屈服して、八月二十九日英艦コーンウォリス號内で、欽差大臣伊里布及び耆英と、英國全權ポティンチャーとの間に講和條約が調印された。これが謂ゆる南京條約で、批准は翌年香港で交換された。この條約の中に、香港を領土として割譲すると同時に、廣東、厦門、福州、寧波、上海の五港を通商場とすること、英國はこれ等の港に領事を置くこと、を初めて規定したのである。かくて一八四三年十一月八日マドラス砲兵隊のデヨーヂ・バルフォア大尉が、上海の初代英國領事として赴任して來た。彼は到着の翌日、上陸すると直ちに道臺に面會し、開港の期日、領事館の設置箇所などについて交渉した。そして城内西姚家街の顯といふ支那人の所有家屋を借入れて、これに造作を施し、とりあへず領事館を開設した。十一月十四日バルフォア大尉は次のやうな告示を出した。

「余は英國領事館を、臨時上海市内の東西兩門の間にある城壁に近き街路に設置したるに付、

茲にこれを全英國臣民に告示す。」

これが事實上の上海開港宣言であつた。同年十二月末日現在の在留英國臣民は總數二十五人であつた。最初は商人達も皆城内に家を借りて住んでゐたが、周圍の不愉快な光景と臭氣の紛々たるに堪え切れず、何れも城外に移ることを考へ、將來の發展を見越して、外灘一帯に土地を買付けた。地價は、一畝が制錢五〇乃至八〇千文であつた。英領事館も率先して數地を買付けた。だが英本國は初め領事の土地買付を認めず、ためにバルフォア等は、私費をこれに投じたくらゐであつた。支那側當局は、勿論それ等の賣買契約を承認しやうとしなかつた。

そこで土地の永租借權についての商議が重ねられた。一八四五年十一月二十九日に至つて、道臺宮慕久とバルフォアとの間に、初めて土地章程が定められた。これが英租界を正式に生み落した大憲章であつた。

當初の英租界は、南は洋涇濱クリーク（今の愛多亞路）、北は李家莊（今の北京路）を境とする區域で、東西については何等説明がなかつたが、翌年になつて東は黃浦江、西は界路（今の河南路）までと定められ、その面積は八百三十畝となつた。更に二年後の一八四八年、英國第二代目の領事

アルコツクは租界擴張を要求し、境界を重訂して、東北は蘇州河第一渡場まで、西南は周涇濱、西北は蘇州河濱蘇宅まで擴張、全面積二千八百二十畝に達したのであつた。

英國の租界設定に續いて、佛蘭西と米國がこれに倣つた。一八四四年佛蘭西は黃埔條約、米國は望廈條約を支那と締結し、英國と同様に通商の權利を得てゐた。

一八四八年佛蘭西はモンクニイを領事として派遣し、道臺麟桂と交渉の結果、翌年四月六日佛租界の設定に成功した。

米國は一八四六年商人ヘンライ・ウォルコツトに代理領事を命じて、英租界内に駐在せしめたが、一八四六年米國聖公會の主教ブロンが、蘇州河以北の虹口の草地に教會を建て、米人居留民が同方面に住み始めるに至つたので、これまた租界設定の要求を道臺に提出し、道臺も已むなくこれを認めた。

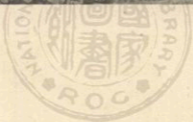
一八六三年英租界と米租界は、合併して今の共同租界となつた。

開港とともに、外國船が直接上海に来るやうになつたので、支那側は、洋涇濱の北、黃浦江に面するところに、盤驗所を設けて輸入税の徴收に當つたが、一八四六年からは北門外頭壩の南に

新海關を設けて、これに代へた。開港翌年に上海に入港した外國船は四十四隻（八、五八四噸）であつたが、五年後の一八四八年には百三十三隻（五二、四七四噸）となり、その中九十四隻が英船、二十五隻が米船であつた。輸入の大宗品は阿片であつた。

かくて上海は、各國人の自由貿易のために開放せられたのだが、それから暫くは、ジャードン・マゼソン商會、デント商會、ラツセル商會などの阿片帆船のスピード競争時代となるのである。

〔附記〕この拙文は伍東氏により翻譯され、雑誌「半月刊」第六卷第四期に轉載せられてゐる。



吳淞鐵道の開通

吳淞鐵道の開通

支那鐵道史の序幕

何處の國の鐵道史にも、その最初の短い單線が敷かれるまむには、それ／＼の國情に即した面白いエピソードのあるものだが、とりわけ支那最初の鐵道開通の物語は甚だ興味深いものがある。

支那における鐵道建設の企圖は、一八四二年の上海開港後二十年、印度における最初の鐵道開通に運るゝこと二十年にして、漸く外人の手によつて始められた。外人達は先づ最初の鐵道を、上海から蘇州まで敷設しようとする目論んだ。英人を主とする二十七軒の上海在留外國商社は、協議の上請願團を組織し、一八六三年七月二十日附を以て、時の江蘇巡撫李鴻章に、その許可方を申請したのであつた。

ところがこの請願は不幸にして却下となつた。李鴻章は自國人の力で鐵道を創設せねばならぬと考へてゐた。彼がこの考へを貫かうとすることは勿論無理だつたし、事實後年に至つては、彼も外資借款による鐵道建設の餘儀なきを悟りはしたが、とにかく最初は勇敢に外人の提案を一蹴したのであつた。これと日本における事情を對照させることは興味がある。日本では右とほど時を同じうする慶應三年、幕府は米國公使館書記官ポルトメンなる者に、『江戸横濱間鐵道免許證』を與へ、最初の鐵道敷設權を、外人の手に委ねてしまつたのである。明治に入り國營の方針が確立せられ、幸ひに國家の手による京濱鐵道が明治五年開通を見たのである。

當時の李鴻章の態度に就いて、ハリイ・バークスは鐵道技師マクドナルド・ステイブソンに宛て、次のやうに書いてゐる。

「領事團の主要メンバーの後援があつたに拘らず、この案は決定的に不認可となつた。恐らくはつきりと、次のやうに領事宛通告して來た。すなはち鐵道は支那人自ら設計し、彼等自ら管理する場合のみ、支那にとり有益である。國內において多數の外人を雇傭することには、根強い反對が存する。また人民はかゝる目的のために、自己の土地を取上げられることに、大反

對を表示するであらうと。彼はまたこの種提案を、北京政府に傳奏することは、絶対に拒絶する旨通告し、剩へ次のやうに附け加へた。租界が外人に供與するやうな過分な便宜を、國內に於て得ようとする外人側の試みに、反對することは自分の義務だと考へると。』(一八六四年三月八日)

この書翰の名宛人ステイブソンは、ちやうど三十年前、印度で最初の鐵道敷設を設計して來た人である。彼は印度における成功を、そのまま支那において、もう一度繰り返さうとして、一八六三年の秋支那へ來たのである。

ステイブソンが最初に提案したのも、上海蘇州間の鐵道で、この線なら將來倫敦西北鐵道とその美を競ふであらう、と宣傳した。支那側には何の反響もなかつた。上海の外人達すら、もはや氣乗薄の態度を示した。時期を見て、といふのが、彼等の意嚮だつた。だがステイブソンは功を怠らぬ。彼は更に廣東に向いて、支那人の間に遊説した。公開の席上で鐵道の必要を力説する彼の熱辯に、地方的繁榮を希ふ廣東商人達の心が多少動いた。しかし商人達の集合力量は未だ薄弱だつた。官憲は遂に一顧だも與へず、此處でもまたステイブソンの努力は水泡に歸した。

一八六四年彼は「支那に於ける鐵道」、なる一書を残して、淋しく故國に去つたのである。

ステイブソンは、この書の中で、漢口を中心とし、東は上海へ、西は四川を経て、雲南から印度國境へ、南は廣東へ、北は鎮江から天津、北京へ達する四大幹線と、寧波上海間及び蘇州福徳間の二支線を含む遠大な鐵道計畫を、支那政府に建議してゐる。

一八六五年英人技師ヘンリー・ロビンソンを中心として、上海に一鐵道會社が組織され、今度
は甚だ控へ目に、だが支那當局には伺ひを延てずに、上海吳淞間十里強の短距離に、鐵道建設が
企てられた。當初は支那人小土地所有者からの敷地買上げ、特に田地の中にある彼等の墓場の處
分の困難から、一直線の線路を劃することが覺束なく思はれた。ロビンソンが匙を投げようとし
た時、最大の英人會社怡和洋行（*J. & A. ン・マクソン*）が助け船に現れた。事業は怡和洋行
によつて繼承され、道路開鑿に名を藉りて工事を進めることになり、會社名も *Woo-sung Road*
Company とせられた。そして土地の買入れはどうか済まし、愈々建設に取りかゝつたが、間
もなく資金難のために、工事は途中で放棄されねばならなかつた。馬車用道路は大體出来上つた
が、これを鐵道にまで完成するには、英國式の設計で約十萬磅はかゝる見積であつた。ところが
會社には二萬磅しか資金がなかつたのである。

それから十年を経過した一八七五年、怡和洋行のマックアンドリユーとF・B・ジョンソンの二重役が英本國へ歸り、ランサムズ・レービア商會のレービアに會つた際、その人から、最初の設計よりも規模を小さくして、やり直してはどうかとの勧誘を受け、適當な小型機關車のあることを教へられた。この機關車は使用状態に於て重量僅かに二二cwtであるが、牽引力は相當強く、一時間十五哩から二十哩ぐらゐは走れるものであつた。何度も試験し、特殊な箇所を少しく改良した上で、會社はそれを採用することに決定し、レービアに見積を依頼した。ゲーヂは三〇吋、レールの重量は碼當り二六封度であつた。だがこの輕便鐵道にしても二萬八千磅はかゝるといふ見積で、最初からの準備資金を八千磅超過してゐた。然し二萬磅は現金とし八千磅は株式とすることを目算が立ち、一八七五年八月正式に契約が成立した。そしてダブリエル・ジエームス・モリソンが技師として支那に出張することになり、英國ではG・B・ブルースが名譽技師となつた。

十月一日モリソンは、米國經由上海に向ふべく英國を出發した。同月中にグレンロイ號が材料輸送のためにチャーターされ、倫敦から上海に向けて出帆した。バイオニア號と命名された機關車と多量の鐵道材料とモリソンの助手達を乗せたグレンロイ號は、十二月二十日に上海へ入港し

た。モリソンは三週間ほど遅れて一八七六年一月八日に到着した。

敷設工事は直ちに着手された。基礎工事たる高さ約八呎の盛土が出来上つてゐたし、無数の小さなクリークが既に暗渠になつてゐたので、工事は意外に早く進捗した。十五箇所ほどの架橋作業が済みさへすれば、あとはレールの敷設だけである。架橋は造作なかつた。そして敷日後の一月二十日モリソン夫人の手によつてレールの敷き初めが行はれた。二月十四日上海北部の現在天后宮のある地點から徐氏花園附近に至る約四分ノ三哩の敷設工事が完成し、パイオニア號が支那における最初の Railway Run を遂行した。

鐵道建設に従事した英人達は、初め支那官邊の反對と、民衆の誤解に基く迫害や氣候風土の激變で、相當苦しめられるものと覺悟し、悲壯な決心の下に本國を旅立つたのであつた。グレンロイ號で送られて来たこれ等の人々の勇氣ある態度を、レイピアはその著の中で賞讃してゐる。(リチャード・レイピア「支那に於ける最初の鐵道」一八七八年版五頁)

ところが聊か豫期に反して、地方住民の反對は起らなかつた。それどころか好意と興味を以て進行する工事を見てゐた。この事實は、バーシイ・ホレイス・ケントの著書「支那に於ける鐵道企

業」(一九〇八年)を初め、英國側の文獻の強調するところで、幾分手前勝手な解釋のやうに見えるが、「申報」其他の當時の資料にもこれを裏書するものがある(但し當時の申報は外人經營)。書物によつては、支那民衆が風水其他の迷信や排外思想から鐵道工事を妨害したとあるが、本當は妨害ではなく、敷地買収價格に絡む利害問題の紛糾だつたやうだ。

だが民衆が興味を持つたことが却つて官邊を刺戟し、當局は、この外人企業を阻止しようとした。上海道臺の名で二月廿三日附抗議書が發せられた。すなはち該事業は當局の公認せるものでないから、北京政府から何分の訓令が来るまで、とにかく工事を中止せよといふのであつた。そこで道臺が首都に請訓する間一ヶ月を限つて、パイオニア號の運轉を休止するといふことに、會社が妥協した。

一ヶ月経つたが、再度の抗議は來なかつた。レール敷設工事は再び急速に進められ、機關車は再び活動を開始した。依然として住民は好意ある態度を示し、たゞ面白がつて見物してゐた。實際、一個の煙を吐く小怪物が、レールや枕木を牽いて往來してゐる様は、彼等にとつては不思議極まるものに相違なかつた。當時の申報によると、見物人は上海の住民ばかりでなく、遠く幾十

里の外から馬車や人力車や一輪車などで来るものもあり、その數毎日千人に達し、これを目あてに果物、點心などを賣る露天商人まで現れて、宛ら市が建つたやうだとある。この年の五月のクイムス紙には、上海特派員の左のやうな通信がある(ケント前掲書による)。

「何哩もの道路が完全に砂利敷きされた時、全国的に興味を喚起した。文字通り千人の人が毎日近隣の都市農村から押し寄せ、工事を打眺めては、小機關車に始まつてプラスの小石に至るまでの一々について批評してゐる。誰も上機嫌で、一日の行樂が目的なのがわかる。爺さんと子供、老婆と少女、文人、職人、農夫など社會の凡ゆる階級が代表されてゐる。」

そのうち機關車も二臺に増加され、建設材料は續々到着した。新機關車は重量九噸で、バイオニア號より稍大きいものだつた。これは中華帝國號と名附けられた。レールは江灣まで延長された。六月十二日中華帝國號も走り初めを行つた。一時間二十五哩の速力であつたが、車輪の直徑僅か二七時の六輪機關車を二臺連結したのとしては寧ろハイ・スピードだつた。殆んど同時に輕便客車も到着した。正式開通式は六月三十日に行はれ、この日には江灣までの往復を一時間十五哩の速度で走つた。翌七月一日には一般支那人を無料に乗せた。營業は七月三日月曜日から開

始された。他方江灣から先への延長工事もどし／＼進められた。發車回数は一日六回往復であつたが、列車は常に満員で、第二回の客車注文を發したほどだつた。乗車券は上中下三級に分れ、乗車賃は安かつたが、乗客が多いので、會社は充分採算が立つ見込であつた。

申報は開通初日の盛況を、次のやうに叙してゐる。

「午後一時に至るや男女老幼續々詰めかけ、大半は皆上等中等の車に乗らんとせり。忽ち車内は空席を餘さず、上、中等の切符を買ひし者も下等車に乗る始末なり。列車既に發したるに人なほ潮の如く押し寄す。蓋し皆初めてのもの珍らしきに我れ勝ちに試みんものと來れるなり。」

汽車に乗るのが一つの遊山だつた。城内に住んで年中外出したことのない者までが、この面白い見世物の話を聞いてはちつとして居れず、一家眷族を引連れて一遊を試むといふ有様で、本來閑靜な個所だつた停車場附近が、今や俄然熱鬧の巷となつた。當時の申報記者は別に一段の遊記を書き更に趣を添へてゐる。

「予初めて開通の日乗車往遊す。鐵路の兩側には見物人雲集し、乗車せんとする者雜踏して計數すべからず、客車の不足を感じしむ。最も奇なるは華人未だ汽車を見たるなく、その危険安

姿を知らずして、婦女及び小兒その大半を占むることなり。先づ振鈴の音を聞く。蓋し衆人に再び乗車するの不可なるを示すもの。又繼いで汽笛數聲、即ち碎々たる音響を作す。これ汽車の吹號なり。車は漸次速力を加へて駛す。車内の者盡く顔面喜色を帯び、見物人亦皆聲を擧げて注目凝視す。忽ち列車は跛走し、身は動搖して定まらざるを覺ゆ。

「この時最も趣あるは野外の郷民を見るに如く莫し。査するに上海より江灣に至る一帶、稻田數畝を除く外は殆ど悉く棉花畑とす。折柄棉樹已に長じ、郷人は鋸もて耕せり。但し此處はもと僻靜にして過客を見ること稀なり。今忽ち汽車の通過するあり、既に烟氣の直貫するを見、又客車六輛、みな鮮衣華服の人を載すを見る。郷民の以て奇觀となさざる者あらんや。故に悉く皆鐵路に面し、停工して呆視せり。或は老婦の杖により、口を開きて延望するあり、或は少年の失神したる如く凭れ佇めるあり、或は乙女の打眺めて興するあり、小兒に至りては或は恐懼して年長者によりすがるあり、時には牽牛の驚きて逃げ惑ふもあれど、結局一人として顔面喜色を帯びぬ者とはなし。初めて江灣に近づくに及び汽笛また鳴り、汽車は漸次緩かとなり再び兩側に人垣の作られたるを見る。」

開通後一ヶ月は何の事故もなく、極めて順調に経過した。ところが八月三日に一人の兵士風の男が轢死した。この事件が動機となつて、再び官邊の阻止運動が始まつた。

「列車が停車場間を普通のスピードで進行してゐると、この不幸な男が線路の真中を、爆進する列車に向つて歩いて来る姿が認められた。汽笛が鳴つたので、彼は一旦線路を離れたが、列車が二三呎の處へ来るや、突如機関車の直前に躍り入つたのである。」

とケントは書いてゐる（前掲書）。間もなく自殺者は、財産も友人も縁者もないことが判つた。

そこでこんな噂が立つた。この男は、支那政府に傭はれて飛込みをやつたのだ。支那人が金のためには命も棄てるのは衆知の事實だ。政府が民衆の感情を激昂させて、企業に反対せしめやうと謀つたものに違ひない。上海道臺の露骨な敵對行爲だ、といふのである。他方にまたかうも論ぜられた。死人に親類縁者がなく、會社へ何の苦情も持込まれなかつたところを見ると、彼は傭はれ者ではなからう、若しさうだとすれば、必ずや會社へ賠償を要求して、事件を一層完備させたであらうと。

説明はどうにもあれ、企業はこの時以來事實封鎖された。鐵道に對する呪ひの聲が民衆の中か

ら湧き上り、暴動化の恐れさへ生じた。事態の紛糾を防ぐために、英公使トーマス・ウエイドの命令によつて、鐵道は一時閉鎖された。それは英人所有線としては、遂に再び開かれなかつた。一八七六年八月二十二日附のノース・チャイナ・デイリー・ニュースは次のやうに書いてゐる。

「吾々は昨日サー・トーマス・ウエイドが吳淞鐵道に營業中止を命じたとの驚くべき報を受取つた。これは李鴻章との交渉において、如何なる問題からも離れ、自由に本件を討議せんがために執つた一時的な措置としか考へられない。吾々は英國公使の眞意が幾らか判明するまで、批評を差控へた方がよいかも知れない。だが今回の措置が、間もなく悲觀さるゝに至るだらうことは甚だ確かである。」

九月十三日英國と支那との間に、芝罘協約が調印されたが、その際吳淞鐵道の問題も討議された。英人側は、會社が土地を買入れ済みなること、自己の所有地をどうしようと、勝手たるべきこと、道路建設の許可を得てゐること、莫大な費用を投じて造つたこの鐵道が附近の土地に永久的便宜を與へるであらうこと、鐵道條例なき以上、許可を得て造つたこの道路が、今更支那當局の考へてゐた道路と形が異ふなどと云つても通用しないこと等々を主張した。だが支那當局は徹

頭徹尾反對して譲らなかつた。結局十月二十四日南京に於て、兩江總督沈葆楨は、該鐵道を二十萬五千兩で買取ること同意した。支拂は三回賦拂とし、最後の賦拂が完了するまで、會社は擔保として鐵道を保有し、株主のために營業を持続する權利を與へられた。上海道臺は十一月二十五日附でこの解決方法の有効を聲明した。

かくして鐵道は一八七六年十月三十一日から再び運轉を開始した。そして十二月一日には吳淞までの全線が完成した。全線開通の第一日は、生憎雨天だつた。紛争の影響もあつて、乗客は多くなかつた。午後二時發の一番列車に乗つた支那人は約百人に過ぎず、且つすべて「下等」客で、大抵は蘆草濱で降りてしまつた。終點まで乗つたものは十人餘りに過ぎなかつた。午後四時發の二番列車は乗客が僅かに三十人餘りだつた。尤もその後營業は次第に復活し、再び満員状態を呈するやうになり、一八七七年二月には客車六輛から九輛に増加した。後に會社の發表したところによると、同年八月二十五日までの一周年に滿たぬ間に、乗客總數十六萬一千三百三十一人を算してゐる。

一八七七年十月二十日愈々代金全額支拂が完了した。鐵道は支那政府の有に歸した。だが意外

にも、支那政府は自らその經營に當らうとはせず、引渡しを完了するや否や、一切の鐵道設備を破壊してしまつた。そして車輛やレール其他の諸材料を臺灣へ送つた。これ等は後に一部基隆で使用されたが、大部分は打狗灣の海岸に放置した。盜難を墜朽に打委せられた。最後の幕は、上海停車場跡に、天后宮といふお宮を建立することによつて閉ぢられた。

李鴻章が英人の助けを藉りて、北支に四十哩の鐵道を敷設したのはそれから十年の後である。滬寧鐵道の支線としての現在の上海吳淞線が、張之洞等の手によつて再建せられたのは、それから更に十年の後である。而もこれ亦、間もなく財政的に、英商怡和洋行の援助を仰がねばならなかつたのは皮肉である。思ふに支那政府は、鐵道そのものに反對したのではなく、外國人に所屬する鐵道に反對したのである。李鴻章の如き當時の支那の最も進歩的な獨眼な官僚は、開港直後に於ける支那を、外國資本に従屬せしめることなくして、資本主義的發展の軌道に乗せ得ると信じてゐた。だから彼等は、國內の經濟的樞軸が、外國資本の手に握られようとした時、初めは不遜な、後には絶望的な反抗の態度を示したのである。だが彼等の幻想は長期の試練において次第に打毀され、日清戰爭を経て遂に完全に消滅したのであつた。

上海邦人發展史

一、幕末官船の上海派遣

幕末の日本にとつては、長崎が海外貿易の要衝であり、また政治的策源地の一であつたが、これと一水を隔てた清國上海は、謂はゞ最も近い西洋の出店に相當し、船にしろ武器にしろ、長崎で買入れが出来なければ、上海まで行けば大抵は調達出来るといふ風であつたから、幕府も諸藩も、長崎に次いで上海に着目した。たゞ西洋との近接といふ點からばかりでなく、支那に本邦物産の輸出市場を開拓すべしとの見地から、上海へ貿易船派遣の企てが、幕末すでに行はれた。

萬延元年外國掛大目付から、幕府に産物方といふ一局を設置すべきことが建議されたが、その意見書には、國內物産の調査をなした上で、「かね／＼申上げ候通り、支那へ仕出船の御沙汰有

之候へば、彼地の模様次第、貿易取組みも心丈夫に出来仕るべく云々とあつて、支那への出貿易の必要を説いてゐる。これに對して勘定奉行小栗上野介はじめ、外國奉行等は何れも賛成を唱へ、安政開國以來外國貿易が開始されたが、これまでのところ當方は、居ながら彼の求めに應ずるのみで、甚だ不自然であるから、これを改めて先方へ大いに進出するが宜しく、且つ「彼國香港等にて、外國交易の振合にも見分なし仕り候はず、御爲め筋には相成るべく」、殊に唐國出產の品は、西洋の諸品と異り、また我國産品の支那へ向くものもあり、彼我ともに便利と存する次第ゆゑ、早速支那へ商船を仕立てる旨を仰せ出されたいと述べてゐる。（本庄榮治郎「幕末の上海貿易」

「經濟論叢」四六ノ五）

當時の貿易は、支那向けは勿論、歐洲向けも、一旦は上海に仕向けられ、上海が日本貨物の集散地の觀を呈してゐたし、海運はすべて外國船によつてゐたが、幕府内での右の意見で見ると、出貿易の必要は相當初期から感ぜられてゐたわけである。たゞ外洋船を所有しないといふことが争へぬ弱味であつた。そこで先づ、日本へ来る外國船の買入れが必要であつた。それに内外の政情は、海軍力擴充の必要からも、幕府と諸雄藩を馴つて、船の買漁りに狂奔せしめたのである。

上海への出貿易は、文久二年（一八六二年）幕府の費用において、遂に實行せられた。幕府は長崎で英國の帆船「ノームスチス號（三五八噸）」を買上げ、船名を千歳丸と改め、これに長崎會所調役沼間平六郎を主班とする旅商團と多數の貨物を載せて、上海に派遣した。

一行は水夫まで入れて總勢五十一名で、勘定吟味役根立助七郎、徒目付鍋田三郎右衛門ほか江戸役人三名が加はり、長崎會所役人三名、長崎地役人七名、長崎本商人（兼年寄）三名及び夫々の從者計二十三名であつた。從者の中には長藩の高杉晋作、佐賀藩の中牟田倉之助などがゐた。また薩藩の五代友厚は水夫に身を扮して乗組んでゐた。長崎在留の和蘭商人トンプレンヤも臨時御雇として一行に加へられ、船長その他乗組英人は、買上げ前のみ、乗組ませた。

一八六二年即ち同治元年の五月六日、千歳丸は極上高く日章旗を掲げて、上海に入港した。そしてまる二ヶ月間上海に碇泊した。モンタルト・ド・ジトサスの「史的上海」に、この年日本の「Zensai Maru」といふ船が、初めて上海へ通商を求めに來たとあり、「江海關道洋務成案彙編總目」といふ書物にも、同治元年「日本國官沼間平六郎等」が上海へ來て通商を請うた、と記録されてゐる。橋本光撰「東方兵事紀略」には稍々詳しく、

「同治元年日本官の上海に至れる有り、和蘭國領事に因りて貿易を請ふこと、西洋無約の各小國の例の如くす。通商大臣蘇撫薛煥これを許す。是れ日本通市の始めたり。」

とあつて、更に支那流に解釋した通商申入れの理由をも記し、「長崎奉行が僚屬を遣し、和蘭船に附して貨を賣らした」との判断を下してゐる。もと／＼この貿易給派遣は、長崎の和蘭領事ポートインの斡旋によるどころ多く、上海に着いてからも、萬事和蘭委せであつたから、船まで借物と思はれたのであらう。

上海に上陸した一行は、直ちに和蘭領事館を訪問し、積荷を全部委託販賣に附した。支那側も通商條約は結ばぬが、和蘭領事館が代理店となつて賣捌く分には、毫も差支へないといふことであつた。一行は上海道臺吳煦はじめ支那官憲と面接すること五回、その他英、米、佛のコンシュル等をも訪ねて、大いに見聞を擴めたのであるが、貨物の賣行は、値段關係から薩張り思はしくなかつたらしい。

上海で初めての日本商品の試賣だつたとはいへ、商品の種目は、從來長崎あたりで支那人がよく買付けてゐた支那向け輸出品を、豫め選定して來たので、支那人にとつても、餘り珍しい物は

かりではなかつた。それに當時、上海は太平軍の包圍攻撃を受けてゐる最中だつたから、商賣の時期としても悪かつたわけである。積荷は約五十品種の多岐に亙り、うち主なものは石炭、海參、干鮑、寒天、昆布、人參、織物、漆器その他美術雜貨等であつた。返荷として買付けた支那商品は、織物、絨氈、水銀、石膏など十種餘りである。(尙當時の貿易の始末は、川島元次郎著「兩國史話」、中村孝也著「中牟田倉之助傳」及び本庄博士の稿論文に詳し)

幕府はこの貿易のために、洋銀三千弗を準備し、更に上海の和蘭領事宛に二萬七千弗の爲替を組んだくらゐで、多額の出資をいとはず、邦品宣傳のために船からの努力を拂つた次第であるが、貿易上の直接の收穫は上述のやうに大して芳しくなかつた。けれども貿易外の收穫は非常なものであつた。幕吏や藩士や長崎商人が、現地に來て仕入れた上海知識、西洋知識は、どれほど國內改革のために役立つたか知れないのである。殊に高杉晋作、中牟田倉之助、五代友厚等優秀な諸藩の志士達が、太平天國の亂を實際に目撃し、また英佛の支那植民地化の形勢を目睹して得たところは、蓋し母國興隆のための、没すべからざる原動力の一となつたのである。

高杉の手記「游清五録」中の上海滞留日録(東行先生遺文七)に、

「熱々上海の形勢を見るに、支那人は盡く外國人の便役たり。英法の人、櫛市を歩行すれば、清人皆傍らに避け道を讓る。實に上海の地は、支那に屬すと雖も、英佛の屬地と謂ふもまた可なり。」

とあるが、後に彼の持論となつた『五大洲に腹をつき出して、經倫を行ふ』は、この上海觀察の結論といふことが出来るし、また歸朝後の海軍擴充論の提唱、奇兵隊の創設の如きも同様である。特に彼が大村、山縣と共に庶民の子弟を徵募して洋式の編制操練を施した奇兵隊は、實に日本近代陸軍の最初の發芽であつて、同行の中牟田が我海軍創設のために盡した偉大な貢獻と好一對をなしてゐる。中牟田の率ゐた肥の海軍は維新戦役の勝敗を決する重要役割をもつたもので、後に彼は海軍中將子爵となつた。五代は上海滞在中、落のために外國船買入れといふ大使命を果し（五代蘭作者『五代友厚傳』）、後に大阪商工會議所に銅像が建てられる程の功績を、明治實業界に残した。殊に五代は昭和九年北海道函館に、上海向け海産物輸出會社廣業商會を設立するや、直ちにその支店を上海に開設し、また大阪で彼が起した製藍所「朝陽館」の代理店を、明治十一年から十五年にかけて上海に設置したこともあり、上海と甚だ淺からぬ因縁をもつたのである。

二、北海道上海貿易の發端

千歳丸に次いで、幕府は元治元年（一八六四年）再び貿易船を、上海に派遣した。二度目の船は健順丸といひ、文久元年幕府が函館で買入れた米國帆船サルゲア號（三七八噸）である。

初め函館奉行は、この船を香港、爪哇方面へ差向けるべく、文久二年海産物を萬積して函館を出帆せしめたが、物議のため品川まで来て中止したのであつた。文久三年幕府はこれを上海へ遣すことに決し、翌元治元年兵庫から上海へ向はせたのである。健順丸は二月二十一日上海に入港、滯留約一ヶ月半にして離退、長崎、兵庫経由、七月十日品川に歸着してゐる。（「北海道史」本庄博士前掲論文）

健順丸には軍艦奉行支配組頭次席函館奉行支配調役並山口鍋次郎、外國奉行支配調役格通辯御用頭取森山多吉郎、その他函館奉行所所屬役人七名、松平越前守家來二名、商法方として蛸子砥平、西田屋文兵衛等が乗込み、船員をも加へて一行五十餘名であつたが、今回は外國人を一人も

乗せず、全然邦人独自の力で行ったのが、千歳丸の場合と異つてゐる。

「東方兵事紀略」によると、健順丸一行の對支通商は、英國官憲を通じてなされたことが窺はれ、従つてこの間に生麥事件の後始末なども、英國側と交渉されたことが想像される。商品の交易は、主として北海道の海産物を華商に賣り、これと引換へに砂糖、棉、水銀等を買入れたといはれてゐる。因みにその頃、上海では、ゴルドンの常勝軍が破竹の勢ひで太平軍を打破り、既に南京近くまで追ひ追つてゐたのであつた。

元來、北海道の海産物は、長崎の唐蘭貿易時代から、對支輸出品の大宗であつたから、安政六年函館の開港とともに、上海—函館の關係は著しく深められたのである。前記健順丸の上海派遣以前に、英人乃至支那商人の上海から函館に來つて、海産物の買付を行ふものが少くなかつた。その當時の貿易には興味深い逸話がある。

安政六年六月二日函館開港の當日午前四時第一着に、巴港灣頭に投錨して、住民を驚かしたのは、米國帆船モレー號であつたが、これに次いで英國の帆船イリサーメル號が入港した。このイリサーメル號で來たアストンといふ英國商人とその番頭の陳玉松といふ廣東人が、函館の海

産問屋柳田藤吉商店の店先に現れ、寒天や椎茸を一覧した後、海帯はないかとて、墨紙に並べて包んだ一寸四方ぐらゐの古びた見本を示した。主人藤吉は海帯の何物なるかを解せず、見本が古過ぎて判別が出来なかつたので、土地の博學者龜屋七郎右衛門（如水と號す）に鑑定を乞うたところ初めて昆布だと判つた。そこで三石産と十勝産の最上新昆布を客に示すと、こん度は客の方が見本と違ふから海帯ではあるまいと承引しない。已むを得ず藤吉は、それ等の昆布十四、五本を陳玉松に贈り、支那に歸國の上硫めんことを求めたのであつた。

ところが同年八月再びイリサール號が來た時から、猛烈な昆布の買付が開始された。昆布が海帯に相違ないことが判つた結果であり、そのため昆布の価格は入船毎に暴騰し、海産問屋は氣味の悪いほど儲けたのである。それから文久、元治と過ぎ、慶應年間になつて、昆布貿易に停頓の一時期が來た。その動機がまた面白い。

『時に慶應三年七月と記憶せり。米四番の飛脚船イリニエル駛入津し、これに乗組み來れる清國人六、七名の盛裝せるものを載せて一隻のボート、本船より埠頭に向つて漕ぎ來れるものあり。已に埠頭近くなりて、ボート鐵棒を以て海中を探り、昨年清國人入津したる時投げ棄て置きたる煉瓦石に昆布の附生せるもの數本を引

揚げ、少しく愕ける色ありて上陸せり。この時自分（藤吉）は埠頭にありて、船某（清國海人）と共にこれを
親居たりしが、船より大事去れり、請ふ内に入りて談ぜん、自分を伴ひてその館内に入り、扱、謂らく、
只今ボートにて上陸せるは、何れも上海にて盛んに昆布の買人なし居る商人連なり。彼等は曾て昆布の長さ
十八尋程のものを見て思へらく、是れ蓋し一年にしてかく生長すべきにあらず、必ずや数年乃至十年の歳月
を經てかくの如く長大を致せるに相違なし。故に因、五年間絶えずその買入れをなさんには、日本の昆布を
全く買盡すことを得べく、遂に日本より清國にこれを買入れを申込むに至るべしと、彼等はかく信じて年々
多額の昆布買占めをなし居たる次第なるに、今や昨年投棄せる煉瓦に長大なる昆布の附着せるを見て、茲に
初めて昆布は一年生の海草なることを發見せり。既に自己の不明を嘆りたる以上今より後、又前日の如き買
入れをなさざるべし。これ余が大事去れりとなす所以なり、とて深く嘆息せり。」（大久保湖南筆記、柳田藤吉
翁口述録）

北海道の昆布が、無盡蔵であることが知られると、上海の昆布市價は忽ち暴落を告げ、函館で
の支那人の新規買付は、全く中止された。けれどもこの價格低落は、上海方面での昆布消費を、
普遍化する機縁となつた。それまでは上流社會のみに需要されてゐた昆布が、今や一般に行き互
つて、船頭、苦力の仲間にも用ひられるに至つたのである。

明治六年八月、北海道開拓使は逸早く上海に、昆布賣り擴めのため御用開墾本六兵衛、林徳左

衛門その他五、六名より成る組合組織の委託販賣店を置いた。その商號を開通號といひ、場所は佛蘭西租界で、漢口にも支店を持つてゐた。當時の上海渡航者で、この開通號に宿泊したものが少くない。

明治七年、征臺役善後のために、北京に使した酒井玄蕃の日記に、左のやうな記述がある。

「十一月七日……上海に安宿す。……帆船如蟻、毛唐洋館林立、先づ開通號に至り投宿を乞ひ、美代、長瀬に逢ひ、和好の事相續候處亭主等大喜なり。」

九日 漢口の開通號支店の便を待て逗留す。

十四日……漢口に着。開通號に到るに松五郎なる者居り、當時商ひも無之、至て閑暇の由にて、色々深切に教へ呉れ甚だ好都合なり。……開通號は開拓使の商店にて専ら昆布並に鹽物を賣る。番頭、心齋、春駒、居る。春駒能く日本語を解す。」

開通號は明治八年十二月閉店し、翌年八月これに代つて同じく開拓使關係の海産問屋廣業洋行が設置された。これは五代友厚、笠野醇吉等による廣業商會の上海支店で、笠野が支配人として放腕を振ひ、明治二十四年まで營業を續けた。

上海事變までは、北海道海産物の上海向け輸出は、函館上海間に定期直航船があつたくらゐに、

殷盛を極めてゐた。現在では直航船こそなければ、昆布を紐帯とする北海道と上海との繋がりも、決してなほ薄らいではゐないのである。

三、明治初年の在留邦人

上海最初の在留邦人と目せられるのは、畫家安田老山である。老山、名は養、美濃高須藩の侍醫の家に生れ、初め長崎で鐵翁について畫を學んだが、後ち故あつてその門を追はれ、元治元年支那に密航し、上海に留まつた。ちやうど幕府の第二次派遣船健順丸と同じ年に、上海へ來たわけである。

また鐵翁禪師の同じ門下の畫家、體井雲坪（越後の人死後畫名高し）、淵川（越中の人）も、その頃上海に渡航し、ともに徐雨亭（先に長崎に來た山水畫家）、王道之（後に老山の妻の墓字を書す）、陸王群等と交遊して、専ら畫の法を研讀し、支那では、老山は吳水、雲坪は吳江、淵川は吳山と號したといはれる。そして彼等の渡航を案内したのは、長崎の和蘭人宣教師フルベッキ（G. B.

Verbeek) であつた。

當時上海には、邦人の在留するものなく、維新後になつて、知名邦人の來往漸く旺んとなつたが、老山が一番先輩であり、現地の事情に通曉してゐたので、常に彼等の案内役を勤めたものらしい。「臺灣史と樺山大將」の著者は、

「美濃の人で安田老山といふ畫家の如きは、その八年前に日本を脱出して上海に在住し、支那事情に通じてゐたので、樺山少佐その他に便宜を與へたことも少くなかつた。」

と、明治六年樺山資紀が上海に赴いた頃のことを記してゐる。七年征臺の役には、福島九成と共に軍のために地圖を作製して、大いに寄與するところあつたとも傳へられる。(寫生能久、東照先覺志士記傳「上巻」)

老山は、上海で當時名高い畫家胡公壽を師友として交はり、畫技を學んだ。胡公壽、名は遠、また横雲山民とも號し、山水蘭竹花卉の畫に巧みで、三百年不出世の畫聖とまで名聲を轟はれてゐた人であり、その畫法を會得した老山もまた、歸朝後日本で名を馳せ、東京の奥原晴湖、京都の中西耕石などと並び稱されたのであつた。

幕府が一般に海外渡航を公許したのは、慶應二年で、向後學術修業又は商業のため海外へ赴くものは願出次第免許するとの布令が出たが、その年既に岸田吟香が、和英辭書印刷のため、ヘボンと共に來滬してゐる。しかし維新前後にも、上海渡航はなほ相當やかましかつたと見え、棲雲「峽田日記」の著者竹添進一郎が、熊本藩で買込んだ汽船萬里丸の修繕に上海へ来た際は、表向き漂流といふことにしてゐる。明治三年岡山の西渡山が、上海に遊學した時も、藩嗣の忌諱に觸れ、歸朝後謹慎を命ぜられたといふ。

それでも明治元年に邦人の上海に定住して、商業に従事するものが既にあつた。この上海邦商の鼻祖は、田代屋といひ、長崎の陶器商田代屋慶右衛門の養子友成源平(泰興)が開設したもので、上海蘇州路に家を借り、肥前有田焼や漆器を支那人に賣り、また當時相當在住してゐた日本婦女子のために小間物を賣いでゐた。そして間もなく邦人來滬者のために、旅館をも兼營したのである。

旅館としての田代屋は、明治初期の日支交渉史に因縁の深い名前だ、當時北清の地に赴くものは、往き歸りとも上海を経由するを常とし、北京政府との交渉に使した大官の多くは、この田代屋に船旅の疲れを休めるのが例であつた。在野の志士商人等は、勿論こゝを唯一の根城として活

動し、アスター・ハウスや開通號で宿泊したのも、田代屋に赴いて互ひの連絡をとり、またここで日本の消息を聞いたのである。

明治二年通商少佐品川忠道が「上海表商法取扱向經驗の爲め」といふ職分で、上海に駐在を命ぜられ、翌三年通商権大佐に昇格、「京坂並其他商人上海へ開店に付き取締且彼國探索申付候事」といふ辭令を受け、四年日支通商條約の締結成るや、翌五年在支最初の領事館が上海に開設されて、その初代領事に同人が任命された。明治八年には三菱商會が上海航路を開設した。明治九年には東本願寺の小栗栖香頂、谷了然等が上海開教に着手し、十年には三井物産が石炭賣込のため上海支店(支配人上田安三郎)を開設した。

その頃上海の在留邦人は、既に相當増加してゐたらしく明治三年(一八七〇年)の工部局人口統計では、在留邦人は英租界四名、虹口租界三名、船員二十二名、合計二十九名で、全部男子のみとなつてゐる(H・ラング著「上海・社會的考察」一八七五年)が、同年條約交渉のため來滬した梅原前光は、その「使清日記」に上海の在留邦人を五、六十人と記してをり、明治六年小栗栖香頂の最初に上海に入つた時の日記(「東本願寺上海開教六十年史」)には、

「日本人五十餘名の内、一、友長（長崎横津町）、一、竹村（東京墨本）、一、渡、一、和田雄次郎（紀州）、一、大藏金吾（越後）、一、田代屋彌兵治、一、池田利吉（長崎熊屋町）、一、上野屋傳兵衛（時陽院）」

とある。その後明治十年代には、恐らく二百人近くの在留邦人がゐたと思はれる。これ等の中には、領事館員や醫師、商人及びその家族のほかには、職業婦人と洋妾が相當數を占めてゐたやうである。そして田代屋中心の時代は過ぎ去り、人々は領事館を中心に集まるやうになり、女達も本願寺別院を中心に集まるやうになつた。毎年の天長節には、在留の邦人悉く領事館に参集し、御眞影を拜し、祝酒を戴くを例とした。田代屋の肝入りで、「皇國人にして西洋人に嫁せし者」のために、本願寺で授業が行はれ（明治九年末）、また寺院内に育嬰堂なる教室を設けて、邦人兒童のために、寺小屋式の小學教育も開始せられた（明治十年の秋）。

支那側の文獻によると、日本の輕業師なども、そのころ屢々上海に來てゐたらしい。王翰の「瀛海雜誌」は、光緒元年（明治八年）の出版であるが、その中に、滬北近ごろ東洋戲劇多しとして、網渡り、脚藝などを描寫してゐる。光緒十年頃に、花柳界の消息を書いた本が流行したが、それ等に載せられてゐる妓女番附の中には、大抵一人か二人は、日本女性が混つてゐる。「海上羣芳譜」

には蘭田仙、新光生、阿諾生などといふ日本女性の名が出て居り、「春江花史」には寶玉生と三玉生といふ二女性の名がある。「海上中外青樓春影圖説」には、日本婦人の選ばれたもの、寶玉生以下十一人に上り、三味線を膝にし或は羽子板を手にし、或は洋傘を携へた着物姿の繪が載つてゐる。

日本妓館の有名なものに、鐵路大橋(天佑宮橋)の三盛樓、清河坊の美滿壽などといふのがあつたらしく、「海上羣芳譜」に、

「初め東洋婦女の來混せるもの皆虹口一帶に居り、衆有るものを除く外は、大半西人の抱ふるところとなり鹹水妹(外人相手の支那妓女)と相彷彿す。中國人は言語の不通に因り、従ひて問罪するものなかりき。庚辰(明治十三年)秋より鐵路大橋の三盛樓、茶寮を創む、支那西洋料理を兼備し、東洋小女子三人を雇用して奔走に供へ、兼ねて茶客のため煎茶裝烟をなさしむ。人皆その風雅絕俗なるを以て、盡く眼界を一擴せんと欲して、これに趨くこと驚の如し。この例に倣ふもの、遂には婦人をして事に従はしめ、すべて中國言語をも習はしむ。遊席などにも侍る。」

とあり、そのほか開東樓、玉川品香社、登瀛閣などといふのもあつて、一般に東洋茶寮或は東洋茶樓と呼んでゐた。吳友如の「申江勝景圖」には、東洋茶樓と題して、美滿壽の繁昌振りを寫

東洋茶樓





(上) 青年時代の五代友厚。

(下) 田代源平(24才の時上海三馬路三興照相にて寫す)

生した畫が載つてゐる。

明治十六年、領事館は上海居留日本人取締規則を布告し、その第一項に「飲食店、旅館屋の營業を爲すものは、領事館の成規に従ひて願出許可を受くべし」と規定してゐるから、その頃になつて、これ等の茶樓は一齊に閉鎖されたものと思はれる。なほ當時の取締規則には、「男女外出する時は、必ず相當の衣服を着用すべし」とか、「婦人にして髷はれなく斷髮し、又は男裝を爲すべからず」等といふ項目があつた。

四、岸田吟香の樂善堂

米國プレスビテリアン派の宣教師で、上海、厦門方面で布教と施療に當つてゐた James Curtis Hepburn という人が、安政開港と同時に横濱に来て施療院を開き、傍ら日本語の研究を始めた。後に明治學院最初の總長となつたヘボン(漢平文)博士である。

このヘボンの許へ、箕作麟祥の周旋で、岸田吟香が和英辭書編纂の助手として住込んだ。元治

元年吟香三十二歳の時のことで、彼はこの時初めて支那に關する知識を養つたのである。

慶應二年九月和英辭書の稿成り、その印刷のためへボンと相携へて上海に渡航した。吟香第一回の上海生活は、翌慶應三年五月に至る約九ヶ月間で、辭書校正の傍ら努めて支那讀書人と交遊し、深く支那内外の事情を究めると共に、また商人等にも接觸してわが對支貿易伸張の策を練つた。辭書の印刷は上海市南門外にあつた米人經營の美華書館で行はれ、印刷成るや「和英詞林集成」と題して出版された。本邦外國語對譯辭書の濫觴であり、へボン式ローマ字の起源である。明治元年、岸田吟香は再び上海に來てゐる。こんどは蒸汽船を購入するつもりで、單身來滬したのであるが、目的を果さず歸朝したやうである。この時既に支那貿易について大なる抱負を有ち、同年横濱判事寺島陶藏(伯爵宗則)を通じて、明治新政府に左のやうな意見書を提出してゐる。

「近來富國強兵策を相明候もの不少候得共大抵皆高趣の言にして實用に乏數候。富國の法は種々あるも農商を肝要と爲し、其内農は古來完備するも商には法なく、歐洲諸國は完備す。今直ちに商法を立てるは困難なるも漸を逐ふて進まば英佛、米利堅の商賈にも不劣ほどに相成るべく、殊に日本は近隣に支那國と申す便利の場所御座候。此支那と申す國は歐人の金箱に御座候。此金儲けに極宜敷支那を差置候而歐洲或は米利堅に

此商賣に参り候は、甚だ以て生理不明なる義に御座候。殊更御國の産物は支那人の尤も好む處に御座候。第一に人參、漆器、絹、錫、鉛、磁器、海參、昆布、鮑魚等は支那人の好物にて然も多く産するを以て之を蒸氣船に積込み、上海に送つて賣捌けば、多分の利潤有之、此對支貿易を行ふ爲には、會社を設立し、堅く契約を相結び商人前幾何宛とか出金して之に當るが最も宜敷候。」(中島眞雄「對支回顧録」下巻列傳)

その頃また上海の新聞によつて、西貢方面の米價を知り、わが國の米相場と比較して、その輸入を主張したり、上海市場に於ける本邦海産物の相場を、自己の創刊した「横濱新報」紙上に發表して、當業者の利便を圖つたりしてゐる。

吟香が「東京日日」最初の主筆として、櫻菱、柳北、南橋等と共に文名を轟かせたのは周知のことだが、明治十年新聞社を辭すると、銀座に樂善堂といふ藥舖を開業して、精鑄水と稱する眼藥の販賣を始めた。その賣行が頗るよかつたので、明治十三年彼は更に上海に渡つて、舊英租界河南路に樂善堂支店を開設し、支那内地に向つて精鑄水の販賣を開拓した。この精鑄水は、吟香が辭書編纂を助成した謝禮に、ヘボン博士からその處方を傳授されたもので、支那でもまた大いに歡迎された。

上海の樂善堂は、賣藥、雜貨の取扱ひのほか、諸子百家の袖珍本の稱賣を行つた。これがまた非常な好評を博し、年に十五萬冊からの賣上げを見た。元來支那の科擧には、受験者が抱へ切れだけの参考書を、試験場へ持込んでもよかつたが、何しろ木版大字の漢籍のことだから、到底各自必要なだけの参考書を全部携へて行くといふことが出来ず、これが科擧に志す讀書人一般の悩みであつた。創意に富む吟香はこゝに着眼し、銅版の細字を以て、尤大な漢籍を縮刷にして發賣したのである。

(註) 後に明治廿八年、金港堂主人原亮三郎が商務印書館に出資し、支那教科書の出版によつて、社部を隆昌に赴かしめたのも、この吟香の故智に學ぶところ多かつたであらう。因みに商務印書館は、初め美華書館に勤めてゐた支那人四名が五百元宛を出資して創立したもので、後經營難から解散しようとしてゐたのを、東京の金港堂主人が引受け、日支合辦としてその挽回を図り、大正二年資本金百五十萬元にまで増資されたが、翌年日本人の特株は全部支那側に譲渡されたのであつた。

かくて岸田吟香の樂善堂は、年々巨萬の利益を擧げ得たのであるが、國士としての吟香は貯蓄といふことをしなかつた。「岸田の片貿易」と呼ばれたやうに、荷物はどん／＼取寄せたが、内地

への送金は一向捗々しくなく、後にはその赤字が、本店の財政に支障を興へるくらゐであつた。片貿易に偏した理由は、その商品を對支志士達の賣り食ひに委せたり、常に多數の食客を養つてゐたからである。

すなはちわが民間志士や參謀本部の派遣將校達は、支那内地に入るに當つて、樂善堂の精餉水袖珍本などを携へ、何れも商人風を装ふて、自由に旅行、調査の目的を果したが、それ等商品の代金が、吟香の手許に還ることは、殆どなかつたらしいのである。そして行商ばかりでなく、漢口、長沙、重慶、北京、天津、福州等の要地には、志士、將校達による支店、出張所が形成されて、夫々大口に商品を曳いたのである。荒尾精、根津一、小澤徳平、山内崑、宗方小太郎、中西正樹、高橋謙、赤津仁作、中野二郎、小倉金太等の對支先覺者が、相前後して、それ等の支店出張所を主宰し、各々その部下に有爲の青年志士を置いてゐた。荒尾精の漢口樂善堂規則といふのを見ても、『第一條、我黨の目的は、云々』といつた有様で、商店といふよりも、宛然一個の梁山泊であつた。

上海樂善堂の近處には、更に一屋を借りて、常に數十人の食客を置いてゐた。輝々たる血氣の

青年ばかりで、何れも志を東亞の大局に馳せ、徒手空拳を以て渡來して、對支活動の好機到るを待ち構へてゐるのであつた。これ等の豪傑連が、後に日清戦争に際し、みな軍に従つて大功を樹てたことは、冷く天下の知るところである。

五、初期の上海航路

幕末邦船の貧困に乗じて、我れに來航した外國船の尤なるものに、米國パシフィック・メール會社があつた。同社は慶應三年（一八六七年）桑港、上海間に航路を開き、更に明治三年には、横濱から神戸長崎を経て上海に至る定期支線を設け、表日本における旅客貨物の運輸を掌握した。その横濱支店たる謂ゆる「亞米利加四番」の名は、當時の我が商界を脅威するに足るものがあつた。

七年征臺の擧あるや、邦船の軍事輸送に堪ふるものは、僅かに日本國郵便蒸汽船會社の數隻を算へるに過ぎなかつた。そこで政府は、一たび軍事輸送を前記パシフィック・メールの船隻に頼らんとしたが、米國の局外中立の宣言に遭つて果されず、遽かに蕃地事務局の英人顧問キャプテ

ン・ブラウンを香港に派して外國船十三隻（價格銀百五十七萬六千八百餘弗）を購入、これを三菱商會に委託して運用せしめた。

翌八年二月、三菱商會（五月から三菱會社と改稱）は、政府の命によりパシフィック・メールの上
海航路に對抗すべく、右受託船中の左記四隻を以て、初めて横濱上海間に毎週一回の定期航路を
開設した。

東京丸（木製外車）二、二一七噸

金川丸（鐵製暗車）六〇六噸

新潟丸（鐵製暗車）一、〇九〇噸

高砂丸（鐵製外車）一、〇二〇噸

政府は三菱會社に、船舶の無償拂下げ、助成金の下付等の保護を加へたので、會社は勇躍パシ
フィック・メールを敵手に戦ひを挑んだ。優秀な船舶を擁する相手は、その速力を利用して、日
本船出帆の翌日追つかけて發船する等の舉に出でたが、こちらは運賃の切下げで對抗した。當時
社長岩崎彌太郎は、社中に告示して次のやうに督勵してゐる。（日本郵船株式會社五十年史）

「我邦古來外航を企てしことなし。今上海通航の如きは、大に外航を感んにして航海の大權を我に復するの
階梯なり。今此階梯を踏んで漸々進抄する所あらんとす。然るに米郵船會社の屢々我出帆の日を躰き故らに

障礙をなすが如きは、實に我帝國を畏如するの甚だしきものなり。余が各位と共に主として努むる所のものは、此障礙を排除して、航海の大權を我に復するに在り。」

かくて九ヶ月の激争の結果、双方とも莫大の損失を蒙つたので、社長岩崎は政府に請うて融資を受け、人を介してパシフィック・メールに交渉し、明治八年十月同社の神戸、長崎及び上海における土地、建物、埠頭とその使用汽船コスタリカ號（木製外車一、九一七噸、後に玄海丸と改む）、オレゴニア號（木製外車一、九一四噸、後の名護丸）、ゴールデン・エーヂ號（木製外車一、八七〇噸、後の廣島丸）及びネバタ號（木製外車一、〇六〇噸、後の西京丸）を銀七十八萬弗で買収し、別に三萬弗を同社と關係深く且つ本航路に縁故のあるO・O汽船會社に贈り、兩社ともに爾後三十年間本航路並に日本沿岸諸航路に立入らぬ旨を誓はせたのである。

ところがパシフィック・メールの驅逐後間もなく、翌九年二月英國のP・O汽船會社（俗に「横濱十五番」）が、新たに香港、上海、横濱線を開いて、本邦船を脅威し始めた。恰かも前門に虎を拒いで、後門に狼を迎へた觀である。だが三菱會社は、再び敢然とこの勁敵に拮抗し、政府を動かしてP・O汽船に横込まれる海上貨物の阪神間鐵道輸送を禁ぜしめ、或は外國船乗込規則を制

定して外船利用の旅行者を取締らしめる等、手段を盡して力闘し、遂に六ヶ月の後P・O汽船を無條件で同航路から撤退せしめることに成功したのである。

この競争は前回に幾倍する苦戦であつたらしく、「郵船會社五十年史」に「當時社中一般より各自月俸の三分ノ一を減額して、難局に當るの資に供せんことを社長に請願せしに見ても、這回の抗争が如何に容易ならざりしか想像すべきなり」とあるが、相手方は左程努力も拂はなかつたやうで、最近出版されたボイド・ケイブルの「P・O汽船會社百年史」は、この航路について何も書いてゐない。郵船會社となつて後の明治十九年、支那の招商局も、海定、致遠の二隻を以つて、上海横濱間に一時運船を試んだ（孫慎欽の「招商局史稿」によると同治十二年（明治六年）及び光緒四年（明治十一年）に上海から長崎神戸方面に航海營業を試んだとある）が、これは勿論苦もななく斥けた。

當時の上海航路の船の速度を記録について見るに、明治七年十一月パシフィック・メールの飛脚船ネバク號に乗つて、上海から横濱に歸つた酒井玄蕃の日記によると「丁度二晝夜と一時間にて上海より長崎に達す」とあり、十一月廿六日午前一時八分上海を出帆、天候先づ普通にて三十

日午後一時神戸に着いてゐるから、神戸上海間は五晝夜半を要してゐたことが窺はれる。また明治九年の上海東本願寺住職の日記によれば、東京丸なども神戸上海間行程五日となつてゐる。現今の連絡船二晝夜に較べると、實に隔世の感が深い。

光緒二年（明治九年）出版の葛元照編「滬游雜記」に、當時の本邦上海航路の乗船價目が擧げられてあるが、これで見ると上海から長崎までは六元、神戸まで十元、横濱まで十五元であつた。光緒五年（明治十二年）の訪日使節王春の「談瀛錄」には、當時の就航船の形骸、船室、食堂、サービスの模様など極めて詳細に記してゐる。

開航當初八ヶ月間は支店といふ程のものではなく、前に述べた佛租界の開通號内に三菱の本田政治郎、内田耕作等が駐在して事務を執り、船も恐らく佛蘭西バンドあたりに横着けてゐたものらしいが、パンフイック・メールの設備を買収してからは、虹口のメール・ウワーフとその建物を使用した。メール・ウワーフは「三菱碼頭」と呼ばれるやうになり、会社は支那人の間に「東洋公司」の名で知られるやうになつた。

明治十八年三菱會社は共同運輸を合併して日本郵船會社となり、二十二年初めて正式に上海支

店を開設したが、初代の支配人はW・A・クルボットといふ外人であつた。邦人支配人が置かれたのは明治二十四年以後のことである。明治二十三年三月八日の邦字紙「上海新報」には、虹口碼頭の擴張工事を施さうとし租界當局の差止め通牒に遭ひ、會社と工部局が夫々辯護士を立て、争つた記事が載つてゐる。當時の租界における邦人商社の地位が、推して知られる。

日露戦争直後、明治三十九年の五月またまた外國船の進出があつたが、これには使用船の定期的増大を以て對抗し、從來の定期一週一回を二回に増進した。四十二年右外國船の撤退後は、定期命令船の外に神戸上海間一年十六回以上の定期自由船をも開航した。大正四年以降、上海航路の命令は、神戸上海間を本線に、横濱上海間を附屬線に変更せられたが、その頃の命令本線には二千五百噸級の博愛丸、山城丸、近江丸、筑前丸、筑後丸の五隻が就航してゐた。長崎上海間に初めて、今日の日華連絡線が開かれ、五千噸快速客船二隻が、處女航海をしたのは、大正十二年の春であつた。

因みに上海の名物黄包车が流行し始めたのは、右の我が上海航路の開設と殆んど時を同じうしてゐる。すなはちホークス・ポット著「上海小史」によると、最初的人力車が日本から輸入せら

れたのは一八七四年（明治七年）であつた。

六、東洋學館と日清貿易研究所

明治十五年の朝鮮事件を契機として、自由黨や玄洋社の同志の間に、大陸經營論が擡頭し、十七年清佛戦争の勃發に乗じて、哥老會の煽動その他の對支活動が實行に移され始めた。先づ「上海は東洋第一の要港であるから、この地に學校を創設して大いに青年子弟を養成し、これをして支那の國語國情に通曉せしめることは、他日大陸經營の計をなす上に極めて必要である」との見解に基づき、明治十六年上海乍浦路に「東洋學館」なるものが設立せられた。これは數ヶ月にして閉鎖したが、次いで明治十七年の末に至り崑山路八號に「亞細亞學館」として復活した。

この種事業の主唱者は長谷場純孝、末廣重恭、馬場辰猪、中江篤介、佐々友房、杉田定一、平岡浩太郎、日下部正一等で、館長には末廣重恭を推し、宇都宮平一、新井泰、大内義映、山本忠禮等が實際經營の任に當つた。學校としては素より規模も小さく、學科も支那語と英語の教授を本

位とし、生徒は僅かに十數名であつた。しかも生徒として入學した者が、後年支那で活躍した澤村繁太郎、山内富、高橋謙、荒賀直順、中野熊五郎等何れも既に支那四百餘州を呑むていの青年豪傑揃ひであつたから、みつちり落着いて勉強するといふよりは、龍吟虎嘯互に氣焰を掲げるに暇ない有様であつた。他方經營者もまた多く内地にあつて政界に馳驅するに忙しかつたため、やがて財政難にも襲はれることとなり、教頭宇都宮の知きは、自己の衣類書籍類を賣却して經費に充てた程で、明治十九年には早くも閉鎖の已むなきに至り、その後始末は大隈伯の出資によつて解決し得たといふ。(禮山堂直著「上海」、「東亞先覺志士記傳」上巻、「對支回顧録」上巻)

これに次いで起つたのは、荒尾精の「日清貿易研究所」である。明治十九年參謀本部の派遣將校として渡支した荒尾は、先づ上海に岸田吟香を訪ひ、その援助を得て、漢口に樂善堂支店を開き、居ること三年、龔の東洋學館に生徒たりし山内富、高橋謙その他の青年志士を指揮、具さに支那事情を調査し、明治二十二年四月同志井深彦三郎を隨へて歸朝した。そして彼の體驗に基く對支政策の結論は、日支貿易の振興、従つて必要な人材の養成、これであつた。東洋學館乃至亞細亞學館時代の人々の茫漠雲を掴むやうな大陸經略論に比べて、これは遙かに現實的且つ進歩的

であつた。

蓋し當時の我が對支貿易は、日清通商條約締結後既に二十年を經過したに拘らず、頗る萎微振はず、而もその大半は日本内地に在留する華商の手に掌握せられ、上海においてすら貿易に従事する邦商は、三井洋行のほか廣業洋行、吉田號、東興洋行（平田棉行）、樂善堂等隻手の指を屈する程度に過ぎなかつた。故に先づ上海に「日清通商會」（日清貿易商會）を設立し、次第に全支那の開港場に支店を設け、日本内地の商工業者と氣脈を通じて貿易の振興を圖らんと企畫したのである。而して當面これが業務を擔任すべきエキスパートの缺乏せるに鑑み、その第一着手として人材養成の機關たる日清貿易研究所の設立を目論んだのである。

荒尾精は歸朝早々この案を具して政府方面に資金調達を運動し、農商務大臣岩村通俊等の賛成を得たので全國に遊説、學生の募集に努めた。折柄國會開設を目前に控へ、國民一般は政治熱に淨かされ、且つ歐化萬能の時代とて、支那問題などに耳を傾ける者はないと思はれてゐたに拘らず、荒尾の熱心な遊説は意外の反響を起し、入學志望者三百餘名に上り、試験の結果そのうち百五十名を選抜して都下を集めることが出来た。農商相の更迭で一時資金調達難に陥つたが、金謀

次長川上操六の盡力によつて、内閣から四萬圓の補助が出る事になつた。明治二十三年九月九日荒尾精以下職員並に學生約二百名に近き一行は、無事上海に到着した。

開校の式典は九月二十日英租界大馬路旁西路億里里（泥城橋畔）の假校舎で舉げられた。校舎は荒尾と豫て親交の深かつた廣東人の大地主羅記就に屬する支那家屋、三棟十軒分を改造したもので、高橋謙等漢口時代の同志達が豫め借入れ、手配して置いたのである。研究所の職員には所長荒尾精、所長代理根津一、幹事小山秋作、西村忠一、學生監宗方小太郎等のほか、教授約十名があり、中に御幡雅文、清國人沈文藻、英人アストル等がゐた。漢口樂善堂同志の多くも教授又は日清誘導商會設立委員として參加した。

研究所の授業は、かくして開始されたが、初めから資金は潤澤でなく、誘導商會の設立は遷延せられ、役員たるべき人々の間には、漸く不平の聲を漏す者が現れた。殊に學生は氣候風土の異なる上海に来て、口に慣れぬ支那料理の賄ひに食が進まず、下痢を起すものも増えて、非常に悲觀的になつた。加ふるに當時池塘の多かつた上海の濕氣に當てられ、熱病に罹る學生が一時に九十名以上にも達し、豫算外の出資で、財政は愈々窮迫を告げるに至つた。そこで荒尾は急遽歸東し

て、金策に奔走したが果さず、留守を預る根津代理所長は、漢口樂善堂の信用を利用して、三ヶ月後拂ひの約束で苧麻を買入れ、三井洋行に依頼して荷爲替を組み、上海で即金を得て一時を凌ぐ等の苦心を続けた。學生もその内情を知つて動搖を來し、結局三十名の退學と商會部その他の冗員淘汰で收まつたが、これまでの校舎の設備では病人が絶えないといふので、二十四年六月同じ家主の持つ湧泉路（妙安寺路）競馬場前の洋館に引移り、長崎商業學校長猪飼麻二郎を教頭に聘して、教務の改善、校紀の刷新を圖つた。

その後も財政難は續き、家賃の如きは初めから二ヶ年許りも滞納してゐた。幸ひに家主の謹記號主人は、荒尾の人物に深く傾倒し、自己の事業の相談相手にしてゐたくらゐるで、家賃のほかにも大分融通しており、取立てなどは一切しなかつたと云はれる。

既にして三年の課程を終り、明治二十六年六月末、研究所は八十九名の卒業生を出して閉鎖された。もと／＼この研究所は、日清誘導商會本部並にその各地支店に活動すべき人材の養成が目的であつたから、只一回卒業生を出すだけで、その任務は終つたわけである。だが資金の調達難から、肝腎の誘導商會が組織されるに至らなかつたのは遺憾であつた。

荒尾の考へてゐた誘導商會なるものは、具體的にどんな組織と性質を持つものか、稍々捕捉し難い節がないでもないが、大體現今各府縣の在支貿易助長施設に似たやうな公共斡旋機關を目途としたものらしい。「余若し此商會をして當時流行の株式會社組織を取らしめば、幾百萬圓の運動たりとも、取て其難きを憂へざるなり」と學生一同宛の書翰の中で述べてゐる。

「銀行頭取あり、會社々長あり、商業學校長あり、皆來りて曰く、研究所生徒卒業の後、幸に其二、三名を分てと。余答へて曰く、余應に日清の貿易を興さんとす。而して其人の尙未だ足らざらん事を恐る。何ぞ分つを得んと。又人あり來り語つて曰く、虫徒にして業成らば、此許多の人才何くに之を用ひん。當時彼業を替むもの、三井會社、廣業洋行等に過ぎざるにあらずやと。余答へて曰く、甚ひかな君の言や、我生徒をして當時の會社洋行等に於ける手代番頭の如くにして止ましめんならば、我何を苦んでか多年之を養成するの必要あらんやと。其人分らずして去る。」

これもその書翰の一節である。彼がかく非常に大規模に組織しやうとした對支貿易の斡旋機會は、それから三十餘年も後の大正十二年に、大阪商人の寄附を土臺として生れた。大阪市上海貿易調査所を先頭に小規模ながら弗々實現し始めた。昭和年代に至つて、各府縣によるこの種のも

めが、競争的に設立されたのは一つの奇観である。

日清貿易研究所は卒業生を出して後、更に二年間彼等に商業の實習を授けるべく、二十六年七月一日商品陳列所を新設し、卒業生の中の約四十名を收容した。商品陳列所は大阪の貿易商岡崎榮次郎等の出資により、英租界四川路漢口路角、税關後面の二階建の一種を借りて、これに充てその南隣りに日華洋行なる看板を掲げた岡崎自身の店が開店した。陳列所は全く學生の自主的經營に委ねられたが、専ら委託品の小賣を業とし、大口取引はすべて日華洋行に譲つてゐた。學生は合宿所の家賃に補助を受けるのみで、衣食は自辨となつてゐたから、學費のないもの數名は、日華洋行の手傳をして自活した。

陳列所開設の翌年日清戦争となり、所員の殘留は租界の安寧を妨げるといふことで、已むなく一切の設備を一英人に託し、二十七年八月末御膳雜文引率の下に一同日本に引揚げた。戦時中多數の卒業生が従軍して、功勞を樹てたことは勿論である。戦後卒業生の一人である土井伊八氏は荒尾精の委任を受けて、單獨この陳列所を復興し、所名を「瀛華廣懋館」と改めて暫く各府縣からの委託品販賣を續けたが、後その功勞に酬ゆるため權利一切が土井氏に譲渡され、現在江西路に

輸出入業を営む瀛華洋行の土臺となつたのである。(井上雅二著「巨人荒尾精」、創立三十周年東瀛同文書院誌及び「支那」二十五周年記念號)

七、日露戰爭前後の在留邦商

明治二十七年日清戰爭の當時、上海在留の邦人は既に一千内外に達してゐたが、開戦と同時に一旦殆ど内地に引揚げた。その時分の殘留組の模様については次のやうな記述がある。

「日本と上海の交通は英國々旗の下に、アンセロスなる汽船之に當れり。當時の在留邦人は千人内外にして殆ど全部引上げ歸朝したるも、踏留まりて天長節を當時洋濱濱に開設せる昆布會社の二階に於て祝したるは僅に三十餘名なりき。當年に於ける支那人の敵愾は今日の如くならず、一、二迫害及衝突を起したることありたるも、他は平穩にして、租界内に於ては相互尙は出入を繼續し居たり。」(大正四年内山請外二氏共著「大上海」)

次いで明治三十三年團圓事件となり、各國聯合軍の北京進軍を見るに及び、上海もまた兵火を

免れずとの謠言が頻りに行はれ、こんどは日清役當時とは打つて變つて、支那側が非常な騒ぎ方をした。銀行は取付けられ、家財を纏めて地方に避難するものが續出した。これを映じて外人の居留民會は、萬一の場合日本の出兵を依頼しようかと決議するし、折柄創立せられたばかりの我が南京同文書院も上海に引移るといふ有様であつた。上海義勇隊に、初めて邦人が参加して、日本隊を組織するに至つたのもこの時である。

その頃在留邦人はなほ千二百人程で、日清戦前に比しても餘り増加しておらず、且つ北支出兵の徴給で、上海航路は再度の停船を餘儀なくされ、貿易の改善は遅々として進まなかつた。

邦商の開店が増へ、在留人口の激増を來したのは、日露戦争以後のことである。三十七年末在留邦人は既に三千三百を數へ、翌年には五千を超え、その後引續き漸増して、大正三年一萬を突破した。

日露戦争中も勿論邦船の就航は一時杜絶したが、外國船による貨物輸送は跡を斷たず、殊に棉花、豆類等の對日輸出は頗る旺盛を極めた。上海道臺は三十七年二月局外中立を宣したが、皇軍の連戦連勝で、邦人に對する人氣は非常によく、六、七、八月にかけ上海各銀行の買入れた日本

軍票は莫大な額に上り、當時北支向け荷動き活潑だった本邦綿糸布の支拂ひに充てられた。これに反してロシア側は、上海碇泊軍艦乗組員の支那人殺害事件などから信用を失墜し、ルーブル紙幣の上海外國銀行に賣付けられた額は、三十七年二月から七月までに千三百萬ルーブルの多きに達した。(内山清「大上海」)

日露戦争から歐洲大戦まで、殊に明治四十二年頃から大正初年にかけての、邦商の上海進出は實に目覚ましいものがあつた。明治四十四年の辛亥革命は、上海に一時金融恐慌を齎したが、その後間もなく邦品に對する意外な需要擡頭を見せ、我が在支商權は愈々その基礎を固めるに至つた。實際この時以來、我國對支貿易の主流は、大阪川口や横濱での居貿易から、上海への出貿易に轉換したといふことが出来やう。

「上海に於ける日本及日本人の地位」と題する大正四年刊上海總領事館報告書(内山清氏執筆)には「明治二十年以前に開業せる商店にして現存せるものは僅かに九店にして、三井物産會社を除く他の各商店の多くは、在留外人若くは日本人向の雜貨店なり。日清戦争當時に於て、一時當地本邦人中内地に引揚げたるもの多かりしが、其後漸次増加し、特に日露戦争以降非常なる發

達をなせり。當地に於ける重要なる大商店の多くは、日露戦争後の開設に係るものにして、又支那第一革命事變當時、本邦雜貨が意外の盛況を呈したる爲、明治四十四年より大正元年に互りて、小雜貨店の數増加せり。然るに斯くの如き同業者の激増は勢ひ供給過多となり、各商店ともに薄利となりし爲大正二年以降は、記すべき商店の新設を見ざるに至りたり。」とあり、また大正三年出版の「支那貿易案内」には次のやうな記述がある。

「本邦人の支那に渡りて彼地に於て自己の運命を開拓せんとするものは、三井、三菱等第一流の巨商にあらざれば一貫一木の僑商家たらざるはなし。然るに近時は、第二流の實力あり信用ある各商店が、相競ふて彼地に支店出張所を新設し盛に貿易を行ふに至れり。即ち神戸の鈴木、湯淺、大阪の伊藤、井上、横濱の増田、東京の町田、服部等其他有力なる商店は、上海、漢口、天津、大連に各々一大發展を開始するに至りたるが如き、これ近年直接貿易の盛んに行はるるに至れる原因にして、支那に於ける本邦商の一大發展の現象として賀せざるを得ざるなり。」
今明治初年から歐洲大戰に至る約五十年間に、上海で開店した邦人商舖の主要なものを擧げると左の如くである。(○印は今日まで存続のもの)

明治元年 田代屋(陶磁器、旅館)

明治四年 荒木屋(雜貨、小間物)、木棉屋(飛脚船問屋、陶器、小間物)

明治五年 崎陽號(小間物、旅館)

明治六年 開通號(海產物)

明治八年 ○三菱商會(郵船)

明治九年 廣業洋行(海產物)、有馬洋行(陶器、小間物)

明治十年 ○三井洋行(石炭)、末松軍平(醬油)、永昌號(陶磁器、小間物)、鏗源號(陶器、雜貨)

明治十一年 津枝洋行(藍靛)、三德洋行(小間物、雜貨)

明治十二年 北川藤五郎(陶器、小間物)

明治十三年 榮善堂(藥種)

明治十四年 清原健三(陶器、雜貨)

明治十五年 立川洋行(雜貨)、○松崎洋行(食料品、旅館)、鈴木喜真館、厚東鶴藏(雜貨)

明治十六年 藤井商店(陶磁器、雜貨)、赤井市街(穀物、小間物)、大倉組(貿易)、池崎新吉(藍甲細工)、小西富三(雜貨)

明治十七年 矢野商行(鵜卵)、喜多洋行(吳服)、古賀洋行(吳服)、修文館(印刷)、柳川清助(醬油)、渡邊

源三郎(日本酒、干物)、梅木傳吉(穀物、下宿屋)

明治十八年 兒玉洋行(美食品)、錦芝洋行(陶磁器、小間物)

明治十九年 大龜玉吉(摺附木)

明治二十年

○吉田號(雜貨)、東興洋行(半田棉行)、市原鷄卵商會、○東和洋行(旅館)、小泉洋行(雜貨)、楠幸吉(鷄卵輸出)、椋尾仙太郎(陶器、雜貨)

明治二十一年

○內外總會社(棉花買付)、○常盤舍(旅館)、東葉酒樓(日本酒)

明治二十二年

北海道昆布會社、三菱礦煤所(石炭)

明治二十三年

松村商店(綿布)、天野號(雜貨)、奉國總店、佐藤寫真館

明治二十四年

中桐洋行(金物)

明治二十六年

○橫濱正金銀行、日華洋行(雜貨)、○丸三藥房

明治二十七年

○秋田屋菓子店

明治二十八年

○濟生堂藥房、○土橋號(雜貨)、○村井號(玩具)、○樋口通國所

明治二十九年

大東新利洋行(航運)、○豐陽館(旅館)

明治三十年

○岸田洋行(美術品)、近江屋(理髮器具)

明治三十一年

東洋關西合資會社(鷄卵)

明治三十二年

吉隆洋行(雜貨)、曉梨軒(食料品、文具)、○吳光社(牛乳)

明治三十三年

中井洋行(洋紙)

明治三十四年

內外鷄卵會社

明治三十五年

○大阪商船會社、○上海紡織會社、○川內回漕店(通國業)、○前田洋行(美術品)、八千號

(寫真器)、淺見商店(雜貨)、○松本商店(食料品)、藤本炭服店、作新社(印刷)

明治三十六年

○日本棉花支店、佐藤商會(穀肥)、山田商會(鷄卵)、田邊洋行(雜貨)、○松尾洋行(食料品)

○米田商店(食料品)、田村洋行(骨董)、雲龍織綿工場(日支合辦)

明治三十七年 ○北福洋行(硝子器)、日華洋行(雜物)、日清商會(食料品)、石川洋行(美術品)、岡田號(雜

貨)、○萬歲館(旅館)、○上海日報社

明治三十八年

○大倉組(石炭、穀肥、綿糸布、軍器)、鈴木商店(砂糖、海產物、穀肥、綿糸布)、武林洋行(穀肥、棉

明治三十九年

花、麻)、○東照公司(仁丹、雜貨)、○三笠洋行(副雜物)、真崎洋行(製麵機)、福隆洋行(雜貨)

○三菱公司(石炭、銅、洋紙)、吉野公司(銅、電線)、○上海製造絹絲會社、○東新洋行(棉

明治四十年

花、金物)、日比野洋行(陶磁器)、日信大藥房、○重松藥房、○廣貫堂藥房、恒春堂藥房、○三

頭洋行(ベシキ塗業)、○近藤度量衡器店、中川洋行(夾服)、○岩崎京染店、○日本堂(書籍)

明治四十一年

○日清汽船會社、高田商會(機械、軍器、毛織物)、書上洋行(絹綿布、棉花、蠶糸)、鶴谷洋行

明治四十二年

(陶磁器)、○千代洋行(寫真器)、○華南洋行(電氣材料)、芝操行(棉花)、○興業洋行(雜貨)

鴨川洋行(美術品)、山田商店(酒類)

東麟洋行(雜貨)、東瀛洋行(雜貨)、多勢洋行(硝子器)、○淡海洋行(建築材料)

○伊藤忠商店(綿糸布)、伊藤商行(洋紙、葉煙草)、瀧定洋行(綿布)、町田洋行(綿糸布、穀

肥)、○東亞興業會社(土地建物)、○瑞寶洋行(石鹼製造)、美華皂廠(石鹼製造)、福興洋行

(雜貨)、草刈洋行(陶磁器)、○大和號(銀)、○須藤洋行(電氣材料)、中東大藥房、○廣光堂

藥房、祥和洋行(雜貨)、新各洋行(家具)、植木洋行(洋品類)、岡田商店(食料品)、永田製藥
唐林源洋行(洋品類)、上海便利社(裁賣)

明治四十三年

安部幸洋行(砂糖、海產物、穀肥)、泰西藥房會社、福井洋行(和洋紙)、○華和公司(玩具)、
池上洋行(日用品)、○三和洋行(棉花)、若川洋行(果物)、實洋行(磁類)、○古益通關所、○
山本誠(洋品類)、福家(菓子)、眞美堂(裝版)

明治四十四年

○臺灣銀行、○內外聯合社(紡績)、湯淺洋行(砂糖、麥粉、棉糸)、○堀井隆寫堂(文房具、
自轉車)、○瀛華洋行(穀肥、牛骨)、森大洋行(棉糸、棉花)、田岡洋行(綿毛製品)、○野澤組
(綿製品、穀肥)、武井洋行(鐵油、穀肥)、松川洋行(石炭)、○山口商會(雜物)、○上海美術
工藝製版社、開新社(印刷)

大正元年

新利洋行(生糸、豚毛、麻)、○服部洋行(時計)、○伊藤益洋行(雜貨)、○松浦洋行(古織)、
小野村洋行(蠶糸、美大洋行(棉花、穀肥)、南原洋行(皮革、穀肥)、今野洋行(雜貨)、池田洋
行(雜貨)、○大正洋行(文房具)、永井洋行(帽子、製罐)、長野分行(漢國製品)、○黑越公司
(印刷用品)、大阪小林支店(銅、齒刷子)、華昌榨油廠、○江南製革廠、米華製帽廠、倫敦洋
行(石鹼製造)、○荻澤印刷所、○林建築事務所(請負)、○建曆洋行(通關業)、中和洋行(通
關業)、○鈴木商會(皮製品)、○大正屋(食料品)、○玉屋製服店、○杉浦洋服店、○岡島商會

(紙器)、○清水家具店、申江堂(書籍)、山崎靴店

大正二年

増田合名會社(砂糖、麥粉、木材、設肥)、明治貿易合資會社(洋紙、設肥)、曾和洋行(綿製
品、絹織物)、黒木洋行(陶磁器)、石田洋行(陶磁器)、○隆記洋行(紡織用品、金物)、仁壽
堂藥房、○日支公司(紫檀細工)、○石橋洋服店、○高岡洋行(製靴)

大正三年

○阿部市洋行(綿糸布)、高嶺洋行(石炭)、○漢和洋行(金物雜貨)、○兒玉貿易商行(譯語製
品、牛骨)、西畑洋行(硝子料器)、○原精藥房、○松下洋行(家具)、○稻垣吳服店、中洋印
刷局、小川靴店、上海日日新聞社、○東和館(映畫)

これ等のうち、第一流の貿易商や會社、銀行は、何れも獨美租界目抜き場所に陣取り、中堅
どころの雜貨貿易商は、多く棋盤街や佛租界洋涇濱に集中した。一部の會社銀行員を除き、當時
の貿易商は、大抵店員と共にその店舗内に居住してゐた。在留邦人相手の小賣商は、主として虹
口の文路吳涇路方面に集まり、次第に「日本人街」を形成するに至つた。

かくて上海在留の邦商は、歐洲大戰の起るまでに、すなはち明治四十四、五年頃から貿易の活
況に恵まれて大いに陣容を整へ、大戰による對歐洲貿易仕場の好機を捉へて、一層飛躍的な發展を
遂げたのである。上海に商工會議所が出来たのもその頃である。すなはち明治四十四年十一月支

那革命による取引上の善後處置を協議した邦商達が、そのまま團體を作つて上海日本人實業協會と稱したのが、今の會議所の前身である。それが名實ともに上海日本商業會議所となつたのは、歐洲大戦による再度の好況で、邦商達も一度閉つた後の大正八年四月である。事變後の現在、この會議所は、日本内地の商工會議所法の適用を受けることになり、愈々擴充強化されつゝある。

なほ日露戦争直後、上海を根據地として、邦人の賣藥、雜貨の行商が各地に活躍したことを書落すわけに行かない。この行商の創始者は、彌地圓藏といふ人であるが、これを流行せしめたのは「支那貿易案内」の著者長谷川宇太治で、明治三十八年仁丹の代理店東亞公司の開店するに當り長谷川はその別働隊として「東來負販團」の名の下に、六、七十人の日本青年を率いて賣藥化粧品、雜貨の行商に従事したのである。これ等に眞似て富山の藥屋連や在留雜貨商も同じ企てを試み、上海のこの種專業者は一時四、五百人にも達し、遂に競争の結果、數年ならずして失敗に歸したのであるが、この行商の流行が邦品の宣傳、人材の訓練に役立つところは少くなかつたと云へやう。「支那貿易案内」には、著者自身の行商の經驗談が詳しく記されてゐるが、氣焔萬丈、如何にも東來黨團長の述懐らしくて、また行商當時の苦心の程を偲ばせるものがある。

幕末の上海派遣船千歳丸

文久二年（同治元年）五月六日、一八六二年六月二日（火曜日）晴天、三本マスト三五八噸の帆船が、前橋に和蘭國旗、中橋に英國旗、後橋に日本國旗を掲げて、上海に入港した。

船名を *Sai Sai Maroo*（千歳丸）といひ、その船長は英人リチャードソン、コンサインナーは蘭館歌耶洋行（*T. Kroes and Co.*）であつた。

徳川幕府が、寛永鎖國の後二百餘年にして、初めて積極的な對支貿易進出を企圖し、こゝに派遣したのが、右の千歳丸である。

この船に、維新の奇傑の高杉晋作が乗つてゐた。その他にも各藩の志士が、幕吏の従者や水夫となつて、乗込んでゐた。

時に清朝は、太平天國の亂に悩んでゐた。上海は、賊軍の包圍攻撃を受け、官軍は外人部隊の援けを藉りて、これを防いでゐるといふ非常時であつた。

筆者は、可なり長い間、仕事の片手間にこの興味深き史實——日支貿易史上看過し得ない幕末貿易船の派遣と、高杉等志士の上海に於ける行状について、調べることに努めてゐた。

當時の記録として、内地で發見されてゐるものに、勘定役根立助七郎の幕府への復命書、高杉晋作の「游清五録」、佐賀藩士中牟田倉之助の「玉海滯在中雜錄」その他の手記、長崎の本商人松田屋伴吉の手記等、千歳丸に乗つて來た人々の書いたものがあり、孰れも詳密を極めてゐる。なほこの上海行に加つた濱松藩士名倉予何人と共に、翌文久三年歐洲へ使した外國奉行支配組頭田邊太一も、その「幕末外交談」の中に、千歳丸上海派遣のことを記してゐる。

現地に在る筆者としては、専ら支那側の文獻について、これを調べ、聊かなりと内地史家の努力に酬ゆるところあらんと願つた。そして姚錫光の「東方兵事紀略」や江海關の記録に、多少ともそれに關する記述のあるのを發見して、稍々意を強うしたのであつたが、最近に至つて、當時の「字林西報」(ノース・チャイナ・ヘラルド)に、實に詳細な記事の載つてゐるのを見出して、大いに愉快になつた。

新聞記事のことは、松田屋伴吉の手記に、吳淞江に入りたるに英人一人バツテラに乗り來る。

「此者世界評判記を拵へ候者之由」とあつて、記者のインタービューを受けたことが確かであり、また中牟田倉之助の日記にも、日本船の入港が上海人の好奇心を喚び、新聞は逸早くその記事を掲げたと記してゐるから、これは面白いぞと思つたのである。

そこで、當時の英字紙「ヘルラド」を見たいと思ひ、梶原國生氏に豫め話してもらつて、デイリー・ニュース社を訪うたのである。「ヘルラド」の古い綴込は亞洲文會（ロイヤル・エイシアナック・ソサエティ）の圖書館にもあつたが、生憎とそこの一八六二年の分が缺けてゐた。ところが流石にデイリー・ニュースの本社には揃つてゐた。

綴込を繰つて見ると、果して載つてゐる。一八六二年六月七日（土曜日）の「ヘルラド」のトツプに、しかも約千百語を費した長文の社説である。その頃の新聞の地味な編輯振りから見ても、これは餘程重大視した取扱ひ方である。

「日本はこのたび、日進月歩の今の時勢に全く應はしく、一の興味ある觀物を、商界に展示した。日本國旗を掲げた英國製帆船の、過日の上海入港は、それだけでも甚だ注目し得る事件である。ところが更に、この船は、同國政府の手で買上げられた官有船であるばかりでなく、海外

貿易の目的の下に、同國の特産物や製造品を積んで來てゐるといふことが判つた。それは、この特異な國民の排外國策の上に、全く新しい光りを投げかけるものである。これまで吾々は同國の臣民を、專制的威壓によつて支配してゐた大君 (Tycoon) とその役人 (Yacouin) や大名達 (Daimios) が、外國貿易の獎勵を好まなかつたばかりでなく、町人や船舶業に従事する者を輕蔑してゐた、といふ風に教へられてゐた。

これが、その社説の書出して、當時の駐日外交官や旅行者の皮相的な觀察に基いて行はれた對日通商交渉の失敗を、商人的立場から痛烈に批判してゐる。また列國の前後を辨へぬ排他的競争が、抜目のない幕府の役人に、外國貿易の利益を教へる結果となつたと論じ、かくて自由貿易のコスモポリタンの精神に感染した日本政府が、今や自己の勘定において取引をせんものと、最初の冒險を試みたのが、こゝに問題の船の入港となつたのだと説いてゐる。

そしてこの船が、もとロイドの船舶表に「アームಿಸチス號」として登録せられてゐた三五八噸の第一級の英船で、舊所有者リチャードソンが約二年間長崎上海間の航海に使つてゐたものであること、それが長崎で三萬四千弗の價格で買はれたこと、船體が頗る堅牢で、登録噸數の二倍の

貨物を積めることなどの詳細な経過を記し、昆布や寒天や漆器その他の積荷の總高を約六百噸と見積つてゐる。船名は千歳丸と改められてゐるが、これは (To last no thousand years) を意味するものだとも書いてゐる。

これ等の記述は、日本側の記録と殆ど正確に一致してゐる。モスマン著「新日本」(ロンドン一八七四年)やジーサス著「史的上海」(上海一九〇九年)などの英書に、千歳丸に関する記述が簡単に載つてゐるが、恐らくこの「ヘラルド」の社説から取材したものであらう。

英領事メドハーストはこの「見知らぬ國からの見知らぬ客」を千歳丸船上に正式訪問し、その始末を北京の公使にまで報告してゐる。この時の會見において、日本人側は、上海の貿易事情について色々と聞いてゐるが、いづれも計数的に見る要領のいふ質問であつた。第一に上海港の關稅收入について訊ねてゐる。そして同時に、何故外人が收稅に當るのかと聞いてゐる。また租界の土地の價格は如何程か、日本人にも買ふことが出来るかどうか等をも訊ねてゐる。

日本側の記録によるも、既に事情は、和蘭コンシユルから、細々と聞き知つてゐる筈であるのに、英領事に會つては、また英人の念所をついた質問をするのである。實に熱心な態度である。

先方から、「御一行は單に商賣だけのために來られたのか、それとも別に政治的な使命も帯びて
られるか」と問はれたのに對して、幕吏は、

「單に商賣のため罷り越したまでにごさる。或は一部の者が上海に居残り、船は次回の荷物を
積みに引返すことになるやも知れぬ。」

と答へてゐる。千歳丸は、それから約二ヶ月滞在の後、舊曆七月五日上海を出帆したが、誰も
居残つた者はなかつたやうである。幕府の次回の派遣船が入港したのは、それから二年後の元治
元年二月であつたが、その時は船も人も異つてゐた。

「デイリー・ニュース」の前身である當時の「ヘラルド」は週刊であつたが、その六月七日號か
ら八月二日號までの各紙は、その在港船舶表の欄に千歳丸の名を載せており、その入港の日附は
六月二日、出港は七月卅一日となつてゐる。これは勿論新聞であり、その通關手續完了の日であら
う。右船舶表の船長名の項に、七日の新聞はリチャードソンと舊船長の名を載せてゐるが、十四
日以後は Noemana と記してゐる。これは幕吏一行中の長崎會所調役沼間平六郎のことで、日本
側文獻の記録と完全に符合してゐる。沼間の名はさきに擧げた「東方兵事紀略」にも、海關の記

録にも載つてゐる。餘程幸運な男である。

これに比べると、幕吏の従者であつた高杉や中牟田や、水夫になつて來た薩藩の五代才助等は、この上海行の經驗を生かして、後年邦國のために名を擧げた面々であるに拘らず、外文人の記録は勿論、幕府の公文書や本商人の手記にすらも、何等その名を留めてゐないのが氣の毒である。

尤も高杉は當年二十四歳、中牟田は二十六歳、五代は二十五歳の青年であつた。中牟田の日記に、高杉と打連れ、字林洋行といふ『新聞紙屋』すなはち現在のデイリー・ニュース社を訪れた記事があるが、今はこれを確かむべくもない。『五代友厚傳』には

『日本千載丸の一水夫が蒸汽船を購入せりと傳ふる者あり、上海新聞も亦此の事を掲載して異聞事とせり。』

とあるが、「ヘラルド」には、その種の記事は遂に見當らなかつた。しかし、當時五代が藩のため私かにサー・デヨーデグレイ號といふ汽船を買付け、香港經由長崎に回漕せしめたことは嚴然たる事實なのである。高杉もまたこれを見て發憤し、長崎に歸着後直に、獨断で和蘭の蒸汽船を買付けた。長州藩は事後にそれを承認して、代金を支出したのであつた。

上海における高杉晋作

一、維新志士の千歳丸潜入

寛永以来二百餘年の鎖國主義を棄て、幕府が積極的に對支貿易の振興に乗り出し、長崎で購入した帆船「千歳丸」を上海に派遣したのは、文久二年四月二十九日であつた。

千歳丸には、長藩の高杉晋作、佐賀藩の中牟田倉之助、薩藩の五代才助など維新の志士が、或は幕吏の従者となり、或は水夫に身をやつして参加してゐた。

高杉晋作が、この一行に加はつたのは、同藩の參政長井雅樂が公武合體を唱へて幕府と策應したのに憤慨し、單身これを斬らうとしたのを桂小五郎になだめられ、そんな亂暴なことはこの際見合せ、一度外遊でもして來てはどうかといはれたのが動機である。毛利家では、最初高杉をは

じめ井上、伊藤等を英國に留學させるつもりであつたが、事に妨げられて果さず、次いで幕府の千歳丸上海派遣のことを聞込み、一行中の御小人目付鹽澤彦次郎に手入れをして、高杉を鹽澤の同役大塚三郎の従者として潜入させたのである。この時毛利家から鹽澤に贈つた賄賂が、木綿縮五反、肴料二千疋と同家の記録に残つてゐる由である。

鹽澤彦次郎は、萬延元年幕府の最初の遣米使節にも加はり、ワシントンにまで行つて來たことのある男で、一行中の顔役だつたと見える。中牟田倉之助が佐賀藩の御連物方から出た使節二十本一箱を贈つて、従者に加へて貰つたのも彼であつた。初め中牟田も、高杉と同じやうに、藩命を帯びて文久元年の遣歐使節に加はる豫定であつたのが、定員削減の結果その選に漏れたものである。高杉が「中牟田航海術を心得、且少々英語等も出來」と書いてゐるやうに、彼は一行中の知識の最尖端にゐた。漢學を得意とする高杉が、上海滞在中多く支那人と筆談を試みたのに對し、中牟田は概ね洋人と語つてゐる。

五代才助は、和蘭通詞岩瀬彌四郎から千歳丸上海派遣の擧を知り、彼の計ひで出帆の際の同船に、水夫となつて乗組むことが出來たのであつた。當時大阪にゐた藩公島津久光から、出張のお

許しと外國汽船買入の資金を得るために、長崎大阪間を早瀬船で往復してゐるうちに、解纜の明日が切迫し、武士の身分では潜入の餘地がなくなつたからである。そこで佩刀と衣類を岩瀬の行李の中に匿して持つて行き、上海で購入船の機関をする等の重要な瞬間にだけ、侍の姿に復したのであつた。五代は、中牟田とは長崎の海軍傳習所生時代に、既に知り合つた仲であつた。

幕吏をもの敷としなかつた流石の高杉も、この兩人とは、一見互に傾倒した。すなはち、中牟田については、同僚皆語るに足らぬが、唯、中牟田がゐるので心強いとほめ、五代に關しては「航海日録」五月三日の條に、「此日始めて同船の水夫才助といふものと談す。才助は薩州藩の五代才介なり。形を變じて水夫となり此船に入ると云ふ。才助さきに、予を崎陽の寓舎に訪ひしも予時に病ありて談するを得ざりき。一見猶知の如く、肝膽を吐露して大いに志を談す。亦妙なり」と記してゐる。

二、高杉の上海滞在日記

以下高杉の上海滞在中の日記(漢文)を直譯し、他の資料によつて、これに多少の註釋を加へて見よう。但し日記文中の括弧内の字句は、高杉の原註である。

『五月六日 早朝川蒸汽船來る。本船を引き、左折して湖江す。兩岸民家の風景殆ど我が邦と異なるなし。右岸に米利堅商館あり、嘗て長髮賊、支那人とこの地に戦ひしといふ。午前漸く上海港に到る。こゝは支那第一の繁盛なる津港なり。歐羅波諸邦の商船、軍艦數千艘碇泊し、楢花林森津口を埋めんと欲す。陸上には則ち諸邦の商館、秤量千尺、殆ど城塞の如し。其の廣大熱烈筆紙を以て盡すべからざるなり。午後官吏上陸し、和蘭館(館前は歐耶洋行と謂ふ)に至る。予また陪從す。官吏は樓上に登り、從臣は樓下に待つ。予、清人三兩名と筆話せり。官吏、蘭人と應接する乃ち清人を以て介者となし、街市を徘徊す。土人、土塔の如く我が鞏を圍む。其の形異るが故なり。街門毎に街名を懸け、酒店、茶肆、我が邦と大同小異にして、唯臭氣の甚しきのみ。黄昏本船の甲板上に歸る。四方に極目すれば、舟子數乃の聲、軍艦發砲の音と相應じて、實に愉快の地なり。夜に入るや、兩岸の燈影、水波に泳ぎ、光景畫けるが如し。』

和蘭館歐耶洋行とは T. Kroes and Co. のいつか、クレースなる商人が領事を代理してゐたの

である。一行の上陸には、サンバンを用ひた。このサンバン一ヶ月借切りなれば十弗、買求める
とすれば一週三十弗であつた。市中見物の案内に雇つたのは廣東人であつた。すべての旅行者が
するやうに、松田屋伴吉が、先づ兩替をして見たが、その時の相場は、一弗に付一貫二百文であ
つた。

三、太平亂の銃聲聞ゆ

「五月七日 拂曉小銃の聲、陸上に轟く。皆云ふ、是れ長毛賊の支那人と戦ふ音なるべしと。予
即ち以爲らく、この言信なるは、實戦を見ることを得べし。心私かに悦ぶ。官船の碇泊する所を
中口と謂ふ（上海港中の小名なり）。川幅は兩岸相隔つること幾かに十餘町、川流濁水なり。英人云
ふ、數千の碇泊船及び支那人は皆この濁水を飲めりと。予以爲らく、我邦人始めてこの地に來り、
地氣に未だし、加ふるに朝夕この濁水を飲まんか、必ず多く人を傷くべし。黄昏小船、官船の傍
らを通ぐ。旗號に、軍需公務の四字を書す。戦争二役の忙しきを知るべきなり。」

この前後の上海附近の戦況を記せば、太平軍は四月十九日太倉城東で清兵五千を全滅させ、一部は寶山に、一部は嘉定に進撃した。寶山方面は英國軍艦スクーリング號の水兵に阻止されたが嘉定は忽ち陥落した。浦東方面は、清軍が外國から借りた大砲の威力で、太平軍を制圧してゐた。五月一日太平軍は嘉定から更に進んで廣富林と泗涇に出で、松江と虹橋を攻撃した。松江ではアメリカの退役將校ワードの部隊が防戦し、虹橋では清將程學啓が力戦した。五月六日虹橋の戦闘に太平軍不利となり、七日七寶から兵を増援したが矢張り抜けず、戦況はその後しばらく膠着状態に入つた。二十一日清軍の主力が上海集結を了し、李鴻章自ら全軍を指揮して逆襲するに及んで、太平軍は退却した。『同治上海縣志』卷十二及び『李鴻章奏議』その七日の虹橋戦闘の銃聲が高杉の耳に入つたのであらう。

黃浦江の濁水を飲まねばならぬと聞いて解雇した一行は、先づ蘭館で飲料用水の濾過法を傳習した。これは河水に明礬を投じて濾過する方法であつて、明礬一斤四合にて銅錢百四十文、すなはち一斤に付銀三匁に當ると、その値段を松田屋が記してゐる。

四、幕吏上海道臺と應接す

「五月八日 官吏皆上陸し、道臺に至り、支那人と應接す（道臺は上海城内の官廳名）。同僚の士、盡く陪從せり。予風疾あり、因りて官吏に請ひ、陪從を辭す。官吏皆出で船中更に閑靜なり。頗る旅愁を慰むるに足る。日の暮れ、官吏歸船す。同僚の士、皆城内の是非を談論す。予別に志あり。則ち私かに歎笑せり。」

時の道臺は吳煦といつた。幕吏と道臺との應接は、その後も數回行はれ、何れも詳細な筆録が残つてゐるが、この日の會話は、僅々次の如くであつた。

幕吏先づ曰く、曩に和蘭コンシユルを以て申入れ置いた通り、この度當地に商人を差遣するに付取締のため渡航したる次第なれば、滯在中何卒よろしくお願する。また聊か貨物を積んで參つた故、運上所に、然るべく注意を與へられたい。

これに對し、道臺の答へて曰ふ、その儀は和蘭領事より承知仕つた。上海の商人が官制調達の

ため、貴國と通商するは、由來久しいが、貴國より當地に渡航せられし先例はなかつた。故に貴國と通商條約が締結せらるゝまでは、和蘭との通商規約に準據し、萬端領事に一任せられたい。貴國の貨物も、和蘭の貨物として扱ふことに致したい云々。

高杉の觀察によれば、今回の上海五市の廻りは、畢竟長崎商人が土地の奉行高橋美作守に賄賂を遣ひ、私利を營まんがために策策したのだ。江戸から來た實吏も、多くは高橋の阿黨で、みな偽物だから、海外へ行けば給與がいゝといふのを目當に來たのだ。従つて互市のことは、商人と長崎地役人に委せ切りで何も知らず、たゞ商人の書上げる記録を寫すのみ。商人共は通詞を味方に引入れ、その通詞どもは萬事外表に相談に及ぶといふ次第ゆゑ、結局英國人に好きやうにされてしまふのだとある。

『五月九日 この日行李及び諸器物を陸上に送る。午後官吏上陸し、安記洋行に寓居す。安記洋行は中國の行名(別號を保護、すなはち西洋名とす、所在地名は洋涇濱)にして、館主は姓を張、名を叙秀といふ支那人なり。居室陝隘にして、官吏甚だ不平なり。議論紛々、同局相罵り、その醜體笑殺に堪へざるなり。』

宏記洋行は、蘭館から三軒目の隣りにあつた。四室の家賃が一ヶ月に銀百三十弗、高杉は中牟田倉之助、名倉予何人、木村傳之助等と同室を占めた。

『五月十日 晴、官吏行李を巡見のため黙耶洋行に到る。予また陪従す。黄昏和蘭人來り告げて曰く、長髮賊上海三里外の地に到れり、明朝必ず砲聲を聞くべしと。官人これを聞きて大いに驚す。予却て喜ぶ。三更の後、同僚肥前の中牟田云ふ、外國船長崎に發するに予書翰を郷國に送らんと欲す、兄如何かと。予因りて惣々家君に奉るの書を作り、中牟田に托す。』

『五月十一日 官吏官船に至る。予陪従し、午前歸館す。午過ぎ官吏皆行し、予中牟田と館に在り共に航海有益のことを論ず。中牟田云ふ、航海學をなさんと欲せば、凡そ課程あり、運用術、航海術、蒸氣術、砲術、船造術これなりと。』

五、各國領事館を訪問

『五月十二日 朝英書を読む。午後官吏盡く佛蘭西館に至る。予陪従す。佛蘭西コンシユル官吏』

を門前に迎へ、官吏コンシユルと樓上に登る。予張樓下に待つ。予張を遇するに猶且つ梅酒及び佳菓を以てす。因りて知る官吏を遇するに必ず美酒佳肴を以てすべけん。官吏の應接了り、佛人商店に至る。大小の器械、店に満つること山の如し。有用の器要求甚し。唯價の高きを恐るゝのみ。日暮れて歸館す。」

「五月十三日 官吏亞米利加、英吉利、歐羅斯商館に到る。官吏の初めて英館に至るや、兵卒ケベルを肩にし館内を衝る。館内野陣を張り、大砲、小銃列して館傍に在り。聞くに英人支那人のため長毛賊を防禦す、故に此の如じと云ふ。英館を去る十五、六間ばかりに橋あり、新大橋と名づく。今を去る七年前、古橋朽崩し、支那人再建する能はず、因りて英人この橋を建つ。支那人は通行する毎に、壹錢を英人に貢ぐと云ふ。亞館に至るに、亞人官吏を遇すること佛人の如からず。敢て酒肴を設けざるなり。魯館に至るや、魯人官吏を遇すること、甚だ禮讓あり、殆ど佛人の上に出でたりと云ふ。日暮れて歸館。」

新大橋はガーデン・ブリッジのことで、當時は開閉橋だつた。高杉の別の手記に「上海新大橋、その中央兩つに分かる。鐵くさりを以て板を引上げ、大船を通す」とある。

「五月十四日 晴、上陸の日より今日に至るまでに已に、一句餘を數ふるに、雨更になく、實に無雨國なるかと疑ふ。終日閑居し、英書を読み記行を閲す。聞くに同行渡邊與八郎の従僕、昨夜來急に病み、今朝冥行せりと云ふ。同行者の病者甚だ多し。諸子萎縮し、或は歸りを促さんと思ふ者あり。予以爲らく、一步國を出づれば、死已に決せり。然れども空死は無益とす。唯身自ら吾が體を護るのほか術なきなりと。この日佛蘭西の兵卒數百人、軍艦より上陸す。予公事ありて遂に看るを得ず、甚だ以て遺憾となす。」

「五月十五日 今朝官船の水夫兵賣急に病みて冥行す。醫師云ふ、朝夕この悪水を飲む。故に、多く人を傷くるなりと。この日、清人三、四名寓居に到り、筆話をなす。」

藥種目利渡邊與八郎の従者は傳次郎といひ、鳥原の者で、當年二十四歳、兵吉は兵助とも書いたのがあり、堺廻船頭通丸の船夫で、當年三十二歳、何れもコレラで死亡したものである。六月十四日には和蘭通詞岩瀬彌四郎の従者碩太郎がまた痢病で死んだ。彌四郎の實弟で、當年二十六歳であつた。その日は傳次郎の命日にも當るので、城内の西南隅にあつた一粟庵といふ寺で讀經を頼み、三人の弔ひをした。一粟庵の名は「上海縣志」や葛元煦の「滬游雜記」に出てゐる。三人を

葬つたのは、上海濱手の爛沈渡といふ所で、六月二十九日に、二本の石碑を造り、一は碩太郎の墓に、一は兵吉、傳次郎の墓に充てられたのである。

『五月十六日 今晚また砲聲を聴く。同僚名倉予何人詩作あり、予またその韻を次す。』

微身豈與西夷死 一片膽心淨似霜

忽聽砲聲起回首 天皇所在是東方

この日予外出して千歳丸に至る。五代才助と談じて歸館す。また伊藤軍八と清人の家を訪ひ筆話す。又馬路外の書坊に至り、書籍を得て歸る。街市に徘徊すれば、土人予輩に尾して來る。土人の臭氣人を蒸し、猶ほ炎熱人を蒸す。予また甚だ窮せり。

この日高杉が伊藤と訪問した支那人は、瀨慶といふ讀書人であつた。書物のことや阿片戦争に關係ある林則徐、陳化成などのことについて語つてゐる。この日の會話に限らず、支那人との筆談の結果を、高杉はすべて大切に控へて歸つた。

伊藤軍八は、櫻田門事件の永戸浪士と關係のあつた大阪の學者で、高杉とは相識の間柄であつた。高杉は別の手記に、『軍八頗る文事あり。予嘗て昌平塾に同學すること一年、再びこゝ（長崎）

に逢ふ。況んや同船同行、談話舊の如し。實に奇遇と謂ふべきなり」と書いてゐる。

「五月十七日 午前中牟田、五代と川蒸氣船に至り、諸器械を見る。船は英人の所用に係る。この日炎熱燒くが如く、流汗衣裝を濕す。」

六、上海の形勢を論ず

「五月十八日 雨降る。始めて梅雨の景をなす。午後同館の清人張棟香と古玩店に至る。鼎様の香爐を求めて共に歸館す。棟香予に美酒を飲ます。輿に乗じて豪談し、頗る愉快を覺ゆ。棟香予のために孔明の出師表を書すと云ふ。」

「五月十九日 雨、午後馬路外の書坊に至り、店の主人と談じ、書籍を見て歸る。」

「五月廿日 朝中牟田と亞米利加商館に至る。商人の名はチャルス、予ら二人を透して、その居室に至る。チャルス曰く、我れ横濱に挽留すること三、四年、少しく貴邦語を解す。明後日出航し、又貴邦に至らんと欲すとて、予ら二人を遇するに佳酒を以てす。中牟田英語を解し、談話分

明す。奇聞を聞き、益を得ること少なからず。予チャルスに謂つて曰く、弟近日英書を讀めるも、未だ人と談ずるを得ず。日夜勉強し、他日再逢のとき兄と能く談ずるを得んと欲す。チャルス又曰く、再逢の日、弟また兄と能く貴邦語を解せんと欲すと。乃ち禮を告げて去り、歸館す。午飯を喫し、また西門兵衛の陳汝欽を訪ふ。汝欽氣概あり、予と心よく合ふ。筆談するに甚だ愉快なり。日將に暮んとす。因りて汝欽と別る。この日、上海港口の亞米利加蒸氣船過ちて火を失す(船名コルトス、船主名デル、船積高千百七噸)。

チャルスは、中牟田の日記には、リッチャルツと書かれてゐる。

「五月廿一日 古玩店に到り、畫巻を看過す。この日終日閑坐す。因りて熱く上海の形勢を観るに、支那人は盡く外國人の便役たり。英佛の人街市を歩行すれば、清人皆傍らに避け、道を讓る。實に上海の地は、支那に屬すと雖も、英佛の屬地と謂ふも、また可なり。北京はこゝを去る三百里、必ず中國の風を存せん。親近をしてこの地に及ばしむれば、あまた慨歎すべし。因りて憶ふ。呂蒙宋の太宗を正諫するに、親近を以てし遠きに及ばず、豈に宜べならずとせんや。我が邦人と雖も心を須ひざるべけんや。支那のことにあらざるなり。この日、書牘を作り、名倉に托し

て陳汝欽に贈る。」

顧みれば、澎湃たる夷患の波、また頻りに神州の岸を洗つてゐる。上海の形勢を眺めての高杉の悲壯なる感慨、眞に東亞の先覺としての面目躍如たるものがある。中牟田もまた記して曰く、

「西洋人へ相頼み、門番させ候處より、自國の城門を、自國の人出入叶はざる様相成り、賊亂の末故とは申し乍ら、餘り西洋人の勢盛んなること、唐人のため憐むべし。支那の衰微、推して知るべく候也……近來段々西洋人北京へ住居罷在候由、これは後には北京城も、西洋人へ防ぎ方相頼み候やと考へられ候」と。志同じければ、觀るところまた同じだ。

「五月念二日 他に奇聞なく、終日俗事を辨ず。」

「五月念三日 朝五代と英人ミユルヘツトを訪ふ。ミユルヘツトは耶蘇教師なり。耶蘇教を上海土民に施す。城内の教堂はミユルヘツトの關する所なり。ミユルヘツトの常居する所に、また教堂と病院あり。醫を施すの院なりと謂ふ。總じて西人教師の教を外邦に施すや、必ず醫師を携へ土民の病み且つ窮する者あらば、乃ち其の病を醫して、この教に入らしむ。是れ教師の外邦に教を致すの術なり。我が邦の士君子、豫防あらざるべからざるなり。聯邦志略等の書を備めて歸る

この日、道臺士官、默耶洋行に於て、日本官吏と應接す。佛蘭西人一名、和蘭コンシユルその謀をなせりと云ふ。」

『五月念四日 午後官吏に陪從して官船に到る。この日、炎熱燥くが如く、試みに寒暑計を見るに八十六度なり。この日、清人一兩名來談す。』

七、炎熱を冒し視察に努む

『五月念五日 朝五代と、英人ミ^ニエ^ルを訪ふに不在なり。空しく歸館す。黄昏より風雨甚だし。この日、花旗國の蒸氣船一艘破裂す。即死者凡そ二十三人、内清人十六名、花旗人十一名、船名はフニーツンスタイル、積高百六十噸。この船マンズラントスコより來りしと云ふ。』

『五月念六日 風靜まり雨晴れ、旭日軒を照らす。清人馬銓來る。話すに頗る文事あり、又書能くし、予のために楠樹書屋の四字を書す。馬銓はもと江州縣令にて、只今喪に居り、故に辨官すと云ふ。この日、官吏和蘭商船に至る。幕府船を需めんとするの意あり、故に至れるなり。この

船長さ二十間、二本柱なり。中牟田歸館して云ふ、頗る精工にして、千歳丸に勝ること遠し。五年前の製造にかゝり、價三萬七千弗なり。幕府需むる能はず、予我が藩主をして、この船を求めしめば、頗る有益なりとす。然れども千里相隔て、如何ともするなし。空しく嘆息するのみ。」

「五月念七日 中牟田と、英人ミニユヘルに至る。上海新報、數學啓蒙、代數學等の書を需めて歸る。」

「五月念八日 書坊來る。書籍を需む。」

「五月念九日 書坊を訪ひ、書籍を得て歸る。」

「六月朔旦 雨、風疾ありて、他出するを得ず。同僚甚だ不平なり。唯中牟田勇士あり。予これがために大いに力を得。節、梅花に及び、天氣甚だ悪し。」

「六月三日 雨、官吏に陪從し、馬銜の家に到る。城内の街市狹隘、加ふに風雨あり諸子窮す。」

「六月四日 書坊來る。皇清全圖を需む。」

「六月七日 晴、官吏道臺域の外廓を徘徊す。予また陪從す。大南門に至り小憩し、左折して田間の路に入る。野菜及び粟米の種法、本朝と異なるなし。茫々たる田野更に山を見ず、左方に旌旗卓

立す。是れ支那人の防げる陣營なり。右折し西門に向ひて行けば、小寺あり、頗る没落なり。賊の破る所となりしと云ふ。西門を入りて、關帝廟に到る。廟は關帝を祭り、道師その廟を護る。道師は本朝の所謂山伏の如きものなり。こゝを去りて孔聖廟に到る。廟堂二あり、その間の空地に草木を種へ、結宏頗る備はる。然るに賊變以來英人これに居り、變じて陣營となる。廟堂の中に、兵卒銃砲を枕にして臥す。これを觀れば、慨然に堪へざるなり。英人支那のために賊を防ぐ。故に支那聖像を他處に移し、英人ここに居ると云ふ。英士官日本人を廟堂に導き、茶及び砂糖を與ふ。官吏これを受く。小憩して乃ち去り、午後館に歸る。

八、故國の政變に魂飛び心馳す

「六月八日 千歳丸に至りて五代を訪ふ。五代云ふ、國書來る。書中に云ふ京播の間少しく變あり、我が藩またその事に關すと。予これを聴き、少しく驚す。五代云ふ、事決し已に鎮まる。兄憂ふる勿れと。予魂飛び心走る。千里の海游如何ともなし難し。空しく東方を望み、空しく慨然

これを久しうす。午後蘭館に到り、短銃と地圖を求む。」

維新回天の大業進行中の重要な時期を、暫らく留守にして外地にゐた高杉にとり、本國からの情報は、雷電のやうに耳朶を打つた。多分伏見寺田屋の事件か、乃至は勅使大原左衛門督東下の一端を知つたのであらう。卒かに出でて短銃を購つた彼の心境、察するに餘りがある。

「六月十二日 城内に至り、街市を徘徊す。」

「六月十三日 中牟田と夜門外を遊歩す。米利堅人あり、予と中牟田を導きて、その寓舎に至る。この米人、さきに横濱に來りし故、能く日本の形勢を解す。其の話しに云ふ、大阪開港となれば、予また日本に至るべし。然るに昨新聞紙を見るに、大阪の開港、大君已にこれを許し、大名これを許すを欲せず、事その間に起る。故に開港或は運るべし。聞くに大名中水戸なる者最も強大なるらし、信なりや否やと。中牟田言を巧みにして、一實を對せずして去る。因つて憶ふに、水府は已に甲寅以來、志士の死する者數十人あり、外國人その雄を懼るゝことまた宜べならずや。」

「六月十四日 暁天中牟田と西門外に到り、支那人の練兵を觀る。練兵處は、乃ち防賊の陣營なり。その兵法を見るに、威南塘の兵法に似て非なるもの。銃隊は金鼓を以て令となし、操引、操

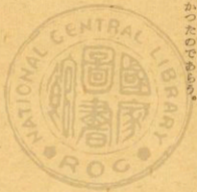
進をなす。その餘は變化なし。銃砲は盡く中國製にて甚だ不精巧なり。兵法と器械皆西洋なし。唯、陣屋は西洋を用ふ。歸路大南門の衛士玩松を訪ひ、練兵のことを尋ぬ。玩松云ふ、さきに英佛兵に長毛賊を防がんことを請ひ、近日また我が兵卒をして西洋の兵銃を學ばしむ。因りて賊懼れて近づく能はずと。この言により、支那の兵術、西洋銃隊の強堅に及ぶ能はざるを知るべきなり。十二點鐘の後歸館す。」

「六月十五日 終日俗事を辨ず。」

「六月十六日 晴、中牟田と外行し、米利堅人の店に至り、七穴銃を求む。清人某を訪ふ。某予に書を求む。予拙筆を愧ぢず、舊詩を扇面に録す。去りてミユルヘルを訪ふに、不在、空しく歸館す。」

「六月十七日 五代來り談す。午後中牟田と英人の預るところの砲臺に到り、アルムストロンク砲を観る。砲十二ポンド。方今我が邦傳ふる所の大砲は、大概筒口より玉薬を入れるに、この砲は然らず、筒の後より玉薬を入れる故に甚だ便となす。英人アルムストロンクの新製するところ、その名を以てその砲に名づく。この砲六口上海にありと云ふ。」

高杉の上瀬滞在日記はこれで終つてゐるが、千歳丸が支那貨物の積込みを了へ、上瀬港を出帆したのは七月五日であつた。故國の風雲益々急を告げ、歸心矢の如くになつて、出發の準備に忙殺され、日記を附ける餘裕がなかつたのであらう。



幕末の上海渡航者

一、生麥事件

文久二年四月、幕府が初めて上海に派遣した官船千歳丸に、高杉晋作、中津田倉之助、五代才助(後の友厚)等各藩の志士が乗込んでゐたことは、今では可なり知れ互つた事實である。

その千歳丸の船長だつた英人ヘンリー・リチャードソンについて、不思議な因縁話がある。彼は英國の退役海軍大佐か何かだつたらしいが、その持船を幕府に賣り、賣つた船の船長として一行を上海に案内したばかりでなく、上海上陸後も色々一行の世話をやいた。上海で私かに汽船を買入れて歸つた薩藩の五代才助などは、大いに彼の厄介になつた筈である。

ところが、千歳丸が七月十五日長崎に歸港して間もなく、謂ゆる生麥事件が起つた。すなはち同年八月二十六日江戸を發した島津久光が、生麥村に差しかゝるや、偶々四名の英國人が馬を馳せて、久光の前驅を横切らんとした。隨從の薩摩の侍の一人は、直ちに刀を抜いて、一騎を斬殺し、二騎を傷けた。

この生麥村で殺された英人の姓が、やはりリチャードソンといふのであつた。どうも筆者にはこれが千歳丸の船長と同一人であつたやうに思はれてならない。「福翁自傳」や「五代友厚傳」には、生麥事件の英人をリチャードソンと記せるのみで、その名をヘンリーといふのかどうか不明だが、詳しく調べる暇がないから、今はこれを同一人として置きたい。

英公使は、この事件の賠償金として十萬磅を幕府から取り、更に遺族扶助料として一萬磅を薩藩に要求した。薩藩はこれに屈服しなかつたので、英艦七隻が鹿兒島を攻撃した。その節、船奉行副役だつた五代才助は松木弘安（後の寺島宗則）と共に、英艦に捕はれ身となつたのである。五代が上海で買つて來た汽船「天祐丸」（原名チヨリヂ・グレー號）外二隻の船も、英軍に抑留された。まことに奇しき因縁である。

元治元年二月、幕府は再び健順丸といふ官船を、上海に派遣した。前回の千歳丸の場合は、萬事と關委せて取引をしたが、今度は英國領事を通じて、對支通商を圖つた。この時の使節が、上海で英國側と生麥事件の後始末について交渉したかどうか、史家の問題となつてゐたやうだ。然し上海に馴染深いリチャードソン、而も第一回の派遣船の船長だつた人の變死に絡まる事件であつたとして見れば、交渉とまでは行かなくとも、少しは、そんな話も出たことであらう。

二、密航者

千歳丸及び健順丸の上海派遣を機縁に、元治から慶應にかけて、諸藩の武士が旺んに上海へ來るやうになつた。多くは汽船、兵器等の購入を目的に、外國船で密航したのである。健順丸一行の幕府への復命書「黃浦誌」の元治元年十二月二十六日の條に、左のやうな記述がある。(新村出著「遠西叢考」、白柳秀湖著「明治大正國民史」維新改革編)。

「今日旅亭アストルに至る。主人云ふ、日本使節入港數日の前、日本人三名あり。亞船に乗じ



て来れり。我れその名を詳かにせず。蓋しこの人兵器を買はんと欲して来れるなりと。後英國商人某あり。彼の名刺を持てり。書して大日本藤州、小林六郎、長尾治策、外一人、薩州家士名不詳。蓋し港則に軍器を賣買することを許さず。故にかれ等手を空しくして歸ると云ふ。」「
旅亭アストルとはアスター・ハウスのこと、文中姓名不詳とある薩藩の士は上野景範であつた。何れも洋服を着用し、大金を所持してゐたらしい。

土佐の後藤象二郎も上海へ汽船を買ひに来てゐる。それは後が武市半平太等の勤王黨を裁斷した當時、刺客の難を逃れる必要もあつたからで、同じく土州出身のアメリカ漂流者中濱萬次郎を案内に立て、渡航したのであつた。

長州の伊藤俊介(博文)は、慶應二年幕軍との戦争中、藩命を帯びて來滬し、上海で外國船二隻(第二西貢丸と函珠丸)を購して歸つた。梁川藩の曾我祐準は、上海から香港、シンガポール、カルカッタ方面にかけて視察し、その際、上海の街上で伊藤と邂逅してゐる。竹添進一郎(井々)が最初に上海に來たのも、熊本藩の汽船萬里丸の修理といふ使命を帯びてであつた。その時の井々の戯詩がある。

浦東雜纜落潮時

來往帆檣如織絲

舟子無眠夜相警

綠江辨髮半偷兒

三、第三回の遣使

幕府は慶應三年一月、上海に第三回目の使節を派遣した。こんどは官船を用ひず、横濱英館百一番の所屬汽船ガンヂス號に便乗したのであつた。使節一行には、義に高杉晋作等とともに、第一回上海遣使の従者となつて來滬した経験のある濱松藩の名倉予何人を始めとし、同藩の大林虎次、田原藩の八木財次（元濱松藩士）、佐倉藩の串戸五左衛門、渡邊莊平、鍋本立本、高橋作之助等がゐた。

この時の一行は、上海ばかりでなく、蘇州、鎮江、南京をも視察して歸つた。歸つた頃には、朝暮の關係が極度に緊張してゐて、復命書の提出などはなかつたらしいが、名倉予何人の紀行や彼の従者だつた安倍保太郎（後に保太と改名）の手記が残つてゐる。（白柳秀樹「文獻の吟味」とその取扱

方——「書祭」地圖

名倉予何人は濱松藩の學問所克明館に教鞭を執つてゐた人で、名は重次郎、字は敦、松隠と號し、詩をよくしたらしく、上海で支那の文人と交つてゐる。文久二年に來た時は陳汝欽（勉生と號し、天臺の人）と親密に往來し、高杉晋作とも大闘してゐるが、慶應三年に來た時には、姚承蕪といふ支那詩人と交つたことが窺はれる。姚承蕪、字は芭蕉、詩民と號し、青浦の諸生で、「四漢瑣紀」に收められてゐる「詩民漫鈔」の中に、次のやうな作がある。

贈日本人蒼敦 別字松隱

未得瀛洲泛客筵 忽聞譯遞滬濱東

綠君來訪春消息 劍佩誇傳太古風

憑城煙雨萬人家 芳樹因寒信何賒

難得朶雲留海上 迢遙客地詠梅花

松窗有詠梅作

「四漢瑣紀」といふのは、上海地方出身者の詩文隨筆集で、この本の他の部分には名倉と同行し

た八木財次、申戸五左衛門等の名も載つてゐる。即ち同治六年（慶應三年）丁卯三月、江蘇省海濱學人許錫祺幸甫氏識すところの「養素齋記」には、「日本國遠人八木君」云々の語があり、また同じ人の「立雪書屋記」には、「申戸先生は東洋日本國の人、儉といふのはその名なり。今歳の春、瀟湘に遊ぶ云々」とある。また同じく許錫祺の「雲無心別墅記」には、「洗耳先生は日本國の逸人云々」とも記してゐるが、これは一行中の誰のことだか判らない。申戸五左衛門は、明治年間三井系統の實業家として知られた波多野承五郎の岳父である。使節中の佐倉藩士高橋作之助は、後に明治洋畫壇の草分けとして名を馳せた高橋由一である。

四、在留の文人畫家

これよりさき上海には、安田老山、岸田吟香、八戸弘光、曾根常之助などの人々が既に在留してゐた。安田老山、名は養、美濃出身の畫家で、元治元年に來滬した。吟香はヘボンとともに辭書印刷のため、慶應二年に上海へ渡つた。八戸弘光は、名は喜三郎、字は順叔といひ、支那人の

書には宏光とも書かれてゐる。曾根常之助は宇和島藩の人で、嘯雲と號してゐたやうだ。何れも文人肌の人々で、支那の知名の士と頻りに往來してゐた形跡がある。

ガンヂス號で渡來した使節一行は、上海でこれ等の人々の消息を知つて驚いたらしい。ガンヂス號と横濱を同日に上帆して、上海まで航程を共にした歐洲行のアルヘー號には、徳川民部大輔や澁澤榮一が乗つてゐたが、この一行も吟香等當時の在留邦人の消息を聞いたことであらう。

岸田吟香の慶應三年三月の日記には、八戸弘光との交遊、南洋歸りの曾我裕準との面會、ガンヂス號一行の八木財次、高橋由一等との邂逅について、實に微笑ましい記事があるから、左に抜書して見よう。

『二十一日　ひるから、きんきへいて見るに、弘光、明日、香港へいくとて、したくをしてゐる。曾我彌一といふ人がきてゐる。きのふ逢た。處々あるいてきたさうだが、香港で日本の女の三味線をひいてゐるのを見たといふ。うささんの組よりあとからまた出たのだらうといふ。

『二十三日　けふ、へぼん對譯辭書にあたらしく名をつけてください、ほんのとびらがみにかくやうによい名をといふから、和英詞林集成とつける。昨日、日本人を二三みた。あすとルは



法名釋 信一 俗名三宅廣科	明治九年八月六日 上海 上海 上海	法名釋 紅楓 俗名安田山	明治九年八月六日 上海 上海 上海
---------------------	----------------------------	--------------------	----------------------------

(上) 紅楓女史の墓 (澤村幸夫氏撮影)

(下) 東本願寺上海別院過去帳第一冊 (その第一號は安田老山の妻)

うすにとまつてゐるやうだと、へぼんはなす。だれかまた新來の客とおもはれる。あひたいもんだ。

○もうちきにかへるんだ。うれしいネ。

支那人のこゆびのつめのばかりし

ながくもここにゐられざりけり

五、遊

「二十四日 てんき、おほよし。よつじぶんにぶらりと出て、どこへいかうかとおもひながら、河岸を南へすた／＼あるくに、ふと軋位佛の招牌を見て、此間、弘光のいふた事をおもひ出して、このうちへたちよつて、日本人がゐるかとおもはりますとて、支那奴が案内してくれて、はじめて曾我準造にあふ。いろ／＼はなしをしておもしろし。梁川の藩中の人なり。去年の十月から處々船に乗て、あそびあるいて、新嘉坡にも、輕方にも逗留したとて、その土地の風俗な

どいろ／＼はなす。それから同じ道して出て東來洋行へいく。少しこゝで貨物の値段などきいて、こゝをも出て城内へいて、仁圃先生の處へとほつて見れば、源香の書四幅と、おいらの竹を四幅、りつばに袂装して兩傍の壁にかけてある。こゝで筆談してしばらくやすむ。そばに仁圃のむすめが、ぬひをしてゐるのを曾我が見て、あれはよつぽどよい女だ、かわいらしくてといふたら、なんときいたかその娘が顔を見てわらつてゐる。十三四ぐらゐるな子也。根、ここを出て城皇廟へいかうとするに、むかふから八木がくるから、おまへひまりか、つれしゆはないかといへば、高橋もきてゐるといふ。そこで曾我を引合せて、四人づれになつてあるきながらはなす。小東門から出て、八木、高橋にわかれて、また靑拉佛のうちへかへる。曾我、この三日に香港で日本のかるわざ、てづまなど見た、なか／＼大入で金主はよほどもうける様子だといふ。いろ／＼くわしくはなしたこともあるけれど、今夜はくたびれたから、こゝにかゝない。それよりか、たつたいま、このままのなりで、ふとうら門から出て真波人の店へいたら、そのうちにゐる周良弼といふ男がいろ／＼筆談する。經學者と見える。めんどろうだから、こゝにかゝない。あゝだれぞ、うまいものでももてきてくれ／＼ばい／＼。酒がほしい。かねもほしい。あした

はひがさを壹本かはねばならねえ。ねむい、ねむい。」

六、岸田八戸等の評判

吟香の畫を、支那の文人が複製して、自家の壁にかけてゐることからして、如何にも支那人が吟香を尊敬してゐた模様が知られる。比較的新しい本だが、黃協瑛の「滌南夢影錄」には、岸田吟香が、明治初年再度來滬して、樂善堂を開設した當時のことを、左のやうに評してゐる。

「日本岸君吟香、滬上に旅居すること十餘年に垂んとす。家富み書を藏し、尤も醫理に精し。藥肆を四馬路口に設け、額に樂善堂と曰ふ。刀圭を乞ふ者、つねに戸外に滿つ。更にその慧思を出し、製して銅版袖珍書を爲す。縮きこと牛毛の如く、犀角よりも明かなり。盈尺の書、縮めて方寸一二の本と成すべし。殆ど人巧にして天工を奪ふものか。甲申の春、予、彼國先生（王翁）の處に在りて、これに一見す。恂恂たる儒雅、前輩に愧ぢざるの風流、これと詩を談ずるに、頗る見到する處あり。また彼の國中に翹然として異を負ふ者なり。」

八戸弘光もまた王翰にほめられてゐる。すなはち王翰の隨筆「斐爾餘談」の中に、「日本宏光」と題して、次のやうな記述がある。

「日本人宏光、字は順叔、行三。素と日本京都江戸に居り、將軍の貴胄として、華職を世襲す。年僅かに二十六歳、瑰奇英偉、超卓不羣、固よりその國中の俊傑なり。同治丙寅（慶應二年）五月、香港に來遊し、曾て英京倫敦に往き、その山川風物を覽し、各機器水火二力の妙用を詳観して、悉くその旨を會通す。英國の語言文字には、皆能く洞曉す。英人その聰穎を羨まざるなく、嘖嘖として歎美し、敬禮加ふるあり。また嘗て金山（サンフランシスコ）に遊歴し、至るところ輒に詢ぬるに有用の學を以てし、奇技淫巧には、これを視て蔑如するなり。既に香港に至り羊城（廣東）に往來するに、文人才士皆之と交はるを樂しむ。順叔また皆一々延接し、努めて賓主の歡を極む。ここにおいて投贈の詩章行篋に盈ち、書を求める者、常に戶外に滿つ。順叔の書におけるや、各體工みなざるなく、而して尤も鍾鼎篆隸を擅まにす。これに因りて書名大いに粵東に噪がる。云々」

王翰は後に、明治十一年日本に遊んだ時、東京の文人達に、八戸宏光の消息を尋ねたが、誰も

知らなかつたと、その「扶桑遊記」に書いてゐる。

「中江名勝圖説」といふ上海の風俗畫集には、「東賈搜奇留心辨偽」と題して、和服に下駄履きの二人の日本人が、支那人の骨董屋で書畫を眺めてゐる畫がある。その説明に、日本人は片石寸縷に千両金を出すのを吝まず、眞偽の鑑定に丈けてゐると述べ、殊に「安君老山、岸君吟香、曾波君嘯雲の如き類は、皆博雅好古、考校精詳」とあるのも面白い。

七、老山と紅楓女史

安君老山、すなはち、安田老山については、橋本關雪の「普陀山より西湖へ」と題する繪と文（『文藝春秋』昭和十四年八月）に、左のやうな一節があつたから寫して置かう。

「南波にて傭ひし一人の若き轎夫、別るゝに臨み一枚の畫を携へ來り、「この畫は自分の親父が曾て日本の畫家より描き與へられしものと傳ふ。先生も畫家の上しに聞けば、もしや御存じあるまいか」と問ふ。見ればまだ裝演を施さざる山水にて、安田老山の筆なり。老山は明治初

年相當なる地歩を占めし畫家なり。干支を按ずるにたしか慶應二年か三年なりしと記憶す。他に同行者二人ありし様子なりしも今は覺へず。慶應と云へば猶ほこのあたりに旅行するには相當の難澁なりと察す。」

葛元照の編した「滬游雜記」を翻刻して、明治十一年東京で出された藤堂蘇亭の「上海繁昌記」には、老山の描いた畫が二葉口繪に收められてゐる。まだ木塔であつた當時のガーデン・ブリツヂと黃浦江の寫生である。

この老山の夫人の墓が、上海南北の日本人墓地に現存してゐる。もと龍華にあつたのを、大正二年頃、誰かの手で岡北へ移したもので、高さ五尺、幅二尺餘りの自然石に「日本紅楓女史之墓 華亭胡公壽題」とあり、裏面に左のやうな銘が、漢文で彫記されてゐる。

「日本紅楓女史、姓は伊原、名は愛、字は修車。安君老山、名は養の室。善く蘭竹を寫し、筆致清媚なり。同治九年に老山に隨ひ、中華上海に至りて寓居し、□十一年七月二十三日病故す。存年二十有六。老山柩を攜へて龍華寺塔の西側に葬る。因りて碑を立て、以て記す。」

大日本長崎縣

八坂町住石工岡村徳光

老山の夫人も書家だつたわけで、夫婦ともに胡公譯の畫風の影響を受けたことが、墓の題字から窺はれる。紅楓女史が上海へ来たのは明治三年、二十四歳の時に當つてゐる。東本願寺上海別院の過去帳第一冊第一號は、歿年を墓碑とやゝ異にしてゐるが、この女性の原籍を、信濃國伊那郡飯田町と記し、法名は妙瑞信女、俗名は安田さぶとなつてゐる。字を停車といふくらゐだから、餘程の麗人だつたらうと、或る人が想像を逞しうした。

なほ紅楓より一年早く、明治二年に上海に來た日本の一女性のことが、黃協垣の隨筆に出てゐるのも見逃し難い。それは外ならぬ藝妓であるが、「滬南夢影錄」に「三三、またの名は珊瑚、東瀛の名校書なり。壬午秋航海して滬濱に來る。云々」とあり、相當支那人仲間に有名だつたらしいのである。

八、初代領事品川

慶應三年三月、幕府の使節が上海に来てゐた頃、長崎奉行河津伊豆守からも、上海道臺宛に通商交渉の書面を送つてゐる。これに對する道臺からの返書は、明治元年三月になつて到着し、長崎總督澤宣嘉の手に入つた。澤は伊豆守の意を繼いで、改めて上海道臺と書面を往復した。丁度その頃、浙江紹興生れの吳吉甫といふ者の一味が、上海で日本紙幣を偽造した事件が起つた。そこで大蔵省では實地について、これが取調べをするため通商權大佑品川忠道、長崎縣權少屬神代廷長等を上海に派遣した。（松本忠雄『上海に於ける日本入貨税の初期』、『東洋』昭和十四年十月）

品川はそのまゝ上海に留まり、大日本外務出張所の看板を掲げて、在留邦人の取締りと通商事務を取扱ふことになり、日支通商條約調印後正式に代理領事に任命せられた。後に總領事に榮進し、前後十五年の長きに亘つて上海に在任した。明治八年に「清國通商條例」といふ一書を著し、支那の輸出入手續、通關規則、上海港の諸規則、租界の土地章程等を譯出して、當業者の便宜に資した。王韜は「扶桑遊記」の中で、品川を評して「品川領事よく英語を操り、風度恬靜、意致謙抑、足るある多き者」と賞賛してゐる。

神代廷長のことについても、支那側の記述がある。すなはち陳其元の「庸閒齋筆記」卷三に、

「余上海に在りて、各國領事官と互に相往還す。皆各その禮を盡す。日本新たに通商換約す。その代理領事官神代延長、最も恭順なり。余に謂つて曰く、我が國、中國の書を読み、中國の字を寫し、中國の禮を行ふ。もとこれ一家なり。云々」とある。非常な日支親善振りだが、この言真ならば、餘りに「恭順」の度が過ぎた感がある。

九、柳原前光の視察

明治政府は、清國と正式に通商を開始するため、最初木戸を使節として派遣することになりかけたが、これは間もなく、立消えになり、外務權大丞柳原前光が、明治三年八月出張を命ぜられた。柳原の一行は先づ上海に上陸し、ここで二十日許りも滞在して色々な調査を行った。

上海には、既に事情に適した品川忠道がゐたので、總ての世話はこの品川が見た。一行の上海到着の日には、品川、神代等のほかに、長崎春徳寺の僧禪貞といふ者が、偶々上海へ来て居つたといふので、埠頭に出迎へてゐる。柳原等は上海上陸の第一夜に茶館に行き、支那料理で老酒の

杯をあけたが、その店の番頭に肥前の人七郎なる者があつて、性浮腫善談、英語と支那語を話すので大いに興を添へた。品川は一行を更にバブリック・ガーデンに案内し、果ては四馬路の妓樓から芝居小屋にまで引張り廻してゐる。

一行は上海道臺と折衝を重ねる傍ら、英、米、獨、佛、蘭の領事に會つたり、海關の制度を調べたりしたが、當時西洋科學書を翻譯出版してゐた江南製造局の附屬翻譯館をも訪うて、出版物を買つて歸つたことが、支那側の文獻に出てゐる。すなはち「上海縣續志」卷二十一の徐壽の傳記にいふ。

「徐壽、無錫の人。……既に滬上翻譯館に入り、金匱の人葉衡芳とともに、譯述するところ多
種あり。日本これを知き、柳原前光等來訪し、譯本を購買して歸國、做行す。」

一〇、向 中 尉 の 墓

明治六年には參謀本部から、兵要地誌の作成を目的として、初めて將校下士團が支那へ派遣さ

れた。一行は美代清元中尉を主班とし、島弘毅、向郁、長瀬兼正、芳野正常、江田國容、中村義厚等の面々で、最初暫く上海に留まり、小栗栖香頂師の紹介で支那語を習ひ、習年北京に入った。この第一回の派遣は征韓論とも關係があり、目的は北支にあつたが、當時日支交渉が危機に陥つたので、七年十一月には再び全員上海に引揚げた。同日大原里賢を主班とする第二回の將校團派遣があつたが、これは南支方面に出向いた。

第一回派遣將校のうち、島中尉と向少尉は、明治八年再び上海經由、北支に行つて活躍した。後に島は滿洲に向ひ、向は揚子江流域の研究に従ふことになつたが、明治十一年、向は漢口から下つて上海に出た時、遽かに時疫にかゝつて死した。享年二十九歳。いまその墓が上海日本人墓地に存して居り、竹添光鴻(井々)の撰、吳道書の碑文があつて、「大日本向君、諱は郁、山口縣嚴國人、中尉はその職なり。明治六年より始めて清國に航す。云々」と記されてゐる。

一一、江藤新平の逃亡

明治六年、征韓論に敗れた江藤新平が、佐賀で亂を起し、窮地を脱して行方をくらました當時、鎮壓の大任を帯びて西下してゐた大久保は、江藤が上海に逃げはせぬかと心配して、内務省から北代正臣、河北俊弼等を上海に派遣した。彼等は上海から更に香港に向ひ、南支一帶に互つて江藤を搜索した。

これより先、大久保内務卿は、江藤が逃げたと聞くと、早速上海の品川領事に手配を命じた。品川は直ちに亂民江藤逮捕に關する協力方依頼の件を、支那官憲に申入れ、若し上海以外の支那沿岸に日本の小蒸汽船が現はれても、これを抑留して、本官に通知してくれるやう命令を出され度く、なほ賊徒発見の際は、これが捕縛に向くため、兵船を一隻貸して貰ひたいと依頼した。これに對して、支那側は充分好意ある回答を寄越してゐる。

領事館では、更に賊徒探索のため、道臺から護照の發給を受け、書記生大倉謹吾を、青波、舟山方面に派遣した。ところが、江藤は事實支那へは逃げて來ず、薩摩から土佐へ行つて捕へられた。そこでこの大が、よりな捜査網も自然消滅した次第だが、この事件で支那當局が示した誠意には、大久保も深く感激したらしく、後年臺灣問題で北京に行く途次、上海道臺に會つて謝意を表

してゐる。(薄井沼治「佐賀の嵐と上海」)

因みにこの件で、喜波、舟山方面へ出かけた大倉謹吾(小栗栖香頂の「八洲日曆」に大藏金吾と記す)は、越後の人、大倉良蕙の子で、もと雨廊と號する南畫家であつた。夙に長崎に出で清語を習ひ、明治五年上海に渡航し、老山等とともに始め畫道を研究したが、後品川に隨つて領事館に勤務するやうになつたものである。



滬上雜記

一、木棉事始

古代支那では、人は五十にならなければ、絹を着ることが出来なかつた。孟子に「五畝の宅、これに樹うるに桑を以てすれば、五十の者以て帛を衣るべし」とある。では五十歳未満の者は何を着てゐたかといふに、木棉ではなく苧麻布であつた。麻衣では冬寒い。けれども暖い絹は、老齡者だけに許された昔からの贅品だつたのである。

木棉が、支那で一般的衣料として普及したのは、さう古いことではない。明の邱濬（海南島出身）の「大學衍義補」に、

「漢唐の世、遠夷木棉を以て入貢すと雖も、中國未だその種あらず、民未だ以て服となさず、

官未だ以て調となさず、宋元の間はじめて、その種を傳へ、中國に入る。關陝閩廣はじめてその利を得。蓋しこの物外夷に出で、閩廣の海、船商を通じ關陝西域に接するが故なり。然るに、この時なほ未だ以て征賦をなさず、故に宋元の食貨志には皆載さず。我が朝に至りてその種乃ち遍く天下に布く。地、南北となく皆これを宜しとし、人、貧富となく皆これに頼る。その利を絲粟（さくそう）にくらぶれば蓋し百倍せり。」

とある。木棉ははじめ支那では烏疊（ウエツ）といひ（後漢書）少しく降つては古貝、または吉貝と呼んでゐた（樂書）本草綱目に「木棉に二種あり、木に似たるものは古貝にして、吉貝はすなはち古貝の訛、草に似たるものは古終なり」とある。「古貝」は印度支那の *Bambur* 語で *Kopala* といふのと同じで、梵語のカルバサである。現代の印度語でも、實棉のことをカバスといふ。棉花の原産國は印度であるから、恐らく宋末に渡來したアラビヤ商人によつて、種棉の支那輸入が行はれたのであらう。「古終」はアラビヤ語の音譯ださうで、英語のコットンもこれの變化らしい。

この棉花の支那傳來については、大正十四年「東洋學報」に、藤田劍峯の「棉花織布に關する古代支那の知識」と題する甚だ權威ある研究（同博士の遺書、東西交渉史に收む）が載せられたが、同

じく棉花の傳來とその後の棉業の發達について、學問的なものではないにせよ、明治三十五年に刊行された楡原陳政の「清國商況視察復命書」に、頗る詳しい考證が載つてゐるのに驚いた。尤もその箇所は、楡原が自身で書いたのではなく、「某氏の編記に係る」ものを参考のため収録したと斷つてある。某氏とは當時の上海在留邦商の一人らしく、今その名を確め得ないのは残念だがとにかく昔の人の勉強振りには頭が下るのである。

支那文獻では、清の樞華撰「木棉譜」が、最も重要なものである。これは支那の棉業史を知らうとする者の必讀の書であらう。蘇廷珩の「鵬波漁話」といふ隨筆集にも「吳梅村木棉吟」と題して、多少木棉に關する記述があるのを見かけた。近人の書には、徐蔚南氏の「上海棉布」がある。これは、事變前の上海市博物館に陳列されてゐた各種土布の見本と、紡織工具の模型に關する説明書だが、これがまた頗るあり難いのである。これ等の書によつて、吾々は、開港以前の上海における重要産業が、何であつたかを知ることが出来る。そして、現代における上海紡織業の發達に、理由のあつたことを理解し得るのである。

興味深いのは、木棉の工業が、主として婦人の労働に依存することである。上海の古語に現れ



南通の倭子墳

た婦人の家庭における地位は、奴隷に等しいものであり、婦人は男の農耕を助けると同時に、また織布にも勤しむのが常であつた。「饑亦織、凍亦織、一梭一梭復一梭、日短天寒難成匹……」と明の董宏度が「織婦歌」に、その辛苦の状を寫してゐる。

明代以來支那全國に販路を有つた上海綿布、清代には歐米にまで輸出せられた南京木棉は全くこの地方の勤勉な婦人達の、手と足との労働によつて生み出されたのであつた。そして、上海の繁榮に對する婦人の貢獻は、今もなほ續いてゐることはないのである。租界における一部の摩登小姐だけを見て、支那の女は働かないと、言ひ切ることが出来るであらうか。

元朝の元貞年間（一二九五—九六年）、海南島から上海地方へ、打棉と紡織の改良工具を移入し、地方人にその使用法を傳授して、棉業興隆の礎を築いたのは、黃道婆といふ一婦人であつた。このことを記した最も古い本は、元末の陶南邨の「輟耕錄」である。その後、明清時代の筆記類にもよくこの話が轉寫されてゐる。

黃道婆の生れた上海近郊の烏泥涇といふところには、歿後彼女のために祠が建てられた。この祠は元から明、清にかけて度々毀れては重修せられ、所在地もあちこちと移動したが、現在は最

早存在せず、烏泥涇の淋しい畑中に、黃道婆の墳塚が残つてゐるだけである。それも里人に此處だと示されなければ、定かには知る由もないらしい。だが、祠は廢れ、墓は荒れても、周圍に淫しなく擴がつてゐる棉田こそ、彼女の最も生々しい遺物に違ひないのである。

民國十八年、上海市政府が「市花」を選定するため、市民の一般投票を募つたことがある。その時最高點で當選したのは、蓮でも牡丹でもなく、實に棉花であつた。

二、倭子墳

皇軍が、昭和七年の上海事變及び今次事變に、敵前上陸を敢行した吳淞、七丫口、白茆口、杭州灣北岸の金山衛などは、今から凡そ四百年前、一明の嘉靖、弘治年間に、我等の祖先である無名の戦士たちによつて、既に何度も敵前上陸が行はれたところであり、一時は南京を陥れたことすらあつて、上海の如きは甚だしい戦禍を蒙つた。

この倭寇を防ぐために、嘉靖三十二年（一五五三年）九月、初めて上海の今の南市の位置に城が

築かれたのである。その城壁は、一九一四年に取拂はれるまで、ずっと存在してゐた次第だが、この城が出来ると、四郷の富豪はみな安全を圖つて、城内に遷居して來た。こゝにおいて上海は急速に繁榮に向ひ、清の康熙の代になると、海禁も解かれて江海關が設けられた。かくて上海は對外貿易上の重要な港となるに至つたのである。

「國際上海港の恩人よ、汝の名を倭寇といふ」と澤村幸夫氏が「上海風土記」に書いてゐるが、まことに然りである。足利時代の日本の海賊こそは、上海の發展に機縁を與へた「逆縁の恩人」なのである。

ところが、上海の港を開いて繁榮させたのは英國人だ、といふのが何時の間にか一般の通念になつてしまつた。なるほど英國も一八四二年隨海軍を派して吳淞砲臺を攻撃し、やゝ近代的な敵前上陸を行つて上海に侵入、城内で相當の掠奪もやり、遂に租界を設定させて、上海繁榮の動機を作りはした。

太平天國の亂當時、租界を安全地帯として、崩れ込んだ支那の富豪達によつて、租界を母體とする新しい上海の發展が行はれたこと、恰かも倭寇當時の上海城の發展に彷彿たるものがあり、

英國人もまた上海にとり、逆縁の恩人となつたわけだが、英國と上海との因縁は、倭寇のそれに遡ること實に三百年である。三百年の先輩が今また租界を尻目に、新上海の都市建設を開始してゐるのである。

江南から江北にかけて、倭寇の遺跡は甚だ多い。上海城そのものが、倭寇の最大の遺跡だといへば云へぬこともない所以は既述の如くだが、そのほか倭寇防衛のために、支那側の設けた防壁や烽火臺が各所に残つてゐる。上海東南の南匯あたりには、殊にその顯著な跡がある。倭寇の襲來を望見するや、住民は忽ち烽火を擧げてSOSを報知し、各地の烽火臺はリレー式にこれを中継し、一瞬のうちに蘇州、杭州邊まで傳達されたといふ。

しかし倭寇の遺跡は多いとは云へ、大抵は支那側の設けた防禦手段の跡で、倭寇自身の施したもので倭寇の墓は稀しい。占領はしても直ぐあつさり引揚げたのであるから、今のやうに忠靈塔を建てることもなく、戦死者の屍を收容することも少なかつたのではないかと思ふ。逆に敵側の倭寇の屍體を埋め、その上に勝墩を築いたりしてゐる。丁度前回の上海事變に爆彈三勇士が名譽の戦死を遂げた廟行鎮(廟巷)へ、後に支那側が寄附を募つてコンクリートの巨大な墓碑を建て、

三勇士の向ふを張つて、支那兵の武勇を紀念してゐたのと、同じ氣持から出た自慰的措施であつたらう。

すつと以前に出た島津四十起氏の「上海案内」には、浦東に倭寇の墓があると書いてあつた。島津老に糺すと、これは懸志から取つたのだから間違ひはないと云はれた。なるほど「同治上海縣志」卷三十二に左のやうな記述がある。

「倭子墳墩、浦東二十二保三十五圖何家街の南にあり。家中倭寇の積骸ありと相傳ふ。故に名づく。或は云ふ、倭これを築きて斥塚となせりと。今は高さ二尺許りの土墩を存するのみ。」
ところがこの浦東の「倭子墳」は、實は「倭子墳」の誤りで、倭寇とは關係のないものだといふことを、筆者はさき頃讀んだ毛群麟の「對山書屋叢餘錄」といふ本で知つた。すなはち同書卷十五に、

「浦東舊く倭子墳あり、倭寇積骸の處に係ると云ふ。而してその非なるを知らざるなり。蓋し嘉靖の間、馬勝なる者あり。口に北音を操り、而してその籍を詳かにせず。身短微髭にして操舟を業とし、鹽を浦江の東に結ぶ。人みな呼んで馬矮子となす。素と水性に習ひ、洪濤巨浪中

に、能く伏せて時を經。毎に大風海盜に遇へば、必ず小舟に棹さして浦濱を巡視し、覆溺を救
授して酬を索めず。人みなこれを徳とせり。死後里人その居りし處につき、地を堀り葬を營み
呼びて矮子墳となす。今矮をもつて倭となすは、乃ち世俗流傳の誤りなり。」

とあり、同治縣志の説を全然否定してゐるのである。矮子は馬勝といふ小男に對する仇名で、
チビ公とでも譯すべきもの。矮子墳は、通稱チビ公といふ義人の墓だつたわけである。それにし
てもこの義人は、土地の言葉を話さず、素性が明かでない上に、泳ぎが上手で、人を助けても謝
禮を取らぬといふから、どうも矢張り日本人のやうな氣がしてならない。

上海には、も一つ倭寇の墓がある。これは「民國上海縣志」卷二に、左のやうに出てゐる。

「倭塚、三十保二圖水福禪院の西南にあり、明の嘉靖の間、倭寇剽掠したるに、村人殺してこ
れを焚き、骨をこゝに埋む。」

三十保二圖といふと、蘇州河の少し上流の南岸地區に當る。こゝの墓については前志に何も出て
ゐないところを見ると、土地の傳説を新たに聞知して記したのであらう。

江北の南通にも矮子墳があるらしい、といふことを田中忠夫氏から教はつた。而も江北開拓の

父張審が、その墓を修復した逸話があることを、或る支那人の隨筆で讀まれたといふ。そこで筆者は、張審の子息の張孝若の著はした「南通張季直先生傳記」を試みにひもといて見た。すると果して、倭子墳に關する可なり詳しい記述があつた(二五九頁)。

ところで筆者は、日本人に知己の多かつた張審のことだから、多分史蹟保存の意味で、好意的に倭寇の墳墓を修理したのだらうと、頗るお人好しな想像をしてゐたのであるが、豈計らんや、それは全く異つた動機から行はれたのであつた。つまり崩行鎮における支那側の記念碑と同じなのだ。

彼の傳記によると、事實は次の如くである。倭寇の頻繁に來た頃、南通に鹽の密輸に従事してゐた。曹頂といふ貧しい若者があつた。將師張經の募兵に應召して、狼山鎮總兵部の兵卒となつた。城壕の衛りにつき頗る戦功あり、忽ち擢んでられて小校となつた。彼は益々勇氣百倍して、倭寇に敵對した。倭寇は被害甚大なのに憤慨して、城北の單家店に伏兵し、道路に陷阱を掘り、敗退を伴つて曹頂を誘き寄せ、不意に反撃を加へた。彼は從卒二人と共に、墮落して戦死した。今城の南に高く盛り上つた謂ゆる倭子墳なるものは、昔曹頂が斬り殺した倭寇の屍が堆積して出

來たものに外ならぬ。頂の死後、縣人これを有り難がり、墳を距る一里許り南の地に厚く葬り、祠を立てゝ祀つた。

後に張馨が、「日本人の無理横蠻を見て、中國人の愛國心を激發させる必要を痛感し、」この倭子墳の上に京觀亭といふのを建て、刀を携へ、馬に跨つた曹頂の像を安置した。また曹公祠を重修して、そこに小學校を建てた。そして「重修曹公祠碑文」に排目的な文句を記した。南通に遊んだ日本の友人が、これを見て、

「こりや少し非道い。何とか改めてくれぬか。」と訊いたのに對し、張馨は、

「貴國は日清戦役に中國に勝ち、分取りして歸つた戦利品を、培國神社に陳列してゐる。それは貴國人の愛國心を激勵するためで、間違つてゐるとは云はぬ。吾々がこの墓を修理し、この像を立てたのも、中國人の愛國心を激勵するためだ。間違つてはゐまい。」と答へたといふ。

今次事變に、廟行鎮の支那側紀念碑は、戦火を蒙つて破壊された。そして大場鎮に、日本側の



(上) 上海の城壁

(下) 1880年頃の洋浜濱 (1916年埋立てられて現在のエドワード路となる)

壯大な記念碑が立てられた。南通には直接戦火が及ばなかつたから、前記の京観亭や曹公祠は、現存してゐることと思ふ。

三、大阪商人と東洋莊

大阪上海樞軸といふ言葉が、今日の日支經濟關係の態様を象徴してゐるやうに、明治以來日支の貿易は、大阪と上海とを互ひの表裏關とし、この交通路を本筋に發展して來たのであつた。

大阪へ支那人が來往し始めたのは明治以降で、長崎や函館に比べると大分遅いが、明治四年には既に川口方面に在留して、貿易に従事する華商があつた。最初の大阪川口華商は、廣東籍、福建籍のものが多く、その買付品も海産物が主であつたが、日清戦争頃から上海商人が斷然多くなり、大阪の地元で出来る雜貨や綿糸布が賣れ行くやうになつた。そして三十年頃には海産取引は神戸へ移轉し、大阪は上海商人を主として天津、芝罘方面の華商を加へ、更に日露戦後には、滿洲からの來住者も増へて、こゝに、所謂川口貿易の殷盛を見たのである。大阪商人が、この川口

での居貿易から、上海への出貿易に進出したのは、餘程後年のことである。

明治二十年に、大阪の雜貨商吉田號が、上海の佛租界の洋涇濱に初めて店を持つたのが、大阪商人進出の先鞭であつたが、この吉田號を宿屋同様に利用し、大阪の雜貨問屋が續々見本携帯で乗込むやうになつたのは、漸く明治も末年の四十年頃である。その頃になると洋涇濱、東棋盤街を中心に、大阪雜貨を取扱ふ邦商洋行の数が相當増へた。ハンカチ、タオル、洋傘、硝子器、掛時計、齒磨などが、その時分の賣行品の大宗であつた。

取引相手の華人雜貨商を「東洋莊」と呼んだ。これは日本品輸入商の意で、天津でも同様であつたが、奉天では大阪莊、營口、哈爾濱あたりでは東洋雜貨舖というてゐる。明治三十九年上海の邦商は、この東洋莊と協議して、紛議の調停その他營業上の共同利益増進のため、東洋莊同業公所なる團體を組織した。後にこれは改組して華商のみの東洋莊貨公所となつた。この團體に呼應して連絡のために生れたのが、大阪の貿易同盟會である。

大正十二年大阪市産業部は、大阪商人の寄附を集めて、上海に貿易調査所を創設した。この機關がまた東洋莊と大阪貿易同盟會との連絡役を勤めた。大正十三年貿易調査所で、大阪雜貨商に

よる見本市が開かれたが、見本市なるものの草分けである。

明治末年から大正末年にかけての、大阪の公私擧つての上海進出は、川口の華商を決して閉却したものでなかつたにせよ、終局において、川口貿易を衰退せしめた。勿論大阪商人は、上海の華商から直接注文を取つて歸つても、その代理店たる川口の華商に二分の口銭を與へて、そこで荷渡しをするのが常であつたが、そのうちに、この種の注文取り營業から、上海での開店營業に段々變つて行つた次第である。他方上海では支那人の輕工業が勃興して來た。東洋莊筋でも工場を經營するものが漸次増へた。所謂商業資本の産業資本への轉化である。搗てゝ加へて、排日の續發で東洋莊は益々日貨を買はなくなつた。そしてはや、日本の對支輸出貿易は、雜貨や綿糸を揚棄して、機械や工業藥品の高級なものに、主力が移つて行つたのであつた。

このやうに日支貿易の歴史は、日本側の輸出についていへば、居貿易から出貿易への轉換が相當手間取つたのであるが、輸入の方は可なり古くから先方へ進出して、雜穀や肥料を買付けてゐた。三井、三菱、大倉、鈴木等の大きな店が、早くから上海に進出し得たのは、主として買付の商賣に妙味があつたからである。つまり近代日支貿易の歴史は、支那側から大阪へ雜貨の買付に

出張るし、日本側から上海へ穀肥の買付に出張つたところから始まり、後には遂に兩種の商賣が上海の一處に集中せられるに至つて、殆ど日本側の出貿易のみに一元化された、といふ風に要約されるであらう。

四、東來負販團

明治二十年頃、岸田吟香の上海樂善堂を本據に、參謀本部の派遣將校荒尾精や、その他幾多の對支先覺志士が、岸田の眼藥精鈔水の行商をして、全支踏査の目的を達したのは、有名な話であるが、明治三十八年日露戰爭直後に、仁丹の東亞会社が上海に開店するに際し、その別働隊として「東來負販團」の名の下に、數十名の青年が行商に従事した事實を記すのもまた面白からう。

この行商團の指揮者は「支那貿易案内」の著者、長谷川櫻峰で、この擧を考案するまでの苦心が、並大抵ではなかつたらしい。

初め櫻峰が上海へ來たのは、東亞会社の依頼による賣藥の賣行調査のためだったが、二ヶ月許

り宿屋で居るうちに旅費も盡き、調査は一向要領を得ないところから、思ひついたのが、身を落しての賣藥の行商であつた。勿論初めは單獨で試みた次第で、小さな赤い支那カバンに、眞田紐をつけて肩にかけ、前年開業したといふ富山出身の丸三藥房で、原價十五圓の賣藥を借り、街中歩いて支那人に賣つて廻つた。

當初は戸毎に毎日訪ねて緋出しを食ひ、江戸繪を撒いて、小供を懐柔する策に出でてもまた失敗、疲れ切つて或る日、とある茶館に登つて見て、こゝに初めて成功の端緒を掴んだ。茶館に遊んでゐた支那人が、ワンサ押かけて、飛ぶやうに藥が賣れたわけである。そこですつかり行商の要領を會得した櫻絳が、毎日城内や四馬路に出掛けて呼賣りを續けてゐるうち、再び考へついたのが、大規模の行商團の組織である。

「實業之日本」社主に依頼して、日本内地の青年を募集したところ四百人の申込があり、そのうちの三十名が選ばれて大神宮で宣誓式を行ひ、旗を押し建て、上海へ乗込んで来た。これが東來負販團で、後には更に六、七十名に増加し、上海を中心として蘇州、杭州、長江沿岸にまで行商活動を開始し、一時非常な成績を挙げたのであつた。

ところが東來黨の活躍を見て、上海の邦人間にも、これを真似るものが續出した。殊に富山出身の藥屋連が、逸早くまた大規模の行商團を企てた。その結果幾年ならぬに、上海邦人の行商者四、五百人の多きを數へるやうになり、遂に競争のため種々の弊風を残して、何れも失敗に歸してしまつたのである。櫻峰は、後年その著書の中で、

「行商を以て專業とし、これによりて支那に活動せんとするの動機を作りしは、余を以て嚆矢とすべく、而して本邦商人は、當時この機關によりて商品の研究、支那の嗜好を知り得たるの功や没すべからずである。而してこの行商によりて、各地に獨立の店舗を開始し、或は會社銀行官衙に奉職し、支那的發展に従事せるものその幾十人なるか知るべからず。不幸にして半途この事の失敗に了りたるは、頗る遺憾なことであつた。」

と自讃してゐるが、事實當時の行商出身者で、後にその經驗を活かし、大いに成功した邦人も少くないのである。

因みに島津四十起氏の談によれば、藥種行商の開始は、長谷川よりも、菊池圓藏といふ人が稍早く、この人は今も漢口に健在だといふ。

五、邦人紡績の發展

上海邦人の主流は、歴史的に見れば何といつても貿易商でなければならぬが、今日ではどうも紡績業者が王様のやうである。貿易業者は、店舗は大抵借物だし、品物は始終流動するので、その投資といつても知れたものである。上海邦人の全投資額三億圓餘りのうちで、輸出入業の投資は精々五千萬圓程度だが、紡績業の投資額は、實に二億圓に近い。それだけに邦人の使用人も多いし、その用度掛を相手の邦商が非常に多い。居留民團の財政なども、紡績への課金に依存するところ最も大きいのである。

この邦人紡績が、上海に續々進出して來た時期は、かの歐洲大戰時分であつたが、それ以前にトツプを切つて、この地方へ乗出した我が棉業關係者は何人かといふに、先づ内外棉の川部利兵衛を挙げなければならぬ。彼は早く明治十七年に、唐棉の觀察のため上海方面へ渡つた。その頃彼は舊幕時代以來の大阪有数の總問屋松坂屋（主人は秋馬氏）の番頭を勤めてゐたが、當時我が棉

業關係者中誰一人として、支那棉の原産地事情に通じたものがゐないのを慨嘆し、單身上海に航し、浙江省餘姚地方を行脚、視察に努めたのである。歸國後神戸の在留華商鼎泰號支配人朱季方と謀り、上海の源記、寧波の新泰泰號と合同して、寧波に秋馬洋行といふ棉繰工場を開設、十八年十月大阪淺川製足踏機二十四臺を送つて操業を始めた。これは間もなく不成功に終つたといへ、日支合辦事業の先鞭として記憶に價するであらう。

紡績は明治三十年頃、佐々木直吉がモリスと稱する工場を、上海靜安寺路に經營したのが始まりである。木製三千錠のガラ紡で、支那人經營の三新紡あたりから落綿を買ひ、これを原料に十番手以下の糸を紡いたのであつた。

近代的紡績工場の邦人による創始は、上海紡織と内外綿である。明治卅五年三井の山本桑太郎の英斷で、支那人の工場を買収して生れたのが上海紡織會社、次いで明治四十四年内外綿の川邨利兵衛の遠眼で、上海宜昌路に土地を買つて建てたのが内外綿の第三工場、調ゆる水月紗廠であつた。その後大戦となり、大正七年から十三年にかけて、日華、公大、豊田、裕豊、東華、同興の各邦人紡が上海に進出した。この時期は、支那人紡績にとつても黄金時代だったのである。

上海に支那人の紡績が創設されたのは明治廿三年で、李鴻章による上海織布局が、その最初のものであるが、これは間もなく焼けた。ついで華盛、華新、大純、裕源等の諸工場が起つたが、日清戦争後外人企業の勃興で脅威を受けた。すなはち日清下關係條約の結果、我國が上海で工場建設の権利を取得するや、この條約に均當して、逸早く紡績企業に着手したのは外人だつた。戦争直後早くも英人の怡和、老公茂、獨逸人の瑞記、米人の鴻源などの工場が出現し、萌芽時代にあつた支那人紡績と競争した。そして支那人紡績が漸く外人紡を抑へて活況を呈したのは、明治四十三年から大正十四年に至る間で、これが史上唯一の支那人紡華かなりし時代である。

ところがその時期の終り頃に、邦人紡が大舉進出して來て、工場の新設、外支人紡の買収を盛んに行つたので、爾來支那人紡績は全く萎微沈滞して、今日に及んでゐる。

今次事變で、舊英租界のものを除く支那人紡績は、とりあへず軍管理の下に、邦人紡との共同經營に委ねられて復興することゝなつた。そして占領地域内の焼残りの支那人紡が、そつくり邦人紡に割當てられたのである。邦人紡の事變による被害は約三千萬圓の巨額に上つたが、今や復興の意氣旺んに、壞れた支那人紡にも手入れをして操業を進めてゐる。目下なほ回難的な態度を

採つてゐる支那側工場主が追々表面に出て来て、名實とも具つた日支共同經營が行はれるやうになれば、上海邦人紡の基礎は愈々不拔のものとなるであらう。

六、居留民會の政黨

上海居留民團は、明治三十八年に成立した日本人協會が、同年公布の居留民團法により、四十年改組せられて出来た在留邦人の自治機關である。

民團の機構は、その後昭和十年に改革せられるまでは、居留民會とその議員中から互選した行政委員會とから成り、行政委員長も名譽職であつた。ところがこの制度は議員や委員の轉任の多い土地の事情と、それでは永久的な仕事が出来ないといふ理由から、昭和九年末法規改正研究委員會が出来、政府からも派員を見て慎重研究の結果、現在の有給民團長制に変更されたのである。すなはち内地の市町村と同様に、立法機關と行政機關とを分離して、行政の責任者を民會議員中から出さないことにしたわけである。

ところが、永い傳統を破つて、俸給の高い民團長を置くといふことには、當時相當反對があつた。この改正案を提出した筆者の先輩安澤嘉作氏は、議員改選の際に非常な苦戦をせねばならなかつた。この時の選挙は、民團史上特筆すべき激戦振りであり、立候補者の立會演説や、街頭の立看板が見られ、恰かも、普選實施直後の幕やかなりし國會議選挙に彷彿たるものがあつた。

民會に政黨が生れたのもこの時である。従前は大體會社紡績派と土着派の二大分野に分れてゐたのだが、その土着派が當時交民俱樂部、茶話會、土着本黨などと、まるで無産黨のやうに分裂抗争した。これ等の政黨は今もなほその名残りを留めてゐる。

元來民團は在留民から課金を取り立て、小學校と火葬場を經營するだけのものと、一般に考へられてゐたのが、その頃急に、政黨まで作つて争ふやうになつたのは、何故かといふに、勿論理由があつた。それは前回の上海事變後、政府から銀五百萬元の復興資金が民團に貸下けられ、民團内に復資部といふのが新設されて、低利貸付を開始したからである。事變で傷手を蒙つてゐた在留民、殊に謂ゆる土着派の民團行政に対する關心が、一時に昂まつたのも無理はあるまい。その資金が初めて政府から下りると決つた時の如き、その運用方法について、實に三十有餘回に

互る公開討論が、新聞紙上に展開されたのであつた。

民團が復資部を抱へてゐることは、政治の個みであると當時は思へた。民會議員中、復興資金を借りたものが、非常に多かつたので、「朝に復資部の門をくゞり、夕に議政壇上に叫ぶ、また難いかな」との批評も出たくらゐである。

今は時局柄、民會も政争を慎しみ、民團長も自肅會といふのを提唱して、大いに治績が擧つてゐるのはうれしい。現地の長期建設の擔當者として、これからの上海邦人は、會社派も土着派もなく、和衷協同で進んで貰ひたいものである。

七、日本俱樂部の由來

現在の上海日本俱樂部が組織されたのは、明治四十一年であるが、それまでにも在留邦人の俱樂部は、何度も組織されては中絶してゐるのである。

最初の日本俱樂部は、古く明治十年代に遡る。「東本願寺上海開教六十年史」によると、別院日

記十六年二月五日の條に「夕五時方、品川(領事)の招きにクラブに往く。この日招きに應ずるもの三十餘名なりき」とあり、同十二日「岡本來り、クラブ一月集金並に年内總集金の入費を要求に付、白氏分(白尾主務)を交附す。明日會には出席を断り置く」など見え、當時既に領事館内にクラブなるものが成立し、會費を以て維持してゐた事情が明らかである。また領事館内に、同會なるものがあつて、これへ時の居留民が集まつてゐたことも、その日記で判るのである。

ところがこのクラブは、そのうち廢れたと見え、明治二十四年になつて再び俱樂部結成の必要が、當時の「上海新報」新年號紙上で説かれてゐる。

「在滬邦人へ―獨立自營の精神を作る事。我居留民は年々増加しつゝあるが、一致團結、邦人の體面維持に努むる所なく、烏合の衆の如し。一致團結事を始めんことを希望す。」(同紙一月二日三十一號)

この記事が出るまでに、俱樂部結成のことは、既に着々進められてゐたと見え、同紙一月十六日(三十三號)には、左のやうな報道が載つてゐる。

「在滬日本紳士連の俱樂部は、舊臘二十五日夜、日本領事館に初回を開き、一月十日夜三井物

産にて二回を開けり。漸次盛大ならしむる希望なり。」

かくて第二次の日本倶楽部が華々しく結成された次第だが、倶楽部とはいへば単なる懇親會でしかなかつた。一定の建物内に碁將棋を備へる程のことすら出来なかつたらしい。何分人数も少なく、資金がなかつたことが、次の記事に窺へる。

「クラブ。

△上海クラブ(第一)、英租界河畔、十二萬兩の建築費を以てす。請負人三名破産せりといふ。

△ドイツクラブ(第二)、廣東路にあり、一の劇場を附屬す。

△税關クラブ(第三)、虹口、ポルトガルクラブ、虹口、前二者に比して微々といふ。

△日本人もクラブを作るとの噂あれども、費用のかゝるものなれば、永續覺束なかるべし。」

(「上海新報」三十九號)

この記事にいふクラブとは、建物を備へた倶楽部のことらしいが、この種のを邦人が初めてもつたのは、明治三十二年の運動倶楽部であらう。それとて靜安寺路にあつた正金銀行社宅の庭園を借りてゐたに過ぎず、翌年同社宅が靶子路に移轉するに至つて中絶してしまつた。

明治三十六年になつて、東大出身の在留者が、乍浦路に赤門俱樂部を設立し、後改めて日本俱樂部と稱したが、同時に東大出身者以外の人々によつても、癸卯會なる俱樂部が南潯路に設立せられ、翌三十七年この両者が合併して日本俱樂部と改稱した。これが今日の日本俱樂部の前身で、文路の舊の西本願寺のあつたところ（現在空地）に設備をもつてゐたのである。

ところがこの俱樂部も、一部階級者の専用物のやうな觀があつたので、當時中堅的な實業家の一部は、明治三十九年また別に實業俱樂部なるものを斐倫路（外虹橋北二軒目）に設立し、また別に滬友會といふのも生れた。明治四十一年四月この三者が合併し、東本願寺の建物内に引移つて、初めてこゝに上海日本人俱樂部が生れたのである。當時會員は約二百四十名であつた。その頃更に洋涇濱方面の雜貨貿易商によつて、組織された商友俱樂部といふ課業機關も存在したが、これは別個のまゝに終つたらしい。

現在の文路にある俱樂部ハウスは、大正三年三月俱樂部が財團法人となると同時に、工費八萬四千七百四十八兩五匁をもつて竣工したもので、落成當時は「輪奐の美を極め」たものだそうだが、事變直前には、大勢が上を歩ると、天井が揺れて落ちさうだつた。最近改築、擴張されて、

稍々見直したものの、會員一千名を超ゆる今の俱樂部としては、まだ／＼貧弱過ぎる。時局柄一般の新建築が不自由になつたのは致し方ないが、俱樂部だけはせめて上海俱樂部やアメリカン・クラブに劣らぬ堂々たるものを持ちたいものだ。

因みに、日本人俱樂部は、事變以來日本俱樂部と改稱するに至つた。これは新事態に即應し、親日支那人の入會をも歓迎するといふ結構な趣旨からである。同様の趣旨をもつて、ブロードウェイ・マンシヨンの十六階に、新興俱樂部といふのも出来た。これは維新政府の要人や支那側實業家と邦人側官民との、幾分非大衆的な社交俱樂部であつた。新中央政府の成立後、新興俱樂部は解消し、新たに日華俱樂部といふのが、北四川路と寶樂安路の角に出来てゐる。

八、洋 妾 物 語

明治の初め、日本婦女の來滬せるものうち「業あるものを除くほかは、大半西人の抱ふところなり」とは、前にも引いた「海上羣芳譜」の言葉であるが、明治九年東本願寺上海別院の日

誌にも、「皇國人にして、西洋人に嫁妻せし者」のために、寺小屋式の授業が行はれた事實の記述がある。

光緒十年に王翰の書いた「滬語漫錄」の卷十一には、また左のやうな記事がある。

「去秋の間、滬上に回る。相良（名は長裕、鹿兒島の人）特に盛饗を設けて叟（王翰）のために塵を洗ひ、東瀛の女子十許人を招集す。みな皓齒明眸、織機に入るに類ひす。これを詢ねれば則ちみな西人の外室なりと。月界金餅數十枚、故に容飾炫麗なり。」

このやうに上海の洋妾は、明治の初期から相當大勢のたらしものであるが、日清、日露戦争時分には、その数が益々増加してゐたと思へる。現今吳淞路あたりで相當な店を構へてゐる土着邦人の中には、少年時代、これ等洋妾に可愛がつて貰つた経験をもつものが、少なからずあるようだ。「西洋人に嫁妻した」淋しい日本の女性達が、暇さへあれば邦人の少年を、活動や芝居の見物に伴つて行き、別れ際にお菓子を貰ひ呉へて歸つて行つたといふのは、今もよく聞かされる老上海の思ひ出である。

開北の日本人墓地を歩くと、身寄り薄いこの外地に、若くして儂くなつた彼女達のために、吳

人の建てた墓がいくつもある。『明治二十四年、鈴木タカ子(二十五歳)、相愛せる眞友大英國人エス・ジニー・モリス』、『魚井りう(二十八歳)、明治二十八年英國人ジョン・グワイフ建之』などといふ墓の文字を見てみると、一種もの悲しい追想が湧いて来る。

数多いこれ等の洋妾の中には、國際都市上海を舞臺に、大和撫子の本領を發揮して、非常時局に功勞を樹てたものも少くなかつた。この種の物語の中でも、明治廿七年七月廿五日、後の元帥東郷平八郎が艦長として乗組んだ浪速艦が、開戦直前に豊島沖で、清國軍隊を満載した英船を撃沈した、かの高陞號事件にまつはる秘話の如きは、その壓巻であらう。

高陞號事件は時の政府にとつて、少なからぬ心配の種だつた。一つには、その撃沈が宣戰布告(八月一日)前にあつたこと、二つには船籍が英國に在つたこと、三つには船舶を拿捕せずして撃沈してしまつたことである。尤も一と二は、當時既に開戦同様の情勢にあつたことだし、敵の軍事輸送船なのだから、これを阻止するのは當然で問題にならないが、第三の何故拿捕せずして撃沈したかの點には相當困つた。これには日本の降服命令にも拘らず、支那側が拒んだといふことの、證明が必要であつた。この證明を得るについて、日本女性の働きが、效を奏したのである。

當時上海に、石渡マサといふ老上海の女侠がゐた。虹口靖遠街に裁縫師匠の看板をかけ、相當の弟子をもつてゐた。このマサ女を「お母さん」と呼んで親しみ仕へてゐた若い女性の一群の中に、偶々高陞號の英人船長と親密の間柄にあつたものがおり、その縁によつて、マサ女も該英人と知り合ひであつた。

マサ女はこれを奇貨として、若い彼女に説いた。彼女はマサ女の入れ知恵によつて船長を説き、かくて竟にその英人の口から、「陸沈當時高陞號は、乗客たる清兵に左右せられて、浪速艦の命令に服せず、これを拒んだ」といふ真相を証言させた。そこで高陞號の持主たる印度支那航業會社も、日本に對する賠償要求を抛擲し、事件は難なく解決して、政府は愁眉を開いたのである。

近來は外人に嫁したもののよりも、支那人の妻君となつてゐる女性が多いやうである。大概は、日本留學生が娶つて歸つたものである。留學生出身者は、政府の役人になつてゐるものが多いから、その地方官となつたものに隨いて、相當奥地深くまで、日本女性が入り込んでゐる筈である。内山書店の話によると、事變前四川や、甘肅の奥地向けに、「主婦之友」や「婦人公論」の賣れ行きがあつたとのことである。戦時中これ等の女性達はさぞ苦勞してゐることであらう。

九、邦人新聞の歴史

上海最初の邦字新聞は、明治十七年以來現地で印刷業を営んでゐた修文館の主人松野平三郎が、明治二十三年六月發刊した「上海新報」である。

「上海新報は週報にして、上海における日本新聞紙の最初なり。この以前にありては、岡正康の督する僅かの報告と三井洋行の商況報告とのみ。」

と遠山景直著「上海」(明治四十年版)に記されてゐる。この新聞の生れた直後に、荒尾精が日清貿易研究所を上海に設立したので、松野はその記事を大きく取扱つてゐるが、報道のみならずやがて批評にも立入つた結果、研究所との間に衝突を來した。研究所生徒の一部は、翌年五月修文館に亂入し、印刷機を破壊して、新聞の發行を不能に陥らしめた。この新聞は明治二十三年末までに三十號を出し、翌二十四年五月に五十號に達してゐるが、その後ほとんどなく廢刊されたものの如くである。

ついで明治三十一年山根虎之助、白岩龍平氏等により「亞東時報」と題する漢字の月刊雑誌風のものが出された。社中には章炳麟、畢永年、宋恕等の錚々たる支那文士も加はり、大いに時局を論じて盛名を馳せたが、明治三十三年「同文滬報」の發刊せられるに及んで、これに合併した。

漢字紙「同文滬報」は、初め東亞同文會の事業として、明治三十二年もと姚文藻が經營してゐた「字林滬報」を買収して改題、井手三郎社長となつて發刊したもので、翌三十三年井手個人の經營に移つたのである。同紙發行當時は、北に團匪事件あり、南は謠言百出、わが日本の行動につき誤解するもの多く、國交上不利の形勢にあつたが、本報よくその真相の報道に努め、ついで日露戰爭時分には、東京、山海關、芝罘間の電信連絡に任じ、迅速な戦況報告を掲げて、滬上の紙價を高からしめた。

明治三十六年永島高連なる人、また週刊の邦字紙「上海新報」を發行、翌年第十三號に達した頃經營難に陥つて、當時の印刷所中原定太郎の手に歸し、同年三月名を「上海日報」と改め、日刊新聞となつた。七月同文滬報社に合併せられ、井手三郎がその社長となり、後に波多博氏がこれを繼承した。その後邦人の増加するに及び、大正三年に宮地貫道氏が「上海日日新聞」を創刊し

大正七年には深町作次氏が「上海經濟新報」を創刊、後これを「上海毎日新聞」に改めた。爾來事變直前まで、この三種の邦字紙が鼎立して來たが、事變勃發と同時に、それ等は一時休刊し、三社協定の下に「合同新聞」を出して戦時報道の役割を果した。「合同新聞」解散後は、「上海日日」が廢刊し、他の二紙は復刊したが、現在の「大陸新報」が發刊せらるゝに及び、「上海日報」もこれに合併せられた。

邦人發行の漢字紙は、「同文滬報」以後、しばらく存在しなかつたが、昭和三年頃山田純三郎氏が、居正と提携して日本籍の「江南晚報」を出し、反蔣運動を煽動したことがあつた。昭和七年の上海事變直後には、再び山田純三郎氏を社長とし、小口五郎氏を主筆とする「江南正報」が出され、これは一千號以上續けられたが、昭和十年に至つて廢刊した。今次事變以來は「新申報」なる國策漢字紙が、大陸新報社から出されてゐる。

一〇、日本人街の出現

上海邦人の密集してゐる虹口は、もと米國租界の基本部分であつた。その米租界を開いた人はブーンといふ耶蘇教の坊さんで、その名を取つたのが、いま日本俱樂部のある文監師路、すなはち文路である。

初め日本人は、この文路へ一番多く集まり住んだ。明治末年頃までは、英租界で貿易に従事する邦人は、その店舗内に居住するのが常で、現今のやうに虹口から毎日通勤するのではなかつたが、その頃からして文路は邦人居住者の最も多い街であつた。大正四年の領事館調査によると、當時文路の邦人居住者は八百五十一人、吳淞路は五百十五人で、崑山路の二百九十五人、南潞路の二百三十五人がこれに次いでゐる。吳淞路の邦人が断然殖へて、日本人街と通稱されるやうになつたのは、まだつい最近のことである。

吳淞路の面貌が、すっかり日本人街らしくなつたのは、恐らく前回の上海事變以後のやうに思ふ。それも仔細に見れば、まだ随分支那人が残つてゐたのである。ところが今回の事變で、支那人の店は殆ど文字通り皆無となり、全然日本人のみの街になつてしまつた。吳淞路ばかりでなく乍浦路も、海寧路も、北四川路までも同様である。

あの長い北四川路が、戦後またたく間に、邦人の飲食店や小賣商店によつて、ぎつしり詰つたのには、全く驚くのはかない。或る人が北四川路を歩いて丹念に調べたとところによると、昭和十五年一月現在同路の使用家屋總數七百三軒のうち食堂、料理屋、カフェー、喫茶店などの飲食店が百二十七軒の多きを算へ、ネオン・サインを施した店は百五十軒に達して居り、邦人商店の總數は約六百軒で街全體の九割を占め、事變前の六十五軒に比し、略々十倍に増加してゐる。

元來北四川路は廣東人の根據地で、粵妓がゐたり、廣東劇場があつたりして、昭和七年の事變直前までは、支那人によつて非常な繁華が齎らされつゝあつたのだが、その背後地たる開北が一度焼けてからは、滅切り淋しくなつてしまつた。そして五年目に、更に甚だしい戦火が、同じ箇所を見舞つたのだから、もはや北四川路が、支那人の街として復活することは、困難だとは見られてゐた。だがかくまで急激に日本化しようとは豫想外だつた。

虹口一帶は事變で大分焼けたとはいへ、戦後暫く支那人の復歸が、餘り自由でなかつた關係から、當初邦人は比較的容易に店舗や住居を求めることが出来た。ところが、その支那人の制限が撤廢された上に、邦人は益々増加して来るし、且つ資材關係から建築も制限されることになつて

今や非常な住宅難に陥つてしまつた。市中心區に出來た東興新都や振興住宅組合の家屋も、忽ち邦人で一杯になつた。上海恒産公司の計畫にかゝる日支共榮の新理想都市も、今のところ宛ら日本人街として實現したかの觀がある。

この新日本人街と虹口日本人街とを繋ぐメイン・ストリートは、昭和十三年十月小野部隊によつて擴張せられた松井通り（舊の其美路）である。將來家屋の建築が不自由でなくなれば、虹口邦人の新市區への移動は、この松井通りに沿うて、次第に實現して行くことゝならう。

上海の植物園

中國農業經濟研究會は、去る七月十二日の日曜、浦東の市立園林場に、ピクニツクを兼ねて例會をもつた。午前九時バンドの銅人碼頭に集合、朝から天氣模様が悪かつたので、同行僅かに六人。それでも陽氣に老酒四斤を携へて、市公用局の黄色い渡船に乗り込む。船が出ると直ぐザアと一雨來た。ひどい雷雨だ。

船は形こそ非藝術的だが、近代的な發動機船で、船室はかなりゆつたりしてゐた。設備も整つてゐる。同行の吳覺農氏の話では、市公用局はこれ等の渡船經營で、月二萬兩からの収益を擧げてゐるとのことだ。客室は三層になつてゐて、一番上が特等、中間層が頭等、最下層が二等と差

別されてゐる。吾々の陣取つたのは頭等で、目的地の東溝までは二十仙だ。階上には外國の小學女生の一群が乗つてゐた。階下の支那人達は暑苦しいので、頭等船室の外側の甲板へ上つて来て、立つてゐた。

船は黄浦江を、南側の岸に沿うて、極めて緩かに下つて行つた。左方遙かに揚樹浦の諸工場は、煙突の煙りを絶つて、靜かに雨の中に眠つてゐた。たゞ上海發電所の十三本の煙突だけが、朦々と黒煙を吐いてゐた。

バンド出發後、西渡、慶寧寺の二つの船着場を経て、東溝に着くまでに約五十分かゝつた。黒く塗られた長さ二十間程の棧橋を通つて上陸した時には、幸ひに雨は殆ど止んでゐた。園林場は船着場から五分とかゝらぬところにあつた。小さな門を入ると、もう緑の世界だ。露を含んだ樹木の間に縫うて行つて、事務所の客間に落ち着いた。

この客間はかなり古いが、清楚な感じのする純支那式のもので、部屋といふよりもバルコニーに近い。床はコンクリート敷きの土間で、左右に壁はあるが、前後の庭とは殆ど隔てるものがないので、非常に明るくてすがすがしい。部屋の隅々や机の上の多くの鉢植と生花は、室内を外と同じ

みづ／＼しい自然の色で彩つてゐる。欄間には宣統頃の大きな木の額がいくつも掛つてゐる。

場長の包容氏は、吾々の研究会の一員である。青山の農大出身で、農務部設計委員をしておられる。「民衆農化讀本」等の著作がある。こんな静かな田園で、こんな風な仕事に従事されてゐる氏の生活の如きを、科學的詩人の生活といふのであらう。

包氏から「上海市々立園林場概況」といふパンフレットを買つた。その第一頁には「趣旨」として、次の如き意味が述べられてゐる。

一、上海市民は物質的には物足りてゐるが、精神の陶冶に必要な、空氣の澄み切つた園林を有たない。市立園林場は市民の精神的糧だ。

二、上海は東亞唯一の大埠だから、市政府はその園林の面積を、全市の百分ノ五乃至十ぐらゐにせねばならぬと計畫してゐる。市立園林場は上海市美化の發祥地だ。

三、國民の庭園に對する知識が頗る幼稚で、研究及び試験機關がなく庭園事業が發展しなかつたが、市立園林場はその研究試験の嚆矢だ。

四、上海には半開放の外國公園及び私人庭園を除いては市立公園がない。市立園林場は初めて設

けられた郊外公園の一つだ。

五、一般市民は庭園方面の趣味を缺いてゐる。また趣味がある者も、草花樹木を手に入れ難い。

市立園林場は、そこで市民に庭樹花種を供給する大本營をなすのだ。

この園林場は、昔は塘工花園または略して花園と呼ばれ、盆栽と蔬菜を主に作つてゐた。今の事務所は、清朝時代からの塘工善後局すなはち堤防修築事務所をそのまま用ひてゐるのである。現在の規模の植物園となつたのは、民國十七年市社會局の管轄となつてからで、まだ四年目にしかならないので、樹木はみな若木である。

市立園林場はこゝを總場とし、この外に三つの分場がある。第一分場は總場を距る二支里の琵琶灘にある。もとの上海縣立苗圃で、民國七年の創立に係る。第二分場は浦西殷行區軍工路にあり、昨年三月設立、第三分場は龍華區斜橋路にあり、昨年八月設立されたものである。これ等園林場の總經常費は民國十七年度は五千八百元餘、十八年度は一萬元餘、十九年度は一萬二千元であつた。

園林場は民衆の樹藝を指導する趣旨から、無論何人にも參觀を許してゐる。實費で苗木や種子を分譲するし、種々な盆栽も賣る。また市民の依頼に應じて、専門的な庭園設計家を派し、大小

住宅向の庭園を築造する。この場合も、勞賃と花木の費用の外は一文も取らない。毎年十月か十一月には菊花展覽會を催し、同時に一般の出品も受けて、品評會をやつたりもする。

雨は、吾々が茶を飲みながら語らつてゐる間、降つたり止んだりしてゐた。遅れて来た二人の會員も加はつて、吾々は植物園を一廻りして見ることにした。植物は全く日本のと同じであつた。それもその筈、殆どすべて日本から、苗木を取り寄せたのだといふ。支那のものとして特徴的なのは、糸のやうな細い葉と、淡紫色の小米花をもつた西湖柳ぐらゐのものだつた。松、杉、檜、楓、梧桐、公孫樹、合歡、石楠、藤、椿等々の東洋の代表的な樹木は、餘すところなく集められてゐた。松はまだ苗木に過ぎなかつたが、その代り揚柳が、日本の植物園に於ける松の地位を占めてゐた。草花も相當あつて、ダリヤ等の季節の花が咲き亂れてゐた。粗末ながら温室もあつたが、名前のむづかしい西洋草花はあまり見當らず、南洋植物などは殆どなかつた。花では流石に蓮が見事であつた。小さな丘が蓮池のそばにあり、その上に小さなあづま屋が設けられてあつた。吾々はそこで一休みして、百パーセントの涼味を味はつた。同行の陳管生氏が大きな地圖を擴げた。それは同氏が設計した上海市郊外公園の設計圖であつた。その公園は今の園林場を改造して設けられるもの

で、明年三月頃落成する筈である。面積約廿八畝、丘あり、川あり、橋ありで立體的な公園だ。黄浦江を距てた對岸には、市政府の總舎が建つ筈になつており、黄浦江に出入する巨船を、ほし
いままに眺めることが出来る船好の位置にあることゝて、將來は随分人足の向くことであらう。
設計者の陳氏は、千葉の高等園藝出身で、國民會議上海農會代表に選ばれた人である。

再び例の部屋に歸ると皆で紀念の寄せ書きをした。支那の人々のに較べて、僕と田中氏の字は
ひどく見劣りがした。寄せ書きの後、吾々は質素な午餐を共にした。どんな料理でもこんな處で
かうして食ふとうまいものだ。さけて來た老酒をチドリ／＼やりながら、雑談に打ち興じた。
殆ど全部の人々が日本語を話すので、甚だ都合がよかつた。會の主席黃枯桐氏の農業教育問題に
關する豫定の講演は、出席者が少なかつたからとて中止された。

午後、我々は第一分場を見るために、園林場の前を流れてゐる大將浦といふ河を船で廻つた。
吾々は浦東第一橋で上陸したのであつたが、その橋の附近に多くの發動機船が横着けにされ、そ
の甲板に外人男女が安樂椅子を持出して、午睡をやつてゐるのを幾度も目撃した。これ等の外人
は、多くは船を所有する金持らしかつたが、何れにせよ外人達が、支那の田園に甚だよく親しん

でゐるのを見て、日頃狭つ苦しい共同租界から、鼻先すら出さない上瀬の日本人を憐れみたくなつた。先に公用局渡船で一處だつた外人小學女生の一團も、同じくこの邊へどクニツクを行つたものらしく、吾々とは第一分場で再會した。

第一分場は前に見たものと大差なかつたが、こゝのは庭園的でなく、寧ろ實用向なプラタナスの如き苗木の大量栽培を行つてゐた。事務室には正面に孫文の像が懸けられ、天井に多くの青天白日旗が飾られ、壁に日本製の農業改良ポスターが貼られてあつた。

この日、雨は吾々のプログラムを妨げなかつた。吾々は雨の間は屋根下で語り、雨が小止めば外に出るといふ方法をとつた。雨は却つて緑滿る植物園の美しさを加へた。吾々がこの緑世界に別れを告げ、再び塵埃の巷に歸つたのは、もう日暮に近かつた。(昭和六年七月)

申曲

一、申曲のもととは花鼓戲

上海の地方戲を申曲といふ。上海語の最も通俗的な歌劇であつて、近頃非常な流行振りを示してゐる。大世界や永安公司の樓上で、日夜上演されてゐるばかりでなく、ラヂオでも毎日放送されるし、レコードにもなつて盛んに賣出され、遂にトキキともなつて上映されるに至つた。その曲本は俚鄙低俗、文學的には全く價値のないものだが、あたかも日本の浪花節のやうなもので、大衆的影響力の大きい點に注目せねばならぬ。

支那の芝居に暗い筆者は、まして俗語の多い申曲などに、通曉すべくもないのだが、支那人の申曲研究の一、二あるのを見て、少しく紹介したい氣になつたのである。實はレコードを買つて

來たり、大世界あたりを、少しは覗いても見たのだが、全く物にならなかつた。やはり文献のみに頼るのである。

吳企雲氏の研究（『上海研究資料』所載）によると、申曲のもとには花鼓戲である。光緒十年の「上海繁華小志」に「花鼓戲」と題する詩があり、その中に現在流行の申曲の一つである「小珠天」の名稱が出てゐる。それで申曲は、むかしの花鼓戲に外ならぬことが證明されるのである。

では花鼓戲の起つたのは何時頃かといふに、大體乾隆中葉のことらしい。初めは田舎に起り、次第に都市に移つて來たもので、最初は白素これを演じたが、後に夜間の興業に變つた。乾隆嘉慶時代の青浦人諸聯の「明齋小識」なる一書に、「花鼓戲傳はりて未だ三十年ならぬに、變するも屢々なり」とある。嘉慶時代の南匯人楊光輔の「滬南樂府」にも花鼓戲についての記述があり、流行の狀が窺はれる。

「男は鑼を敲き、婦は兩頭鼓を打ち、和するに胡琴笛板を以てす。唱ふところ皆淫穢の詞、貧白また土語を用ひ、村愚悉く能く通曉す。花鼓戲演すといへば、必ず夜を以てし、隣村の男女戸に鍵して往觀す。」

花鼓戲の樂器は、こゝに書かれてあるものと、今もあまり變らない。兩頭鼓が普通の太鼓に改められた程度である。廣東洋琴やピアノなどは、放送の場合だけに使はれる新様式である。

花鼓戲の文句は地方の俗語を用ひ、淫猥であるから、愚昧の民衆に却て愛好されるのである。光緒二年の「游園雜記」に、「花鼓戲は兒戲の如し」と題する次のやうな曲がある。

「異處、工を求め、淫、妖姬を逞ふし、狂、寔を逞ふす。花鼓新腔送り、眼を賣り春心動く。醜態帽兒同じ。干戈虛しく弄して一様。排場、周郎を把りて哄し難し。君看よ、輕薄なる桃花、總て是れ空。」

俗惡、毒淫の有様を形容してある。芝居の場面を省略、按配するには、調子の順序を變へてはならぬ。ところが花鼓戲は目茶苦茶だ。芝居通を嘯すことは到底出来ぬといふのである。

花鼓戲の筋は、すべて男女の情事を扱ひ、極めて猥褻の箇所が多いので、これを聴きに行つた男女の間には、往々風紀を紊すものが現れた。觀客と演者との間にも曖昧な情事が發生した。これがため清末の官憲は、嚴にその上演を禁止してゐたのであつた。

けれども上海には租界がある。支那官憲の取締りの手が届かない租界では、自由に花鼓戲が上

演し続けられたのである。

二、東郷調 II 本灘

申曲はまた東郷調とも言つた。東郷とは浦東地方を指す。東郷調はすなはち浦東腔である。浦東の人間が、これを唱ふのを得意とし、語調に浦東訛りが多いからである。

龍套氏の「上海梨園史話」(中華日報所載)によると、東郷調は、もとは浦東の田植え歌である。はじめは農民が田植えの際に口ずさんで、辛苦を忘れる手段であつた。それを次第に左官屋、豆腐屋の職人、馬車屋、宿屋の客引きなどが聞き覚え、副業に唱つて稼ぐやうになつたものだといふ。田植え歌とはいへ、やはり芝居の文句の俗化したものが唱はれたのであらう。花鼓戲といひ、東郷調といふも、元來崑曲に發して墮落したものに相違なく、後に地方的な言葉で創作を起し、單純卑俗な下世話趣味を示すに至つたのだと思ふ。その變遷の中間的存在は、蘇州の灘黃である。

蘇州の灘黃 すなはち蘇灘は、徐傳霖氏の講話(井上紅梅著「中華高華鏡」所載)によれば、崑曲

を簡單にしたもので、清朝諷刺中の産物である。皇帝が崩御すると、三年間鳴物は一切法度となり、芝居は一齊休業の餘儀なきに至るのだが、それでは藝人は暮しが出来ない。芝居といへば昆曲に限られてゐた時代だつたが、その本場の蘇州で、錢といふ男が苦し紛れに案出したのが、この灘簧である。崑曲の脚本を踏襲し、或は脱胎して間もないもので、これを前灘といふ。後に滑稽小劇を添へて、一層大衆的にしたものを後灘といふ。後灘には林步青といふ名人が上海に現れ、彼のために海派蘇灘といふ言葉も生れた。

この蘇灘、特に後灘に似たものが、時を同じうして寧波にも、上海の田舎にも發生した。本場の蘇州に比べて、田舎生れだけに一層卑俗になつた。寧波のものを寧波灘簧、または甬灘といふ。上海のそれは花鼓戲であり、東郷調であるのだが、これは名前からして餘りに土臭いといふので、蘇州灘簧の向ふを張つて本地灘簧、または時して本灘と呼ぶやうになつた。龍套氏によれば、この改稱は今から四十年餘り前のことであつたといふ。

本灘と改稱された頃は、佛蘭西大馬路に聚寶樓、樂意樓、如意樓などといふ茶館があつて、それ等の樓上で、盛んに上演されてゐた。茶館のほか、八仙橋の野菜市場などで演唱するものもあ

つた。

三、本灘の改良

上海の近代化と共に、本灘といふ名稱もまた陳腐になつた。そこで民國三年、施蘭亭、邵文濱、胡雪昌等斯界の主も立つた人々が相談の上、こゝに初めて中曲といふ堂々たる名前を掲げることになつた。

だが、昔の崑曲に匹敵するかの如き印象を與へる、この風雅で、堂々たる名稱にも拘らず、申曲の内容は、依然として俚鄙低俗、風教に害あるものであつた。しかも、これが上演を禁止しようとしても能はぬほどに、民衆に愛好せられてゐた。政府當局は最早これを禁止するの消極策を棄て、進んでその改良を指導せんとするに至つた。

民國二年、上海縣政府は、通俗教育事業の一つとして、通俗宣講團なる指導機關を組織せしめたが、その工作計畫には『花鼓改良』の一項を掲げてあつた。民國十一年に至り、上海少年宣講

團が活潑な活動を開始するや、彼等は申曲改良を以て、職業教育の重要な項目だとなし、大いにこれが促進に乗出した。彼等は、申曲の演唱を職業にしてゐる友人達に書状を送り、その改良方を強硬に要求した。邵文瀆、花月英の二人の申曲家は、連名してこれに反駁文を送つたが、宣講團は執拗にその要習を繰返した。

申曲家は改良の困難な事情を、次のやうに述べてゐる。すなはち、世間一般が淫蕩な歌や輕薄な仕事を好むのであつて、吾等商賈人たるもの、生計のために、結局衆と共に墮落せざるを得ぬ。在滬申曲家は數百人に達するが、互ひの纏りがなく、優秀な人間がゐない。申曲の唱句は郷音土語であるとはいへ、さて新たに製辭造句するとなると容易な業ではない。改良の責を、目に一丁字なき貧寒の徒に負はせるのは無理だ、といふのである。これに對する宣講團の解答は、相互に團結すること、半日學校へ通ふこと、速かに曲本を専門家に差出して、審査改善を求めると等々であつた。

民國十九年、申曲家の相互團結が遂に成り、申曲歌劇公會なるものが初めて組織された。この同業組合は、後に民衆團體組織法が公布されると、これに適合するやうに改組を命ぜられ、民國

二十三年末から上海市申曲歌劇研究會と稱することになった。改組當時、會員は二百六名を算へたが、不参加者も相當あつた。

改組直後、研究會は子弟學校の創設を目論んだりしたが、最も大きな事蹟は、「王長生」、「何一帖」、「渡過橋」、「肚郎叫喜」、「和尚看病」、「杆木香（逃七關）」、「男意河（比漢郎）」、「雙夢遺」（浪被單）等の戯曲の上演禁止であつた。禁止の理由は、「演詞粗俗にして風紀に害あり」といふのであつた。但し禁止されても、改題して上演する風がなほ行はれた。例へば現在よく上演される「父子同寢」とか「陸賈賈」とかは、さきに禁止されたものと殆ど變らぬといふ。

四、申曲の劇本

申曲家にいはせると、申曲劇本の數は百種以上にのぼるさうであるが、そのうち脚本の流布してゐる約三十種の題目を挙げるに、左の如きものがある。

庵堂相會

拾打譜

雙投河

男落庵	賣冬菜	雙望郎
女落庵	賣紅菱	小姑燭關米
藍衫記	賣草團	逃七關
陸雅臣	賣花球	嫂告
小球天	小分體	張鳳山
周老龍	遊花園	繡荷包
徐阿增	摘菜心	打窗棧
買郎眠	拗木香	拔廟花
十弗許	扎石榴	贈花鞋

これ等のほか、彈詞を用ひて改編した新曲が澤山ある。同じ戯曲を、異つた名前で呼ぶことも往々ある。例へば「男落庵」は、また「賣糖記」とも、「欺父出家」ともいふ。また一つの戯曲を三部ぐらゐに分ち、その各部分毎に名稱を附してゐるものもある。

申曲の最も代表的な劇本は「庵堂相會」であるが、同じ題目のものが京戯にもあり、百瀬にも

ある。總じて申曲は大戯と小戯とに大別出来、「捉牙蟲」、「賣紅菱」などは小戯であり、「庵堂相會」、「陸雅臣」、「賣娘子」などは大戯である。「捉牙蟲」は短い滑稽劇で、その人物は男女二人切りに過ぎないが、「庵堂相會」には十数人の登場人物があり、その筋書は次の如くである。

金家の老夫婦が先祖の墓参りに出掛ける。金秀英（女主人公）と紅雲（女中）とがその隙きに庵堂に行く。秀英は婚約者の陳宰廷（男主人公）と庵堂で相會する。老夫婦が家に歸つて紅雲を責める。王家の人々が金老夫婦に龍舟を見に行くことを勧める。陳宰廷は二度騙され、三度金家の庭園に入る。秀英の父金學文が陳宰廷に離婚證書を書くことを迫る。秀英闇夜に陳家へ赴く。小賊に遭ひ、秀英、宰廷害を蒙る。秀英吊り、紅雲後女のために哭く。小賊に棺を盗まれ宰廷は自殺する。天日再び巡り、秀英、宰廷ともに蘇生する。岳父は心を癒へし、宰廷に銀子を贈つて、北京の考試に赴かしめる。宰廷狀元に及第し、榮華の身となる。

井上紅梅氏の「中華萬葉鏡」には、「雙望郎」と「賣紅菱」とを巧みな譯筆で紹介せられてゐるが、同じ題名の申曲劇本でも、筋をよほど簡単にし、随分改作したものもあるやうだ。演唱家が各自勝手な改作を施すものらしい。申曲劇本の出版物としては、申曲研究會編「申曲大集」（民國

二十九年廣藝書局發行）があり、レコードの歌詞を集めた「新新戲考」なども参考になる。

因みに現在の申曲演唱家としては、筱文濱と筱月珍、王筱新と王雅琴、施春軒と施文韻、丁少蘭と丁婉娥などのコンビが有名であり、筱文濱と筱月珍は曹炳生、王瑤琴等と共に、民國三十年一月、國華公司による最初の申曲映畫「慾壑難填」に出演してゐる。

五、申曲の歌詞

百種に餘る申曲に習熟し、これを演唱するには、相當な修業が要る。申曲歌劇研究會の章程には、學生は少くとも三年間の稽古を要すると定めてゐる。だが申曲の歌詞は極めて簡單で、實に馬鹿げた文句が多い。たゞ獨特の調子があつて、通常七字句を重ねて行き、各句の終字に上海音の韻脚を押すのである。語呂がよく、調子がよければ、それだけで聽衆を喜ばすことも出来るので、詞句は演唱家により自在に改變され、必ずしも一定の脚本に據らない。逆にまた、異つた劇本の演唱に當つて、往々常套的な文句を用ひる。調子を取るために、同じ文句を何回も繰返すこ

とがあり、問答體の場合など殊に反復が多い。

申曲の常套句は、數種の劇本の唱ひ出しに、「東方日出でて宵紗を照す」(贈金釵、拔蘭花)、「東方日出でて高樓を照す」(賣花球)、「東方日出でて漸漸として高し」(繡荷包)、「東方日出でて乾坤を照す」(摘菜心)と同じやうな文句で始めるのなど、その一例である。妙齡の女には、きまつて「二九挽郎十八歳」と冠し、足の速いのを形容するには、「三步を二歩に急いで行けば、一里一村はや過ぎぬ」といつた工合ひに必ず唱ふ。「わたしや姉妹二人切り」とか、「わたしやほんとに一人娘」とかいふ場合には、必ず「父母には三人も四人も子供があるわけではないわ」といふ意味の「勿養三男並四女」を、まぐら言葉として附ける。色男が逃げ出すのは必ず「北の窓より」であり、娘を口説く時には、いつも「兩聽ついでおじぎして」といふ。

格言のやうなものもよく入れる。そして數へ歌の形式を好んで用ひる。「藍衫記」や「庵堂相會」の十教訓はその好例である。申曲の筋は大抵男女の私情を取扱つてゐるが、中には純粹に數字の遊戯、計算の妙味を扱つたものもあり、文字の遊戯で興を添へたものもある。數字の遊戯を扱つたものゝ例は、「張鳳山」、「小珠天」などである。

文字の遊戯には、多く對聯が用ひられる。それも、上品なものではなく、實にふざけたものである。「對聯書きの先生は學問があまりだ」と唱句でひやかしながら紹介するくらゐだから、左に見られるやうに全く人を食つてゐる。

江湖河海青波浪 (Kauung-Woo-'oo-'he-tshing-poo-lauung')

遠過逍遙達道通 (Yoen-Koo'-siau-yau-dah-dau-'thoong)

竹子愛梅梅愛竹

風來送香香送風

虞夏商周漢五百翰林千進士

唐宋元明清十三閣老九公卿

文字を回轉させた奇抜な詩を用ひたものもある。

香しき蓮碧りの水風に動いて涼しく

水動き風涼しうして夜の日長し

日長うして夜の涼風水を動かし

涼しき風水を動かして碧りの蓮香し

薬種の名前を並べたり、お茶の葉の種類を挙げたり、問答を繰り返して、掛け合ひ萬歳のやうな場面を呈することもある。但し何時も歌の調子で、問答を繰返すのである。

申曲は上海語で唱ふのであるから、歌詞は假令低劣であらうとも、上海語と共に蔓延する運命にある。交通機關、文化機關の發達に伴ひ、電信、電話、ラヂオ、新聞、雑誌、書籍の普及に伴つて、上海語は、今や上海の方言ではなくなりつゝあり、それと共に申曲は、益々廣汎な聴衆を獲得しつゝある。

蘇曼殊の生涯と作品

一、日本人か混血児か

蘇曼殊といふ支那作家の生涯と作品は、吾々日本人にとつて甚だ興味深いものがある。彼は一八八四年すなはち清末に生れ、一九一八年すなはち民國八年に死んだ薄命の作家で、詩人であるとともに小説家であり、翻譯もし、繪も畫き、同時に僧侶でもあつた。彼の作品は、今なほ支那の青年達に愛讀されてゐる。この天才的な支那作家が、實は支那人ではなく、日本人であるか、或は少くとも日本生れの日支混血児だといふのだから面白いのである。

蘇曼殊が純粹の支那人でないことについては、疑ひの餘地がないが、彼が日本人であるか混血児であるかの點になると、まだ判然としてゐない。現國民黨中央委員にして支那當代の文章家た

る柳亞子は、曼殊生前の親友で、曼殊の最もよき紹介者であるが、その柳亞子は、今までに曼殊の傳記を三度書いてゐる。最初に書いたのは「蘇玄瑛傳」で、それによると、曼殊は支那人を父とし、日本人を母とする日本生れの混血兒となつてゐる。楊鴻烈の書いた「蘇曼殊傳」(一九二三年)や榮社乾の「A Brief Sketch of the Reverend Mandju's Life」(一九二四年)でも同様になつており、諸宗元の曼殊大師塔銘にも同じやうに書かれてゐる。

ところが、柳亞子が二度目に著した「蘇玄瑛新傳」(一九二六年初稿、一九二八年訂正)では、曼殊が全然日本人であると改められてゐる。羅建業の「蘇曼殊研究草葉」(一九二七年)も、曼殊日本人説を採つてゐる。羅建業の説は、曼殊の住んでゐた廣東での言ひ傳へを根據とするものであるが、柳亞子の説は、曼殊の著作の一つである「潮音」の跋と曼殊の小説「斷鴻零雁記」に據つたものである。「潮音」の跋には曼殊の傳記が書かれてあり、それによると曼殊が全然日本人となつており、「斷鴻零雁記」の主人公も純然たる日本人なのである。

「潮音」の跋は、最後に「學人飛錫、金闍寺に於て跋す」と署名されており、形式上、京都金闍寺の僧飛錫なる人が書いたことになつてゐるが、柳亞子は、右の跋は曼殊の自傳にほかならぬと斷

定したのである。すなはち飛錫なる僧は實在の人ではなく、曼殊の作つた假空の人物だといふのである。この點につき、筆者は最近金開寺事務所に問合せたところ、「明治初年に當寺に飛錫なる人は來往無之、又記録にも見當り申さず、就ては飛錫は旅行の意には無之候や」との回答に接した。だから柳亞子の推定は當つたわけである。

かくて相當水い間、柳亞子は曼殊日本人説を持してゐた。一般にも漸くそれが信ぜられるやうになつてゐた。尤もその間にも、反對説を唱ふる者が全然なかつたわけではなく、歴史家馮自由や曼殊の従弟蘇維驥などは、依然曼殊が混血兒であることを主張してゐたが、とにかく極く最近まで、蘇曼殊は日本人であるとの説が勝つてゐたのである。

ところが極く最近になつて、柳亞子は再び自説を翻して、曼殊混血兒説を發表した。即ち一九三二年十一月三十日發行の雑誌「文藝茶話」誌上で、「蘇曼殊略傳」と題して彼は、曼殊の母は日本人なるも父は支那人なること、母も從來それといはれてゐた人物とは別人なることを述べたのである。従前の説では、曼殊の父は宗郎（姓は不詳）といふ日本人、母は河合といふ女性で、東京で生まれ、父の死後母が蘇傑生といふ支那人に再嫁したので、その連れ子となつて支那へ來たこと

になつてゐたが、こん度の説では、曼殊は蘇傑生の實子で、父が横濱へ行つてゐた時分に、日本人の下女に生ませたのを、當時の彼の妾河合せんに養育させたものであり、曼殊自身はそのことを知らず、せんを生みの母と考へてゐたのだといふのである。柳亞子のこの最新の説は、氏が曼殊の従弟の蘇維驥から聞いたところに基いたものであり、蘇維驥はその事情を、蘇傑生の第二の妾から聞き知つたものである。

十一月二十九日及び三十日の時事新報は、柳亞子の右の一文を同時に掲載し、同紙に「逍遙夜譚」を執筆してゐる天廬新は、その隨筆の中で柳亞子の曼殊傳を批評し、これこそ曼殊の「棺に蓋をする」と同じい最後の論定で、多年論争の種となつた曼殊の血統問題はこれで解決したと述べてゐる。

一時日本人とされてゐた蘇曼殊は、かくて再び日支混血兒とされてしまつたが、これを以て曼殊の血統問題の考證が完成したといふのは早計であらう。前に述べた通り、彼の自傳と見るべき「潮音」の跋は、明らかに彼が日本人であることを記しておるし、彼の自傳小説「斷鴻零雁記」の主人公も日本人である。柳亞子によれば、それは曼殊が彼自身の血統を知らなかつたからで、

自己の血統に疑ひを抱き、疑ひから假説を生んだのだといふのであるが、それにしても餘りに穿ち過ぎてはゐるからうか。

曼殊が下女の子だといふ點についても疑ひの餘地はある。蘇傑生と河合せんとの間に生れた蘇照亭(本名は樟)といふ曼殊の兄に當る人が、まだ生きてゐて神戸で商賣をしてゐるが、その人は自分と曼殊は實の兄弟で、曼殊は下女の子などではないと主張してゐるさうである。ところが柳亞子によると、蘇照亭は父の不名譽を置かため、處をいつてゐるのださうである。

かく蘇曼殊の傳記は未だ不確かなものである。曼殊に関する考證は、もつと／＼深められなければならぬ。篤實なる柳亞子は、恐らく今もなほ考證を續けてゐられるであらう。筆者は更に第四の曼殊傳を、氏に期待するものである。曼殊はさう古い時代の人でないから、恐らく日本にも彼と交渉を持った人が現存してゐるであらう。筆者はまた、それ等の人々が、曼殊について語られんことをも希望するものである。

ともあれ今のところ、曼殊については、柳亞子の所説が最も據り所の多いものであるから、以下氏の最新の説に従つて、曼殊の生涯を語らう。

二、曼殊の生涯

蘇曼殊は一八八四年舊曆八月十日日本横濱市で生れた。本名は蘇戩、字は子毅、後に玄瑛と改めた。父は蘇傑生といひ、廣東省中山縣恭常郡濠溪郷の人で、横濱の萬隆茶行の買辦であつた。父傑生に一妻三妾あり、第一の妾は河合せんといふ日本人だつた。

傑生が横濱にゐた時分、一人の日本人下女を雇つた。その名をおわかと云ひ、まだ十九の娘であつた。彼女の胸に一つの紅い痣があつた。傑生は支那の骨相學から見て、彼女がきつと偉い子を生むだらうと考へて、彼女に手をつけた。そして生れたのが蘇曼殊である。ところが産後三ヶ月も経たぬうちに、その下女は親元へ歸つてしまつて消息が絶えた。傑生は曼殊を河合せんに養育させた。曼殊は河合せんを、ほんとうの母と思ひ込んだ。

曼殊は六つの時、父の正妻貴に連れられて、父の故郷の濠溪に行き、七才にして郷塾に入り、書を學んだ。彼が九才の時、父は商賣に失敗して、第二の妾大陳と横濱から歸つて來たが、三年

すると彼等は二人で上海へ行つてしまつた。一八九六年、曼殊は義母（傑生の正妻）に連れられて上海へ來、父や大陳と一處に住み、その時初めて英語を學んだ。翌年父は病氣で故郷へ歸り、大陳もついて去つたが、曼殊は義母とともに上海に残つた。

一八九八年彼は遠縁の林紫垣に連れられて横濱へ行つた。そこで華僑の建てゝゐた大同學校に入學し、一九〇二年業を畢へた。それから、早稻田大學高等豫科に入り、翌年成城學校に轉校した。そして征露義勇軍や軍國民教育會に加入し、漸く彼の支那革命に對する熱情が成熟して來た。だが林紫垣が、彼の革命參加に反對して、學費を絶つたので、已むなく笑を負ふて廣東へ歸つた。

だが、間もなく上海へ飛び出し、身投げして死ぬ旨の遺書を林紫垣に送つて置いて、ひそかに蘇州に去り、吳中公學社の教授となつたが、再び上海に還り、國民日報社に入つて翻譯を擔當し、陳獨秀、章行嚴、何梅士等と同居した。だが幾日か過ごすうちに面白くなくなり、陳獨秀、章行嚴の不在中、行嚴の金を三十弗失敗し、何梅士には芝居見物に行くと云つたまま家出した。それから香港へ行つて中國日報社に入つたが、依然心樂まず、遂に出家となる決心をし、惠州の或る

破れ寺で髪を落して僧侶となつた。が、またもや辛抱し切れず、或る日師父の留守に、兄弟子の度牒（僧尼免許證）を偷んで逃げた。その度牒の持主が慧龍寺で、剃髪した博經といふ僧であつたところから、曼殊は自ら慧龍寺の僧博經と名乗つた。

一九〇四年舊曆正月香港に到り、同郷人の簡世鎰に遭つた。簡はそれを曼殊の父に報告した。この時父は病が重かつたので、簡に託して曼殊に歸郷を命じたが、曼殊は肯んじなかつた。曼殊は父が河合せいと絶縁してゐることを知つてゐたので、父に不満だつたのである。間もなく父は死んだ。そしてそれ以來、曼殊と蔡家との交渉は全く断たれた。この時、彼はまだ二十一の青年であつた。

曼殊はその後、香港から上海へ来て、南洋旅行を思ひ立ち、暹羅、錫蘭等を週歴して梵語の研究を始めた。歸國後は教員生活には入り、長沙の實業學堂、明德學堂、南京の陸軍小學、蕪湖の皖江中學等で教鞭をとつた。

一九〇七年日本に渡り、章炳麟の「民報」、劉師培の「天義報」に關係した。「民報」は國民黨の前身中國同盟會の機關紙、「天義報」は無政府主義の宣傳機關である。翌八年には再び南京に赴

き有名な佛教研究家楊仁山の祇壇精舎の事業を授けた。

一九〇九年第二回の南遊を志し、先づ新嘉坡に赴き、後爪哇に行つて、中華會館の教師となつた。この頃頻りに印度へ行きたがつてゐたが、果さなかつた。一九一一年夏日本に歸り、秋また爪哇へ行つた。この年の舊暦八月十九日、武昌で革命軍が事を擧げた。曼殊はその報を聞いて甚だ興奮したが、旅費がなくて歸れず、そこで年を送つて翌年の舊暦二月上海に歸つて來た。だが支那の政治局面が、思つたやうには進展せぬので、歸々として樂せず、「大平洋報」に長編小説「斷鴻零雁記」を發表したほかは何もせず、毎日花酒に耽んでゐた。

一九一二年冬、安慶高等學校の教師となつたが、翌年の夏休み以後止して蘇州、杭州等を幾ヶ月か流浪し、後上海に來て、南京路の第一行臺に一時住まつたが、間もなくまた日本へ旅立つた。彼の河合せんに對する思慕の情は甚だ厚く、日本へ行くのは常に彼女に會ふためだつた。日本で二年程暮すうち、國民黨が失脚して、多くの要人等が日本へ亡命して來た。この時分曼殊は孫文、蕭紐秋、楊滄白、居生、邵元冲、鄧孟碩、田桐、戴天仇等と往來し、彼等の機關紙「民國雜誌」に小説と隨筆を發表した。當時上海で發行されてゐた章行嚴の「甲寅雜誌」や陳獨秀の「新青年」な

どもも作品を發表した。

一九一六年支那に歸り、翌年も一度日本へ行つたが、それを最後に、以後日本へは行けなかつた。彼の胃腸病が漸く重くなつて來たからである。この年の秋、蔣介石や陳果夫と、しばらく上海白爾路新民里十一號に同居してゐたが、冬になつて病愈々重く海寧醫院に入院した。翌一八年春、金神父路の廣慈醫院に移つたが、竟に再び起ち得ず、陽歷五月二日その數奇な一生を終へた。享年三十五歳。終生獨身で通した彼であつた。杭州西湖に、立派な墓が、友人等によつて建立されてゐる。

三、曼殊の作品

蘇曼殊は小説家としてよりも、詩人として優れてゐた。左に彼の詩二、三を紹介しよう。何れも日本での作である。

過 蒲 田

柳陰深處馬蹄驕 無際銀沙逐退潮

茅店冰旗知市近 滿山紅葉女郎權

過若松町有感

孤燈引夢配朦朧 風雨鄰庵夜半鐘

我再來時人已去 涉江誰爲采芙蓉

寄 調 箏 人

生憎花發柳含煙 東海飄零二十年

懺盡情禪空色相 琵琶湖畔枕經眠

曼殊はまたバイロン、シニレー、バーンズ等の詩を漢譯してゐる。彼の譯詩は彼の自作の詩よ

りもよく、彼の詩は、彼の畫よりもよく、彼の畫は彼の小説よりもよいと、作家都達夫は批評してゐるが、これは中つてゐるかも知れぬ。左はロバート・バーンズの“A Red, Red Rose”の漢譯である。

譯彭斯類類赤贖藥

類類赤贖藥 首夏初發苞

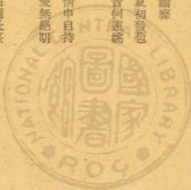
測測清商曲 眇眇何遠姝

予美諒天紹 幽情申自持

倉海會流枯 相愛無絕期

倉海會流枯 頑石爛炎熹

微命屬如縷 相愛無絕期



抄法別予美 維隔在須臾

阿陽早日歸 萬里莫踟躕

曼殊の小説には、自傳小説「斷鴻零雁記」のほか、「天涯紅淚記」(未完成)、「絳紗記」、「焚劍記」、「碎管記」、「非夢記」などがある。これ等のうち「斷鴻零雁記」が最も廣く讀まれ、英譯本も出ており、脚本にもされてゐる。だが彼の小説は、郁達夫もいつてゐるやうに、大して優れてはゐない。胡適も曼殊を「鴛鴦胡蝶派」の人と評したことがあり、一般に批評家には不評である。あまりに感傷主義に墮し、文章のみに凝つて、内容が稀薄なのである。曼殊はまた外國小説の翻譯もしてゐる。英文からの重譯だが、ユーゴーの「レ・ミゼラブル」(慘世界)や印度人ゴーチヤ原作の「サーラ」(婆羅海濱遊跡記)などがある。曼殊の畫は、餘技としては優れてゐる。畫は勿論洋畫ではない。

詩や小説は感傷的だが、彼の隨筆、雜文は、それ等と幾分趣きを異にしてゐる。隨筆では、明末の忠臣烈女の遺事を書き、また廣東人を鞭撻する「呼喚廣東人」、南洋華僑に對する和蘭政府の

壓迫を取扱つた「南洋話」、無政府主義者エンマ・ゴールドマンを讚美した「女傑郭耳殺」などの雜文を書いてゐる。一九一一年の革命の時には、南洋から故國の革命家に、彼等を鼓舞する手紙を送つてゐる。

彼は一個の感傷詩人ではあつたが、同時にまた支那革命に對して、ロマンチストとしての理解と同情を持つてゐたのである。曼殊の數多き知名の友人のうちで、彼に最も多く影響を與へたのは章炳麟と陳獨秀であつた。彼は陳獨秀から漢學を學び、章炳麟から詩作を學んだと云はれてゐる。章炳麟は孫文と共に國民黨の前身同盟會の一方の巨頭であり、陳獨秀は人も知る中國共產黨の最初の指導者となつた人である。曼殊がこの二人から學んだものが、たゞに詩と漢文に止まらなかつたといふことも事實であらう。

蘇曼殊の著作には、雜誌に載つたものや、他人の編輯したもの、ほかに「文學因緣」、「拜輪詩選」、「潮音」、「漢英三昧集」などの單行本があり、これ等は何れも、その初版が日本で印刷されてゐるが、勿論既に絶版で、現在は手に入り難い。曼殊の自稱するところによれば、彼には文學作品のほかに、なほ「梵文典」八卷、「梵書摩多體文」、「沙尼達羅」、「法顯佛國記惠生使西城記地名

今釋及旅程圖、「泰西羣芳名義集」、「泰西羣芳譜」、「埃及古教考」、「粵英辭典」、「漢英英漢辭典」、「英譯燕子箋」、「無題詩三百首」、「女子髮髻百圖」などの著作があるといふが、「漢英英漢辭典」と「女子髮髻百圖」の原稿の一部が発見された以外、他はすべて未発見に屬する。「梵文典」八巻を除くほかは、本になつてゐるのかどうかさへ不詳である。

なほ他人によつて編纂された曼殊の作品集には、左の如きものがある。

柳亞子編—曼殊全集五卷

同 氏編—曼殊遺蹟

柳無忌編—蘇曼殊詩集

同 氏編—曼殊逸著兩種（嶺海幽光錄と娑羅海濱遺跡記）

（註）柳無忌は柳亞子の子息で現南開大學教授、柳亞子と曼殊全集五巻を共同編纂し、目下「蘇曼殊年譜

及其他」一巻の出版を計畫中である。

梁社乾譯—The Lone Swan（英譯斷鴻零雁記）

黃嘉謨脚色—斷鴻零雁

何震女史編——曼殊畫譜

蔡哲夫編——曼殊上人妙墨冊子

王德鐘編——曼殊上人燕子龕遺詩

馮秋雪編——燕子龕詩

沈尹默編——曼殊上人詩稿

周瘦鵑編——燕子龕殘稿

同氏編——曼殊遺集

段菴旋編——燕子山僧集

盧翼野編——曼殊說集

光華書局編——曼殊詩集

同書局編——曼殊小說集

金織雲女史編——曼殊代表作

時希聖編——曼殊小叢書



(註)

なほ章行殿編「名家小説」、文明書編局「小説大観」にも曼殊の作品が收められてゐる。

〔附記〕この拙文は昭和七年十二月に書き、「上海週報」新年號に載したところ、徐蔚南氏によつて翻され、柳亞子編「普及版蘇曼殊全集」及び文公直編「曼殊大師全集」に收められた。



東海の詩人蘇曼殊

春雨樓頭尺八簫 何時歸看浙江潮
芒鞋破鉢無人識 踏過櫻花第幾橋

——蘇曼殊「本事詩十掌」のうち——

一、彼の作家的地位

こゝに蘇曼殊を紹介するのは、彼の支那文學史上に於ける地位の問題からではない。彼は文學革命以前の作家で、文學史的に見るなら、さほど輝やかしい役割を演じたとはいへない。私の紹

介の動機は、たゞこの著名の支那作家が、實は日本人であつたか、或は少くとも日本人を母にもつた、數寄な運命の持主であつた、といふ一事にかゝつてゐる。

胡適が、申報五十年記念號に書いた「五十年來中國の文學」中には、清末の推稱すべき詩人として、鄭珍、金和の二人が挙げられてゐるに過ぎない。胡先驥は、胡適の右の一文を批評し、清末には、なほ高心夔、江湜などの優れた詩人がゐたことを指摘したが、依然として、同時代の卓越せる天才詩人蘇曼殊の名を逸してゐた。このことを遺憾として、北京師範大學の教授楊鴻烈氏（現宣傳部事業部長）は、長文の蘇曼殊傳を書いて世に問うた。それは今から約二十年前だつたが、その頃から蘇曼殊に關する研究、考證が漸く盛んになり、生前の友人知己達は、競つて彼の逸話、性癖、奇行などを紹介し始め、それとともに彼の遺稿、繪畫、書翰などがかなり發行されるに至つた。そして一九二八―二九年には、彼の生前の親友で、國民黨の中央委員柳亞子とその子柳無忌（南開大學教授）の手により、曼殊全集五卷が刊行され、次いで時希聖により曼殊小叢書七卷が出版された。そのほか他人によつて編纂された曼殊の著作集は、現在までに數十種に達した。蘇曼殊の名は、かくてもはや、支那文學史上不滅のものとなつた。

蘇曼殊は元來僧侶で、一般には曼殊大師とか曼殊上人とか呼ばれてゐるが、彼を有名にしたものは、彼の藝術であつた。彼の自稱するところでは、佛教に關する著作も相當あるといふが、その種のものとは殆ど發見されてゐない。彼は藝術家としては、天才肌で、詩も作り、畫も描き、翻譯もやり、小説も書いた。そのうち最も優れてゐた力量は、何といつてもその古艶な文章で、作詩とバイロン、シェレーなどの詩の漢譯も相當なものであつた。彼の文章は老人に舌を捲かせ、彼の詩は若者の心を捉へる。小説には「斷鴻零雁記」、「碎碧記」、「綠紗記」などがあり、そのうち「斷鴻零雁記」が最も廣く讀まれ、脚本や英譯本も出てゐる。

現代の流行作家郁達夫は、蘇曼殊を批評して「彼は一個の才子であり、一個の奇人であるが、決して大才とは云へない。天才と靈性を具へ、ロマンチックな氣質を豊富にもつてゐたが、獨創性がなく、雄偉な氣概を缺いてゐた」と述べてゐる。同じ啓蒙期以來の作家周作人は、曼殊の作品に頽廢的傾向があるやうに見てゐた、と記憶する。曼殊を認めない胡適も、嘗て曼殊の小説「綠紗記」を批評したことがあり、その際、曼殊を「鴛鴦胡蝶派」の人と評してゐた。

彼の小説は、謂ゆる文章體で書かれており、筋はつまらぬが、文章はすばらしい。悪口をいふ

白話文の作家達も、この點では到底眞似が出来まいと思はれる。それは、漢唐の傳奇、稗史をよく讀み、且つ天分に恵まれた者でなければ、出来る業ではないのである。彼の詩は、他のすべての『南社』詩人のそれと同様に、側體である。今關天彭氏に學んだところによれば、それは晚唐詩の特徴であり、この詩風で一世を風靡した清末の龔定庵の、深い影響を受けたものにほかならない。

だが、ともかく蘇曼殊は、その作品が廣く讀まれてゐる間に、批評家の仲間には評判がよくなる。最近支那文學史と名のつく書物が約二十種も刊行されてゐるが、そのうち曼殊の名が載つてゐるのは甚だまれである。私の見たところでは、陳炳堃の『最近三十年中國文學史』に、詩人としての曼殊が取扱はれてゐるくらいに止まるやうだ。

二、蘇曼殊は日本人？

蘇曼殊は一八八四年日本で生まれ、その母は日本人である。そこまでは確かなのだが、彼の父

が日本人であつたか、支那人であつたか、の點になるとまだはつきりしてゐない。

曼殊は生前、自己の血統について、如何なる親友にも、詳しくうちあけることを欲しなかつた彼の自傳小説「斷鴻零雁記」や、彼の自傳と目されてゐる譯詩集「潮音」の跋文によると、彼は純然たる日本人らしいが、作品の上でなしに、彼自身の口から日本人であることを、他に告げたことが一度もなかつた。そのために友人達ですら、彼の考證に手を焼いてゐる。曼殊全集の編者柳亞子などは、三度も説を變へてゐる。初めは混血兒だといつてゐたが、中頃は日本人だといひ、近頃はたま混血兒だといつてゐる。

曼殊の隨筆や雜文は、すべて支那人の立場で書かれてゐる。彼は終始支那人であらうと努めたのに相違ない。そしてそれがために、人知れぬ悩みを憫んであらうと思はれる。柳亞子の記すところによると、一度こんなことがあつた。

曼殊が、一葉の若き日本婦人の寫眞を、柳亞子の許へ持つて来て、當時ともに編輯してゐた雜誌に載せないかといつた。誰のだと問うても答へない。仕方がないので柳亞子はこれに「東海的女詩人」と題して、銅版にした。すると、曼殊はそのあとへ更に自分の洋服姿の寫眞を挿込んで

雑誌に載せさせた。それには自ら「東海の詩人蘇曼殊」と題した。そして柳亞子に向ひ、「これとあれとは一對なんだよ」と淋しく笑つたのである。

飽くまで支那の作家であらうと努めた日本人(?)蘇曼殊の逸話として、これは甚だ含蓄深いものがあるであらう。

三、ロマンチスト蘇曼殊

蘇曼殊は、一個の薄幸にして多感な詩人ではあつたが、支那革命についても、或る程度の理解と同情をもつてゐた。それは彼の時代と彼の友人等から受けた影響である。彼は日露戦争當時の日本を見た。彼は一九一一年の辛亥革命の前後を、革命家達に親しく交はりつゝ見てゐた。彼は政治運動には携らなかつたが、その文藝作品の多くを、革命團體の機關紙に發表してゐた。彼の友人には、近代支那の代表的な政治家が多く、章炳麟、陳獨秀、劉師培、孫文、蔣介石、居生、田桐、邵元沖、鄧孟碩、葉楚傖、陳果夫等とは、何れも淺からぬ交渉があつた。中でも蘇曼殊に

最も多く影響を與へたのは、陳獨秀と章炳麟であつた。彼は陳獨秀から漢學を學び、章炳麟から作詩を學んだといはれてゐる。

蘇曼殊が甚だ感傷的な小説や詩を書いた半面に、革命や民族解放を讚歎する隨筆や雜文を書き遺してゐるのは、だから極めて自然のことである。彼は海外留學生の浮華生活を罵つた。彼はその舊友のアナーキスト劉師培の政治的變節を極度に痛心し、劉の墮落は、その妻何震が女留學生だつたからだとも主張した。他方彼は、エシマ・ゴールドマンを極端に讚美してゐる。これ等のことから、彼が多少ともアナーキズムに心を惹かれてゐたやうにもとれるが、彼が一つの系統的な思想を持つてゐたと見るのは誤りであらう。劇的な境遇、當時の支那の動搖せる政治的環境が、或る程度彼を革命詩人的にしたが、彼にとつては、革命もまたロマンチックなものに過ぎなかつたと見るべきであらう。

あらゆるロマンチック詩人が、多かれ少なかれ奇行と變態とをもつてゐたやうに、彼もまた奇人の一人であつた。彼は一日袈裟をつけてゐたかと思ふと、翌日はスマートな洋服姿で現れ、長い髯を蓄へてゐたかと思ふと、次の日にはきれいに剃り落してゐる、といふ風であつた。皮は一

般人の生活様式に對して、全然無智であつたか、或は故意に無頓着を装つた。金錢には頗る恬淡で、あれば忽ち費消し食へなくなつても平氣で寝て暮した。日本にゐた時、一度に五、六斤もの氷を食つて、他から死んだと思はれたが、幸ひに息を吹き返へしたといふやんちやな話もある。月明積雪の或る夜、中禪寺湖に舟を浮かべて、バイロンの詩「希臘島」を吟誦し、誦つては哭き、哭いてはまた誦ひ、ために船頭から精神病者と間違へられたといふこともあつた。かうした奇行は、彼が一個のロマンチストであつたことを裏書するものであらう。

四、蘇曼殊と女性

劉師培の妻何震女史は、蘇曼殊に師事して畫を學び、後に曼殊の畫集を編纂した。その畫集に河合氏といふ女性が日本文で序文を書いてゐる。その河合氏といふのが、曼殊の母である。ほんとうの生みの親だつたかどうかは異論があるが、とにかく曼殊が終生母として戀ひ慕つた女性である。曼殊は日本で生れて、廣東で育ち、長じては支那各地を放浪し、暹羅、錫蘭、新嘉坡、

爪哇等にも旅行したが、彼が最も頻繁に足をはこんだのは、日本の母のもとへであつた。彼は父（又は義父）の故郷廣東では、異族として一族郷人から虚けられた。革命に奔走してゐた支那の同志達とも、心底から打離けられなかつた。だから彼は外國人（歐米人）に、進んで知己をつくらうとしたりもした。天涯孤獨の彼が、たつた一人の日本の母を戀ひ慕つたのは無理もない。

曼殊には廣東の第二の故郷に、雪梅といふ許婚の女がゐるが、曼殊が早く廣東を去つたので、彼女は失望して夭折したといはれてゐる。日本にゐた時分には、母河合氏の姉が、娘の静子といふ婦人を、曼殊にめあはせようとしたが、これも實現しなかつた。雪梅と静子は、小説「斷鴻零雁記」の主要な登場人物となつてゐる。なほまた彼が南洋への旅行の途次、以前英語を教はつたスペイン人の宣教師ロバーツにめぐり遭ひ、ロバーツからその娘の雪鴻といふのを貰つてくれと頼まれたことがあるが、曼殊が出家であることを理由に断つたので、これも纏まらなかつた。曼殊の自傳によると、彼は支那の古い傳奇小説「燕子箋」を英譯し、その原稿をロバーツの娘に與へたところ、彼女はそれを故國スペインの首都マドリッドで出版すると約して持ち歸つたといふ。この雪鴻といふ女性と曼殊とは、相當深い交渉があつたらしく、「題拜輪集」といふ彼の時に左の



蘇曼殊の照像と曼殊の畫稿手帖にあつた戲畫



蘇曼殊の山水畫

やうな小序を書いてゐる。

西班牙雪鴻女詩人過存病榻、親持玉照一幅、拜輪遺集一卷、曼陀羅花共含羞草一束見贈、且殷殷勸以歸計。嗚呼、予早歲披髮、學道無成、思離身世、有難言之惻！爰扶病書二十八字於拜輪卷首、此意惟雪鴻大家之心知耳！

柳無忌は「蘇曼殊及其友人」なる一文の中に於いて、曼殊と雪鴻とは、純粹の友情を超えた關係をもつてゐたらしい、と述べてゐる。

曼殊の詩には、「調琴人」に贈ると題したものが幾つもある。百助眉史といへる女性が琴を弾いてゐる寫眞に、詩を書いて友人に送つてもゐる。曼殊の研究者達は、その寫眞の主の百助眉史を「調琴人」と同一のものとし、その女性と曼殊との間に、深い關係があつたやうに解してゐる。

しかも百助眉史は日本の藝妓だといふに、意見が一致してゐる。たゞ一人巖建業が、その「蘇曼殊研究草薺」の中において、百助は勝子と同一人物だと主張したが、周作人や柳亞子、柳無忌等はこれを論駁してゐる。特に周作人の如きは、「曼殊と百助」なる一文を書いて、百助が藝妓であることを力説してゐる。名から判断すれば勿論藝妓らしいが、藝妓が琴を弾いたり、藝妓にむつ

かしい漢詩を贈つたりするのはおかしい。が、その考證はともあれ、曼殊が『東方之花百助周史』に相當交渉を持つたこともまた事實であらう。

蘇曼殊は、敦奇な運命の星の下に生まれた詩人であつただけに、かく数々のロマンスをも有つたのであつたが、彼は遂に終生妻をめとらず、わづか三十五歳で死んだのであつた。

ついでに記すが、曼殊に紹琮といふ姪があつた。彼女は神戸で商業に従事してゐる曼殊の兄の娘であつたが、非常な文學好きの女學生で、曼殊の作品を耽讀し、一九二九年十六歳で歴世自殺を遂げたのである。拙くはあるが、叔父蘇曼殊を歌つた左のやうな詩を残してゐる。

—
詩人・飄零的詩人！

我！ 你的小姪女！ 彷彿見着你・・

穿着「芒鞋」、托着「破鉢」、

「在櫻花橋」畔徘徊着。

詩人・飄零的詩人！

我又彷彿見着你・

穿着袈裟・拿着詩卷・

在孤山上吟哦着。

寂寞的孤山呀・

只有曼殊配作你的伴侶！

この詩のうちにある孤山とは、杭州西湖のほとりの地名である。汪精衛氏等「南社」同人によつて建てられた蘇曼殊の墓がそこにあるのである。

支那商店名の研究

孔子の言に、「名不正則言不順、言不順則事不成」といふのがあるやうに、古來支那では、名が非常に重んぜられてゐる。特に商店名は、その使用文字の一つ一つにすら深い意味が盛られ、殆ど迷信的と云つてよいまでに、その命名が重大視されてゐる。たしかに、支那の商店名は、先進諸國のそれに比して、甚だ特徴的である。支那商店名の研究——この研究は勢ひ文字の研究となる——は甚だ興味深いものがあると共に、少なからぬ効用を持つてゐる。どんな文字が、支那の商店名に最も多く用ひられてゐるかといふことが判れば、先づ第一に支那の國字問題の解決——常用基本漢字の選定に役立つ。また支那商人氣質を知るための参考となる。更にまた支那社會の

發達段階を知らんとする者に多少のヒントを與へる。

同文書院教授小竹文夫氏が、一月七日及び八日（昭和八年）の上海日報紙上に發表せられた「支那商店名考」は、上述の意味から、甚だ有益且つ興味深き文章であつた。尤も氏のは寧ろ隨筆風のもので、科學的分析とはいひ難い。その點では支那人自身の研究に見るべきものがあるやうである。筆者は今それ等支那人が既に調べたところに基いて、少しく支那商店名を考究して見よう。

二

支那商店名に關する統計では、徐錫齡氏が廣東において行つたものが、最も正確に近い。それを紹介する前に一寸注意して置かねばならぬのは、統計の方法についてである。元來大都市の商店名調査に際しては、全市商店總數を十分ノ一乃至百分ノ一に減じて、計算の簡單化を計ることが便利でもあり、且つ必要のことだが、如何なる方法で、その數を簡略するかは、細心の注意を要する。通常都市の商店は、區域により營業の種類を異にする傾きがある。例へば貿易商は貿易

商館街に、小賣商は小賣商店街に、工場は工場地帯にといふ風に大體集つてゐる。また繁華な區域には大商店が楯比し、住宅區域には商店が少く、規模も小さい。だから全體の縮圖を作るためには、全市を多くの區劃に區分し、各區の繁華、閑寂、商店の多寡、營業の種類等を考慮して、適當に商店数を按配しなければならぬ。更に商店名の集成も、電話帳や商業名録などに依るのでは不十分である。それ等のものは決して凡ての商店を網羅してはゐない。大小のあらゆる商店名を集めるためには、政府の登記簿の如きものが最も適當なのである。

徐錫齡氏の廣東に於ける統計は、市内を十二區に分ち、全市三萬の商店名から *sampling meth* odにより三千を選んで作成したもので、店名の根據は廣州市政府の商號登記簿である。だから氏の統計は右の條件にかなつたものである。

徐氏によれば、前記三千の商店名中に用ひられてゐる文字の總數は、肥、堂、公司の如き非固有名詞を除き六千六百四十字で、そのうち二回以上發見された同一文字を一字に勘定すれば、僅かに五百九十一字である。この五百九十一字のうち、十回以上用ひられてゐる文字が約百字、三十回以上用ひられてゐるものが四十二字ある。今この最常用字四十二字の發見回數及び總字發見

回数に對する百分比を示せば左の如くである。

文字	發見回数	百分比
興	三六〇	五・四二
和	二六五	三・九九
利	二〇九	三・一五
安	一八八	二・八三
詳	一六〇	二・四〇
泰	一四八	二・二三
華	一二三	一・八五
德	一一四	一・七二
盛	九五	一・四三
發	九二	一・三八
新	八八	一・三二
大	八〇	一・二〇
萬	六八	一・〇三

文字	發見回数	百分比
昌	三一五	四・八九
隆	二四四	三・六七
廣	二〇六	三・四二
合	一七三	二・六〇
生	一五二	二・三〇
永	一三八	二・〇三
源	一二二	一・八三
成	九七	一・四六
福	九二	一・三八
同	九〇	一・三五
豐	八二	一・二四
益	七三	一・一一
榮	六三	〇・九五

右によると興、昌、和の字を用いた商店が最も多く、大體百軒のうち十二軒は興、十軒は昌、八軒は和の字を使用してゐる割合となる。なほ三千の店名のうち、使用回数三十回以下十回以上の文字を列記すれば左の如くである。

順	六二	〇・八四	南	五四	〇・八一
東	五三	〇・八〇	裕	五二	〇・七八
信	五一	〇・七七	義	五〇	〇・七五
公	四三	〇・六六	恒	四三	〇・六六
英	四三	〇・六六	天	四一	〇・六一
元	四〇	〇・六〇	民	三五	〇・五四
聯	三四	〇・五二	協	三三	〇・五〇
寶	三二	〇・四八	香	三一	〇・四〇

三〇回以下二六回以上……中、三、光、明、喜、怡。

二五回以下二一回以上……林、珍、勝、誠、英、茂、全。

二〇回以下一五回以上……瑞、聚、志、有、平、樂、壽、粵、文、潤、黃、榮、仁、耀、悅。

一五回以下一回以上……麗、泉、金正、鴻、富、海、時、來、均、江、兆、財、春、玉、
 惠、振、星、亞、西、太、陳、厚、豐、宏、良、杏、年、友、錦。

北京に於ける商店名に關しては、張耀翔氏の調査がある。張氏の調査は徐氏のほどには詳しくなく、各文字の使用回数を明かにしてゐないが、最常用の文字は左の如くである。

興、華、和、義、成、順、豐、天、聚、公、泰、源、祥、盛、恒、昌、大、裕、隆、利。

南京における統計は陸志章氏によつて作成されてゐる。同氏によれば南京商店の最常用文字は左の如くである。

文字	回数	百分比	文字	回数	百分比
興	六七七	一一・〇五	祥	三〇七	五・〇一
泰	二七六	四・五〇	源	二五六	四・一八
和	二三〇	三・七五	順	二〇三	三・三一
永	一九七	三・二一	昌	一五七	二・五六
大	一三六	二・二二	萬	一二八	二・〇九
盛	一二五	二・〇四	同	一〇四	一・七〇

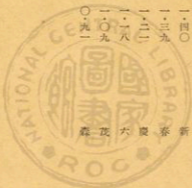
廣東、北京、南京における商店名の最常用文字から、三都市共通のものを抽出すれば、左の十

三

復 恒 福 聚 豐 榮 生 裕 隆 鑫

一〇四 一〇〇 九五 八六 八五 七六 七三 六八 六四 五一

一・七〇 一・六三 一・五五 一・四〇 一・三九 一・二二 一・一八 一・〇九 〇・九一



義 華 德 新 泰 慶 茂 森

一〇二 九八 九一 八五 七七 七四 七二 六七 五六

一・六六 一・六〇 一・四五 一・三九 一・二六 一・一九 一・一四 一・〇四 〇・八三

五字である。

興、昌、和、隆、泰、源、盛、豐、大、順、裕、義、恒、祥、華。

二都市のみに共通する最常用字は、左の十三字である。

利、生、永、德、成、福、同、萬、新、榮、公、天、榮。

いま商店名によく使用される文字を、字劃、字義、字聲等について分析して見よう。

(一)字劃 三都市共通の最常用字のうち、筆劃の最も多いのは豐(十八劃)、最少なのは大(三劃)である。劃の多少は店名への採用に關係する。劃の少ない文字が記憶され易く、簡便なのはいふまでもない。廣東での統計によると、字劃の最も多いのは豐、觀、鬱の四字で、これ等の字は、三千軒の商店中各字一回宛使用されてゐるに過ぎない。二十劃以上の文字は、五百九十一字中僅かに十六字で、使用回数は、總延數六千六百四十回中僅かに三十回である。因みに上海における商店名文字中、最も字劃の多いのも、商務印書館の「上海商業名錄」に現れた限りでは、鬱の字である。

(二)字義 支那商店名の命名に際しては、使用文字の意義が最も重要視されてゐる。最も多く

選ばれる文字は、縁起のよい字、すなはち商賣の成功を意味する文字である。次に多いのは一般的理想を表示した文字であり、第三は審美観念を表示した文字である。いま廣東における最常用字四十二字を、これ等の標準から分類すると大體左の如くなる。

字義	文字	字數	發見回數
商業の成功を意味するもの	興、昌、隆、利、廣、安、祥、生、泰、永、順、成、盛、福、發、源、大、益、萬、榮、裕、恒、寶、英	二六	三、二五六
一般的理想を表示するもの	和、合、同、信、義、公、聯、協、德、天	一〇	七九四
審美観念を表示するもの	新、香、華	三	二四二
其他(南、東、民)		三	一四二

右の分類は勿論大ざつばなものだが、それでも店名常用文字中で、商賣繁昌を意味する文字が

歴倒的多數であるといふことだけは充分知れると思ふ。なほ新、香、華の如き字を審美觀念を表
 示するものとして擧げたが、これはたゞ分類上の便宜からで、これ等の字が、審美的意味だけか
 ら用ひられるといふのではない。香が香港の香であつたり、華が中華の華である場合も勿論ある
 し、新が新世界飯店、新新公司の名稱に見る如き嶄新さを意味する場合と、老順記、新順記なる
 名稱の關係に見る如き、特殊の必要から生じた場合とがあることも忘れてならない。日本にも似
 た例があるやうに、支那では、例へば順記といふ店が暖簾を分けて、新たに同名の店を開いた際
 には、以前からの店には老の字を冠し、新店には新の字を冠するといふ風があるのである。

(三)字聲 支那文字特有の字聲を標準として、商店名文字を見るならば、平聲の文字が最も多
 い。また韻を以て區別するならば、庚、陽、東等の韻が最も多い。いま廣東、北京、南京三都市
 共通の最常用字を、字聲によつて分類すれば、左表の如くである。

	三都市 共通字	二都市 共通字	總計		三都市 共通字	二都市 共通字	總計
平聲	九	七	一六	上聲	〇	一	一
去聲	六	三	九	入聲	〇	二	二

四

支那商店名において、特に縁起のよい意味をもつ文字が廣く使用されてゐるのは、支那の商人氣質を如實に示すものであると共に、支那社會の因襲の根深き、所謂 social pattern への模倣性の強さを示すものである。だが社會の進化は、因襲の打破によつて行はれる。千遍一律の商店名は、やがて顧客に對する吸引力を失ふ。編綴壽ていの古い商號文字は、漸次に嶄新な文字に代へられざるを得ない。

三十年も前には、紫蘭、胡蝶、月宮、現代、亞細亞、太平洋、寰球、華盛頓などの支那商店名は見受けられなかつた。ところが最近はこの種の店名がどしどし増加しつゝある。舊來の支那商店名では、使用文字の一つ一つの固有する意味が重んぜられてゐた。ところが右に挙げたやうな新店名では、文字の意味よりも、文字の組合せによつて生れる言葉の意味が重んぜられてゐる。

この種新名稱の増加傾向を、歴史的に研究するならば甚だ有意義であらうが、比較に資すべき統計がないので不可能なのは遺憾である。

次に支那商店名に現はれた因襲力と創意力との相對關係を、地方、營業の種類、創立の時期等について見ることにしやう。

(一) 地方別 因襲が最も強く作用してゐるのは三都市のうちでは、南京の商店である。これに次ぐは廣東で、北京は最も影響が薄い。もしも上海について調べるならば、恐らく上海の商店が最も因襲打破において進んでゐるであらう。南京、廣東、北京三都市において最も多く使用されてゐる文字は「興」であるが、該文字發見回数の總字發見回数に對する百分比は、南京一一・〇五%、廣東五・四二%、北京約三・六〇%である。また右三都市の最常用字各二十字の發見回数を、夫々合計したものを、各都市總發見回数に比較すれば、南京六〇・九八%、廣東五〇・二八%、北京約三二・〇〇%である。(但し北京の計算方法は廣東、南京のそれと一様でないから、これは絶對正確な比較ではない。)

(二) 營業別 商店の營業種別から見れば、米麥薪炭漢藥等を取扱ふものは、より多く因襲に捉

はれており、洋服屋、化粧品店、書店、百貨店等は、比較的モダンな店名をもつたものが多い。前者は生活必需品を取扱ふ商店であり、後者は奢侈的或は文化的商品を取扱ふ商店である。前者の店名が舊式なのは、取扱品の性質上宣傳の必要が比較的少いからであり、後者の店名が新式なのは、それ等取扱品に對して未だ低度にある支那人の購買心を、宣傳によつて喚起せしめる必要が多いからであるが、同時にまた、商店開設時期の新舊にも起因してゐる。

(三)商店開設の時期 商店の名稱は、開店に際して定められるものである。だから古い店舗ほど名稱が古臭く、新設の店ほど因襲に捉はれないのは云ふまでもない。前述の洋服屋、化粧品店等の店名がモダンなのは、それ等の商店が、支那においては概して創立後未だ日淺きことを示すものに外ならぬ。だが新規設立の商店が、すべて新しい名をつけるといふのでは決してない。新しい店もまた好んで古めかしい名を選ぶ。そこに因襲の力が働く。老舗が信用ある店の同義語である限り、古い名稱の踏襲もまた限りなく続く。

(四)使用字數の限度 店名の使用文字數が多ければ、他の店名と混同される恐れが少い。だが記憶の點からいへば、字數の少いのが勿論よいであらう。この矛盾が、實際に商店の上で、如何

に解決されてゐるかを見るのは興味がある。統計の答案が示したところでは、北京の各店名平均字数は二・五字、廣東の平均は二・三一字、南京の平均は一・九字である。すなはち因襲の根強い南京の店名が最も短く、因襲の比較的弱い北京の店名が最も長い。これで見ると、因襲の根強いところほど、混同され易い名稱が多く、さうでないところほど、名稱が多種多様になることがわかる。

(五)地名の使用 日本では三河屋、信濃屋、東京堂などと、地名をそのまま用ひた店名が非常に多いが、支那の商店名では地名をそのまま取り入れたものは少い。但し地名をそのまま用ひなくとも、その別名、特にそのうちの一字を取入れたものは古くからあつた。例へば上海には申の字を用ひた店名がかなりあるが、これは上海の別名申江から來たものである。上海藥房、上海紙行の如く地名をそのまま用ひた名稱の使用は、最近の現象であり、未だ上海の如き大都市に限られてゐるやうである。だが、この傾向は漸次に増大しつつある。特に中國、中華、大中華の如き支那國名の使用は近時著しく目立つて増加しつつある。

(六)人名の使用 支那の商店名にも、店主の姓名又はその一部を用ひたものが、あるにはある

が、少数である。人名使用の店名は、通常姓名のうちの一字を取入れてゐる。支那人の姓名は、通常姓が一字で、名が二字であるが、それが店名に取入れられる場合は、名のうちの一字が最も多く、姓を用いたものは数から見て次位になつてゐる。姓名の全部を用いたものは、特殊の技術者、例へば醫師、辯護士、仕立屋等に、その例を見るに止まる。一般に店主の名と店の名が同一であれば、混同されることが少く、記憶され易い特徴がある。文明國の慣例では、人名が店名になるのが、殆ど原則となつてゐる。支那の店名に人名が少いのは、資本主義がなほ幼稚なことの反映とも云ひ得るだらう。(日本でも維新前には、人名を用いた店名が少かつた。)だが、資本主義が著しく高度に進めば、人名を用いた店名は、却て減少する傾向を有つ(米國では既にその傾向が顯著である。)それは株式組織の商社が増加するからである。支那商人の因襲の根強さは、店名と人名とを合致させるといふ外國の示例を、少しも受け入れさせはしなかつた。新たに生まれつつある株式會社ですらも、多くは古い名稱の形式を踏襲しつゝある。そこに支那の特殊性がある。

香港經濟史の發端

香港の經濟的發展の歴史は、一八四二年すなはち香港がはじめて、英國に割讓された時期にまで、遡るのが本當であらうが、實際には香港の發展は、これより大分遅れており、當時の商業及び航業に關しては、研究に資し得る正確な報告が残されてゐない。香港の事實上の發展史は一八七〇年にはじまる。(M・クレヴリイもその著の中で香港史を二期に分ち、一八七〇年を分岐點とすべきことを主張してゐる。同氏「香港—その過去と現在」一九三〇年八一—九頁参照)

それはスエズ運河開通の翌年である。この時以後についてなら、資料は豊富にある。だがこゝでは、割讓の年から一八七〇年前後までの、發展の前史的な素描を示さうとするのが目的である。

最初の兩年（一八四二—一八四三年）英當局は、築港事業に全力を注いだ。英國商人の來るものが甚だ多く、商店、埠頭、兵舎、裁判所等が次第に出來、地價は土地面積に限りがあつたから、競争的買付で急激に暴騰し、當時既に香港は立派に一つの都市を形成した。だが、この新興景氣は間もなく行き詰つた。最初の豫定が實現せぬうちに、一切の事業は極度の難關に達着した。はじめから居留民と軍隊は、香港の氣候風土に適順し得なかつたのである。香港の住民は誰も毎日毎日瘦せ衰へて行く自分を見出した。と地元の新聞は書いてゐる。

一八四二年には香港停泊中の軍艦ケギンコートの乗組員が半数まで死亡し、已むを得ず商船から六十名の水夫を募つて補充した。一八四三年には駐屯軍一千五百二十六名の一年内入院度數七千八百九十二回、即ち平均一入院名五回以上に及び、一隊の兵士約七、八百名中二十一ヶ月内に死亡者二百五十七名を算し、精選された砲兵隊百三十五名中でも、二年間に死亡者五十一名、病氣除隊者四十五名を出してゐる。一八四四年香港總督デューヴイスは、病により賜暇を得て舟山に轉地療養し、植民地秘書官は澳門に赴き、駐屯軍司令官はコーロツバへ歸り、植民地技師は二度も病んでこれまた澳門へ行き、主管牧師はマニラに逃避し、醫務官は辭職して去り、財政上にも

異常な素亂を來した。殘留ヨーロッパ人のすべてが、例外なく病に冒され、その他のものは東西に離散してしまつた。(Chinese Repository 一八四二—一八四四年の記述による。)

軍隊で二四%、民間で一〇%といふ高い死亡率の下では、如何に勇敢な者も、辟易せざるを得ぬ。だから内外の商人は、いづれも二の足を踏んで、這入つて行かない。早くから香港で兩替店の開設を準備してゐた印度、パシーの徒ですら、商賣を断念して、店を閉ぢる有様であつた。殘留せる英人の大多數は阿片の販賣業者であつた。彼等の支那への阿片輸入は、非合法手段によらねばならなかつたから、香港を「黒貨」貯蔵の大倉庫として、各地方への密輸はすべてこの總機關から出荷してゐたのである。それ以外の英人商店は何れも相前後して整理するか、または同じ頃開港した上海、寧波等に移轉して營業した。これよりさき、一八四一年に支那の一地方官は云つた「香港は世界的な密輸とルンペンの樂土となるだらう」と、この言葉が果して事實となつたのである。

香港と支那との商業關係が、軌道に乗せられなかつた原因は、阿片の密輸のほかになほ多々あつた。その著しいものは商船護送制度である。英國の商船は積荷が少なかつたので、支那船の護送を副業にしてゐた。支那の商船は、海賊の難をまぬがれるために、大抵英國船に護送してもら

ふのであつた。英國商船は、これがためいづれの支那船にも、巨額の保護費を要求するようになり、後には費用を納めねばならぬことが、一つの規則になつてしまつた。もし納めなければ、英國商船は自ら進んで掠奪した。この結果、穩健誠實な商人は、香港附近の海上に、敢へて近づかうとしなくなつた。(A・ミチー「支那における英國人」三〇二頁、G・W・クック「支那」一三〇—一五八頁。)

かゝる情勢の下にあつて、正常な商業が發達しないのは當然である。正確な商業上の記録がないので、英國の對香港輸出額を示して商業の衰微を説明するが、一八四一年に英國の對香港輸出は七十萬磅を超へ、一八四四年には殆ど百萬磅に達し、一八四五年にもなほ八十萬磅を保つてゐたものが、それ以後は逐年衰退して、一八五三年には僅かに三十萬磅に過ぎなくなつたのである。

商業上の失敗ばかりでなく、香港はまた財政上にも困難に逢着した。英國は香港占領後大きな負擔を生じた。最初の十四年間に行政費は二十七萬三千磅、毎年平均約二萬磅に達した。軍事費は行政費よりも更に大きく、當初毎年約二十萬磅を費し、一八五〇年に至つてもなほ年十萬磅を費した。他方財政収入は限られ、收支全く相償はぬ状態であつた。この種の不足額は、英國政府

で隨時起債して補助せねばならなかつたので、負擔は益々重くなつた。一八五二年ジョン・ラッセルの首相在任當時、植民大臣グレイ卿は、次のやうな意見を發表してゐる。

「香港占領後の費用が、このやうに嵩み、商業上の効果が、このやうに小さいといふことが、もし事前に豫見出来たならば、恐らく當時、香港占領に賛成した者はなかつたであらう。だが吾々は、香港を占領して以來既に久しいのであり、現在吾々が、これを英國對支商業上の最大の市場的根據地となし得る唯一の應急對策は、たゞ經費の節減あるのみである。一八四六年において當初の希望は既に實現不能なことが明かとなり、英國の對支商業は、すべて支那の他の開港場に移轉してしまつた。」(「ジョン・ラッセル卿治下の植民地政策」第二卷二六三—二六四頁)

これこそ香港史の一つの重要な關鍵である。本國においては、一八四七年と一八四九年の兩度に互つて、香港放棄論を主張する者が現れた。(一八六三年四月十七日附M・ゴードンの報告—一八六三年度海外商業年報。)

だが、政府當局は六望にも怯まず、一旦獲得した土地を放棄しようとはしなかつた。香港後年の發展は、政府の見解の正しかつたことを實證するに足りた。情勢の推移は、久しからずして、

この英國の新領土を、極東に於ける商業上の重鎮にしたからである。

二

はじめて香港に復興の機会を與へたものは、カリフォルニアと淡洲の金礦發見による支那人の海外移民の増加であつた。この時までにも、既に少數の華僑がシンガポール、ペルー、中米のアンチル諸島等に移住してゐたが、一八五四年に至つて支那人の海外移住は一段と活潑になつた。カリフォルニアは米國の西隅にくらゐし、東部諸州と相距ること遠く、當時土地の開拓、新礦の採掘のために、移民の需要が多かつた。淡洲もまた同様の状況で、その土地は、より廣く、人口は更に少なかつたから、移民の需要も一層著しかつた。かゝる事情の下に、カリフォルニアと淡洲の、労働者に對する需要は到底満たされなかつた。ところが支那では、労働者があり餘り、殊に南部諸省においてさうであつた。尤も支那人は郷土觀念が甚だ強く、遠い異境に赴くことを恐がるものがあり、法律もまた早くから國外移民を禁止してゐた。だから當時、外國でどれほど労働

者を需要しても、直接募集に来ることは困難であつたが、たゞ支那から遠くなく且つ支那の法律の及ぶ地點で募集して、こゝから改めて海外に積送ることは出来た。かゝる事情から香港は、その最も適当な積換地となつたわけである。

支那の海外移民は日一日と多くなり、一五五一年（咸豐元年）には八千人、翌年には三萬人を超過した。一八四九年から一八六八年までの二十年間に、加州サンフランシスコに上陸した支那労働者は、合計十萬八千四百七十一人、毎年平均約五千人に達した。これはカリフォルニア一箇所だけの数字に過ぎない。（一八六八年七月二十七日附D・クワイットランドのJ・ロス・ブラウン宛書翰―「合衆國の對外國關係」一八六八年版第一卷五三〇頁）

漢洲に向つたものゝ数は更に多かつた。一八五三年の移民總數は一萬三千五百九人、うち三千四十二人はサンフランシスコに向つたが、その他の二萬四百六十七人はフィリッピンと漢洲のメルボルンへ向つたものである。（一八五五年十月六日附ジョン・ブラウラングの植民局宛書翰―「支那に關する文書―移民」一八五八年版二二頁）

この時期における支那労働者の海外移住は、香港の航業と募工の事業に、非常な利益を齎らし

た。船舶の容積は餘り大きくなく、三百人から七百人ぐらゐまでを積載した。凡そ航海に三月を要し、そのため募工請負人は支那労働者一名毎に七十元を徴収したから、毎船一回の總收入は二萬元乃至五萬元に達したであらう。(一八五四年五月四日附W・ケイン知事のニューカッスル公宛書翰「移民」一八五八年版八頁)

募工請負人の収益に至つては、また別に見なければならぬ。彼等が毎回労働者一人の身上につき支拂つた費用は大體百元以下であり、(一八六〇年一月廿七日附M・H・S・パークスの在廣東M・ブルース宛書翰「移民」一八六〇年版一六四頁)労働者が米國或は濠洲に到着した際に受ける報酬は、平均一人につき四百元であつた。(一八五九年十月五日附M・ブルースのジョン・ラッセル宛書翰「移民」一八六〇年版四九頁)

この種募工請負人の殘酷と貪婪は、到底吾々の想像も及ばぬものであつた。彼等は支那労働者を、極めて狹隘不潔な船艙の中に追ひ入れ、飲食も與へず、一切構はずに放置したので、死亡率が非常に大であつた。ハバナへ向つた二萬四千人のうち、五千五百人すなはち總數の二二%以上が中途で病死した。かゝる悲惨な状態は、自然労働者の反抗を喚び起し、その結果船上の器具を

破壊したり、全船を占領して、水夫を殺害したりすることが屢々あつた。

支那労働者の輸出と虐待の悪弊は、一八五五年に至つて極點に達し、流石に英國官邊でも、人道上の問題として取上ぐるに至つた。彼等は香港での支那労働者募集を禁止するわけには行かなかつたが——何故なら香港の財源に非常な損失を來すから——多くの規則を設けて、少くとも文書上では再びかゝる悲惨を繰返させまいと企圖した。一八五五年八月十四日公布の法令は、この種規則の基本となるものであつた。凡そ支那労働者を輸送せんとする船主は、先づ港務處で航行規則書と許可書を受取り、規則違反の場合の罰金用として、一千磅の保證金を積まねばならぬことが規定された。同時に衛生及び人道上のことについても相當の規定が設けられ、成年者ならば船中において少くとも一人當り九平方呎の場所を與へ、毎日船客に充分な飲食を給し、船客二百人毎に醫者一名と通譯を附けて處置に當らしめることになつた。これ等は全く香港を、支那労働者輸出の中心地として存続せしめようとする方便であつた。

一八五五年頃の香港は、支那労働者の募集と國外輸出の場所となつたばかりでなく、太平天國の亂のため内外商民の避難地ともなつた。一八五〇年太平軍は廣西に起つて急速に勢力を伸長し、

南部諸省は根柢から動搖し、一般商業は日に衰微した。その後二年にして廣東、上海が相次いで陥り、時局は益々悪化した。廣東、廣西兩省人民の香港に避難したものは、一八五五年において一萬七千人の多きに達した。一八五六年（咸豐六年）英支間にまた戦事を發生し、後に佛蘭西も參加して、かの「英佛聯軍の役」となつた。（アロー戦事件を動機とする戦争、モーズ支那帝國の國際關係「四一九―四三七頁参照」）

同年十二月英海軍が廣東を攻圍した時、城内の外國商館は皆焚かれてしまつた。そこで全外人居留民は、一家眷屬財産をすべて香港へ移した。一時香港は人が多過ぎて、家賃と地代が急騰したのであつた。その後幾年かのうちに、香港は益々繁榮した。一八五八年と一八六〇年の英佛聯軍兩度の北上は、香港到來者の數を一段と増加させた。

一方では將官と兵士が全市に充満し、各種糧要品が大いに増加して、ヨーロッパ商品の輸入が倍加した。他方では新たに香港へ到來した支那人、外人の市中での消費が少くなかつた。かゝる状況は、はじめに當時の香港住民の企業心を刺戟し、一切の事業が頗る活況を呈し始め、商店は著しく増加し、ドツクと埠頭の建設には政府の補助が不必要となり、その他港務に關する設備も

大いに整理され来た。佛蘭西の領事は、一八六三年に次のやうに報告してゐる。

「香港の發展は、實に地勢の關係による。その港灣は許多の船隻を停泊せしむることが出来、同時に商業は頗る安全自由であり、且つ如何なる關稅も課せられず、汽船による運輸は、香港をその樞軸としてゐる。氣候の方面も、人工的改良によつて頗るよくなつた。これ等種々のものが、香港をして南支商業の中心地たらしめ、歐米、印度及び支那の貨物をすべてこゝに集中せしめるのである。」(M・ゴードンの報告一八六三年度海外商業年報)

これによつて、當時の香港の繁榮振りの一斑を窺ひ得るであらう。

三

當時の實際狀況の理解に資するため、いま一八六九年乃至一八七〇年前後の香港の人口、財政、海運及び重要商業機關の模様を述べて見よう。

人口の方面では、香港は一八七〇年に十二萬一千九百七十九萬人を算し、一八四一年の七千人

に比較すれば極端な増加といひ得る。但し吾々の注意を惹くのは、一八六三年以後の香港の人口が増加を示さず、むしろ滞減状態にあつたことである。だから香港の人口増加は、一八五四年から一八六三年まで、すなはち太平天國の亂の時期において最も速かであつたわけである。この許多の人口は殆ど全く支那人であつて、一八七〇年に支那人は十一萬九千五十七人の多きを占めてゐる。その他には千三百二十一人の香港永住英國人、少數の米國人と葡萄牙人、二千人前後の印度人がゐた切りである。衛生方面の施設は非常な好結果を得てゐた。一八六六年以後死亡率は二%に達しなかつた。香港の住民はこの點については、二もはや不満を表示しなくなつた。

財政状態もまた大いによくなつた。一八六〇年以後収入が行政費の支出を超過した。一八七〇年における行政費の全支出は十八萬二千五百七十六磅で、収入は十九萬六百七十三磅であつた。だから香港政府の予算は、既に充分均衡を保つことが出来た。但し軍費の支出には應じ切れず、毎年二萬磅を負担する以外は、従前通り本國政府から供給を仰いだ。このほか公共事業の建設のため、香港政府は幾回か起債したが、その總額は一八七〇年に八萬磅に達した。

海運方面では、一八六九年に入港船舶二萬七千八百九十一隻（二、五二五、四〇八噸）、翌年に二

萬七千八百九十一隻(二、八三四、四三六噸)を示した。商業の發達程度がどうであつたかは甚だ斷定し難いが、次表によつて、その進展の大略を窺ひ得るであらう。

一八四五—一八七〇年香港入港船舶數及噸數

年次	入港隻數	噸數
一八四五	一六八	三九、四五五
一八五〇	八八三	二九九、〇〇九
一八五五	一、七三六	六〇四、五七〇
一八五六	二、〇九一	八一一、三〇七
一八五七	一、〇七〇	五四一、〇六三
一八五八	一、〇〇七	七一六、四七六
一八五九	一、一五八	六二六、五三六
一八六〇	一、五三四	八五五、一九九
一八六一	一、二五九	六五八、一九六
一八六二	一、三九〇	六八八、五二九
一八六三	一、八二二	八九四、九二四

一八六四	二、二六四	一、〇一三、七四八
一八六五	二、二〇六	一、〇六三、二五九
一八六六	一、八九六	九四九、八五六
一八六七	二、三、二三三	二、五六二、五二八
一八六八	二、七、五〇〇	五、五〇一、八一五
一八六九	二、五、四五八	二、五二五、四二八
一八七〇	二、七、八九七	二、八三四、四三六

右の数字は「港務局年報」に載つたものである。一八六七年に入港船舶及び噸數は急激に増加してゐるが、これはこの時から香港が、帆船の登記を開始したからである。次に掲げるのは、一八七〇年直前、香港に設立された主要商社である。

名稱	設立時期	資本金(元)
匯豐銀行 (Hongkong and Shanghai Banking Corporation)	一八六五	一〇、〇〇〇、〇〇〇
安仁洋面及火險保安公司 (Union Insurance Society)	一八六六	二、〇〇〇、〇〇〇
華商保險公司 (China Traders Insurance Co.)	一八六六	二、〇〇〇、〇〇〇

香港置地公司 (Hongkong Land Investment Co.)	一八六六	一、〇〇〇、〇〇〇
香港火燭保險公司 (Hongkong Fire Insurance Co.)	一八六九	二、〇〇〇、〇〇〇
中華火燭保險行 (China Fire Insurance Co.)	一八七〇	二、〇〇〇、〇〇〇
香港黃埔船塢公司 (Hongkong Wharf & Poo Dock Co.)	一八六六	一、五六二、〇〇〇
香港澳大船公司 (Hongkong Canton, Macao Steamboat Co.)	一八六六	六〇〇、〇〇〇

上表は勿論完全なものではない。これ等の株式會社の外に、なほ別種の商店が存在し、その營業額も見るべきものがあつた。例へば怡和洋行 (ジャコブソン・マゼン) の如きは一八四一年に設立され、現在に至るもなほ發展を續けてゐる。株式會社の組織は、一八七〇年頃には未だ普遍的ではなかつたが、上表に示された資本額について見ても、當時香港の經濟力が、既に膨脹してゐたことを知り得るであらう。

一八六九年 (同治八年) 十一月スエズ運河の開通は、香港ロンドン間の航路を、従前の喜望峯廻行航路に比し二五・六%短縮せしめた。一八七一年六月三日香港英國間の電信も完成し、英國と直接通信が出来るやうになつたばかりでなく、英國經由でヨーロッパ大陸及びアメリカとも通信

出来るやうになつた。同時に一八六五年から續々設立せられた大銀行が、何れも商業貸付を開始した。かゝる新環境は香港との經濟關係を愈々深からしめるものとして特筆に値ひする。

一八七〇年以前の香港市場には、一つの特殊事情が存在した。一八六二年から一八六五年にかけて、香港駐在佛蘭西領事ゴドールの記述したところに上れば、香港の金融と商業は、殆ど完全にジャードン・マゼソン商會とデント商會の二者の手に操縦されてゐた。彼等の資本の雄厚さと私有商船の敏捷さとが一つの優越地位をつくり、彼等を事實上の獨占者にしたのである。

一八七〇年に至つて、かゝる状態は維持されなくなつた。スエズ運河の開通以後、大規模の航業會社が相ついで設立され、各商店は自ら商船を私有して貨物を運ぶ必要がなくなつた。同時に電信が開通したので、遠隔地市場のニュースを取る方法を各自で講ずる必要がなくなつた。また多くの大銀行が商業貸付をするやうにつた。貿易上の一切の道具建てが完備したので、かの二軒

の「實業界の親玉」が従来享有してゐた利益は、漸次消滅して行つた。それ以來、香港へ来る外國商人は日一日と多くなり、彼等はもはや商店と航業を兼營することなく、單に賣買仲買人の仕事を専業とするやうになつた。

多数のヨーロッパ仲買商人が來て、洋行を開設するに至つてからの、香港における商業手續と慣習は詳細檢討する必要がある。何故なら現在に至るまで、この種の事情には多大の變化を來してゐないからである。支那商人が歐米における商社と、直接取引關係を結んだものは極めて少く、一切の輸出入貿易は各開港場における外國商館の仲介を経て行はれ、その最も多くは香港で行はれた。これ等の「洋行」は自らが賣買を行ふのではなく、歐米商社の委託を受けて、東洋商品の代理取扱ひをなすのであり、商品の値段、品質、數量等はすべて歐米商社から指定されるのである。支那商人が外國品を買入れ、または國産品を賣出す場合も、同様彼等に代理を委任する。彼等は市場と産地の事情に精通してゐたから、貨物の取扱ひが工合よく行き、同時に彼等は定期的な、且つ迅速な運輸を利用することが出来たから、業務の進行が甚だ都合よく捗つたのである。

後には競争の結果、外國商館の口銭は著しく値下りしたが、その大體を示せば左表の如くであ

る。(一八七八年香港商業會議所年報)

一八七八年四月二十日香港商業會議所規定の各業手数料表

商品賣買又は代理業務手数料

茶、生絲及び棉花

阿片

其他商品、不動産及び船隻

靴、靴下

茶又は生絲の検査

糖、綿

代理訴訟(勝訴)

代理訴訟(敗訴)

土地管理及び地代取立

仲立人の手数料

手形及び兩替(賣手負擔)

其他(賣手負擔)

賣買仲立、荷役及び運賃の取極

三・〇%

二・〇%

五・〇%

一・〇%

一・〇%

二・五%

五・〇%

二・五%

五・〇%

〇・五%

〇・五%

一・〇%

口銭が大いに下れば、一方では商業を發展させることになり、同時にまた外國商人を勵まして營業擴張に努力せしめ、一商品のみの賣買を専門とせず、種々な儲け口を見つけやうと企圖せしめる。他の一つの影響は、外國の製造家が直接支那商に貨物を賣つて、利益を大きくしやうとする試みを、失敗に歸せしめることである。

支那商人が、洋行に外國品輸入を依頼しようとする際には、先づ代金の三分の一の手附金を置き、出荷の通知が来た時に再び三分の一を納め、残金は荷物と引換へに決済する。洋行と支那商との間では、一般に詳細な契約書を取りかはし、買入條件、商品の値段及び數量、荷渡しの期日を明記し、同時に支那商がもし荷物の不合格以外の理由で、荷受けを行はぬ場合、前納した手附金を全部没収する旨をも規定する。もし洋行が代理を實行せず、または荷物が不正品であるために荷受け出来ぬ場合には、手附金を返却するから、取引は至極順調に運んだのである。

香港の外國商人は、曾て支那奥地の商人と、直接取引關係を結ぼうと試んだことがあつたが、この計畫が全然實行不可能なことを直ちに悟つた。何故なら、彼等は支那の言語に對して大抵不案内であり、各地住民の需要と財力についてはなほさら事情を辨へてゐなかつたからである。のみ

ならず、支那奥地の外國品取扱商は、何れも營業の規模甚だ小さく、利益もまた薄かつたから、恐らくこれ等外國商人相手の支拂に應じ切れなかつたのであらう。

以上は外國商人と支那商との關係であるが、さらに香港外國商館の歐米における商品買付狀況を略述しよう。

各洋行は、見本によつて注文出来る商品は、すべて直接ヨーロッパの製造家に引合ふ。新規商品ならば、ヨーロッパにおける仲買問屋に代理を委託する。洋行の中には直接各製造家との取引を試んだものもあつたが、多くの場合不便を感じたのであつた。ヨーロッパの間屋ならば、各地の製造家と接近しており、値段の高低にも通曉し、もし一製造家が彼等の注文に應じ得なければ、直ちに他の製造家から買ふことが出来、少しも遅延する虞れがない。のみならず、製造家に注文しても、問屋に代理させても、値段に變りがなかつた。或る場合には問屋の方が、一般商況や運輸上の事情に通じてゐる關係から、却て製造家よりも安い値を出すことが出来た。例へば香港と濠洲の間の如きにあつては、一時に一軒の間屋に注文が纏められ、この問屋は専用の船を備入れることが出来たから、運賃が安くなり、従つてその口錢も安かつたのである。

香港の洋行筋が、支那の商品を輸出する場合も、ヨーロッパの間屋について述べた立場と同様で、その効果は却てヨーロッパの間屋よりも大であつた。支那は他の各國と非常にかげ離れ、荷物の輸送に多くの時日を要し、遠地の顧客と直接取引關係を取結ぶことが一層容易でなかつたからである。これがため香港における外國洋行の地位は特別の重要性をもつた。そこで香港全體が一つの大倉庫、一つの大洋行と呼ばれる状態を呈現するに至つたのである。

この時期（一八七〇年）の状況を、以前の状況に較べると、非常な進歩が見られる。前には商人の營業は危険性に富み、荷物の積送には自ら船を所有せねばならず、商品ストックのために、大規模の倉庫を設備せねばならず、巨額の資本を據するもののみ、收利益を収め得たに過ぎなかつたが、今や運輸、保険、信用の機關は完備し、小規模の商店が小さなオフィスと少數の事務員をもつて、充分に遠隔地市場との貿易に従事し得ることゝなつたわけである。

（附記）この一文は一九三一年パリで殉學した陳行叔氏の未完稿の（稿遺佛文の原稿から支那譯されて「社會科學研究」第一卷第三期陳行叔先生紀念號に發表）の初めの部分による。



上海史
文獻
解題





上海史文獻解題

弘治上海縣志

上海縣志の編纂は明の洪武元年顧瑛によつて企てられたことがあるが完成するに至らず、弘治十七年（一五〇四年）知縣郭綽の監修の下に唐錦の手で始めて八卷の編成を見た。この弘治志は早く上海の地から逸失し、清の康熙二十二年の修志の際には已に見當らず、その後各代の修志ともこの書を参考とすることが出来なかつた。然るに上海市通志館が捜査に努力した結果、民國二十四年再彼の天一閣に右原本の殘存せるを發見、翌年これを寫眞版で複製した。

嘉靖上海縣志

明の嘉靖三年知縣鄭濟書監修、高企鵬、八卷。民國二十二年明越然、陳乃乾氏等によつて影印せられてゐる。

萬曆上海縣志

明の萬曆十六年知縣顏洪範監修、張之象編、十卷。徐家匯圖書館に藏本がある。

康熙上海縣志

清の康熙二十二年知縣史彩監修、葉映楹等編、十二卷。徐家匯圖書館に藏本がある。

乾隆上海縣志

清の乾隆十五年知縣李文瓚監修、談起行、葉永等編、十二卷。徐家匯圖書館に藏本がある。

乾隆上海縣志

清の乾隆四十九年知縣范廷杰監修、臬甫編、喬鍾沂等編、十二卷。この書は逸失し、民國元年上海縣續志の編纂者も未見と書いてゐる。

嘉慶上海縣志

清の嘉慶十九年知縣王大同監修、李林松主編、二十卷。嘉慶以前の各志は記述簡單であるが、この書に至つて内容始めて豊富になつてゐる。同文書院及び徐家匯圖書館に藏本がある。

同治上海縣志

清の同治七年巡道應寶時監修、俞樾主編、三十二卷。補遺及び叙録各一卷。この本は坊間の書店でよく見受ける。

上海縣續志

民國元年上海縣民政長吳壽の發起監修にかゝり、姚文楷これを主編し、民國七年完成、三十卷、叙録一卷。これは同治志に引續いて宣統三年までの記事を収めてゐる。

民國上海縣志

民國二十四年姚文裕、秦錫田等編、二十卷。光復以後に重點を置き、民國十七年までの記録を收む。

上海市自治志

民國四年楊逸の主編せるもの。全書七冊、圖表、大事記、公牘、章程規約規則の四編に分つ。光緒三十一年から民國三年までの上海市の記録である。

上海縣志稿

縣當局の編纂にかゝるものゝほか、個人による修志の企ても屢々行はれたやうで、古くは明の黃標撰「上海縣志稿」十卷があつたが、これは嘉靖年間倭寇に遭つて焼けたと傳へられる。清の成豐年間には寶山の人蔣敦復が「上海縣志」の編纂を企てたが、未完に終つたらしく、原稿も發見されてゐない。記録には清の王敬祖撰「上海邑志補」といふ書名も見えるが、原本はまた現れない。

嘉慶上海縣志修例

陸慶循撰

李林松の主編しに嘉慶上海縣志の誤れる箇所を訂正せるもの。全書一冊、五十三頁。上海市通志館に蔵本

がある。

同治上海縣志札記

秦榮光撰

鉛印本、六卷。卷首に光緒二十八年葉繼昌序すところから同年以後の刊行にかゝる。同治志の疎漏の箇所を訂正せるもの。

上海郷土志

李維清編

光緒三十三年上海勸學所出版、初等學校の教科書用として編まれたもの。編者は嘉慶上海縣志の主纂者李林松の曾孫である。

上海郷土歴史志

李右之撰

民國十六年出版、これも小學教科書で、同じ著者により「上海郷土地理志」も出てゐる。

青龍雜誌

梅堯臣撰

宋代の書、「青龍鎮志」と傳へるものもあるが未見。また明の昭祥撰「龍江船廠志」といふのも書名のみ残つてゐる。

鶴沙志

朱之屏撰

清代の書、十卷。鶴沙は下沙の別名で、南浜に屬す。原書未見。

龍華里志

張所望撰

明代の書。ほかに清の釋氏繼善撰「古龍華志」十卷、張宸重輯「龍華志」などもあれど何れも原書未見。

法華郷志

清の嘉慶年間王鏞の撰した「法華鎮志」は未刊のまゝとなり、民國十一年胡人鳳これを増補して首題の書八卷を編した。

諸翟村志

清の嘉慶年間侯承慶續修、道光六年沈葵これを重修して「紫陽村志」となす。諸翟村は上海と青浦との境界に位する一村鎮である。原書傳はらず。

引翔郷志

王煥崧撰

清代の書、未見。

廿一保九十一圖里志

何文源撰

清の道光十四年作、著者は上海の人、内容は郷土志なるも原書未見。

吳淞所志

馬元調撰

清代の書、ほかに劉暉撰「續吳淞所志」、朱庭祿撰「吳淞鄉土小志」二巻の書名も見ゆれど何れも原書なし

江灣里志

清の乾隆年間李保泰はじめて「江灣志」を編し、道光年間盛大鑑これを重修、同治年間陸宿海が更に「江

「續志」を修したが傳寫するのみで刊本は存せず、民國十三年錢澹主編、縣知事馮成の鑒定の下に八卷、附卷一巻の印刷が漸く成つた。

大場志

明の正徳十二年周臣輯、清の乾隆十四年柏學源「大場續志」を修し、後にまた侯廷銓が「續大場志」(別名「錢溪志」)五巻を修したが、原書何れも未見。

眞如里志

清の乾隆三十六年上海の人陸立の輯せるものは原書なし。民國七年頃寶山の人洪復章の輯せるものは上海市通志館に寫本あり。ほかに清の張爲金撰「眞如叢書」、侯錫恩撰「眞如志」の書名寶山縣志に見ゆ。

姚溪志

王德乾撰

民國二十二年稿、八巻。姚溪は眞如の別名。宋の南渡以後から上海市に改屬する以前までの記事を載す。稿本通志館に存す。

上海明心寺志

朱采撰

清の嘉慶十六年稿、六卷。ほかに清の康熙四十七年寺僧上鑑の撰せる「明心教寺志」もある。共に寫本葉
鑿虎氏所藏。

龍華寺志

抄本、趙雲韶氏所藏。

吳地記

陸廣微撰

唐代の書。本文一卷、附後集一卷。吳郡全般に亙る地誌なるも、上海の舊名滬濱について記述あり。同治
十二年江蘇書局刊本を見受ける。

吳郡志

范成大撰

宋代の書、五十卷。水利の項は吳淞江の歴史に關係あり、また卷十及び卷五十に虞諱と真山松の滬濱防衛



の事蹟を記す。「守山閣叢書」に校勘記一卷と共に收めらる。

吳郡圖經續記

朱長文撰

宋の元豐七年原作、三卷。遺蹟につき各所に記載あり。同治十二年江蘇書局刊本がある。

中吳紀聞

龔明之撰

宋代の書、六卷。吳郡の風土人文等につき「圖經」、「吳郡志」に載せざるところを彙録す。なほ類似の書に元の陸友仁撰「吳中舊事」(一卷)及び元の高徳基撰「平江記事」(一卷)といふのもあれど、上海史には餘り傳りなし。

天下郡國利病書

顧炎武撰

清の乾隆年間の書、百二十卷。地方志や奏議文を参考とし、實地旅行の結果を綜合して各地の事情を記す。その江南の部は上海史に關係するところ多し。なほ古くは宋代の樂史撰「太平寰宇記」、明代の李賢等撰「明一統志」、清代では顧祖禹撰「讀史方輿紀要」、蔡方炳撰「廣輿記」、乾隆勅撰「大清一統志」、趙宏恩等撰「江南

通志、温汝龍撰。「方輿類纂」など参考とすべき地理書である。

嘉禾志

岳珂撰

宋代の書、元の徐碩これを重修す。三十二卷。宋時上海の地の属した華亭縣は嘉興府に隸し、嘉興府はもと秀州嘉禾郡とも稱した。

松江郡志

張之翰撰

元代の修志、八卷。

續松江志

錢全衰撰

元代の修志、十六卷。

松江府志

明代の郡人侍讀顧清の修したものの三十二卷、明の郡人陳繼儒の修したものの九十四卷、清の康熙年代の知府



郭廷綱の修したものの五十四巻のほか嘉慶年代の重修もある。

松江府志摘要

閻山菴撰

康熙松江府志及びそれ以前の各志から重要記事を抄録したもの、一巻。申報館版の「府王震澤初集」に收められてゐる。

雲間志

楊潜撰

宋の紹熙四年の書、三巻。滬濱疊に關する記述あり。

雲間志略

何三畏撰

明代の書、清代全燬禁書に屬した。原本金山姚石子氏所藏。

雲間通志

錢岡撰

明代の修志、十八卷。

雲間百詠

許光撰

宋代の原書一卷に、明の張之象、劉邦輔、董宜陽の撰せる各一卷を附し、或は「蔡亨百詠」ともいふ。内容は竹枝詞の類。原書未見。

雲間雜識

李紹文撰

明代中華の書、二巻。成化より萬曆頃にかけての上海、松江地方の實話を集む。嘉靖年間の倭寇に関する記事多し。民國二十五年上海蘇修志局發行、瑞華印務局印刷の黃盛錫氏重編本あり。

雲間人物志

李紹文撰

四巻。明の洪武より萬曆に至る間の舊松江府に属する人物五百餘人の列傳で、上海人に關するもの多し。松江圖書館に抄本を藏す。

雲間海防志

同治上海縣志に書名を認むるのみ。

雲間據目抄

范濂撰

明の萬曆年代の書、五卷。松江府における掌故を人物、風俗、祥異、賦役、土木に分つて記述す。倭寇に關するところは日記體にて詳細を極む。申報館發行の活字本あり。

雲間雜記

撰人缺。四庫全書の目錄にあり。明の萬曆以前の松江の軼事を記せるものなるも原書未見。また「南吳舊蹟錄」に「雲間雜志」の書名見え、「雲間雜識」の跋には「雲間雜誌」の書名も見ゆ。

雲間文獻

黃烈撰

清の乾隆三十七年の書、原書未見。

雲間志略

漁破散人撰

清の道光年間出版の袖珍小冊。舊松江府に屬する山川、古蹟、風土等を簡單に記す。

郷評錄

明代の舊松江府人物評傳。「南吳舊話錄」に引用あるも、原書未見。

淞故述

楊樞撰

明の高濂年代の手録で、萬曆年間に出版さる。多く松江の故事を述べ、處々上海のことにも言及してゐる。著者は華亭の人、字は運之、細林と號す。「藝海珠塵」に收められ、全一卷、三十七丁。

熬波圖

陳椿撰

著者は元代上海下砂場の鹽司。下砂鹽場は今の浦東、南匯地方で、同地の製鹽狀況を描いた圖繪に解説を施し詩を附してゐる。浦東はもとより南匯も元明代には上海に屬してゐたので、この書は上海に關する最古の資料の一つである。民國二十四年上海通社出版の「上海掌故叢書」第一集に收む。

上海田賦志

黃體仁撰

明代の書物で、上海における地租の記録だが、同治上海縣志に書名を認めるのみ、原書は未見。

申江雜識

董容大撰

明代の書、書名同治縣志に見ゆ。

上海記變

董宜陽撰

明代の書、原書未見。

南吳舊話錄

李廷是撰

明末の書、二十四卷。主として松江府下の人物につき遺聞逸事を記す。著者字は辰山、寒村と號し上海の人、醫學者として知らる。民國四年蔣烈氏の重編本あり。



竺江集

潘恩撰

明代上海第一の世家潘氏の始め家名を擧げた潘思（嘉靖癸未の進士）の詩文集、十二卷、附録一卷。上海の諸生潘叔頤の編定本あれど現時流傳頗る少し。「潘恭定公全集」ともいひ、中に上海築城記を含む。

吳淞甲乙倭變志

張鼐撰

明の嘉靖甲寅、乙卯兩年における上海地方の倭寇防禦の事蹟を記したるもの。著者は華亭の人、字は世調、萬曆甲辰の進士である。「上海家故叢書」に收めらる。

閩世編

葉夢珠撰

著者は清初の上海人、字は濱江、梅亭と號す。十卷に及ぶ當時の見聞録で、大は國政から小は市井の風説水旱天災、物價の昂低に至るまで書かれざるはなく、特に松江一郡の沿革について詳細を極めてゐる。「上海家故叢書」に收む。

景船齋雜記

章有謨撰

明清の間に書かれた書、上下二巻。舊松江府に屬することを記し、上海にも涉るところあり。申報館本がある。

五茸志逸

吳履震撰

明清の間に書かれた書、八巻。舊松江府の遺聞、逸事を記し、上海に關するところ多し。松江圖書館に道光年代の抄本があるといふ。

三國識略

董含撰

清初の書、十巻。申報館本あり。民國三年「尊經叢書」と改題せる翻刻本は四巻。多く明末清初のことを記し、上海にも説き及んでゐる。

秋谷雜編

金維翼撰

清代の書、三卷。多く松江府下の掌故を記す。

谷水舊聞

章鳴鶴撰

清の乾隆二十一年の作、著者は荀傳と號し、華亭の人、八十歳の時この書を著し、後に蕙緘士がこれを校訂した。多く松郡の舊聞、遺事を記し、上海の史蹟、人物にも涉つてゐる。申報館刊行の叢書「四溟瑣紀」に収録さる。

松事雜錄

馮金伯撰

清代の書。同じ著者により「雲間遺事」、「雲間雜話」、「五茸遺話」等のあることが「松江府志」及び「南匯縣志」に見えるが、何れも原書未見。

吳淞軼事

袁翼撰

清代の書、二卷。書名「寶山縣續志」に見ゆるも原書未見。

吳淞雜識

清代の書。書名「光緒寶山縣志」に見ゆるも原書未見。

吳淞文獻備考

原書未見。

吳淞江議

明代の書なるも未見。

吳淞江考略

清代の書なるも未見。

吳淞海塘備考

印鴻緯撰

劉械撰

王折撰

沈白撰

袁文韶撰



清代の書なるも未見。

彙考錄

俞世才撰

清の康熙四十年代の書、重刊本あり。晉の吳郡の太守袁山松の事蹟を記す。著者字は樹安、浙江省上虞縣黃城鎮の人。袁山松は孫恩の襲來を防ぐために上虞に黃城を築いた關係から、同地出身の著者が興味を持つたのであらう。袁山松は後に滬濱（上海）に來つて、壘を修し防戦に努めたが、遂にこゝで戦死した。

吳郡通典備彙

吳昌綬撰

同治七年壬戌通序、雲在山房校印、十卷。吳の泰伯の頃から明代までの吳郡の戦争史を編年體に纏めたもの。晉の隆安四年袁山松の滬濱防衛、明代倭寇の上海地方侵犯等の記事あり。

江蘇兵事紀略

陳作霖撰

清の咸豐十年版、上下二卷。周代より清末に至る江蘇戦争通史。倭寇、阿片戦争、太平亂に上海方面の記事あり。

滬城備考

褚華撰

乾隆四十九年版の「上海縣志」は誤謬脱漏が多かつたので、これを補正する目的で書かれたもの。嘉慶十九年の縣志はこの書に依據して訂正せられ、その後の同治縣志、民國續志にも參考書として役立つ。著者は秋菴、文淵と號し、詩文をよくし、多數の著述がある。本書は「上海掌故叢書」に收められてゐる。

滬乘綴遺

艾德撰

同治年間上海縣志の完成した際、艾氏は舊聞を摘拾してその遺漏を補ふべくこの書を作つた。原本は未見

木棉譜

褚華撰

木棉の中支傳來を考證し、播種から紡織染色に至るまでの前代棉業の技術を詳細に解説しており、上海棉業史の貴重な資料である。「蕪海珠塵」及び「上海掌故叢書」に收められてゐる。

水蜜桃譜

褚華撰

上海の名物水蜜桃の栽培状況を叙す。もと上海顧氏露香園で栽培されてゐたが、露香園の廢れた後、その種が蘭華に移され、現在では蘭華が桃の名所となつてゐる。「上海掌故叢書」に收めらる。

淞南樂府

楊光輔撰

著者字は微男、心香と號し、乾隆、嘉慶時代の南瀛人。當時の上海、南瀛地方における風土習俗を六十章の歌曲となし、各章に註釋を附してゐる。清雅誦すべき詞句多く、註釋は當時の風俗を窺ふに足る貴重な資料である。「上海掌故叢書」に收む。

滬城歲事衢歌

張春華撰

清の道光十九年出版、上海の年中行事、風俗を詠じた七絶詩百二十首。年初から季節順に序列し、備考を附してゐる。著者は秋浦と號し、上海の諸生である。本書も「上海掌故叢書」に收められてゐる。

滬城紀事詩

沈嘉森撰

清代の書。著者は芝山と號し、上海の人。内容は上海竹枝詞の類。

海上詩鈔

曹錫辰撰

清代の書、九卷。書名縣志に見ゆ。

松江衢歌

陳金浩撰

清の中葉頃の書、年代は不明。著者字は錦江、江蘇華亭の人。舊松江府下の故事に關する竹枝詞百首を集め、每首に註を附す。上海の蘆子城、黃道婆祠、真崑崙、露香園の水蜜桃、顧繡などを歌つたものも見える。本書は「藝海珠塵」に收められてゐる。

上海縣竹枝詞

秦榮光撰

光緒末年作、民國元年刊行。竹枝詞とは地方の風土民俗を詠じた歌曲のこと。この書は上海の故實を主題とするもの五百三十二首を收む。

上海光復竹枝詞

朱文炳撰

民國二年印行。前清宣統時の作詞百五十四首と民國成立後の續作二百五十首を收む。上海の風俗及び革命時代の項事を歌つてゐる。

海上墨林

楊逸撰

民國八年初版、十七年增補三版を重ね、全書四巻、増録一巻。宋代より民國に至るまでの上海書畫家七百餘人の列傳である。

寶存

胡式鈺撰

清代の書、四巻。その巻四「語寶」は歴史を引用して俗語、方言の考證をなす。著者は上海の人だからこの地方の俗語を多く取入れてゐる。

滬諺

胡祖德撰

民國四年出版、二冊。上海の諺語を集む。民國十二年同じ著者により「滬諺外編」二冊も出てゐる。

上海俗語大辭典

嚴英孫撰

民國十三年出版、一六五頁の小冊。上海の俗語約八百を集めて簡單なる解説を加ふ。

夷患備嘗記

曹成撰

阿片戦争當時における英艦の上海攻撃、滬城占領中における英兵の暴虐振りを目撃者が記した生々しい記録で、道光二十二年五月八日以後十三日間の日誌である。著者は字は寶照、靜山と號し、道成年間の上海人。本書は光緒初年申報館から「十三日備嘗記」と題して出版されたこともあるが、「上海掌故叢書」には「上海曹氏書存日録」に依據し原題に復して収録されてゐる。

壬寅聞見紀略

袁陶愚撰

阿片戦争における上海陥落の模様を當時の日撃者が記した日誌で、戦況を極めて詳細に記録してゐる。本書は曾て「人文月刊」第四巻に連載された。

關道說

道光二十二年英艦の上海攻撃に際し、如何に敵を制滅するかを説いた論著。撰者不詳の寫本であるが、序文の終りに「壬寅七夕、孤蓬自振之室に於て識す」とある。本文は「啖晴明は海外の醜夷のみ、初め鴉片の烟毒を以て我が生民を害す」の語を以て始められ、建製の方法としては、三千の漁舟を集め火を以て敵艦を焼き拂はふといふ勇壯無比の戦術を説き、官兵の騎甲斐なきを憤り、英兵に對する憎惡を以て買かれてゐる附録に「粵東義勇隊」を收む。

啖晴明吟

具青齋撰

嘉業堂刊本。道光年間英艦の上海襲來を詠じた詩集である。

籌辦夷務始末

民國二十年故宮博物院編印、八十卷。清末の外務國防にたづき語る官吏の對外諸事件處理に關する朝廷への報告書を輯録す。外交史の貴重なる資料で、阿片戦争その他上海に關係するところ多し。

達 衷 集

許 地 山 編

民國二十三年は商務印書館發行、四六判二三七頁。阿片戰爭前の英文交渉史料。

史 料 旬 刊

故宮博物院發行の旬刊資料集で、清朝の奏議文、報告文書等未公開のものを収録す。事變直前までに五十冊ほど出てゐる。

紅 亂 紀 事 草

曹 晟 撰

咸豐三年小刀會が上海縣城に攻め寄せた時、敵の包圍の中になつた著者が、身を以て親歴したところを一々詩歌に詠じたもの。「上海掌故叢書」に收む。

覺 夢 錄

曹 晟 撰

上海における小刀會起兵の原因から縣城占領に至るまでの情形を記述す。「上海掌故叢書」に收む。

梶林小史

黃本銓撰

小刀會の上海占領始末を記したもので、咸豐三年八月から五年正月に至る間の見聞録、「上海寧故叢書」に収めらる。

星周紀事

王萃元撰

咸豐三年小刀會の役から同治三年太平天國覆滅に至る十二年間の上海兵禍を日記體に記す。星周と題したのは十二年が歳星の一周だからである。咸豐十年太平軍の上海攻圍の際、著者は虹橋團練局の指揮者だったので戦況の記述は特に詳細的確である。「上海寧故叢書」に収めらる。

難情雜記

薛鳳九撰

著者は上海の人、咸豐十年から同治三年に至る間の上海境内における太平亂を記す。體例「星周紀事」に同じ。

兵災紀略

蔣恩撰

著者は上海人、前書と同様太平亂當時における上海の状況を日記體に記す。民國十五年この書は「星洲紀事」及び「雜情雜記」と合本して「三公雜記」と題して出版されてゐる。

三、略類編

毛祥麟撰

咸豐、同治年間における上海の兵亂事情を記す。

四、夢覺談

吳紹箕撰

四卷。太平天國當時の上海に関する記述あり。

吳中平寇記

錢島撰

同治四年作、八卷。上海方面における太平軍鎮壓の始末を記す。光緒元年の申報館本あり。

小滄桑記

姚燾撰

上下二卷。これも上海地方における洪楊亂の事實を記す。咸豐十年三月から同治元年末までを日記體に叙す。

淞滬從戎紀略

陳錦撰

太平天國當時の上海戦記と思はれる。「中國内亂外禍歴史叢書」の目錄に收められてゐるが、未刊のものとなつてゐる。

江南製造局全案

同治年間曾國藩、李鴻章等が上海に製造局及び廣方言館を創設した際の種類文書を集めたもの。浙江圖書館と南洋中學圖書館に蔵本がある。

江南製造局記

魏允恭撰

光緒三十一年文寶書局石印、十卷。當局の編纂した設備内容の報告書で、建物の圖面、製造武器の圖解、機械工具、製造品目、會計、歴代職員録等の詳細を記す。前掲書と共に支那工業史の貴重な資料である。

江南製造局譯書提要

編譯館編

宣統元年出版、二卷。江南製造局附屬の翻譯館で出した西洋近代科學書譯本の目録。日本の本の譯書も一二あり、藤田豊八博士等が口譯してある。

國朝柔遠記

王之春撰

光緒十七年五廣發書局版、二十卷。清の順治より同治に至る間の對外關係史で「國朝通商始末記」とも呼ばれてゐる。上海開港由來の資料として貴重なもの。

中西紀事

龔定撰

同治四年完稿、二十四卷。光緒十一年北京琉璃廠印行。清代における對外通商史の重要資料。

東方兵事紀略

姚錫光撰

光緒二十三年武昌にて刊行、五卷。日清戦争の始末記であるが、巻頭に同治元年及び三年徳川幕府の上海貿易使節派遣のことを記す。本書は民國二十二年中華書局發行「中國五百年史資料續編（左舜生輯）」にも収録されてゐる。

蘇報案紀事

光緒二十九年鏡今書局印行。二巻、章炳麟、鄒容等が上海蘇報といふ新聞により革命思想を煽動して捕へられた當時の始末を記す。原書未見。當時の「中國白話報」に本書上巻の出版廣告が載つてゐる。

共和關鍵錄

劉汝霖編

民國元年活版、一厚冊。民國創立の初め、清廷は南京政府と上海において和議を進めたが、當時南京側の代表は在廷芳で、秘書だつたのが本書の編者である。収むるところは會議に關する電報、書翰のみ。

宋案真相

程德全編

民國二年三月二十日上海群における宋教仁暗殺事件の報告書。江蘇都督程德全、民政長應德閔から袁世凱に電呈せるもの。左舜生の「中國近百年史資料續編」に收めらる。

癸丑戰事彙錄

洪越、殷榕同共編

民國二年出版、第二革命當時の電報、書翰、新聞の論說等を集む。

五卅痛史

民國十四年北京晨報編輯處清華學生會編印、四六版、四五八頁。

五卅事件

民國十六年上海國際問題研究會編印、四六列、一四〇頁。

滬戰紀實

韋息予、王璠郊共編

開明書店發行の上理事變史。その他民國二十一年、二年に出た上海事變關係の書に王禮錫著「戰事日記」、華振中、朱伯廣共編「十九路軍血戰抗日史料」、徐怡、劉異共編「淞滬禦日戰史」、翁照垣著「淞滬血戰回憶錄」、李浴日著「滬戰中的日獄」、中國史事研究社編「淞滬抗日畫史」、梁雪清、徐國植共編「滬淞禦日血戰大畫史」などがある。

上海撤兵區域接管實錄

民國二十一年上海撤兵區域接管委員會編印。上海事變の結末における日本軍占領地區の返還事情を記録す

八十年來之江南傳教史

史式徵著

民國十八年史式徵(J. S. H. Service)原著、金文祺譯、土山壽印書局發行、六二頁。上海徐家匯を中心とする天主教傳道史。

文定公徐上海傳略

徐宗濤 編

民國二十二年徐光啓三百年祭に出版せるその傳記。土山溥印書局刊、三〇頁。

徐文定逝世三百年紀念文覽編

徐宗濤 編

民國二十三年聖教雜誌社發行。黃節氏の「徐光啓傳」(もと國粹學報所載)、竺可楨氏の「近代科學先驅徐光啓」(もと申報月刊所載)その他徐光啓に關する論文を輯録す。

徐匯紀略

徐家匯天主堂編印の小冊。

上海城隍廟

火雪明 編

民國十七年出版。邑廟の沿革、神話、三巡會、新年の市、動物院、邑廟の土産品等について叙述す。

對山書屋墨餘錄

毛祥麟訂

同治九年刊、十六卷。著者は對山と號し、上海の人。珍聞奇談、上海の故事に關する筆記集で、阿片戰爭當時の「壬寅避寇小志」や太平天國時代の「記癸丑滬陷時事」などは史料として價値があり、その他「廣方言館」、「土產」、「露香園顧繡」、「洋商租地」等参考とすべき記事に富んでゐる。

庸閒齋筆記

陳其元撰

同治十二年檢古齋印行、十二卷、自叙一卷、五卷。金縷の序あり。著者字は子莊、庸閒老人と號し、海昌の人同治十年頃上海の知縣だつたので、この關係業には主海のことも書かれてゐる。

瀛壖雜誌

王韞撰

光緒元年刊、六卷。多く上海の史話を記す。著者字は紫詮、江蘇市里の生れ、十數種のペンネームを有し著書は約四十種に及ぶ。太平亂の當時、叛軍に策略を教へたとの嫌疑を受け、外國領事の保護を得て香港に逃れた。後英國に赴き、日本にも遊んだことがある。本書の大部分は商務印書館發行「歷代小説筆記選」清

(五)に收められてゐる。

隨園瑣記

袁祖志撰

光緒五年刊、上下二卷、蟬隱廬書店の重刊新書あり。著者字は翔甫、錢塘の人で、袁隨園の孫に當る。著者の兄袁祖惠は上海の知縣であつたが、太平亂の際小刀會匪の手に殺された。この書は太平軍に焼かれた南京における祖父の遺物を追記したものに過ぎないが、附録に兄の上海における殉難事蹟を詳しく記してゐる。

淞南夢影錄

黃協埏撰

光緒九年版、四卷。原題に略香留夢室戲編とあり、著者また黃本餘とも稱す。多く同治、光緒年間の上海瑣事を述ぶ。

滬遊臆記

黃楫材撰

最古の上海案内記である。著者字は豪伯、千頃波漁者とも號し、江西上高の人で、清末洋務に通ぜざるをもつて有名であつた。この書は同治五年彼が南昌から來滬し、一年二ヶ月の上海滞在中外人から聞き知つたと

ころを記述したもので、當時の租界の諸制度から西津各國の政教、風俗、遊興にまで説き及んでゐる。光緒二十四年湖北沔陽の李世助の編纂した「鐵香室叢刊續集」に収めらる。

滬游雜記

葛元煦撰

光緒二年出版、全四卷。卷首に英米佛三租界の地圖と各國の國旗、商旗の圖解があり、内容甚だ多岐に亘るが、記述は頗る要領を得た案内記である。著者は字を理齋といひ、武林の人で、上海在住十五年目にこの本を書いた。明治十一年この書は「上海繁昌記」と改題して日本で翻刻せられてゐる。この日本版は原書の地圖と國旗圖を省いて別に安田老山の上海風景畫を口繪に挿入し、第三卷の一部と第四卷の大部分を省略して全三卷に改め、調點と譯註を施してある。「上海繁昌記」は更に昭和五年上海吉田號の前支配人佐々木大助氏により影印せられた。

遊滬筆記

鄒虢撰

光緒十四年版、四卷。著者は金匱の人、字は翰飛、瘦鶴詞人と號し、詩詞に巧みで、上海に寓居すること約六十年、民國二十年八十二歳をもつて卒した。この書はその早年の作であるが、内容は名勝、古蹟、商業

風俗等を記し、案内書として完備してゐる。

上海葬場景緻

蔡林蕪主撰

光緒二十年管可壽齋印行、四卷。上海の遊覽、娯樂の案内書で、特に戲園、妓院について詳しい。「葬場」とは「夷場」すなはち租界の舊稱である。

春江燈市錄

鄒 致 撰

光緒十年二石軒刻本、二冊。上海の案内記で、「遊園筆記」と略々同じものと思はれる。同じ著者の「春江花史」と合本して「上海花天酒地傳」とも稱してゐる。

上海繁華小志

光緒十年の出版、撰者未詳。

雜 著

黃 夢 暉 著

近人の隨筆集らしく、中に上海初期の競馬の有様など書いてあるやうである。

申江名勝圖說

管可壽畫版

光緒十年柔雲館發行、上下二卷四十二圖、香園頭陀の序あり。繪と文による上海案内書で、當時の風俗を知るに貴重な資料。中に「東洋妓女手撥三弦」とか「電氣燈懸光明如晝」など、いふ奇抜なのがある。

申江勝景圖

吳友如畫

光緒十年點石齋版、申報館發行、二卷。上海の名所風俗六十餘圖を収め、各々詩詞を附す。「東洋茶樓」と題する支那人相手の邦人茶館の圖などもあり、漢書とともに上海史の好例の資料である。光緒十九年申昌書室により再版さる。

申江時下勝景圖說

談瀛客編

光緒二十年文寶書局發行、二卷。「滬游雜記」の記事を「申江勝景圖」の模寫が多い。

繪圖上海雜記

藝狀臥讀生編

光緒三十一年文寶書局石印、十卷。これも「申江勝景圖」と「滬游雜記」、「遊滬筆記」の記事とを合せて再編したもの。

滬江商業市景詞

頤安主人撰

光緒三十二年石印、四卷。陳樹珪の序あり。卷一の市景論を除けば他はみな七絶詩で、名勝・古蹟のほか各種の商工業について夫々一詩を詠じてゐる。たゞ詩のみで註釋がないのが物足らない。

胡氏雜抄

胡祖德編

民國元年活版、一冊。上海に關する書籍及び零篇文章四十二種を抄録す。中に姚廷選撰「姚氏紀事編」あり、姚氏は代々城内會館街に居住してゐた舊家で、記すところは明の崇禎元年から清の康熙三十六年に至る上海の掌故である。その他「上海竹枝詞」、「滬北竹枝詞」、「記邑廟玉玲瓏石」等を収む。

滬人寶鑑

黃人鏡著

民國二年華美書局發行、四卷。英華兩文の自序あり、第一卷は公共租界歴史提要その他租界の諸制度、第二卷は交通事情、第三卷は遊覽案内、第四卷は魔都上海の災難豫防法を記し、附録として宗教道德論、商業永久策、中國救急論などを收む。

上海閒話

姚公鶴著

民國六年商務印書館發行。上海在住二十年の見聞と上海の故事に關する筆記で、批評に互る箇所も多いが、金融事情、ゴム株の流行など比較的新しい頃の經濟記事に面白いところがある。

一激研齋筆記

東塔山民撰

民國甲戌刊、八卷。主として江南地方の史事、人物、文藝、巷説に關する隨筆を收む。上海に關係したのも多少ある。

秦景容先生事蹟考

秦錫田撰

民國二十二年刊、全書一冊。明の太祖の再三の招聘を拒けた上海の名望家秦檜伯の事蹟を、その裔孫が編纂したもの。

享帚一錄

秦錫田撰

國民二十年印行、八卷。著者は硯畦と號し、七十歳の祝ひにこの書を作る。論説、建議案、詩文、自傳等を收め、上海の近代史に關係ある記述多し。

松蔭畫漫錄

松蔭畫撰

民國十五年出版、四冊。同治から光緒にかけて申報紙上に載つた巷談を集めたもの。一名「尊聞閣筆記」ともいふ。尊聞閣とは申報館の中に懸つてゐる扇額に由来する。

且頑七十歲自敘

李鍾狂撰

民國十二年印行、四冊。著者は浦東の生れ、字は平書、琴齋と號し、晩年且頑老人と號した。この書は古稀祝ひの時に出した自傳で、同治初年太平軍の上海地方擾亂に父母と共に避難した幼時の記憶から筆を起し、丁機奉公、受験、仕官、革命運動、日本亡命、企業等を年次を追ふて記述し、處々に詩文を挿んである。辛亥革命の際は上海製造局占領のことに参加したので、書中當日の情形を記した條は甚だ正確である。

汪穰卿筆記

汪康年撰

全八卷、光緒末年の作だが、出版されたのは民國十五年。著者字は穰卿、錢塘の人で、光緒の時維新に参加し、上海で中外日報を創刊した。本書の初めの六巻は、清末の外変事情及び上海の社會事情に關する資料として價值がある。

藕初五十自述

穆湘玥著

民國十五年商務印書館發行。著者は上海の人で、藕初と號し、評論家としても知られてゐるが、元來紡績關係の事業家である。この書は五十歳の時に書かれた自傳で、卷末に「藕初文錄」二巻を添ふ。上海の舊式花行その他棉業に關する歴史的資料である。

徐愚齋自叙年譜

徐潤撰

民國十六年刊行、全二冊。著者字は雨之、愚齋と號し、廣東香山縣に生れ、十五歳にして上海へ來り、絲茶問屋の手代を振出しに、次第に實業家として大をなし、招商局、保險會社、炭礦、出版會社、製紙工場、錢莊、地産會社等々種々なる企業に關係し、宣統三年七十四歳をもつて逝いた。その上海在住六十年間の閱歷、見聞を克明に記した自傳であるから、初期の茶貿易、招商局の開設事情、絲業公所、茶業公所の創設等近代經濟史の貴重な資料と稱してよい。卷末に「上海雜記」内外二編あり、これまた上海初期の經濟發展を數字的に記録したもので、文人の隨筆などとは大いに趣きを異にしてゐる。

老上海卅年見聞錄

周瘦鵬著

民國十七年大東書局發行、上下二冊。文字通り老上海の見聞錄で、興味深い實話を豊富に集めてゐる。

上海小志

胡寄凡著

民國十九年傳經堂書店發行、十卷、活版本一冊。胡適の序文あり。開港事略、市政、交通、文化、舊蹟、

生活、梨園、妓寮、酒肆、雜記に分つて歴史的記述をなす。

上海生活

徐國瑛編

民國十九年世界書局發行。隨筆風に上海の衣食住と娛樂を記す。

海上百大風流案

陳聽潮著

民國十九年華生書店發行。繪入り本、一一二頁。小報に載せた軽い短篇物の上海市井情話、奇談を集む。

最近百年上海歴史演義

張恂九著

民國二十年南星書店發行。上下二冊。全文三十餘萬言、八十回に分ち、昔の小説風に、上海の歴史、社會事情を描寫す。著者は南沙の人、若き頃革命に参加し、清廷の遺跡を逃れて租界に止まつた老上海である。

上海鱗爪

郁慕俠著

民國二十四年上海滬報館發行。上下續三集に分る。上海の民俗、故事に關する小話を集む。

花間樓帖

抱五生撰

成豐十年の書、二卷。當時の上海名妓百數十人への讃歌で、この種の本としては古いもの。申報館の「四漢瑣紀」叢書に収められてゐる。

海陬冶游錄

玉鮫生撰

光緒四年の活字本、本文三卷、附録三卷、餘録一卷に分れ、滬北玉鮫生撰とあるものも實は玉鮫の著である。同治、光緒年間における上海の花柳界を叙したもので、城内から租界への青樓の移動状況が知られ、極めて流麗な詩詞聯語をもつて綴られてゐる。

滬隱漫錄

王韜撰

光緒十年作、十二卷。吳友如の輸入り本あり。著者が上海で書いた奇聞集で、卷十一に上海にゐた日本妓女達の列傳を叙し、また卷一には東京新富座の「お傳」劇のこと、卷八には日本橋の名妓十七人の評判記を書いてゐる。

淞濱瑣話

王 韜 撰

光緒十三年王韜六十歳の時に書いた小話集で、全十二巻。その巻七「談叢」及び巻九「江間客撰」「紅豆齋軒落俚詩」は當時の上海花柳界の消息を傳へてゐる。同じく巻九の「東瀛遊記」はわが明治二十年頃の新柳二橋の一流美人を批評してゐる。これ等はまた同じ著者による「滄庵續錄」(光緒十三年、五巻)に吳友如の挿畫入りで収録されてゐる。

歇浦芳叢志

王 韜 撰

原書未見なるも著者の著作目録にあり、全四巻。これも多情多感のかれが、上海の花事について記したもののらしい。

上海品豔百花圖

王 某 撰

光緒十年の木刻本。巻首に光緒五年個人中の序あり。もと花下解人の原稿で「百花榜」といつてゐたのを後に別人が改訂して「百藝圖」と改題し、更に王某某の刊行に際して首題の通り名づけたのである。當時の

妓百人を高品、美品、逸品、豔品、佳品の五種に分ち、各人毎に七絶詩を題して小傳を附し、そのうち、尤なるもの十人の肖像を掲げた珍書である。

申江洋場繁華吟

安定撰

光緒十年版の木刻、二冊。花柳界の詩詞、妓女の番附、上海地名雜語對などを收む。

滬上新畫百美圖

王某撰

光緒十年木刻袖珍本。これも内容は花柳界の歌や美人番附で、口繪數葉を附してゐる。

海上群芳譜

憶情侍者撰

光緒十年申報館發行、四卷。その頃の上海名妓百人を拉し來つて、これを清品、麗品、逸品、秀品の四種に分ち、各人を夫々各種の花にたとへ、詩を題して小傳を附す。中に關田仙といふ一人の日本女子あり、その小傳の中に當時流行の『東洋茶樓』の説明がある。

詞媛姓氏錄

不羈生撰

申報館發行、一卷。清の同治、光緒年間の上海彈詞女子の姓名と當時申報に載つた詩詞、評語を採録したもの。

春江花史

鄒 弢 撰

木刻袖珍本、二卷。光緒中葉の妓女百人の列傳で、これには寶玉生、王玉生の二人の日本婦人が入つてゐる。

柔鄉韻史

詹子渠撰

妓女百人の列傳、原書未見。

海上中外青樓春影圖說

光緒十三年大同書局石印。上海における「中華」、「日本」、「外國」、「廣東」の美妓四十數人を選んで身世

を叙し、精緻な挿繪を入れたもの。これには日本婦人が寶玉生以下十一人選ばれており、或は羽子板を手にし、或は三味線を膝にし、或は洋傘を携へた着物姿の繪が出てゐる。

海上青樓圖記

沁園主人畫

光緒十八年花雨小築居石印、四卷。海濱書同様の美人群像本、数むるところの妓女百零二人。

海上名花四季大觀

晚香居士撰

光緒二十年石印。春夏秋冬の四季に分つて花柳界の模様を叙し、妓女番附、名妓の書翰などを附録とす。當時の風俗叢集として窮て難い。

海上冶遊備覽

指迷生撰

光緒九年初版、十七年再版、寄月軒木刻本、四卷。上海遊里の手引として最も珍なるもの。

滬江色藝指南

光緒三十四年公益書社發行、一冊。これも花叢里巷の案内記。

海上花影錄

民國四年新中國圖書館發行、二集に分れ、妓女の小影のほか、「花叢逸事」、「青樓韻語」等を附す。

海上名花時裝百美圖詠

民國四年才記書紙棧發行、石印二冊。

上海六十年花界史

汪了翁撰

民國十一年時新書局發行、洋裝活版本一冊。咸豐、同治年間から民國十年に至るまでの上海花柳界の歴史を纏めてあり、取材頗る豊富。

海上青樓沿革記

張春帆撰

著者は澁六山房主人とも號し、小説「九尾龜」の作者として有名である。青樓沿革記は民國二十年頃の撰

にかゝり、「萬歲雜誌」第一巻に連載されたが未完結のやうで、單行本は存在しない。

上海雜誌

宣統二年頃集成圖書公司編印、全六冊。上海の雜事を叙し、圖畫を主として説明を附す。

上海市通志館期刊

通志館發行

舊市政府が上海史編纂のために、民國二十一年七月佛羅里薩波賽路二九一號に設けた上海市通志館の四季報で、第二年まで出されてゐる。第一年分の合本は一一八二頁、第二年分は一五〇八頁に上る大冊で、將來通志の一部を構成すべき貴重な研究の成果を収めており、華文資料中最も權威あるものである。初め非賣品だつたので、そのうち一般的に興味のある研究は、別に「抽印本」として發行されてゐる。抽印本には、「吳淞江」、「上海圖書館史」、「上海在太平天國時代」、「關於上海的書目提要」、「上海新聞事業之史的發展」等十種ほど出てゐる。

徵信錄目錄

通志館編

上海市通志館收蔵圖書目録の第一號で、民國二十五年七月印刷された。同館にある各種の會館、公所、會社、商店、工會、同業公會、慈善團體等の古い帳簿類の目録である。ヤルドの研究資料として、それ等は甚だ得難いものである。

三個收蔵記述上海的西文書籍的目録

胡道靜編

上海史文獻の蒐集家として知られる獨逸人S・B・ボヅツク氏、事變前の上海市博物館及び上海市通志館の所蔵する歐文上海關係書目を收む。「禹貢半月刊」第六卷第六期の抜刷本である。

雜誌創刊號目録

通志館編

上海市通志館收蔵圖書目録の第三號に當るもので、謄寫版刷り。同館所蔵の各種支那雜誌（多くは上海發行）の創刊號六百種の目録である。

上海曹氏書存目録

曹驥撰

曹家十代に亙る藏書目録で、邑志にないものが多数輯録されており、上海文化史の一資料たるを失はぬ。

「上海掌故叢書」にあり。

上海市年鑑

上海市通志館編

民國二十四年初版、二十五年版及び二十六年版と三回出てゐる。上海の氣候、土地、人口、政治、經濟、教育、宗教等各方面の事象を記述す。四六判厚冊、發行所は中華書局。

上海特別市

市政府編

民國十八年上海市政府刊行の小冊子。民國十六年五月から十八年十一月までの大事記、市區域表、市政府組織系統、市政統計表を収録す。

新上海新年紀念集

新上海報社編

民國二十四年一月發行、新上海報の紀念號。上海市の概況、都市計畫等に関する記述のほか、上海の歴史に就ての論説、考證を豊富に収録してゐる。この歴史物の部分は多く通志館の人々の筆になるもので、後に「上海研究資料」に再録された。

上海研究資料

上海通社編

民國二十五年中華書局發行、初集六九六頁。民國二十八年版「續集」七五六頁。民國二十三年以來「大晚報」上海週刊及び各種新報紙上に載つた通社同人の上海史に關する研究、考證を修訂して収録し、兩集とも珍しい寫眞數葉を附す。上海通社は通志館の徐蔚南、吳靜山、胡道靜その他諸氏によつて組織されてゐるもので、その研究態度は頗る誠實、作品また詳細正確、信用するに足る。

上海指南

商務印書館編

宣統元年初版の最もよく纏つた上海案内書で、民國三年までに八版を重ねてゐる。巻末に「滬蘇方言紀要」を載す。同じく宣統元年に英文案内記の譯で「旅滬指南」といふのが、壽文公司から出されたこともあつたらしい。

上海市指南

沈伯經、陳懷國共編

民國二十二年中華書局發行。

大上海指南

楊培藩編

民國二十五年中華書局發行。

上海門徑

王定九編

民國二十一年中央書店發行。

上海風土襟記

民國二十一年上海信託公司發行。

上海的一般

洪佩齊編

民國十九年光明出版部發行。繪と文による上海要覽。吳友如の寫生畫と現在の寫眞との對照あり。

上海的將來

民國二十三年中華書局發行、四六列九〇頁、雜誌「新中華」の附録。上海の將來觀につき學者、評論家、文士七十九名から回答を求めて収録したもの。

上 海

韋 息 予 編

民國二十一年大江書舖發行。少年文庫の一部で、上海各方面の状況を簡述す。

上 海

王 春 濤 編

民國二十四年上海青年會智育部發行、四六列二〇二頁。黃任之の「上海的回顧」その他各専門家の上海に關する講演を集む。

新 上 海

唐 幼 峯 編

民國二十年上海印書館發行。

統計表中之上海

羅 志 如 編

民國二十一年中央研究院社會科學研究所發行。

上海市之沿革

蔣筌梧 著

上海の都市成立の原因、政治的地位の形成を論じ、清代以前から上海事變に至るまでの歴史的事象を要領よく記述せるもの。昭和十年及び十一年國際協會同文書院學生支部發行の集誌「國際」に赤松良一氏の譯が載つてゐる。

上海棉布

徐蔚南 著

民國二十五年中華書局發行、二二頁の小冊。上海市博物館叢書の一つで、上海の昔の手工製綿布に關する解説書、寫眞を附す。

上海之工業

民國十九年上海市社會局編、中華書局發行。民國二十五年改訂「上海之機械工業」と題して再版す。

上海之小工業

民國二十一年中華國貨指導所編印。

上海市之國貨事業

民國二十二年農報社發行，四六倍刊一七三頁。

近十五年來上海之罷工停業

民國二十三年上海市社會局編，中華書局發行。

上海之農業

民國二十三年上海市社會局編，中華書局發行。

龍華桃

民國十八年上海市社會局編、大東書局發行。

龍華指南

民國六年上海孤兒院編印の小冊。

龍華今日

民國二十二年出版、龍華の古跡、交通、教育、實業、物産、民俗、上海事變の影響等を記す。

上海市場

潘忠甲編

民國十四年出版、財政部駐滬調査貨價處叢書の一。上海の紙業、洋雜貨、煙草、海産物、麻袋の五種商業につき詳述す。

上海商事慣例

嚴謬慶編

民國二十二年新華通訊社發行。

上海銀行公會事業史

徐滄水著

民國十四年長沙發行、四六列一五六頁。

最近上海金融史

徐寄廛著

民國十五年初版、その後歷次增訂してある。

上海罷市實錄

海上閩人著

民國八年正義社發行、上下二卷。五冊運動當時の上海罷市の状況を録す。

上海租界問題

王揖唐著

民國十三年商務印書館發行、一冊上中下三編。上編は租界の沿革と發展、中編は租界の裁判制度、下編は上海の掌故、瑣事を記す。著者は現在國民政府の要人。

上海公共租界略史

民國十七年上海宣傳部編譯政印行とあるも、上海市黨部はこれを帝國主義の走狗が出版した反動刊物なりとして發賣禁止した。

滬租界前後經過概要

民國十四年出版、五卅事件の刺戟を受けて書いたもの、但し一九頁の小冊。

王 璣 著

上海公共租界收回問題

王 世 杰 著

民國十六年太平洋書店發行。

上海公共租界制度

徐公廩、丘瑾璋共著

民國二十二年中央研究院社會科學研究所發行。

租界制度與上海公共租界

阮篤成 著

租界問題

樓桐孫 著

十年來上海市公用事業之滯進

民國二十六年上海市公用局發行，主として統計圖表をもつて市營公共事業の發展を録す。

上海市地價研究

張輝 著

民國二十四年正中書局發行，四六倍判九六頁。中央政治學校卒業論文集の第二輯。

上海地產大全

陳炎林 著

民國二十二年發行、九二六頁。

游 清 五 錄

高杉晋作著

文久二年上海互市のため幕府から派遣された使節について、上海に渡航した高杉晋作の手記。その内容は「航海日録」、「上海滞留日録」、「長崎滞留日録」、「内情探索録」、「外情探索録」から成り、そのうち航海日録と上海滞留日録とは漢文で書かれてゐる。大正五年民友社發行「東行先生遺文」に収められてゐる。

上 海 行 日 記

中牟田倉之助稿

文久二年の上海派遣船に佐賀藩から乗込んだ中牟田倉之助の手記で、同人にはこのほか「航海日録」、「上海滞留中雜録」、「公儀御役々唐國上海表にて遺書其外と應接書」等の稿本があり、その要領は大正八年中村孝也氏著「中牟田倉之助傳」に見えてゐる。

五 代 友 厚 傳

五代龍作編

大正八年發行、九年訂正再版。文久二年の上海遣使に隨行した薩藩の五代友厚の傳記。その第一章に上海

渡航のことを記述す。なほ五代については、友厚會編「近代の偉人故五代友厚傳」、直木三十五著「五代友厚」等がある。

唐國渡海日記

松田屋伴吉稿

文久二年の上海渡海船に長崎から参加した商人の手記。同人はこのほか「唐國行御書付寫並何書控」、「會所より御持越之品」、「於上海諸品賣買帳」その他上海互市に關する十冊の帳簿を記しており、これ等の資料の内容は、大正十五年平凡社發行、故川島元次郎氏著「南國史話」に紹介せられてゐる。

黃浦誌

山口錫次郎稿

元治元年における幕吏の上海觀察記で、上海への往復及び滞在日記と附屬見聞書（風土誌、港則、運上所規則）とから成つてゐる。原本は帝國圖書館所藏、新村出氏著「遠西叢考」（昭和十年樂浪書院發行）にその寫しと武藤長藏氏の註釋が載つてゐる。

上海紀行

安部保太稿

作者は遠州濱松の町年寄、慶應三年幕府の上海派遣使井上河内守の家來名倉予何人、大林虎次兩人の從者として渡滬した時の日記。遠州笠井町森田氏所藏。

壯遊實錄

名倉予何人稿

文久二年幕府の第一回上海遣使及び慶應三年第三回遣使に参加した。濱松藩士名倉予何人の遺稿、ほかに「航海日録」、「三次壯遊録」、「壯遊餘談」、「再遊海外小詩」、「三次海外遊詩」等と題する手記もある。濱松内田旭氏所藏。

名倉松窓傳

石川象六稿

名倉予何人の傳記、「東洋文化」第五十號に掲載さる。

曾我祐準翁自敘傳

坂口二郎編

昭和五年刊。曾我は慶應年間上海に来たことがある。

幕末外交談

田邊太一著

著者は元治元年池田榮後守等に隨行上海經由歐洲に使し、維新後外交官として對支交渉に關係した。本書には文久二年の千歳丸上海派遣についても聞き書を載せてある。

吳淞日記

岸田吟香稿

慶應二年九月から翌年五月に至る上海滯在中の日記。

西嶺山遺稿

西虎太編

二卷。西嶺山、名は毅一、岡山の人、明治三年上海に遊び留まること一年餘。その當時の日記あり。

入清日記

柳原前光稿

明治三年及び四年上海經由北京に使したる時の日記。この柳原大使に隨ひ渡清した長三洲も、詩文書畫を能くしたから、何か上海に關して書き残してゐるかも知れぬ。

小栗栖香頂略傳

小栗栖憲一著

明治四十年刊。東本願寺から布教のため明治六年上海へ渡り、別院建立の基を礎いた香頂師の傳記。

八洲日歴

小栗栖香頂稿

一百六十四卷。香頂師は八洲と號す。その自傳的日記である。

滬吳日記

岡田穆著

明治五年刊、二冊。著者は蘇所と號し、長崎の醫者。同年上海に航し、更に蘇杭の間にも遊歴した時の日記を漢文にて認む。

北清視察日記

酒井玄蕃著

明治七年北京に使し、歸途上海、漢口に遊びたる時の日記。「對支回顧錄」下巻に全文收録されあり。

清國地誌

岸田吟香編

明治十五年刊、和綴繪入り本三冊。

清國各港便覽

會根俊虎著

明治十四年刊、折本。著者は明治六年以來屢々上海に出盡、相當期間滞在した海軍將校。清佛戰爭に淺からぬ關係を有す。

清國漫遊誌

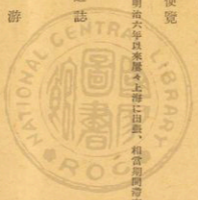
會根俊虎著

明治十六年刊、四六判洋本。

觀光紀游

岡千仞著

著者字は振衣、鹿門と號し、仙臺の人。これは明十七年五月上海から蘇杭を経て北京に至り、再び上海に引返して更に廣東にも遊び、翌年四月歸朝するまでの遊記。竹添井々の「棧雲峽雨日記」と併び稱される名



著であるが、これは多く交友録に傾き、書中上海知名の支那文人が盛んに現れる。

上海紀游

館森鴻稿

著者は明治十七年上海より福建にかけ旅行したることあり、書名不確かなれどその遊記あるらし。

清國巡回記事

宮里正靜著

著者は薩摩の人、農商務省の砂糖技師として、明治二十一年支那各地の商況を視察す。これはその報告書で、上海のことも詳細に記してゐる。

禹城通纂

橋原陳政著

明治二十一年大蔵省刊、上下二巻、菊判二〇三三頁。著者は明治十五年支那に留學を命ぜられ、前後六年間に殆ど全支を巡遊し、「大清會典」を参考としてこの書を成す。

清國新聞港場商業視察報告書

高柳豊三郎著

明治二十九年末名古屋商業會議所發行。馬關條約に依り開港せられた直後の蘇州、杭州、沙市、重慶の視察記だが、神戸上海間の航路、上海の管見、上海蘇州間内河航路についても記述してゐる。

燕山楚水紀遊

山本 憲 著

明治三十一年刊、和綴輸入り本二冊。著者は梅嶺と號し、大阪の漢學者、明治三十年九月北京から南下し上海、蘇州に來り、漢口にも遊んで引返した時の紀行を漢文で認む。

實歷清國一斑

西島良爾 著

明治三十二年刊、假綴袖珍本。

燕山楚水

内藤湖南 著

明治三十三年刊、四六判假綴。

支那現情

長江子 編

明治三十三年刊。上海事情の記述もあらうと思ふが、原書未見。

南 清 貿 易

小山松壽著

明治三十四年刊、早稻田小篇。上海貿易についても書かれてゐると思ふ。

清國商況視察復命書

榎原陳政著

明治三十五年外務省通商局刊。上海に關しても約一〇〇頁近々の記述がある。

支那富源楊子江

藤戸計太著

明治三十五年刊。經濟事情を述ぶ。

蘇 浙 小 觀

遠山景直、大谷藤治郎共著

明治三十六年東京江漢書屋發行、三五五頁。主として上海の事情と航運の狀態につき記す。

上海

遠山景直 著

明治四十年上海にて刊行。邦人によつて書かれた上海案内記の最初の最も纏まつたもの。日本商店と題せる一節の如きは、明治元年以來廿三年までの在留邦商の盛衰を逐一記録し上海邦人史の貴重な資料をなす。

巨人荒尾精

井上雅二 著

初版は明治四十三年であるが、昭和十一年東洋同文会で再版した。日清貿易研究所の創立者たる東方齋荒尾精の傳記で、研究所設立當時の上海事情、滬漢廣運館（商品陳列所）、樂善堂、東洋學館等に關する記述があり上海邦人發展史の重要文獻である。尙荒尾精については最近佐藤瑠石の興味ある傳記小説が出された。

清國總稅務司サー・ロバート・ハイト

高柳松一郎 著

明治四十二年刊、菊判洋本。

金玉均

葛生玄暉 編

大正五年刊。朝鮮獨立黨の首領金玉均の傳記。明治二十七年金は上海東和洋行で王妃黨の手に黨殺された。

金玉均銃殺事件

名倉龜楠編

明治二十七年刊、菊判假綴。

南清紀行

佐藤善治郎著

明治四十四年刊。

支那遊記

前田利定著

大正元年刊、四六判假綴。

蘇浙見學錄

來馬琢道著

大正二年刊、四六判假綴。

上海案内

島津長次郎編



大正十三年金風社發行、後に日本堂發行の上海案内書で十一版まで重版してゐる。上海の歴史から行政施設、名所、舊蹟、名物、珍談、奇習に至るまで細大漏さず記述しており、現在では歴史的文獻に数へてよい。

上海百話

池田桃川著

大正十年上海日本堂發行。明治、大正年間の上海における日支人の生活を叙した雑話集である。同じ著者により「續上海百話」も出されてゐるが、この方は史料的价值に乏しい。

上海の貧民相

井上紅梅著

東亞研究會發行、東亞研究講座の一つ。

燕吳載筆

那波利貞著

大正十四年同文館發行。著者の支那遊記で、上海では大英欽差亞洲文會及び徐家匯天文臺につき沿革的に記してゐる。

上海人物印象記

澤村幸夫著

昭和五、六年東亞研究會發行、二冊、四六判。

上海風土記

澤村幸夫著

昭和六年上海日報社發行。著者が大毎上海支局長時代に子息達に書送つた通信や現地の新聞に書いた隨筆考證などを集めたもので、上海初期の在留邦人、上海の風物、支那文壇、學界の消息その他を巧みな筆致で紹介し、情趣豊かな書である。

江浙風物誌

澤村幸夫著

昭和十四年東亞研究會發行。「棉花生日」、「顧補」、「法華の牡丹」、「龍華の桃」、「紅楓の墓」など上海に関する項が少くない。

支那之實相

大村欣一著

昭和四年東亞同文會發行、著者の遺稿集、「支那開港以前の各國關係」及び「江南三角洲の史的考察」の二つは上海史に關係多き好論文。

● 黒船前後

服部之總著

昭和八年大畑書店發行。史的考證を主にした物語集で、中に「上海由来」と題する一文あり、ギョウラフの傳記から始め、上海開港の顛末を述ぶ。

東亞先覺志士記傳

黒龍會編

昭和八年末發行。上中下三巻。明治初年より日露戰爭前夜に至る期間の我國先覺志士が興亞の運動に盡瘁した模様を記す。上海における邦人活躍の先驅についても多くの頁を割き、東洋學館の設立、芝尾精、根津一等の活動、岸田吟香の事業等記すところ甚だ精細である。

對支回顧錄

東亞同文會編

昭和十一年四月初版、六月訂正再版、上下二巻。東亞同文會内對支功勞者傳記編纂會の編纂にかゝり、責

任執筆者は中島眞雄氏。上巻は對支發展史の概説で、海運業、銀行の進出、對支文化施設等に上海に關するものがあり、下巻は列傳で、上海關係の過去の重要人物は殆ど悉く網羅されており、記述正確詳細、興味深々たるものがある。

東本願寺上海開教六十年史

高西賢正編

昭和十二年東本願寺上海別院發行、四一八頁。明治六年から昭和十二年に至る東本願寺の支那開教の事蹟を、上海別院を中心として記述したもの。前半は藤井草堂氏、後半は石崎達二氏の執筆にかゝる。本願寺は初期の上海邦人教育事業にも重要な役割を演じたので、宗教方面のみならず教育史の資料としても注目される。本書第九編に收められた明治初年以來の師僧の日記その他の諸資料は、原文のまゝであるだけに殊に貴重である。

支那貿易案内

長谷川宇太治著

大正三年東京亞細亞社發行、八八五頁の大冊で、各種商品の取引状況を詳述した支那貿易業者のための手引書であるが、日露戦争直後の上海在留邦商の動靜にも言及しており、その頃の上海における賣藥行商の面

白い體験談を載せてゐる。著者は櫻峰と號し、明治三十八年仁丹宣傳のために初めて來滬した人。大隈伯、益澤男等の序文がある。

上海に於ける日本及日本人の地位

大正四年外務省通商局刊、上海總領事館内山書記生報告。商工業方面の調査で、極めて有益なる資料。

上海及營口事情

大正四年農商務省工務局刊。

大 上 海

内山清、山田修作、林太三郎共著

大正四年大上海社發行。著書の内山氏は當時總領事館の書記生、山田氏は農商務省の派遣員、林氏は在留實業家である。上海の沿革、氣候、衛生、諸制度から諸商品の取引事情に及ぶ總覽的解説書で、發行當時非常な好評を博したものである。

上海貿易品

林太三郎著

大正六年大上海社發行。商品別に大正初年頃の上海對日輸出入貿易を詳説してゐる。

世界貿易上より見たる上海と長江

伊吹山徳司著

大正八年發行。一三二頁、非賣品。大正七年八月以降「上海經濟時報」紙上に「上海の近き將來」と題して連載されたものを改題、單行本としたもの。著者は黃浦江改修局評議員をしてゐたので、汽船と港海との觀點から上海を論じてゐるところは甚だ啓發的である。

上海概覽

大正十二年上海日本商業會議所發行、菊野健二九二頁。

上海日本商業會議所年報

昭和二年以來毎年發行。

在上海帝國總領事館管內狀況

大正十年外務省通商局刊。

上海事情

大正十三年外務省通商局刊。

上海經濟年鑑

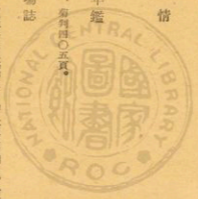
大正十三年上海每日新聞社編、每刊四〇五頁。

支那開港場誌

東亞同文會編

その第一卷中部支那(大正十一年發行)は上海のみに約八百頁を割き、沿革及び諸制度施設を詳細に記述す

經濟的發展に伴ふ上海大築港計畫案



黃浦江改修局技師長ハイデンリュタム氏報告及びこれに對する上海航路標識局長の意見。大正八年日本郵船上海支店翻譯刊行。

上海埠頭調查報告

荒木 寧 編

大正十一年滿鐵社長室調查課刊調查時報第二卷第三號附錄。

上海 港

織岡芳太郎編

昭和四年三井物産上海支店刊。昭和十年改訂増補。

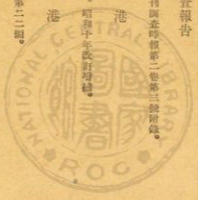
上海 港

河端勘左衛門

滿鐵庶務部調査課刊調査資料第二二編。

「支那研究」上海研究號

昭和三年十二月東亞同文書院發行 of 雜誌「支那研究」の特輯號。同校教授總動員で執筆し、八百頁の大冊



をなす。小竹文夫氏の「上海の沿革」、故山田謙吉氏の「徐光啓附徐家匯天主堂」、太谷孝太郎氏の「上海に於ける同郷團體及同業團體」其の他見るべきものが多い。同雜誌は後にも一度「續上海研究號」を出してゐる。

上海一覽

山崎九市著編

昭和元年上海亞誠堂發行。著者は上海信託會社の取締役、後月と號し、俳句を作る。

大上海要覽案内

濱田峰太郎編

昭和十年上海出版社發行、四六列三四六頁。

上海要覽

昭和十四年上海日本商工會議所編、菊列一八〇頁。

金曜會パンフレット

昭和四年一月創刊、その後十年間大體毎月一冊を出し、約二百五十號を重ね、金曜會は昭和三年山東出兵當時の排日貨以來、上海日本商業會議所を中心とし、上海における紡績同業會その他十種の實業團體の代表者によつて組織され、金曜日に例會を開いて情勢の報告、對策の検討を續けたもので、これはその機關誌。上海邦商最近十年の苦闘史を繰る經濟環境の貴重な資料である。

企業地としての上海

大阪市産業部調査課發行、昭和三年初版、昭和六年改訂再版。上海への企業進出者のために勞働條件、土地の承租及び賣買手續、電力、燃料、水、氣象、税金、建築費、工業關係法規等を解説す。

上海を中心とする長江流域邦人の發展策

昭和九年上海日日新聞社發行、菊判八六頁、同社二十周年記念願論文三篇を收む。

浙江財閥

志村悅郎著

昭和四年滿鐵上海事務所印行。浙江財閥の發達小史、上海における浙江財閥の事業内容、主要人物、上海

總商會の内狀等を調査せるもの。

浙江財閥論

山上金男著

昭和十三年日本評論社發行。浙江財閥を概括的に論じ、上海における浙江系銀行資本の發展過程を追求す。

支那經濟研究

土屋計左右編

昭和五年頃三井銀行上海支店刊行。買辦制度、上海の通貨、上海の倉庫制度、上海大連日本爲替三角關係等の調査研究を収録す。

支那ギルドの研究

根岸信著

昭和七年頃東京發行。上海の四明公所、米業嘉穀堂に関する研究あり。

上海事件に関する報告

高久肇編

昭和初期滿鐵庶務部調査課刊、五卅事件に関する報告書。

上海事變

上海日報社編

昭和七年刊、四六列四四七頁。

上海事變誌

上海居留民團編

昭和七年の上海事變における在留邦人使後の活動を記念すると共に、これを來征の陸海軍部隊並に諸方面の援授團體に贈呈して感謝の意を表し、傍ら後日の参考に資せんとの目的から、民間當局が現地各機關の協力を得て編纂したもの。昭和八年五月末發行、非賣品、約千頁の大冊。

上海邦人工業救済に関する請願書

昭和七年上海工業同志會印行。

上海日本人各路聯合會の沿革と事蹟

橋本五郎次編

昭和十五年上海日本人各路聯合會發行、四六列一五二頁。

上海の白系露人に就て

近藤浩著

昭和十年印行。白系露人の上海への移住経緯、その政治活動、経済状態、白色奴隷、公共團體等を記述した特殊の調査書である。

上海市大道政府概要

昭和十三年發行。事變勃發直後、維新政府の成立以前に先れた上海市の自治機關の概要説明書。

上海地名史

沖田一著

昭和十六年發行。租界内の街路名を考證せるもの。

上海租界概論

植田捷雄著

昭和十三年東亞研究會發行、四六列八六頁。租界の沿革、組織、回收運動、租界行政批判、事變と租界等につき論述す。

上海共同租界と工部局

渡邊義雄著

昭和十三年内山書店發行、四六判二〇頁。著者は工部局勤務、共同租界の沿革及び工部局の機構を解説す。

上海工部局と共同租界

野口謹次郎、渡邊義雄共著

昭和十四年東京發行、四六判一八七頁。

上海市の沿革とその特殊性

馬場嶽太郎著

昭和十三年發行、都市問題パンフレット第三二號、菊判三八頁。

上海共同租界法規全書

山崎九市著

大正五年上海發行、菊判四二四頁。

上海に於ける土地永租權に就いて

工藤敏次郎著

大正十五年上海發行、四六列一八五頁。

上海外國居留地行政概論

中濱義久著

滿鐵庶務部調査課刊、調査資料第五五輯。

上海共同租界誌

上原蕃著

昭和十七年丸善發行、著書はもと工部局警察副總監。

Journal of Three Voyages on the China Coast, by C. Gutzlaff

一八三二年倫敦發行。著者は獨逸生まれの宣教師で、東洋各國の語學に通じ、阿片戦争の遙か以前一八三一年民船に乗じて上海を訪れ、その後も度々支那沿岸各港を旅行した。これはその報告書で、同じ著者による A Sketch of Chinese History (一九三四年刊) と共に、當時の英米獨各新教國に多大の注意を喚起せしめた名著である。貿易港としての上海について詳細記述した最古の英文資料であらう。

Report of Proceeding on a Voyage to the Northern Ports of China

in the Ship Lord Amherst, dy H. H. Lindsay and C. Gutzlaff

一八三四年英國下院の命により刊行。著者は一八三二年東印度會社の囑託として、一隻の貨物船に乗じ廣東から澳門、廈門、福州、寧波、上海、山東、朝鮮に回航して通商を要求し、各港の状況と支那海防の實力を調査して歸つた。これはその時の復命書で、ギネッタヌの前掲書の一部をなすものであり、同様上海につき詳細な記録がある。

Shanghai from a Historical Standpoint, by E. C. Bridgeman

著者は一八四七年來滬した米國の宣教師。

China, Political Commercial and Social, by R. M. Martin

一八四七年發行、二卷。上海について記述あり。

China and the Chinese, by H. Charles

一八四九年發行、二卷。上海についても論じてゐる。

Chinese Repository

一八三二年廣東において米人ブリッヂマンの創刊、ウイリアムスの繼承編輯にかゝる月刊雑誌。その一八四九年 Vol. XVIII に上海賑災の抄録が載つてゐる。

Shanghai Almanac

一八五二年ノース・チャイナ・ワールド社發行。

A Visit to India, China and Japan in the Year 1853, by Bayard Taylor

一八五五年録行發行。著者が一八五三年に東洋に旅行した時の旅行記で、上海に關して多くの頁を割いてゐる。その年に起つた上海の地震について體驗を記してゐるのは珍しい。

Life in China, by William C. Milne

一八五七年倫敦發行、七一五頁。著者は宣教師、當時の上海情景の描寫に多くの頁を割いてゐる。

Anglo-Chinese Commerce and Diplomacy, by A. T. Sargent

上海開港直後の貿易事情を知るによき資料。

Ti-Ping Tien-Kwoh; The History of the Ti-Ping Revolution, by Lin-le

一八六六年倫敦發行。實戦に参加せる者の太平天國戦史。

Events in the Taiping Rebellion, by A. E. Hake

太平天國に關する資料。

Treaty Ports of China and Japan, by Denny and Mayers

一八六七年倫敦發行。

Shanghai Considered Socially, A Lecture, by H. Lang

一八七三年アメリカン・プレスビテリアン・ミツション・プレス發行、一八七五年再版、六〇頁の小冊であるが、開港以前の上海の歴史から説き起し、租界成立の事情及び居留外人社會の狀態を要領よく纏めてゐる最古の英文上海史である。

Sketches in the Foreign Settlements and Native City of Shanghai,
by W. Macfarlane

一八八一年上海マーキユリイ社發行、一一三頁のパンフレット。断片的に當時の上海社會事情を描寫す。

La France dans l'Extrême Orient-Le Concession Francaise de
Changhai, par Ernest Millot

一八八一年バリ發行、翌年再版。もと佛租界公董局主席であつた著者が一八八一年三月末日印度支那學會で行つた講演の原稿。

The Story of Shanghai, by J. W. McLellan

一八八九年ノリス・チャイナ・ヘラルド社發行、一二四頁。開港事情、貿易状況その他ヘラルドの記事を基礎とした記録を載す。

With Gordon in China, by E. A. Lyster

一八九一年倫敦發行。ゴルドン麾下の將校トーマス・ライスターの手紙を収録す。

Shanghai 1843—1893, The Model Settlement: Its Birth, Its Youth, Its Jubilee

一八九三年マッキュリイ社版、九六頁。上海租界の發展史。三編に分れ、第一編は上海の誕生及び年少時

代、第二編は開港五十年記念誌、第三編は一八八——二九一年の商業状況に關する總務司アレイドンの報告となつてゐる。一八四九年及び一八九三年のバンド風景その他の多數の寫眞を附す。

Sketches in and around Shanghai etc., by J. D. Clark

一八九四年マリーキムライ社發行、一八三頁。同社主筆タターク氏が一度紙上に書いた記事を集む。支那芝居、上海の街、寺廟、監獄、人力車と苦力といった風は、これも斷片的の描寫である。

Recollections of Life in the Far East, by W. S. Wetmore

一八九四年發行、六〇頁。小刀會の上海占領當時、租界防衛の義勇隊に参加した一人の體驗記。

Life of Sir Harry Parks, by Stanley Lane-Poole

一八九四年倫敦發行、二卷。一九〇一年“*Sir Harry Parks in China*”と改題増補す。上海開港直後の外交界に活躍したパークスの傳記で、初期の上海發展史を記す。

Les Origines de deux établissements Français dans l'Extrême-Orient
Changhai-Ningpo, Par Henri Cordier

一八九六年パリ發行。著者は佛國支那學の權威。上海、甯波開港前後における佛蘭人の活躍史である。

Freemasonry in Shanghai and Northern China, by F. M. Gratton

一八九五年初版、一九〇〇年改訂再版。上海におけるフリーメイソンの諸施設、沿革、會員名簿等を
収録す。

Rambles Round Shanghai

一八九九年ユニオン社發行、一九六頁の輸入り案内記。

The Travellers Guide to Shanghai

初版年代不明 China Advertising Co. 發行、六八頁。上海城の城壁の寫眞などあり、案内書の中では古

いものメ一つ。其他ホテル、廣告社等の外字上海案内が多数出てゐるが、大體一九〇〇年以後のものが多く。

The Englishman in China, by Alexander Michie

一九〇〇年倫敦發行、二巻。一八四六年上海領事となつたオールコックの傳記で、その當時の上海の政治經濟事情が第一巻に詳しい。

Shanghai by Night and Day

一九〇二年頃マッキニイ社發行。一六八頁の輸入も案内記。

The Shanghai Riot of 18th December 1905

一九〇六年デイリイ・ニュース社版、三二頁。

Historic Shanghai, by C. A. Montalts de Jesus

一九〇九年上海マッキニイ社發行。二五七頁の輸入り物語り本で、上海の歴史書としては最初がよく認

つたものである。殊にその挿畫が興味をそそる。民國四年程影氏により「上海通商史」と題して支那譯され
るが、譯語は正確でない。

European Settlements in The Far East, by D. W. Smith

一九〇九年倫敦發行。

Changhai et la Vallée du Fleuve Bleu, par Madrolle

一九二一年パリ發行、一三二頁。の上海及び揚子江流域の案内書。

Shanghai de La Sua Colonia Italiana

一九二一年上海伊太利商業會議所發行、四七頁。上海における伊太利人の發展史を記す。

I "Settlements" Europei e le Concession in fitts della Cina, de A.

Galassi

Shanghai and the Rebellion

一九一三年デイリイ・ニュース社發行、一一六頁。

Hafen Kolonien und Kolonie-ähnliche Verhältnisse in China Japan
und Korea, von E. Grünfeld

一九一三年イェナ發行。

Schanghai. Ein Überblick über seine Verfassung, Verwaltung und
Rechtspflege, von G. Pernitzsch

一九一四年上海德國總會發行、五五頁。租界の法的考察。

Shanghai: A Handbook for Travellers and Residents, by C. E. Darwent

一九一四年ケリイ・ウォルシュ発行。一九二〇年増補再版、一九一頁。著者は上海ユニオン・チャーチの牧師であるが、上海案内記の中では最もよく翻つてゐる。巻頭にビザン英語の解説があり、最後の章に上海の歴史を書いてゐる。

Some Papers in the History of Shanghai, 1842—1856, by W. R.

Charles

一九一六年倫敦發行、二〇頁。同年五月著者が China Society において講演の原稿。

The International Relations of the Chinese Empire, by H. B. Morse

一九一八年倫敦發行。

How Shanghai is Governed, by E. C. Pearce

一九二〇年上海發行。

The History of Shanghai, by G. Lanning-S. Couling

一九二一年共同租界工部局の委託によりケリイ・ウォルシュから發行。五〇四頁の大冊で、本来全三卷の第一卷に當るものだが、第二卷以下は遂に出ない。著者ランニング氏はこの書の著述に十三年間以上も没頭して死去し、その遺業を繼承した故クイリントン氏も、別に「エンナタクロベディア・シニカ」の名著を有つ支那學者であつたから、この共著は歐文上海歴史の決定版ともいふべき權威書である。その内容は先づ古き支那の事情、西洋との接觸、廣東貿易から説き起して次第に上海の歴史に及んであり、上海史といふよりは英國の對支通商史といふに適はしい。

A Short History of Shanghai, by J. D. Clark

一九二一年マッキュリイ社發行、六七頁のパンフレット。断片的に上海歴史上の大小事件を記録す。

Shanghai Sketches, by Jane Show Wand

東亞政究會圖書目錄にあれど實物なく不明。

The Port of Shanghai

黄浦江改修局發行。十數年前から大體毎年改訂重版。「上海港口大全」とも稱し、英支兩文で書かれてゐる。

30°

Les Concessions en Chine, Par Chung-Sing Chan

一九二五年パリ發行。

La Cour Mixte de la Concession Internationale de Changhai, par G.

Padoux

一九二五年北京發行。

The Nanking Road Tragedy

一九二五年中華書局發行、四一五頁。五冊事件に關する會審衙門の報告書。

Shanghai: Its Mixed Court and Council, by A. M. Kotenev

一九二五年ノース・チャイナ・デイリイ・ニューズ社發行、五八八頁。共同租界の裁判制度に關する大部の研究書である。

Shanghai: Its Municipality and The Chinese, by A. M. Kotenev

一九二七年ノース・チャイナ・デイリイ・ニューズ社發行、五四八頁。工部局と支那側との關係の歴史、法的考察。

A Short History of Shanghai, by Hawks Pott

一九二八年ケリイ・ウォルシュ發行、三三六頁。著者は上海セント・ジョン大學の教授。上海の歴史上の大小事件を、断片的ながら残らず記録してゐる。この書の一部は旗江種一氏により「上海五十年史」と題して「上海週報」自昭和七年八月第八八四號至八年四月第八九八號に邦譯が連載された。最近では土方定一

橋本八男兩氏譯「上海史」(生活社版)と軌足計、濱谷滿雄兩氏譯「上海歴史」(白揚社版)の二種の全譯が出てゐるが、譯語は前者の方が正確のやうである。

The Status of Shanghai, by Ching-lin Hsia

一九二九年ケリイ・ウォルシュ發行、二〇二頁。華人夏晉麟氏が英文で著したもので、共同租界の發達を歴史的に記述す。夏氏には他に「支那外交史」の著作がある。

Histoire de la Concession Franc, aise de Changhai, par C. B. Maybon
et J. Fredet

一九二九年パリ發行、四五八頁。佛租界公董局が編纂せしめたその沿革記である。

Le Régime de Concessions en Chine, par Jean Escarra

一九二九年パリ發行。

Report of the Hon. Mr. Justice Feetham to the S. M. C.

一九三一年南阿聯邦判事フィータム氏が共同租界の行政、立法及び實業の過去、現在及び將來につき年餘を費してものした調査報告書で、三巻より成る龐大なものである。別にサップルメントも出てゐる。滿鐵調査部で完譯を出してあり、上海商工會議所の「經濟月報」にも梗概の譯が載つた。

Histoire de la Mission du Kiangnan, par Colombel

明代以來の江南地方天主教布教史。徐波瀾土山傳印書局發行。

A History of Southern Baptist Work in Shanghai, from 1847 to 1935,
by Willie H. Kelly

上海市通志館がケリイ女史に委嘱して執筆せしめた稿本。

The First Quarter Century of the Y. M. C. A. in China 1895—1920,
by D. Williard Lyon

一九二〇年アツンシエーション・プレス社發行、一五頁。

The History of the Shanghai Volunteer Corps from 1853 to 1922

一九二二年デイリイ・ニュース社發行、八四頁。上海義勇隊の歴史。一九一四年にも同社から Shanghai Volunteer Corps 1853—1914 (二四頁) といふのを出してゐる。

Shanghai Past and Present, by Margaret M. Pardoe

一九二七年上海タイムス社發行の豆本。

Etude sur le Problème des Concessions de Changhai, Par pie-nai

Chieng

一九三二年ナンレイ發行。

La Concession Francaise de Changhai, par Louis des Courtlis

一九三四年バリ發行。

Analytical Angles on the Shanghai Situation, by Arthur and Theodore Sopher

一九三五年上海タイムス社發行、五〇頁。サンデー・タイムス紙に載つた銀問題、金融界、地産界の情勢に関する論文を集む。

The Profitable Path of Shanghai Realty, by Theodore and Arthur

Sopher

一九三六年發行、四一五頁。上海地産取引の動向を記す。

The Growth and Industrialization of Shanghai, by D. K. Lieu

一九三六年發行、四七三頁。劉大均氏の上海工業史で、倉持博氏の「支那の工業」と題する邦譯がある。

The Shanghai Problem, by William C. Johnstone

一九三七年英米兩國にて發行。上海租界の政治的意圖を論ず。

Cequi ne S'avoue pas, Meme a Changhai, Ville de Plaisir

上海在留外人の生活、支那要人、女性等との交際等の瑣事を記す。張若谷氏の華文譯「留滬外史」が眞善

美書店から出てゐる。

Shanghai, the Paradise of Adventurers, by G. E. Mirror

一九三七年紙育發行。著者(匿名)は上海在留の新聞記者にして某國の外交官を兼ねてゐたが、この書の出版により官職を褫奪されたといふ。水滸傳的な魅力ある實話によつて、上海租界及び治外法權のことも弊害を叙述してゐる。「上海租界」と題し市未亮氏の邦譯(昭和書房)が出てあり、阿雲氏譯「上海冒險家の樂園」の邦文版もある。

Shanghai: City for Sale, by Ernest O. Hauser

一九四〇年紙育發行、上海製廉價版も出てゐる。著者はジャーナリストだが、上海の歴史を充分に書きこなした上で、租界社會の特質を解剖してゐる。針線細やかな筆致は、一讀巻を借く飽はざらしめる。「大帮の都・上海」と題し佐藤弘氏の邦譯(高山書院版)がある。

Streets of Shanghai, A History in Itself, by A. H. Gordon

一九四一年上海俱樂部發行の豆本。少年團へ配布用として編纂。上海各街路名の由来を記す。

Shanghai Municipal Council Report

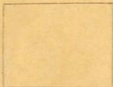
共同租界工部局の年報、一八〇〇年代以来毎年一回發行。その一九四〇年版は滿鐵上海事務所により、一九四一年版は岡本事務所により、邦譯(生活社發行)されてゐる。

Twentieth Century Impressions Hongkong, Shanghai and Other Treaty Port China: Their History, People, Commerce Industries and Resources, by Arnld Wright

一九〇八年倫敦ロイド大英出版會社發行、八四八頁の寫眞入り豪華本。上海港に関する記述に約三〇〇頁を割く。主編者はアーノルドライト氏なるも、現地に在りてカーtright氏が協力してゐる。

昭和十七年七月五日 印刷
昭和十七年七月十日 發行
（三、〇〇〇部）

認承協文出
號27040ア



上海史話
定價貳圓八拾錢

著者 朱澤秀夫

東京市麹町區九段一丁目十六番地
吉村清

東京市神田區錦旗町三丁目二十九番地
大貫善次郎

東京市神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

東京市麹町區九段一丁目十六番地

發行所 株式會社 叻書房

電話九段 一〇三五〇一番
電話九段 三四九七二番
電話東京 一六六六四六番

此發行所の書籍にては一冊丁編丁等の不完全なる品がありまし大御は早速お取換へ
致しませう。

刊 房 書 傍 畝

大塚令三編著

支那の新生活運動

二・五〇
甲・一四

「支那の新生活運動」と云つても日本人間には殆んど知られてゐないが、かつて蔣介石が支那全土に呼びかけ、民族復興を叫んだ一大運動で、わが國の精勵運動と似てゐるところが多分にある。本書は、當時の本運動を目のあたり且聞き、多數の資料を蒐集しその資料を體系づけて編著せるもので、わが國に始めて紹介されたる本運動の全貌である。本運動遂行に當つて蔣介石は常に隣國日本を見ならへと云つてゐるが、現在戦争下にあるわれら日本人はこの運動より教へられるところ大なるものありと思ふ。

敵 傍 書 房 刊

上海總領事館
特別調査班員 刈屋久太郎著

支那工業合作社運動

三・五〇
千・一四

本書は、敗戦の露政權が、戦時經濟政策の一つとして大宣傳の下に運動を起した工業合作社運動の全貌である。現地調査機關にある著者が入手した豊富なる現地資料を基礎として、専ら具體的運動の實狀を紹介せるもの。

米澤秀夫著

上海史話

二・八〇
千・一四

東洋經濟の中心地たる上海に在住二十有年の著者が、幕末の上海貿易に始まる上海に於ける邦人の發展史を、支那史籍、文獻等をもととして論述せるもの。容易に入手し難き古寫眞、繪圖等を多數挿入せる貴重なる研究書である。

敵 傍 書 房 刊

松村天籟著

蘇州夜話

二・五〇
千・一四

支那史上幾多の史實と舊跡を残せる蘇州に、著者は公務を帯びて
在住すること数年、この地の風俗、習慣等を密かに見聞せるとこ
ろを興味深く記述せる書。邦人の手になれる最初の蘇州紹介書で
ある。

カール・クロー著 新保民八譯

支那の洋鬼

二・〇〇
千・一四

支那人の無力と無智とを利用して、米英人が如何にして支那を侵
略せるか、傲慢不遜の支那に於ける米英人の生活を暴露し、また
愛すべき支那民衆の特徴を強調せる興味深き書。

刊 房 書 傍 敵

理學博士 加藤與五郎 著

科學制覇への道

B 6 列三八〇頁
價二・五〇 平・一四

雄大なる東亞共榮圏の資源は科學技術と學理との劃期的躍進に依りて、その偉効を現はす。雄大なる我が帝國の威光は此制覇にて輝く。本書はこの科學制覇達成のため渾身努力せる著者が、この時局に際し、眞心こめたる著作である。

理學博士 小竹無二 著

科學者の心境

B 6 列二九〇頁
價一・五〇 平・一〇

いまや、わが國は國威を大東亞に輝かさんとする秋、この科學者の熱誠あふる眞心をもつて、時局を論じ、新進道を説き、科學者としての切々たる心境を語る。冷厳なる科學をばなれて、にじみでも温情。必ずや若き日本科學へのよき教訓とならむ。

敵 傍 書 房 刊

醫學博士 林

譯著

科學への思索

千二
一五
四〇

デ
竹内時男、佐藤益治譯

科學物語

千二
一八
四〇

モ
河村貞之助譯

生物學講話

千二
一五
四〇

ト
松原安遠譯

動物の生涯

千一
一八
四〇

三
浦定之助著

南海の魚

千二
一〇
四〇

ビ
岡田一匡譯

海底物語

千二
一五
四〇

金
子準二著

文化と犯罪の性格

千一
一八
四〇

ド
長島一樹著

人間と世界像

千一
一五
〇〇

文學博士 吹田順助著

獨逸神史

千二
一〇
四〇



000472625

